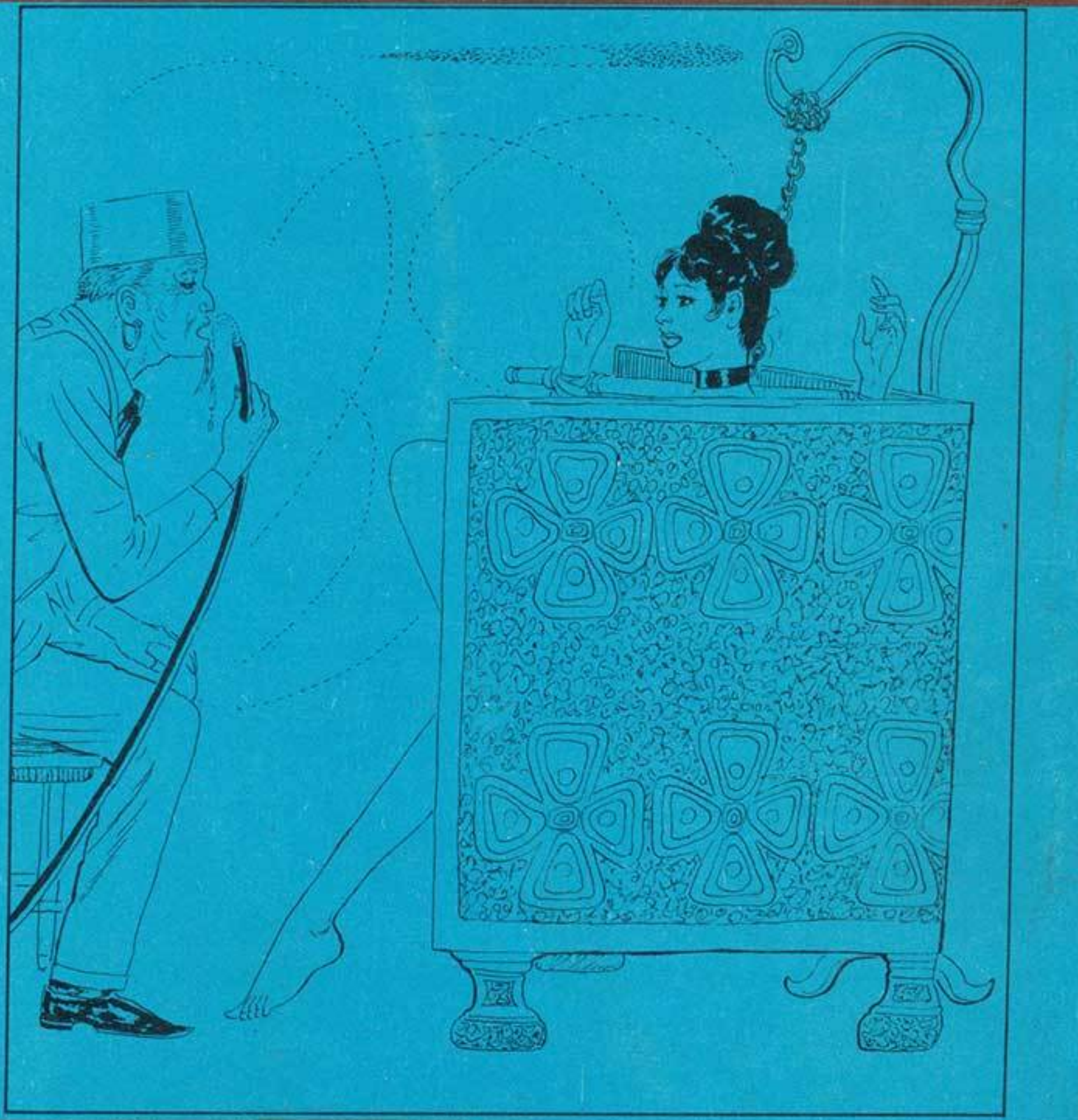


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1965・7

7
月
号



昭和四十年三月二十日印刷 昭和四十年七月一日発行 七月号 第十九卷第七号 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十五年六月十七日国鉄大局特別掛承認雑誌第一二二号

奇譚クラス

7
月
号

写真集

第四集

略号(美4)

$$\nabla$$

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に發揮した文獻的価値豊かなフルオト揃いで、春の暖氣に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に頂けるというだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフオトアルバムです。
この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを
十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが優秀なフォトを盛沢山に収容して同好の方々の御期待にそいたいと考えております。今後順次発売してゆきます写真集を全部お揃え下さいますと、本誌女体緊縛の主要なものも網羅されることになり、文献蒐集集としても極めて有意義なものとなることでしょう。

内容◇

(山原清子)

田美佐子)

(木村洋子)

(大塚啓子)

(山原清子)

(木村洋子)

(山原清子)

(木村洋子)

(大塚啓子)

(大塚啓子)

田美佐子)

(大塚啓子)

田、木村)

(山原清子)

(大塚啓子)

(山原清子)

（山原清子）

八十葉

に、何力
して、特
真を、由
印刷に
ヤ、皆
た。必
す。限
ん。数
ま。中
う。お

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

美貌で清潔な感じの溢れる新人美木乃々子嬢の体当りの演技と読者の責役出演とにより、ここに日本女性拷問刑罰集スチールの第一回作品をここに発表することにしました。素晴らしいスチールを是非一見下さい。

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木馬のとがった背に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪の毛の末端に至るまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に対する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といっているであろう。交叉した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつけられ、美しい両足の拇指はくの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶えに悶えぬくのである。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ縄目の痛々しさ。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい粗砂の上に引きすえられた高手小手縛りの女囚は、首縄を引きしぼられて白状を強いられるが、返答をしないために竹をささらに割った笞で、後手に縛られていたため盛り上るようにつき出た肩先をしたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にしり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、臍を中心とした胴の部分の部分をさげだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるというのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであろう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高々と括り上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きすえられた女囚には更に竹の棒を縄目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持っているものである。身動きもできない高手小手縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

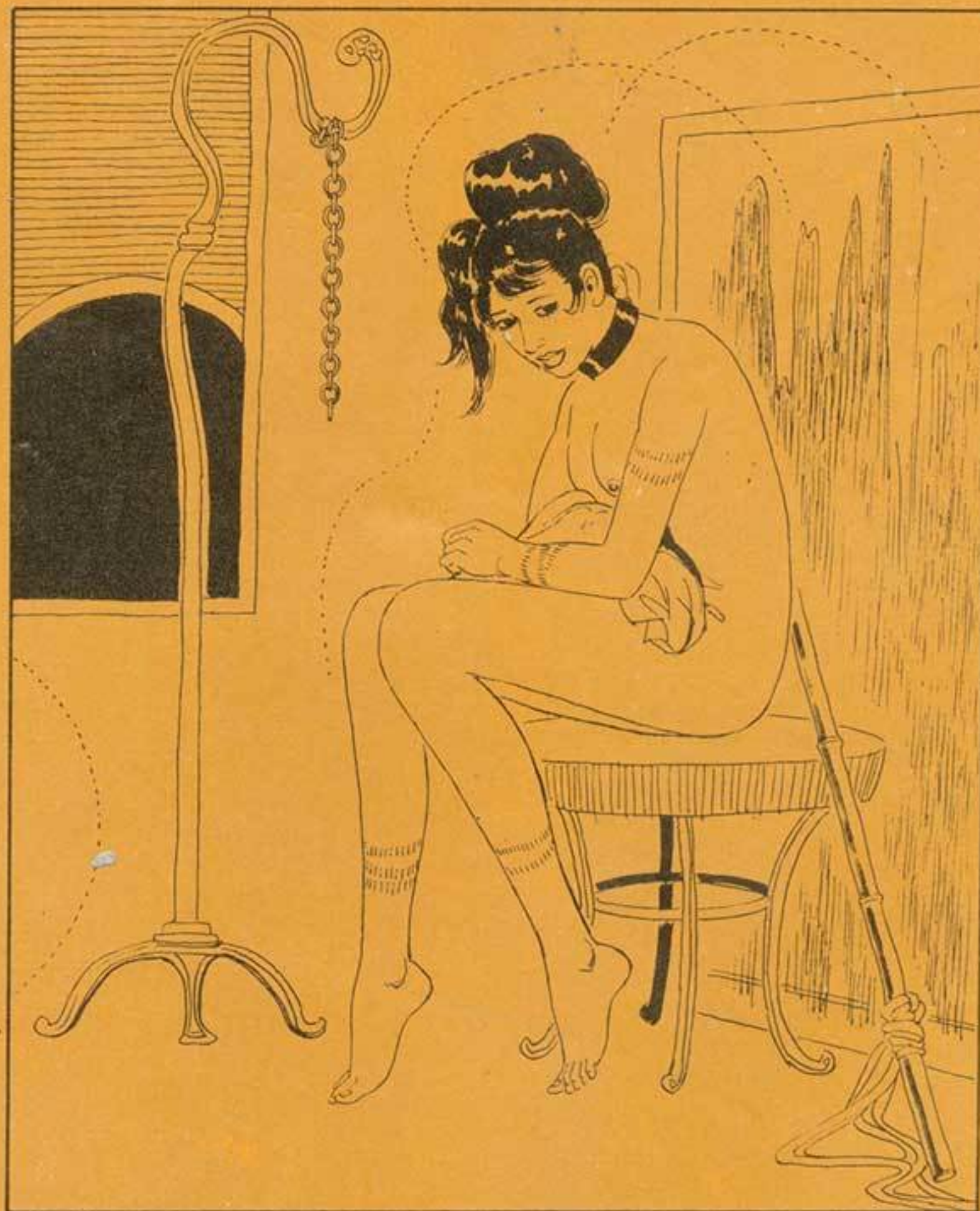
三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた胫と素足の可愛い美木モデル嬢が、白洲の上で厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただきたいでしょう。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



7月号

¥ 300

定価 三〇〇円

玉取姫のモデル山原清子嬢の仕置図

第一回作品発表

キヤビネ版印画紙焼付

入墨女賊拷問刑罰集

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で厳しい拷問を受けた上、白洲で折檻、更に逆さ吊り、海老責、木馬責、大の字磔と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられた女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかるうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままである。

答打ち白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

白洲へ荒むしるを敷いた上へ引き据えられた女賊は、先ず手荒なことをしないうちに有体に白状せよといわれたが、せせら笑って答えないので、打役の手でその入墨も見事な背中を、したたかに竹棒にて打ちまくられる。次第に変化する女賊の苦悶の形相も物凄く、全身を波うたせ、ムチの痛さに悶えるサジスチックな場面。

仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

木馬の四つの脚に両手両足をがっちり四方に縛りつけられて、仰向けに固定された女賊。いかに痛めつけても参らない女囚に対して、女の最も無防備な姿をさらけだした刑罰を強要した。女囚は只顔をのけぞらして、この羞恥責めに対して必死になって耐えているばかりである。裂けるような痛さに失神しそうになりながら。

全裸入墨女折檻

三枚一組 略号(よせ)

着ているものを一切むしり取られた女賊は、入墨の裸身をさらけ出して白洲の砂の上にほり出された。男たちの目の前に裸で放置されるのも、さることながら素早い取縄は女をきびしい高手小手にした上、更に股間縛りにしてしまつた。竹棒で追いまくられ、足蹴にされ、女囚は砂の上を転りまわって呻めき泣くのだつた。

海老責の拷問

三枚一組 略号(よす)

いかにしぶとい女賊にしても、この海老責めだけは骨身にしみてこたえたことだろう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、両足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しき。更に盛り上った肩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白状せよと容赦なく突きあげてくる。

大の字磔処刑

三枚一組 略号(よさ)

遂に稀代の罪を白状した女賊は、磔台に四肢をおもい切りひろげた大の字に固定されて、いよいよこれから胴斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの戮り殺しにされるのである。自分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとかわかっていても、荒縄で大の字にハリツケられている女賊はどうすることも出来ない。

全裸四這木馬責

三枚一組 略号(よも)

木馬の四つ足に手足をひろげて四つ這いに縛られた女賊。見事な刺青をさらけて、その臀部も、背中も、肩口も、無防備のまま露出している。力まかせの竹のささが、はっしとばかり豊満な臀部に背中中炸裂する。髪ふり乱し絶叫しつつ耐え忍ぶ女賊の凄惨きわまりない光景。尚竹ムチは雨となつて裸身のあちこちに降り注ぐ。

ハリツケの拷問

三枚一組 略号(よめ)

かずかずの拷問仕置折檻に対しても、尚ますますその若さと美しさを發揮して衰れえを見せぬ女賊に対して、その美しさの残っている中にハリツケにしてしまおうと僅かに白布を前に当てた裸の女賊を磔架にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて錆鏝の穂先に貫かれて血汐にまみれることだろう。



奇譚クラブ 7月号 目次

◆ 奇クサロン

○「週刊サンケイ」の発禁……編集部選……(9)
 橘あき子(10)……水野弘提供……「出刃庖丁を凝らした女」……「三方にのせ」……
 編集室の生首……水野弘(11)……「サロンの楽」……「庭に晒さ」……
 れる男……美柳輪生(12)……世相……「山田正夫」……木戸健(14)……「川健」……
 一郎(15)……「流腸と流腸器」……「世相」……「山田正夫」……木戸健(14)……「川健」……
 我記(16)……「サロンの楽」……「世相」……「山田正夫」……木戸健(14)……「川健」……
 寿(18)……「八私は訴える」……長田太郎(17)……「郷愁とマゾ感」……「通信」……
 典(19)……「座禪」……「夫婦」……「高小手」……「に寄せて」……「新宮明夫」……
 子(19)……「座禪」……「夫婦」……「高小手」……「に寄せて」……「新宮明夫」……
 座談会の件……「夫婦」……「高小手」……「に寄せて」……「新宮明夫」……
 嬰一さんへ……「夫婦」……「高小手」……「に寄せて」……「新宮明夫」……
 エジ画集……「夫婦」……「高小手」……「に寄せて」……「新宮明夫」……

△ 本文

雑談的な「SM風俗」あれこれ……夜乃 探郎……(26)
 読者通信の女性たち……芳野 眉美……(28)

直腸検査と蛙腹のこと……羽馬 水江……(36)
 「SMよ、今日は!」……保藤 久人……(40)

△ 奇クよ、健やかであれ△
 切腹研究夜話 今昔断想……中康 弘通……(46)

娘相撲物語 とよさんの告白……海野美津男……(50)

連載サディズム小説
 婦人刑務官イヴット・ヴェラデー……西条 操……(60)

心傷たむ遍歴△第十一章そのかみのこと(十二)△
 「約束腹」のこと……宗川 一子……(70)

処刑される女(斬首刑)……黒田 寿……(76)

奴隷(マゾ小説)……平 伏 人……(81)

或る医師の診療メモより……津山 茂夫……(86)

虫垂炎手術記……柴里 雷九……(88)

舞台につづく遊戯……



「SM」より見た世界史シリーズ

殉教の娘バジリカ

黒淵 嬰一 (92)

危険 (やくよけ) 女角力

円山 景三 (104)

読者通信の女性たち

芳野 眉美 (112)

(Sの女性)

「見世物」に関するメモ

夜乃 探郎 (120)

「東雪枝女史との一日」

三原 寛 (125)

SMカメラハント

「鼻責版」夫婦善哉

辻村 隆 (128)

「美女とオナラ」

川崎 進一 (138)

—蛙腹と空気浣腸と人工放屁

「女王様方への志願」

東京ベン号 (142)

ストリップSM劇の体験

毒婦の地獄責め

富士 春波 (146)

シナリオ「いちぢくの実を持つ女」

葉山 啓 (154)

ボクの責め方

宝塚二三夫 (163)

肥満狂崇者のたわごと

須 渾朔 (168)

牝雞妻

(婦人公論の記事から)

羽鳥 水江 (170)

「SM時評」

「編集子も乗り出せば
読者もいよいよシャベル」

橘 行司子 (174)

懸賞募集原稿入選作品

「おとめ」のマダム

山口 広 (176)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野 眉美 (192)

大谷勢津子

両嬢に捧げる

保藤 久人 (200)

異色映画紹介「変態」と「異常者」

藤村 正夫 (202)

△告白△「Tとの貴重な一夜」

笹原 桃子 (204)

春曉夢譚『艶麗切手』

牧 高志 (206)

読者通信

編集部選 (212)

山原清子、鈴木晃子SMコンビ・フォト……………

女性対女性の眞迫的緊縛演技写真

S役……………山原 清子
M役……………鈴木 晃子

鈴木晃子嬢は、山原清子のペットとして永らく飼育されていたのですが先般本誌のモデルとして紹介を受け、初めて「鼻責万華鏡」(略号「はた」)として八枚一組の鼻責めフォトを作成して好評を博しました。今回更に山原清子が実際にペットの鈴木晃子を責めている場面を写真部のアイデアを加味して撮影しました。実際に地味く熱演技は全く当初予期しなかった好結果で素晴らしい傑作が出来上りました。一見下さればお分りの通りSフォトとしてもMフォトとしてもその熱のこもったポーズは必ずや今までにない新鮮さで皆様の胸奥に迫るものと思います。今はすでに絶版になっております。す十何年か以前に作成しました春日ルミ女史対伊吹真佐子嬢コンビのSMフォトが想起されますが、今回の山原清子、鈴木晃子コンビのフォトは、それ以上に迫力と若さに満ちております。純然たるプレイ写真ですが、ネガのまま放置しておくのも惜しいので、特に御希望の同好の方にお分けします。

猿轡をされるまで

大手札印画紙焼付
十枚一組 一五〇〇円
略号(さる)

強烈に縛りあげられた鈴木晃子の鼻をつまみ口を開けたところへ布片を押し込み、豆絞りの猿轡をつわを無理強いに噛ませてしまいうまでの連続組写真である。

縛りあげられるまで

大手札印画紙焼付
十枚一組 一五〇〇円
略号(さあ)

抵抗する晃子の両手をうしろへ捻じあげて縄をからませ、きりきりと身動きできなくなるまで縛りあげる過程の動きのあるポーズを連続で組写真としました。

屈伏させられるまで

大手札印画紙焼付
二十枚一組 三〇〇〇円
略号(さや)

痛めつける清子のサジスチックな表情と姿態。晃子は清子の意のままになりながらも、その豊かで美しい肢体を惜しげもなく、さらけ出して見事な場面を展開する。

〔今月の新版Mフォト〕

読者M氏受難の巻

女性対象のMモデルに応募してきた愛読者のM氏が、自分が女性から、こうして貰いたいという希望をもととして実施したプレイを側面から撮影したものです。S役女性には最近順に生長を遂げた大塚啓子嬢。豪華なホテルの一室に繰りひろげられたMプレイの写真化、特にその一部を御希望の同好者の方々に焼増いたします。

◎M組二十五態◎

大手札印画紙焼付(9×13寸)
各組一枚一組(送料共)

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

- | | |
|-----|--------------|
| M1 | 両股責め押え込み鼻弄り |
| M2 | 足の踵で鼻の頭をつぶす |
| M3 | 皮ムチを顔に浴びせられる |
| M4 | 犬男になめさせる太股 |
| M5 | 足の指をすっぽりなめる |
| M6 | 顔面騎乗の女御主人さま |
| M7 | 臀臭を嗅ぎまいらせる犬 |
| M8 | 足の裏なめを強制する女 |
| M9 | 女御主人の唾液をのます |
| M10 | 玄関でチンチンをする男 |

連続組写真Mフォト

大手札印画紙焼付
三十六枚一組 六〇〇〇円
略号(ほや)

二人の女性の餌食

S女性……………山原清子他一名
M男性……………Mモデル志願者
二人の女性が一人の男性を、こてんこてんに虐め羞かしめ尽す有様を順を追って刻明に写真化したしました。縄、ローソク、浣腸器などを小道具に用い、マゾファンならおもしろく、ぞくぞくする場面ばかりを編集しました。

- | | |
|-----|--------------|
| M11 | 玄関で足指をなめさされる |
| M12 | 私の放屁でも糞くらえ! |
| M13 | 足の踵を必死になめる犬男 |
| M14 | 両股の下に埋れた犬の顔 |
| M15 | 頭を蹴られた尻尾を振る犬 |
| M16 | 両股の首絞めに喘ぐ犬男 |
| M17 | 臀部を革ムチで打ちまくる |
| M18 | ツバの御馳走を飲ませる |
| M19 | 足の指先で鼻を摘みあげ |
| M20 | 鼻も口も足の裏で蓋される |
| M21 | 足のお味はどんな具合? |
| M22 | この犬奴踏み潰してやろう |
| M23 | 股に挟まれて幸福な男の顔 |
| M24 | さあ口を開けてごらん! |
| M25 | 両股の下にある悦楽境 |



四月の末、取次店へ行ったら、「週刊サンケイ」が、四月十九日に発禁になったということをきいた。勿論、当のサンケイ新聞では自分のところで出している週刊誌が発禁になったということなど記事にする筈はないし、同業批判せずという立前から各新聞とも報道しないのだから、私を含めて世間一般の人達の目に入らなかったのは当然である。

ここで、ちよつと考えさせられたのは、あの悪書追放運動のことを各新聞が激しく書き立てていた頃、若し仮りに悪書に指定された雑誌が発禁になったとしたら、どうだったろう。それこそ良識あると自称する各商業新聞から、それみたことかと、鬼の首でもとったように袋叩きにされた挙句、非行少年発生の罪の大半をきせられた

に違いない。

それが今度のようにな新聞社の発行している週刊誌が発禁になったというときは、どうだろう。一言半句、膿んだとも潰れたとも書かないのだから驚きを通りこして全く恐れいった。これが現代をキヤンペーンする——はずと自画自讃する新聞の真の姿なのだ。

これじゃ、如何なるオシヤチノ奥さま連中も知る筈はない。知る筈はないから、ガアガア騒ぐことではないし、若し仮に何かのことで知って騒いだとしても、その事実を報道する新聞はないだろう。昨年の暮、東京都条例に数種の

雑誌が初の指定になったというところが、各新聞に大々的に掲載され津々浦々まで報道されたことがあったが、そのとき妙なことがあった。発表の少し前、「平凡パンチ」外二点が発禁になったという事実があったのに、それらの雑誌は条例では指定されていないのである。これは一体どうしたっていうのだろうか。

普通、常識で考えてみても、大人にまで販売してはいけないという刑法に抵触した容疑を受けて押収までされている雑誌が、十八才未満の未成年には販売してはいけないという条例には指定されないというのが、不思議千万である。真偽はわからないが、今回発禁になった「週刊サンケイ」も多分、どここの県条例でも指定にはなっていないだろう。なにしろ、大新聞社の発行する週刊誌なのだから、遠慮するに違いないから。

数多い中のことだから、見落したのだろう、と善意に解釈はしているが、こんなことが度重なるよ

うだったら、折角の条例の權威も地に落ちるといふものではないだろうか。もっとも、発禁になるものは条例で取締まらなくても、という迷口上はあるが、とにかく、見落しなく公平にやってもらいたいものだ。

天下の大新聞社、大出版社と誇号しているところがだしている週刊誌でもひどいのである。見出しだけ見ていると、エロ新聞はだしの凄いのがあるし、犯罪実話の中には必ずといっていい位の閨房描写のこってりしたのをサービスしている。がしかし、これが悪いというんじやない。結構でございませう、と言いたいところだが、只反吐が出そうな気持ちになるのは、片一方で、私しやそんなことは何にも存じません、という聖人面を臆面もなくさらけ出す輩のことだ。

この聖人面の仮面をひんむいたら果して何にがでてくるだろう。世の中で最もきたない奴、それは偽善者だ。「声なき声」の筆者に若し良心があるとしたら、先ずなにをおいても、「週刊サンケイ」の発禁に言及すべきではなかったろうか。小羊のように善良で純真な読者の人達のためにも！

「週刊サンケイ」の発禁

編集子



〈橋 あき子〉

せめられたい わたしのきもち

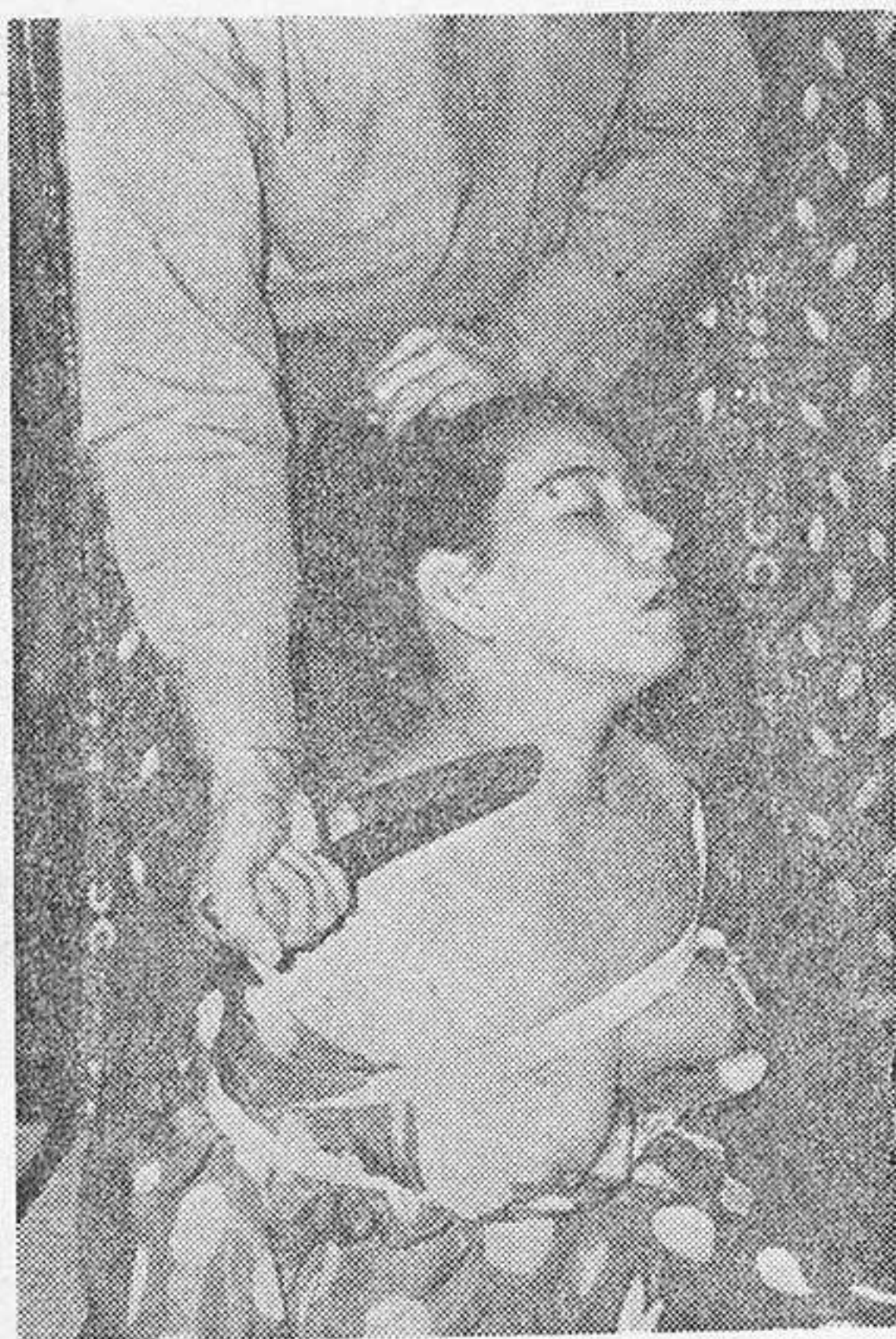
はじめて貴誌を見たのは、古本屋の店先でした。かくすようにして写真のページをめくりすすむうち、私のからだ中があつくなり、胸がドキドキして目がくらみそうになりました。次の日も又出かけてゆきました。もうどこにおいてあるか私にはわかっていません。昨日みた続きからみてゆきました。三日目には勇気をだして三冊買いました。どうしても自分のものにしたいくて、家でゆっくり誰に気がねなしによみたくて、とうとうかってしまったのです。でも、その三冊をくりかえしよんでしまうと、又かわったのがほしくてたま

らなくなりました。それからしばらくして、又さがしにいてみると、キクをみている人がいたのでした。折角さがしてきたのですから、心残りでしたがその時はあきらめて帰りました。五日ほどして又ゆき、こっそり自分の胸でかくすようにしてキクをみていると、私の手の中へ紙きれをにぎらせてにげる様にいつてしまった人がいました。その人はいった先日、その店先でキクをみていた男の人の様に思えました。紙きれには「四月二十日夕方六時ごろ、白川公園でまっております。秘密は守ります。キクのよう

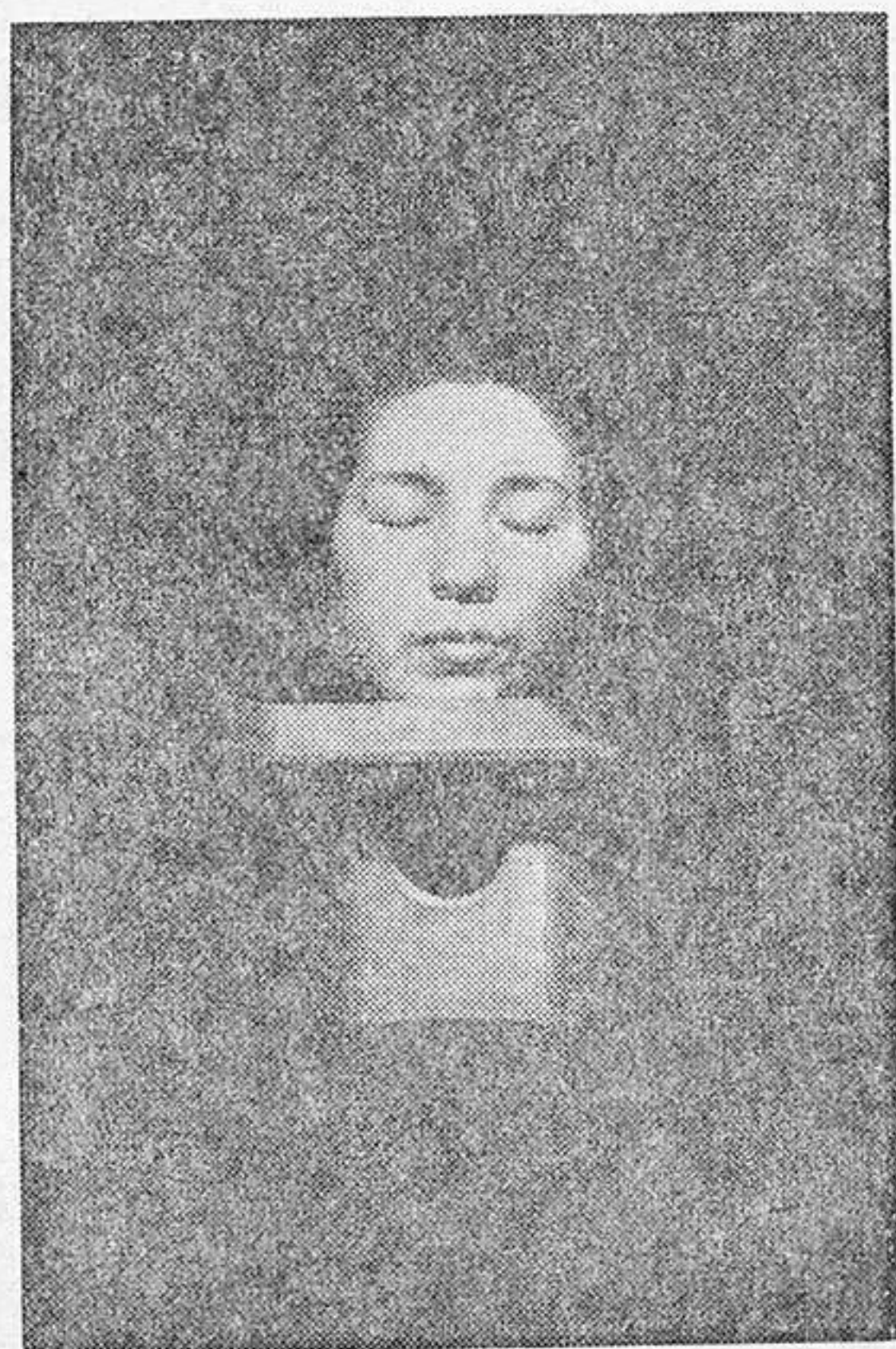
なプレイをしたいのです。どうぞお願いをきいて下さい」と走り書きしてありました。私もずっと以前からせめられてみたいと思っていたので、勇気を出していつてみました。私はベンチにすわって待ちました。五分もたたないうちにいつかの男の人が、私の前を通りすぎました。暫くゆきすぎると戻ってきて、私の横にすわって週刊誌をベンチの上においてたのです。何気なくみると、その週刊誌の下から半分ほど、キクの表紙がのぞいているではありませんか。彼が「お願いします」といいました。私は反射的にうなづいてしまいました。すると彼は又紙きれを私に渡しました。それには（僕の希望するプレイ。一後手にばり、さるぐつわをさせて乳首を



せめる。二、柱に手足を別々にし、ハケでおしりをせめる。と書かれてありました。公園のはずれの旅館の部屋にはいると、彼は持参したテープレコーダーのスイッチを入れて、私にそばへきてすわるようにといいました。夕方部屋の中はうすぐらく顔がはっきりみえないのが幸いでした。テープからきこえてきたのは、せめられている女のうめきごえだったのです。私の胸がドキドキしてきたころ彼はテープをとめて、机の上においてあったアルバムをとって私にみせました。みんなしぼられたりいたためつけられたりしているのば



水野弘提供 「出刃庖丁を凝せられた女」



水野弘提供 「三方にのせられた女の生首」

かりでした。彼はいいました。

「二人でやってみようよ」

うすぐらい部屋の中で、窓からはいつてくる月の光が、なにか神秘的なものにみえるのでした。

かえりみち、ついさきほど、しばらくつけられたうでや、足首がいたくて困りました。それに手首には、まだ、ひもあとがついているので、なるべく暗い道をえらんで帰りました。それから一週間ばかり、私はなにをしていますが、あの夜のことが頭からはなれず、又いつかの約束の場所へゆくようになりしました。もういちど、彼に会いたかったのです。

ちようど一カ年たったころ、彼がきたのです。それはほんとうの偶然だったのです。そして又、その夜も、ありあわせのひもで、彼は私をしばりつけ、せめつけました。しかし、どうしたとか、それ以後約一年、彼にあうことができません。私は、今はたださみしくて気が狂いそうです。どなたか私をせめつけて下さる方はいないでしょうか。年令は問いません。

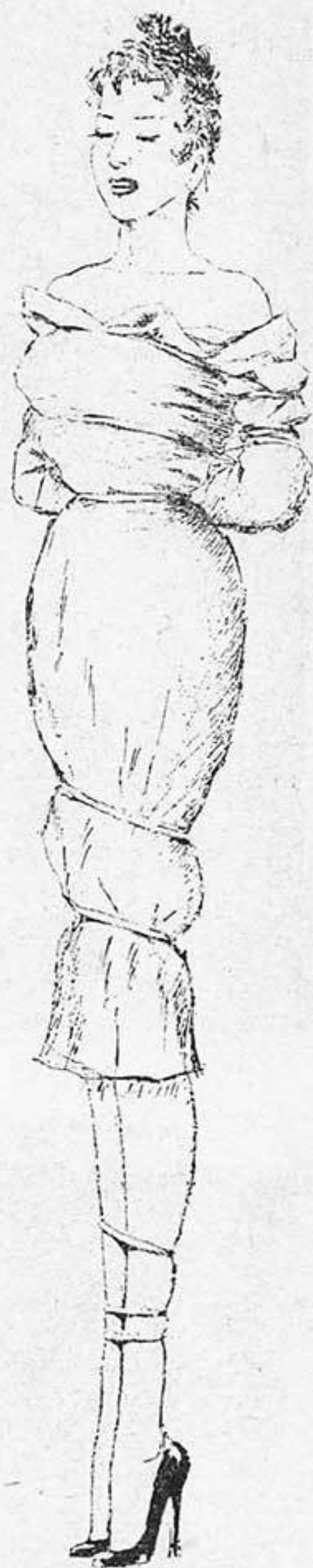
来月号の通信らんで、約束の場所と日時をご指定下さい。必ず必ず出かけてゆきます。私は今年二十二才、五尺二寸、十四貫。丸顔です。アパートの一人住いです。秘密を守って下さる方なら、どんな

たでも結構です。二度の経験をもとに、たのしいひとときをすごしましょう。名古屋に住んでいます。日曜日なら大阪あたりまででも出かけてゆきます。では、どうぞよろしく。

(名古屋市中区宮出町……)

△橘あき子▽

〔編集部より〕筆者のお名前は特に仮名としましたから御承知下さい。



サロン楽我記のため

葉山 啓

過日——

前衛芸術のメッカ、東京赤坂のS会館で、アメリカ製の前衛映画の試写会があって、私は、それに間に合うように、広くなった青山通りを、車を、走らせていた。

私には……車にのると、いつも、ラジオのスイッチを入れて、なんとなく、音を出しておく習慣があつて、勿論、この日も、例外ではなかった。

番組は、TBSのワイド番組、オーナーの電話相談室で、これは聴取者が、スタジオへ、電話をかけて、日常生活上の凡ゆる問題について質問し、それに対して、それぞれ道の専門家が、即座に解答を与えるという番組で——「友人の子供の入学祝いに、千円ぐらいの予算で、なにを、贈れば

いいだろうか……？」などというひやかし半分の、いいかげんなものから、土地の売買にからむ法律問題などという、真剣なことに至るまで、いろんな人々の、いろんな声があつて、それらを、漫然と、聞くともなく、聞いていると、なんとなく、浮世の面白さと、ばからしさ“みたいなものが感じられて来るのだが……。

この日、——その何人目かに、声による推定年令、二十五才——三十才の女性の主要次のような、質問が聞えて来た……。

「先生——私は、トイレが、近くて困っているんです。大学の附属病院を始め、いろんな病院で診てもらったのですけれども、どこも悪くはないと言われます。でも、実際には、十分も、もたないので

す。今、行つたばかりなのに、又行きたくなつて、どうしようもないのです。電車にのつても、すぐに途中下車して、トイレに行かねばなりません。映画を見ていても駄目なんです。……病院では、尿の検査もして頂きましたし、そのほか、いろんな検査もして頂きました。それで、どこにも、異常はないのです。おしっここの出方は、少ししか出ない時もあれば、うんと出る時もあつて、とっても不規則です。そして、いつそそうをするかと、そればかりが心配で、本当に困っています。一体、どこが悪くて、どうすれば、治るのでしようか……？」

○編集室たより」

○グラビヤを廃止してから、本誌の読者層も大分変わってきたのではないだろうか、と編集室での専ら話題になっている。たしかに最近編集部へ届けられる通信の内容も、従来といささか変わってきた。投稿原稿も増えてきたといえるだろう。

○真面目で建設的な御意見や御便りが多くなつたのは、何よりも嬉しい。可能なものは、つとめて誌上に発表したいし、又出来る限りお返事を差し上げるようにしたいと思つてゐる。

○御心配を頂いた辻村隆氏の病氣の方も大したことなく、これから益々活躍してくれらることを思う。ポツポツ撮りためたフォトも相当量に達するので、いずれグラビヤ写真集として、来月号あたりから、続々お目見えすることと思う。

○挿絵の方も、只今は過渡期のため決して十分とはいえないが、いずれ漸進主義で妙手発見ということで、皆様の御目を楽しませることが出来る筈だ。

○日本一うるさかつた神奈川県児童福祉委から、四月号は相変

連作Mフォト〈美伽輪生〉

。。。。尻打ちのポーズ。。。。



。。。。庭に晒される男。。。。

としてはとにかく、一度、トランキライザーを使用してみたら、ということに落ちついたのだが……かげより、声あり「お・し・め」

同日

試写会終了後、四、五人の仲間と渋谷の茶房で、お茶を飲む。

前衛美術界の新進、O氏の話は面白い。

「立川の先の新開地で、細い道をヒョイと曲ると、目の前の空地で四十ぐらいのオバサンが、ウンコをしているんだ……真白い大きな

お尻のマンナカから、このぐらい太いのが、ブラ下っているんだけど、それが、なんとも迫力があって、いいんだなあ……僕は、今あのウンコを、モティーフにしてい、画をかいているよ……題はね――」。

一しきり、SM談議に花が咲きそろそろおひらきという間ぎわになって、著名な英字新聞の映画記者でアメリカ人のミスター・C・ウィルソン・JR、曰く、
「アメリカノ、ハイティーンノ、オンナノコ、イマ、カンチョウゴ

ツコニ、ムチュウデス——ニッポンノオンナ、ミナ、S、ニッポンノオトコ、ミナ、M——カテイ、ヘイワデス ツマラナイ——」

CM——アヴァンギャルド映画出演可能の、M女性の方、御一報下さい。

(作品は、国内、国外にて、発表しますが、おさしつかえのない方に限ります)

「編集部より」特に仲介の労をとりますから、御希望の方はお申込み下さい。

らず残忍性欲を扱っており青少年に与える影響は好ましくないと思われるが、しかし従来に比べると編集上にやや自粛に力を入れている点が見受けられたので、指定の措置をとらなかった。という勧告を受けた。

○別に自慢になる話でもないが大方読者の皆様から御心配を頂いていたので、ここに御報告しておく。手足をもぎとられた達磨さんのような現在なので、あとは目や鼻をというわけだが、とにかく、命だけはオタ、オタスケノ、というところか。

世相診断室

△木戸川健▽

「ワシントン広場の夜は更けて」という歌は、日本でいえば、さしずめ「有楽町で逢いましょう」と同じようなもので、若い人たちのデートを刺戟する歌だそう。

私は特に英語に弱いので、原語の意味は解さないが、メロデーだけ聴いていても、なるほど、甘くせつなく、軽快で、何となくデートがしてみたくなるような雰囲気がある。ところで、この「ワシントン広場」を、つい最近まで、私は、アメリカの首都ワシントンにある、日本でいえば皇居前広場か日比谷公園に相当する場所であろう、とばかり思っていた。が、どうも気になるので、社の物識りに聞いてみた。豈はからんや、「ワシントン広場」は、ワシントンには存在せず、実はニューヨークにあるのだそう。

何故、私がこんな事を書くかといえ、私の事を棚にあげていうようで恐縮だが、「ワシントン広場」がワシントンにあると思ひ込んでおられる方が案外多いと考えるからである。もちろん、他人の国の、広場だか公園だか知らないけれども、そんなものがどこにあるかと知った事ではないし、知らなくても恥ではない。だが、その歌の歌詞やメロデーをよく知っていて、その歌の対象となつてゐる場所が、それがどこにあるのかどんな所か、全然知らないとなると、これはおかしな事である。

最近の、とりわけ若い人々の風潮を見てみると、歌詞やメロデーは実によく知っている。しかし、その歌われた場所が、どこにあるのか全然御存知ないし、関心さへも持たないで全く平気で気持よく歌っている。たかが流行歌のことではないか、と見すごしには出来ない。実は、この風潮は現代人のとりわけ若い人々の、生き方全般に通ずるからである。

私の末弟は、現在高校三年生で東大進学を目指している。頭は私などよりずっといいらしい。愚兄賢弟の口である。ところが、この弟にして、文部大臣がどなたであるか御存知ない。アラキではないのか、などといっておられる。そのくせ、将来高級官僚を目指だけあって、文部行政のことについて

は、日教組の幹部な

みに実によく知

つまる

歌詞やメロ

ーは、

知って

いるの

だ。も

ちろん

大臣の

名前な

ど知ら

東大の

やあし

詞やメ

「ムード

らはや

ド」が

失って

らされ

最近

うだ。

拠には

けてい

である

それな

の、中

小企

業は



ばたばたと倒れる。

マクロ的（国民経済的）に見れば好況なのだ。が、ミクロ的（企業経営的）に見れば不況である。だから、そこに「不況ムード」がただよう。金融操作が悪いことも一因である。しかし、何よりも悪いことは、国民全体がムードに完全に支配されてしまっている事だろう。現在は好況なのだ、と政府がいい、マスコミがお調子を合わせれば、大衆投資は盛んになり、不況ムードは一変して好況ムードになるに違いない。その時、国際



責画

辻鼻太郎

女性が美しくなる季節となりました。己の心をかえりみて編集部の方々も男性であるならば、さぞかし関心浅からぬものがあるのではないでしようか。女性の緊縛画に興味を持つ私がようやく永年の夢であった責画を書いてみました。御笑覧下さい。

収支が赤字であってもである。変な国である、日本は——。変な国民である、日本人は——。「平和ムード」「太平ムード」と

いうムードもある。われわれが最も警戒しなければならないムードは、これである。「ワシントン広場」はワシントンにはなくニュー

ヨークにある。「平和ムード」の平和何処に？日本に平和があると思っている人々のために「ワシントン広場」

浣腸と浣腸器の歴史

山田正夫

男女を問わず一生を通じて、何回か必ずお世話になる浣腸と浣腸器について次のことが知りたい。

一、ガラス製浣腸器など現在使用されている浣腸器が発明される以前は、どんな方法で浣腸されていたのか。

二、イルリガートル、ガラスシンダー、エネマなど現在の浣腸器は、どの国で発明されたのか。又発明者はだれか。日本ではいつから輸入され、最初に浣腸器で浣腸されたのは誰か？

三、グリセリン、石鹼などの浣腸液は何時頃使用されたのか。

昔はお茶とか、朝鮮人参の様に我が国に渡来した時は、非常に貴重で尊重され、一般庶民には簡単に手に入らなかったように、浣腸器が発明された当時は、高貴な人達とか、お金持ちでないと浣腸出

はワシントンにはない、と本当の事を書いたままである。

(おわり)

来なかったことと思われる。

我が国でも浣腸器が輸入された時は、殿様とかお姫様とか、豪商とか、最初は限られた階級しか浣腸されなかったであろう。

外国と我国とに分けて、時代考証的に、浣腸方法、浣腸薬、浣腸器、カーテルなど、浣腸に関する詳しい歴史を是非記載してもらいたい。

貴誌がSM総合専門誌として我々ファンの要望にこたえて、昨年来悪書追放のとはっちりににもかかわらず、不断の努力をされていることに敬意と感謝の意を表しております。扱て、かねがね人間はいつごろから浣腸することを知ったのか、又浣腸器は、いつ発明されたのか、世界で日本で、最初に浣腸したのは誰かなど知りたいと思っておりますので、以上の通り投稿しました。浣腸ファンのために貴誌が文献誌としてファンの希望する編集をしていただければ満足です。

セーラー服哀歓



並川新一

さっきからA子は、ひざをもじもじはじめた。高校三年生の教室の一隅。A子は窓際の運動場の見える教室のうしろに立たされている。理由は、学校で禁じられているレースのついたパンティを穿いていることが、主任のオールドミスの教師に知れたため。誰かがさきほどの体操の時間に、更衣室でブルマーに穿きかえているときに発見しつげ口をしたらしい。

すぐに職員室によばれて、みんなのいるところで、ブルマーの裾のゴムをまくり上げられて調べられた。黒い木綿のブルマーの下から柔らかなピンクと白のレースの飾りのついた婦人用のしやれたパンティが顔を出したとき、オールドミスはカンカンに怒った。

「次の時間には教室のうしろに立ちなさい」
A子は今朝こっそり、姉のタンスから、このパンティを借用してきたことを後悔しながら、もう一時間近くも誰もいない教室の中で一人立たされていることに、くたびれてきていた。それよりも御不浄に行きたい。紺のセーラー服の下ですでに立派に大人に成熟した肉体があえぎはじめ。折目の正しいスカートの下で、今にも爆発しそうな尿意をじつとがまんしている。ヒタイに油汗がにじみだしてくる……。一寸トイレへかけてゆこうかしら、オールドミスの眼鏡の奥からイジワルに光っている目つきが体をこわばらせる。

「さあ、もう十分に反省しましたか？」

のそりと教室にはいつてきた。A子のスカートが、ときどきにゆれはじめる。ヒザがひとりでにガクガクゆれる。

「どういうつもりで禁止されているものを穿いてきたのです。あなたがたは、木綿の白のズロースで結構……。」

お説教の言葉も、もう耳にははいらない。オールドミスは、A子の苦しさを見ぬいてか、わざと長々とはじめ、チラチラ下腹部をぬすみ見ている。

「先生！ ああ……。」

「何です、はつきりおっしゃい」
もう恥も外聞もない、A子は床の上で子供のよう両足をバタバタあしぶみはじめた。黒いストッキングの足が、トントントン苦しげに静かな教室にひびいた。オールド

ドミスの光った眼鏡がA子の顔をのぞきこんだ。とたん
「アーツ、もう……。」

A子は両手で顔をおおった。シューッと何かが洩れる音。つづいてジョーッと音をたててセキを切ったように溢れるもの。みるみるストッキングをつたわって床の上が濡れる。スカートの内側からも、しずくが一面にポタポタ流れてきて、A子は耳のうらまで真赤にして顔をおおったまま、全身の力が一度にぬけて、その洪水の中にくずれてしまった。

「さあ、そんなところに坐ってないで、お立ちなさい」

オールドミスの皮肉な表情。紺のスカートをすっきり、ぐしよくしよに濡らしてしまったA子を立たせると

「まるで子供じやないの、それなのに、こんなシャレたものなんか穿いたりして！」

叱りながらスカートの裾をまくり上げた。A子はもうされるがままに棒のようにつっ立っている。白にピンクの花模様のついたパンティは、すっかり液体を吸いこんで赤いクツ下止めを濡らしてなおも脚にしたたりおちていた。

(未完)



第十三回

辻村 隆

はからずも三隅良信氏から、是非との招聘を受けて、三隅御夫妻の夫婦プレイを直接この眼で確かめ得る榮に浴した。このプレイの内容をカメラ・ハントにしようかと思つたが、三隅氏自身折を見て体験談として書かれるというので私は遠慮することにした。

彼の家は始めての訪問だが、一二〇坪の邸宅は広々として、かなりプレイに使えるいい場所が多くある。若しプレイの際はいつなりと御利用下さいとの有難い仰せでいつかは三隅宅を拝借したいつもりでいる。

プレイの模様の詳細は、到底この頁では無理であるから、いずれその日の事は、三隅氏自身の筆に俟つとして、私の感心したのは、実に御夫妻の意気がピッタリと合っていることである。一心同体とは、実に三隅御夫妻のためにあるような言葉に思われた。今までにも彼は、しばしばセルフタイマーや、長尺シリーズで御自身等のプ

レイの模様を写つされたが、やはり無理があるらしく、私のカメラの前では、まるで人なきごとく、ごく伸々とプレイをたのしんでおられた。庭先での梯子の両端に横棒を結えた逆さはりつけの圧巻は、今もってわすれられない。すべてのフォトが、夫婦プレイのため、露出しているもので、掲載出来ぬのは残念だが、三隅氏にいわせると、腰を蔽う三角布やパンティまた不自然な隠蔽は、見せるためのもので、不自然だと仰言る。夫婦プレイはすべからず、赤裸々でないといふ面白くないというのが氏の持論で——それなればこそ切迫感とリアル味があるのではなからうか。

引続いて鼻責めマニアの増田喜代司氏からお便り戴き、彼等、御夫婦のプレイを別掲のごとくとした。夫婦プレイが続々と続き出すと、新しいモデルを飼育して大したものもとれぬ時間と手間が、だんだんと煩わしくなってくる。

× × ×

グラビヤ廃止断行後、塚本氏もさすがに大分意慾を失くしたようだ。傑作を撮っても、分譲にのみ許されたフォトであつて見れば、フォトを觀賞してくれる人の数は、自ら限定されてくる。箕田氏の話では、幸い販売部数はさして低下せず、当分の内で続行してゆく腹らしいが、たくさんの方からフォトを何とか掲載出来得るような方法を構じて欲しいと、しきりにいつてくるらしい。一面、反つてスッキリしていいという人達もおられるが、矢張り正直いつて淋しい。三隅氏の提唱するように、附録、グラビヤ面裁断、カバー隠蔽等の方法も考えてもいると思うが、私はこんな考えをもつてい

辻村隆氏の

「サロシ樂我記」に寄せて

長田 太郎

長年の愛読歴ある私にいわせれば、今度のグラビヤ廃止は益々痛快である。五月号の文章で「芳野眉美氏によって……事が暴露してしまつた」これはイケナイ。「事を暴露してしまつた」とするか、思い切つて「事が暴露されてしま

る。本誌に引換券を添付して、本誌購読者に限り添付の引換券を送れば(送料各人負担)グラビヤを送ってくれるという方法である。編集部で相当煩雑だが、送料負担するのだから損をしないし、グラビヤのみ特送になるだけである。

× × ×

岐阜の水野弘氏が、はるばると拙宅をおとずれられ、久し振りに久瀧を舒した。御夫人を帯同されて、生首や処刑、それにお二人の夫婦プレイをとる予定でいたが、私の加減が悪いと聞いて見舞い旁々お二人のお見えになつた。何れお二人の夫婦プレイを撮らしていただく日を何よりの愉しみにしている。友あり遠方より来る。また愉しからず哉である。

「とすべきである。」

話が交りますが、神戸の長田区で、ウィークデイの昼間なら、いつでも無料で開放してあげられる屋内と屋外の撮影場所に恰好の家があります。もし撮影などに必要なときは、フランクに連絡して下さい。都合つけます。

最後に、辻村さんも大いに粗食なさつて、早く元氣になつて下さい。待つております。



殺人マニヤの言葉

黒田 寿

大塚さん
グラビヤに貴女の姿が見られなくなつてから久しくなります。文章の方も「冥府の広場」や「野晒し」以来見かけませんが、いかがしましたか。しかも、私は今まで

のものでは決して満足していないのです。なぜなら、私は一〇〇%の殺人マニヤで必ず殺さなくてはならないのです。
ハリツケにかけられた姿もよいでしょう。火あぶりも結構。しかし、これらが屋内にあってはいけません。両の脇腹をべっとり血汐にそめて、こと切れている貴女。絞首台より両足を宙にうかせてダラリと吊り下っている姿。あるいは獄門に梟けられた生首。そして、これらの場合、刑吏は

絹川文代、梨花悠紀子その他のモデル嬢であり、お互いに処刑されあうのです。

こんなフォトが好ましいし、文章の方もいろいろ希望はあるのですが、現在の状況ではすべてを望むのは無理でしょう。この悪筆悪文をしたためる理由は、こんな変った人物もいるということ、貴女に知っていただきたい、これから御活躍に参考にしていただけたら幸いというわけです。

同好の友、佐出須登氏の「十三人の女死刑囚」をお読みにになりましたか？ これは私の希望をほとんどかなえてくれました。誌上のったものは、かなり遠慮したものでありカットされた場面もありましたが、原作のノートをゆずり

△私は訴える▽

或る郷愁とマゾ感

里乃糸枝

奇クを日々の心のよりどころとして生きています私は、平凡な女の日常生活に羨望の念をもやし、出来るだけ、その世界に近づくために、あらゆる努力を費し、これによって、この世に生を享けた欲びを見出している淋しい人間でございます。

今日もこの町の商店街を多くの婦人達に混って歩いていました。とある呉服屋さん、その家は高級品などを陳列してあり、一度も入った事はありませんでしたが、ふと私の目にとまったものがありました。まわりの布地類に混ってトキネルのひとまき、その色に惹かれるかのように店に入ってしまった。そばにい合せた若い女店員さんに、あのネル地を取り出して見せてくれといいましたところ、新しい品より、こんな売れ残りの古い

ものを買われるのですかと私の顔を見ながら出してくれました。それは、この頃では余り見られない桃色で、布耳に淡青色が入っております。中の部分の汚れていないのを三枚分ほど切ってもらいました。本当は全部欲しい気持でした。店には他に二人ほどお客がおり、私の方を見て話をしていたようでしたし、私の変った買物の相手の店員さんに対して何かしらの異常な心情を与えてしまったようで、私はこの時、妖しいマゾ感を得ることが出来ました。

私のなつてみたい。逢つてみたい……という思慕する女性は、田舎出の感じのする、身なりは冬ですと、大柄または緋柄の袴の着物に毛糸などの上被、そして割烹着、襟巻をつけた姿。このような何処にでも普通に見られる人達です。

うけましたので、それを書いてみます。

もちろん、殺されるのは貴女たちです。とうてい誌上に出せるような代物ではありませんので、絹川さん、梨花さん、その他の方々にも参考として回らんでもしていただけたら、この上の幸せはありません。作者が男性である以上、最も興味のある場所がどこかは、いうまでもないでしょう。書くのも恥しい位ですが、心臓を強くし

てやってみます。

なお、私も短篇が何回か採用になり（水責め、パンティと死刑マニヤ、小説映画の処刑ETC）貴女もたしか、二、三回殺されているはず。

感想なり今後の抱負なりを、誌上に発表をお願い出来ませんか。また貴女自身、どのようにして殺されてみたいかなど――。

大塚啓子様

黒田 寿

責め熟語辞典

「座禅ころがし」

昔牢番が女囚を犯す方法の一つとして「座禅ころがし」というのがあった。これは女囚を裸にして後手に縛りあげ座禅を組ませる。座禅というのは、左の太ももの上に右の足先をのせ、更に右の太ももの上に左の足先をのせる方法で両ひざが十分に開き、組んだ足は手を使わなければ外すことが出来ない。体力のある男ならともかく、女には出来ない事だ。こうしておいて、前方へつき転がすと両ひざ頭と頭の三点で支えられて臀部が高く上り、動くことも左右に

転がり逃れることもできない。後方から誰に何をされようとも、どうすることもできないし、相手の顔を見ることがすらできない。

「高手小手」

高手小手縛りの略。高手とは臀部から肩まで、すなわち二の腕、たかうでと呼ばれるところ。小手とは肘から手先まで、普通は手首と呼ばれる部分。人を後手にして肘を十分に曲げさせ二の腕と手首とを嚴重に縛ることをいうが、小手の部分が下らないため、首に縄をまわして手首を引きあげ、手首を下げようとすれば首が締まるようにして逃亡に備えた。

そして私が、このような中年女であつたとすれば、

或る冬の日の事、少々着ぶくれた姿で、自転車に乗っての買物の帰途。

乗り降りの際には特に着物の前が開いて、スソの内から下になっている晒のオコシと共にトキネルのオコシまでが布スソの青い色もあざやかに、出て見えてしまいます。

ふと気がつくとい人の男の方が後からずっとついて来ているようなのです。私はもしかしたら着けているネルのオコシに惹かれていたのかしら……と想いめぐらしてしまうのです。そして、その人が



何か話しかけて来た時は、私の変わった性向も何もかもしやべってしまおうかしら、と年甲斐もなく、いうにいわれないマゾ感に体中が打ちふるえ、変な気持ちにおちいつてしまうのです。これもつまらぬ女のたわ言でしょうかしら。

る我が手にすがりゆるし乞う妻

背を打ちし鞭がヒップにとどき、しかミミズばれせし妻の柔肌

噴きいずる汗にじむ肌いとおしむ小さきゴミのつきいるをみて

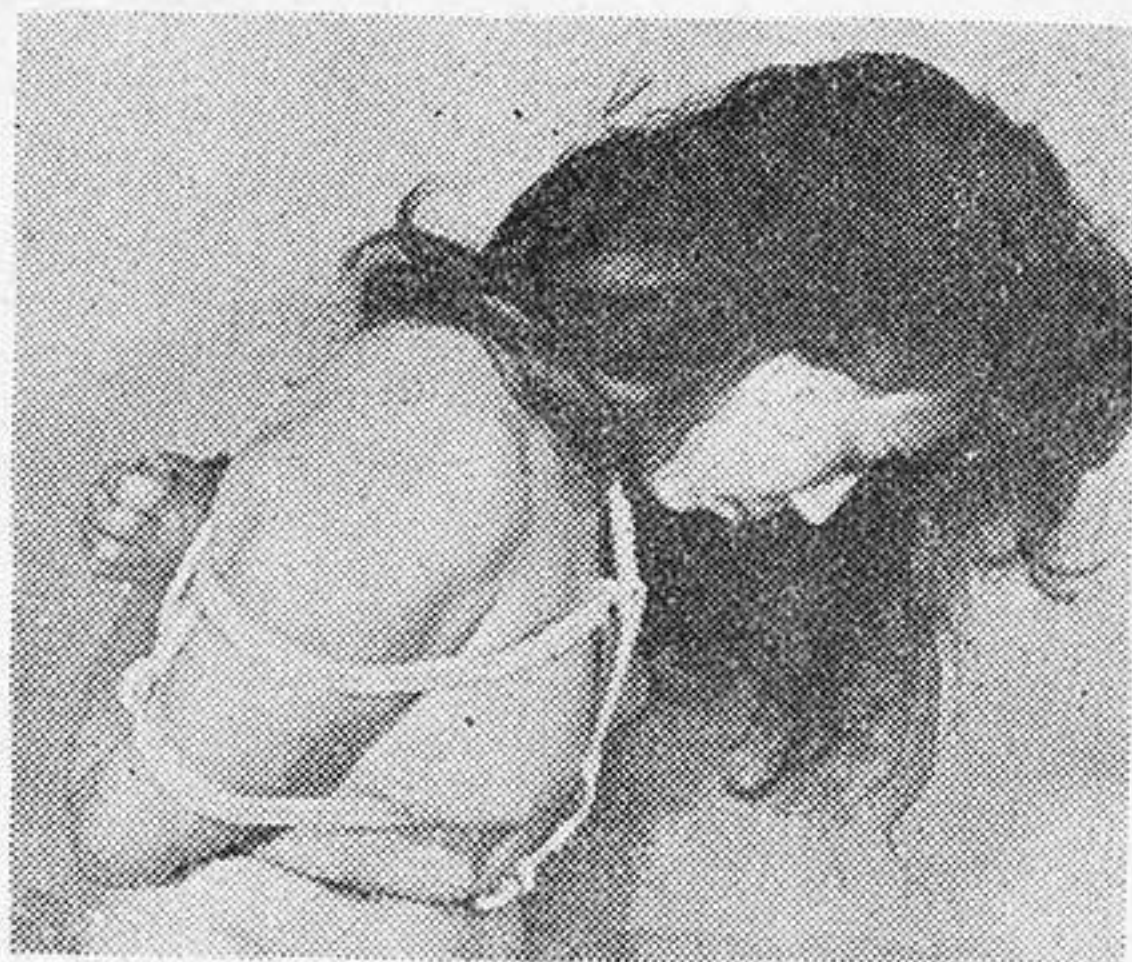
短歌

鞭打抄

後藤図子

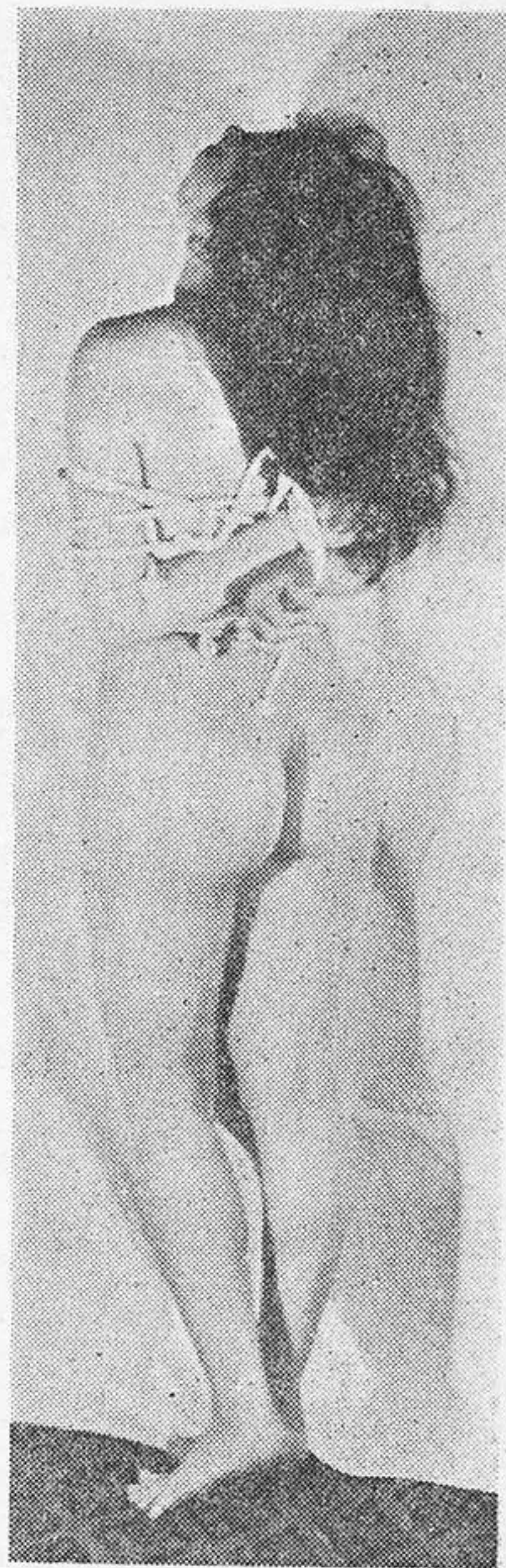
泣きさけびたおれ伏したる妻の背にあからさまなる跡ぞのこれる

革の鞭はっしと鳴らし素振りす



「夫婦プレーフォト」に寄せて

新宮 明夫



長かった寒い冬が去り、再びプレーを楽しむ暖かい季節となりました。夫婦プレー愛好の皆様、その後いかがですか。私達夫婦も本年度第一回のプレーフォトを写しましたので、その内の差障りのないものを選んで皆様の御批評を得たいと思います。

毎号この欄で新しい御夫婦の方々によるプレーフォトや御意見を拝見し心から嬉しく思っております。グラビア廃止後、本誌ではこのサロン欄が重要な役割

を果たすこととなりました。そして奇クサロンが夫婦プレー愛好者の意見や作品によって相当紙数を占める昨今です。読者通信欄のように通信文のみでなく、その人の作品に接しますと、その人と直接お話ししているように思われて一層、親しみを感じます。

夫婦プレーを望まれていても奥様の協力を得られない方々も多いと思いますが、それは夫たる者の啓蒙不足かと考えます。奥様を頑迷に支配しているSMプレーに対する偏見と極端な羞恥心を取除かねばなりません。夫婦間におけるSEXが睡眠や食欲と同様に扱わ

山原清子
後援会座談会の件

編集部

○六月号の本欄で山原清子後援会のことを発表しましたところ只今まで二十数名の方々のお申込みをいただきました。

○最初の予定では数名位いだろうということ企画をしておりましたが、この調子では、まだまだ増えそうなので、第一回の座談会は一応六月中旬と予定しあと八月に第二回目を行いたいと思います。

○なお、入会の方へ贈呈する写真については、小型のもので枚数を増してほしいとか、中判がよいとか、いろいろ御注文がありますのでハッ切写真をやめ大中判二枚にいたします。

○後援会の入会金は一口千円で、入会御申込みのときは、刺青、Mフォト、緊縛フォトの御希望別をお書き下さい。

○座談会開催の日時、場所は追って直接お知らせいたします。第一回開催の場所は、大阪市内若くはその近郊です。座談会の記事は誌上に掲載いたしませんので費用は御負担ねがいます。

〔告白〕 「耳輪と私」

刑部典子

れながら、それがSMに通ずる一つの形態であることを自覚しないのです。但し女性特有の羞恥心を完全になくしてしまうことはSMプレー自体を味気なく意味のない

ものにしてしまいます。女性の羞恥心を利用して責めることこそSM最高の奥儀なのです。公刊誌という立場上の制約から思い切ったプレーフォトを發表できない

のが残念ですが、今後とも同好の方々の作品發表を心から期待いたします。私も皆様に喜んでいただける作品を發表させてもらうつもりです。

○山原清子さんには、いつでも出席できるように待機してもらってあります。刺青、SMに関する告白を執筆して貰っていますのでいずれ發表できます。

読者通信を拝見しますと、佐々木様始め、みな様が、わざわざ神戸までいらっしゃって、私をお探しになった御様子ですが、私、辻村様とお逢いしまして、生れて始めてプレイ致しましたあの日から二週間経って、国の母が体を悪くしたものですから、帰省しておりました。折角さがされたのに本当に御免なさいね。やっと数日前上阪しました。辻村様には早速、連絡しておきました。四月一日、より大阪のミナミのある喫茶店のレジスターを勤めております。以前中華店もよかったのですが、より御給料もよく、前の店をやめた人が、ここにいますので誘われたのです。

相かわらず、ひすいの耳輪はは

めております。耳穴をかくすためと、ひとつは私の財産を体にあたえずつけておくためです。

もう一度、辻村様にプレイをお願いしたのですが、御返事ないのは、どういう訳でしょうか。典子は悲しくなってしまう。本で見ますとお体を悪くした御様子なのでそのせいかしらとも思って、独り慰さめておりますが、簡単でもいいから御返事位いくれたっていいのになあと、ちよっぴりうらんでいきます。御免なさいね。辻村様はあれからすぐ、塚本様を私に御紹介なさって、御自分はいらっしゃいませんでしたわね。あの日は何か気恥かしいようなポーズ許りでした。だってノンコ、男の方のするあのようなフンドシをするな

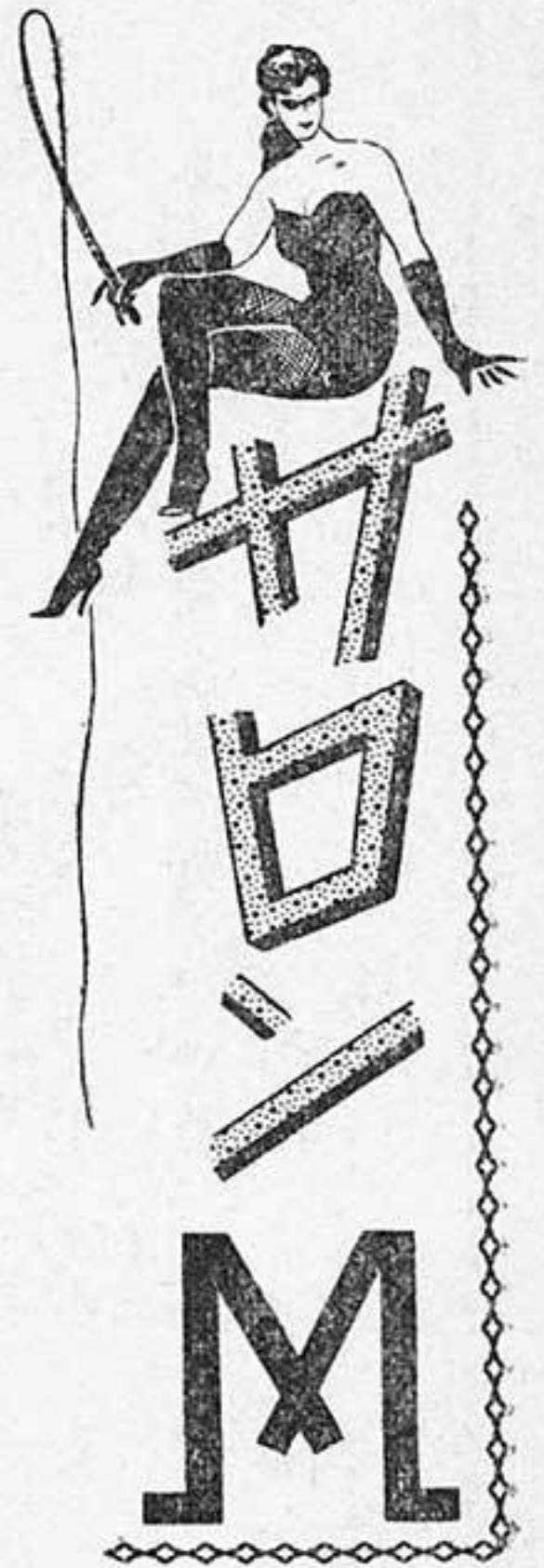
んて生れて始めてですもの。本当に恥かしかったわ。私にはやはり耳を責めていただくのがピッタリ一番です。耳責めを主にして、それに伴う縛りや責めなら、どんなことでも我まましますけど、耳責めがなかったら私にとってお刺身のないつまだけみたいです。

逆吊りされて、両耳に何か重いものをぶら下げられたら辛抱出来るだろうか。私の耳責めのフォトが早くグラビヤにもっと判っきりと出ないかなあ。耳をいじられ、耳穴を強くねじり上げられたら、どんなにいいだろう。なんて独りで考えては赤くなっています。

お友達慶子さんと百合枝さんと三人で、マンションを借りていますが、慶子さんは私の耳穴が穿たれている事に昨日の夜、お風呂で気付きました。中華料理店の主人に無理矢理あけられたのとごまかしましたが、ドキリとしまし

た。けれど若し慶子さんが私と意気投合する人だったら、女性同志責めたり、責められたりするものもたのしいなあって、そんなことを考えていますが、私からの切出す勇気がありません。いつかそうになったら、また、辻村様にでも御紹介しようかしら。慶子二十一才。凄く美人だから、ちよっと心配だけど。

「カメラ・ハント」がのってから電車にのっていても、何かジロジロ見られてる感じがしますけど、私の独り合点かしら。今一寸、髪型もかえたから、滅多に分りっこないと思うけど。でも世間は広いようでも狭いものですかね。そのうち慶子さんも百合枝さんも、きっと私達の仲間になってみせます。辻村様、一度お便り下さい。くれぐれもお待ちします。次はどんな緊縛にでもたえます。耳責めが面白くなければ辻村様のおこのみの方法で結構です。



黒 瀧 嬰 一 さ ん へ

麻 生 保

六月号に載ったあなたの奥様の手記を拝見し、あなたが何やらはなはだしく意気銷沈しております。三月号の読者通信であなたのデビューに心から喝采を送った私は、あなたが「書くことをやめた」などといわれているのを、だまってい

るわけには行きません。一体どうなさったというのですか？ 奥様の書かれたものによると「最近号からショックを受け（中略）作品が奇クに不向きであるという意味を読みとった」とありましたが、多分あなたの作品が高級すぎるとか難かしすぎるとかいった意見があった。または、あなたがそう解釈された、のでしょう。そういう批判があったとしても、私は別に意外だとは思いません

ん。でも、どうしてそれを、それほどに気になさるのでしょう？

二、三の心ない人が何かいったとしても、あなたを支持する声に、より多く耳をかたむけようとなさらないのですか？ あなたの該博な知識と美しい詩藻とを盛った「世界史シリーズ」は奇クの愛読者にはむろんのこと、歴史上の人物評伝としてその道の学究にも高く評価されているのですよ。以前、沼正三氏が「手帖」を連載されていた時にも同様の批判が聞かれました。が、今とってみると「手帖」の文献価値はまことに貴重なもので、この種の古典といつて過言でありません。あの頃、編集部と沼氏がくだらない批判に屈していたなら、われわれは今どんなに不幸でしょう。

奇クがグラビヤを廃止してから内容が充実してきた、という声が高まっていますし、永年の愛読者である私もそう思っています。す。一体、奇クのような文献誌にグラビヤを多く配することはむしろ邪道であり誤解のもとになる、と考えていた私なので、現在の行き方は後退どころか本来あるべき姿になったのだと思っています。

紳士のための文献風俗評論誌に向上発展して行こうとする編集部の意気込みは、ここ最近の月号の著しい充実によっても明らかなのですから、あなたの作品が「奇クに不向き」などということはあり得ないはずですよ。（箕田さん、辻村さん、ね、そうですね。）そしてまた、あなたの文体が「難解にすぎる」などということもありませ

ん。そりや、広い世の中にはあの程度の文章をさえ読みこなす能力のない人もいますし、何でも「見る」か「触れる」かしないと承知しない想像力の貧しい素朴な実存派もいます。また、うすぎたなく安直な生活リズム派もいます。でも、奇クの愛読者の大多数は違う、と私は信じています。なぜなら、知性と趣味性、学殖と美的センス、耽美、幻

想、エリート意識、こういったものは、真のアブの世界に生きるために絶対に不可欠な代物だからなのです。ごらんさい、ユイスマン、ワイルド、サド侯、ザッヒエル・マゾッホ、レチフ・ドウ・ラ・ブルトヌ、谷崎潤一郎、泉鏡花、麻生保、彼等は皆、精神貴族であり、その世界に狷介孤高な生き方をする勇氣をもっていた（あるいはもちつつある）すばらしい人達ではありませんか。

黒瀧さん、どうか勇氣を出して下さい。そして、はるか遠い昔の高貴な美しい女性達の姿をあなたの麗筆で私たちの脳裡に彷彿たらしめて下さい。

最後に黒瀧夫人に一言。

「本人さえも名作とっていない作品」とか、「非才と偏向教育と異常性格。高級な叙事詩など出来るはずありません」というようないいかたはなさらない方が旦那様の精神衛生上よろしいのではないかと思います。おせっかいながら、いささか気になったものですから。

では、お二人の御健康と御健筆を心から祈って筆を置きます。さようなら

「営業部たより」

○グラビヤ写真集、美しき縛しめ第五集（略号「美5」）を企画しております。近々印刷に着手しますので次号には詳細発表できる筈です。御期待下さい。

○新しい分譲写真は毎月「今月の代理部分譲品」として発表しております。つとめて新しい趣向のものを心掛けておりますので、お気

に召したものからお申込下さい。

○代理部分譲品目録は、只今作成しております。故、毎月号の誌上に掲載している広告によってお申込下さるようお願いいたします。

○最近号に広告してありません分は、古い旧号に広告してあります。ても在庫いたしております。

○分譲品の御注文は、必ず略号によって御指定願います。こういった内容とか、こういった傾向とか

いった漠然とした御指定はしないで下さい。

○御注文品の送り先は、必ず楷書で願います。不十分な宛先では誤配や返戻になる恐れがあります。故△△方、××寮内という肩書きもお忘れなくお書き添え願います。

○当方の差出人は阿倍野局私書箱第十四号、箕田京二です。

○本誌旧号の在庫も次第に減少しております。在庫一覧表は最近号

の末尾に掲げております。故、それによってお申込下さい。特集号は殆ど売切になってしまいました。

○一度売切れになりましたものや分譲打ち切りになりましたものは、補充できかねます。故、御諒承おき願います。

○局留にて郵便物をお愛取りになられる際、御注文によっては第一種、第三種、第五種と分けてお送りすることがあります。



「僕のイメージ画」

室井亜砂路

「黒いタイツの女少」と「夕立」



身重のヴィーナス後日譚

瀬 沼 四 郎

「大阪新夕刊」という新聞の五月四日付の紙面に次のような囲み記事がのっている。

「長柄国分寺の近くにストリップ小屋Nミュージックがある。間口二間ばかりの、まことに小さな小屋で、恐らくこれだけ小さなストリップ小屋は、ほかにないであろう。

客席も五十人程度である。料金は四百円。八時以降割り引きの三百五十円である。こんな小さな小屋で一体どうしてソロバンがあうのかと思うのだが、結局ストリップに余り値段の高いものが少ないからであろう。

……中略……

こうした小さなストリップ小屋なら、せめて落として見せて、のぞかせるストリップパーがいれば、と思うのだが、矢張りギャラの関係からか、いまひとつおもしろくない。中には全然、落とさないもの

のがある。いまだき落とさないなど全く珍しいことである。

ただ、ここで明らかに妊娠七カ月ぐらいと思われるストリップパーにお目にかかったことがある。ほんの四、五分出ただけであるが、さすがに身重な体を見せるのが恥ずかしいのか隠してばかりいる。でんとつき出たお腹にヘソがうき上がってそれとはっきりわかる。動作も不自由で歩く程度である。

こんな体でも、多少の金になると出演しなければならぬのかと同情を寄せるお客もいた。およそ口の悪い観客であるが『ニンプは引っこめ』などとはいわないのはさすがである。

しかし、小屋の方ではどう思っ
て出したのだか知らないが。ちよ
っと変わっていておもしろく思
う人もあるらしい。きまりきった
ストリップを見ているよりも、こ
うが、かえって興味を引くとい

人もある。場末の小さな小屋だからこそ、こういう風景に接しられる。もっとも、あまりにも残酷だ
と思う人もいるのは当然だ。

ところで、このNミュージックというのが、小生が二月号の奇クサロン「身重のヴィーナス」で紹介したナニワ・ミュージックなのである。大阪市内、天満駅から歩いて行ける程度のところで、市電長柄国分寺電停のすぐ前だ。この記事にある妊婦が昨年十一月小生に見たものと同じかそうでないかちよつと分らないけれども、小生の他に見た人もあるのだ。しかし、四、五分程度などとはいわな
いで、踊りは無理にしても、十五分なり二十分なり妊娠腹をじつくり拜ませてほしいものだ。ギャラが安ければ安い、探し出してでも、臨月まで、いつも妊婦の一人ぐらい出演するようにしてほしいものだ。落として見せなくても、妊婦腹だけは完全に裸出してほしい。小生のように、ボテレン腹の妊婦ばかりを求めて、ストリップ劇場に入ってみようという気になる男もいるのだから、奇クなんかで交渉して妊婦ストリップ常設などということにならないものだろうか。

「僕のイメージ画集」

室井亜砂路

四月号の吉村英子氏の短歌、『病床日記』大変、感心しました。オムツと浣腸に関する作品で、これほど完璧にマニヤの心情とムードを表現し得た文章を僕は他に知りません。そして、僕もマネシテ、おしめと浣腸をテーマにした絵を二枚をえがきました。(B)(C)

特別料理(D)。組上の鯉という言葉があります。本来、男の潔さをいった言葉でしようが白い腹部を柔かく息づかせて、さらしている様子には、観念の眼を閉じたマゾ女性以外の何物も僕には感じないのです。しなやかな指が、型に沿って流れ、ピタッと、それを組の上に固定します。

狸(E)。尻尾は現したが、身体は依然化けたままです。大人のメルヘンとして描いてみました。

夕立(F)。雨ガエル。カエル。河童。合羽。おかつぱ頭。三月号の大阪雨奇男氏の素晴しいゴムプレイから連想してみました。
木馬(G)。

奇譚クラブ

昭和40年7月号

(1965年・7月号 <第19巻第7号・通刊204号>)



愛読者のみなさまへ

おねがい

華やかに百花繚乱と咲きみだれる花のように色刷口絵を誇ったときもあれば、また表紙まで白地のアート紙に墨一色という、またことに色気のない時代もありましたが、本誌は終始一貫、同じ題号にて発行を続けてまいりました。その間、実に通刊二百号を越す過去の歩みを顧つてみまするに、本誌の今日あるは偏えに愛読者の皆さま方の、ご愛顧の賜と厚く感謝しております。

元来本誌は決して単なる性雑誌ではなく、特殊な風俗文献専門誌を自負してきておりましたが、その内容の性質上、その時代時代に於ける世相風俗を敏感に誌上に反映させる必要のあることは、論を俟たないところであります。従つて、ここ数年来の世情に鑑み、本誌の内容に自粛刷新が加えられてきたことも又当然のことであります。

殊に昨年より青少年保護育成に関する論議がとみに高まり、それに対処するため本誌の編集方針も大幅に改訂を加えられてまいりました。その一つの現われとして、本年三月号よりは口絵並にグラビア写真を全廃するといふ大英断を敢て実行してまいりました。幸い愛読者の皆さまのご支持により、その後毎月確実な刊行が続けております。何卒今後共更に一層のご愛顧のほどを、心からお願い申し上げます。

雑談的な

「SM風俗」

あれこれ

夜乃探郎

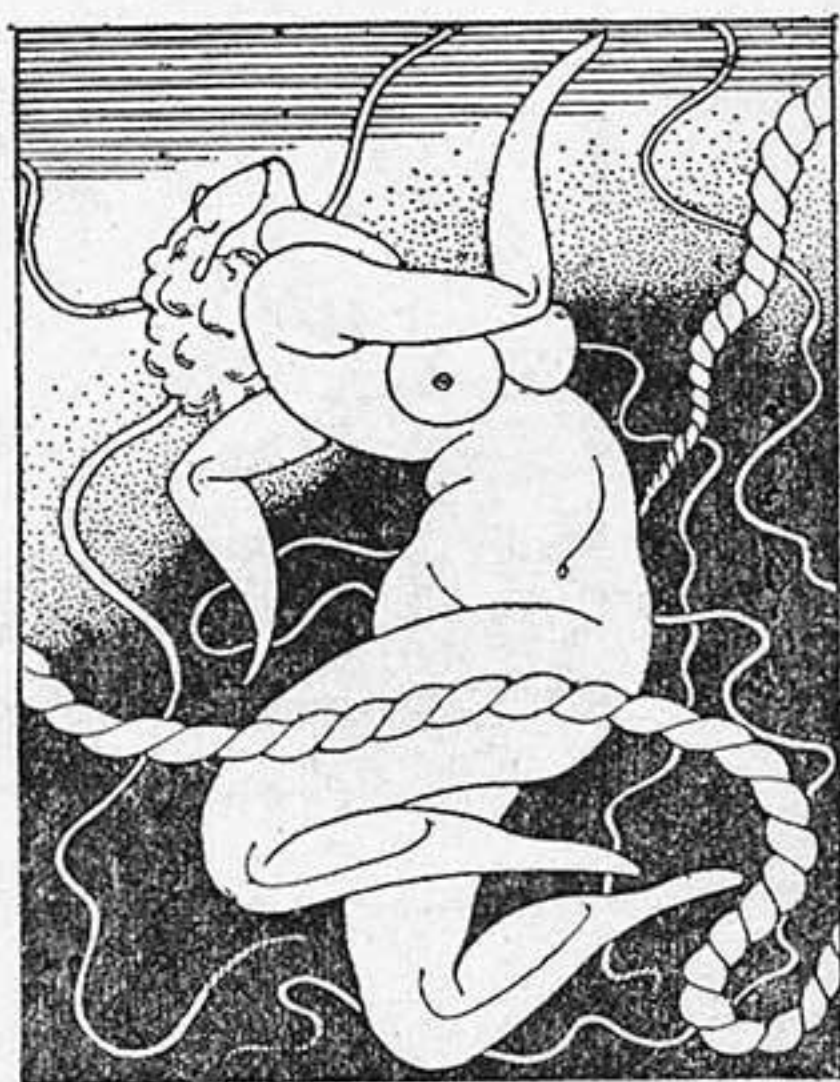
◇窓をあければ港が見える——あの黒いドレスにでっかいオッパイを両腕でかくすようにして唄う淡谷のり子女史の「別れのブルース」は、オールド・ファンには懐しいえきぞていっくなものである。昨年のみそかに、おなじみNHKの紅白歌合戦で、まことに久方振りに彼女が登場し、この唄をうたったのをテレビで見たが、まさに貫るく十分、ただし、どこかくずれたような妖艶さは残念ながら、うかがう術もなかった。（アタリ前だ）話によると、なんでも、この「別れのブルース」は、作詞者が、ハマ（横浜）のパラダイス？（本牧ホテル）とかで、ナントカした？とき、ふと窓をあけて波止場が見えたので、そのままの感じを作品化したとか——の伝説

？がある。

まア、こんな罪のない？ 調子でSM的な風俗談義のあれこれをやってみよう。

◇「奇ク」の最近号では、刺青の女王・山原清子嬢の御登場で、話題をにぎわしているが、先ずチョットこの「刺青」に触れてみよう。入墨と刺青はちがう。入墨というのは、一般の重罪人に右の手首にやや太目に墨の輪をぐるっと入れたものをいうのであって刺青というのは、色々な所謂くりから紋々というのである。でもいまでは、どちらも「いれずみ」と評していられるので、たいした頭を使うことはないが——だが、S的時代物でも書かれるご参考までに。

「面倒だから肌をぬがしてもらいますよ。お



い、一寸おやじさん。わたしやね、そんじよ、そこいらのお姐さんとは、ちっとは違った女でしてね」

この調子で刺青を見せて、たかるのは——明治の頃、大阪を中心に物凄く活躍した古今の女盗大毒婦、雷お新だ。彼女はもろ腕から背、更に内股にかけて、黒雲にのった雷神をほっていた。その当人が、また水もしたたらんばかりの美人だったから、その刺青は、いざというとき、まことに100%の働きをしたらしい。（彼女の刺青は京都大学の医務室に、風聞によると医学上の参考品として現在も保存されているらしい。この世にも珍らしい雷神の刺青は、処刑後、当時ある有名な医学博士のメスの下に、見事にはがされた）

その他、安政の頃、稀代の妖婦「紋ちらしのお紋」これは変った刺青で、新しく情夫が出来ると、その男の定紋を自分の肌にはりつけた。恐らくその数は、千に近いということだ。しかも、彼女は最後の死を共にした情夫某の家の紋を、特に彼女のかくし所にほらせて、自慢にしていたらしい。

◇刺青が出たところで「生首」について触れよう。これは、生首趣味の、新宮明夫さんへのサービス。でも書き方によっては、グロにな

るので文学的または精神分析的に高尚にやってみよう。(生首趣味が、グロというわけではなく、私の表現の下手なために、御理解願う)さて、有名なオスカー・ワイルドのサロメがヨカナンの首を望んで止まない場面は「食人性」に「能動的虐待性」が加わって現われたものと解されるようだ。食人性は、人肉を食み、血を吸る無意識の願望に因している。もちろん、これに対しては強い反応構成作用が示されるので、嫌忌、恐怖として自覚されているが、時に依り、性的願望の構成要素として、薄き仮面の下にてしめされることがある。例えば、母の乳房をかむ赤ちゃん。睡眠中、歯をかむくせの人は食人性の発露。また、金属、石などとマサツする時に生ずる「歯の浮くような音」を嫌う人は、これに対する反応構成を有するものと見られる。だれにも、多少とも、SMがあるように、それが極端に(出たら大変、人喰い人種になってしまふ)現われないだけで、無意識のうちに、何らかの形で前記の例のように出ること論をまたない。御存じ、歌舞伎の「奥州安達ヶ原」の鬼バアサンは、この食人性を象徴するもの。

◇このへんでえろていっく(エロではありません)世界を一つ、SMも、ここでは、芸

術的にいきましよう。

風俗的にカチのあるえろていっくな画集は現在までに、どのようなものが、出されているか、主なるものは世界的なもので、「フックス画集」(昭和三年文芸市場社刊)。「画譜一千一夜物語」(昭和四年十月、国際文献刊行会)。これは仏国マルドリウス原著を矢野目源一が訳したもの。「ピアズレー画集」式場隆三郎の限定版。「フックスの風俗の歴史」これは戦後版で、安田徳太郎訳で、たしか十二、三巻? まで発刊されたと思う。ただし、はっきり公刊書として、店頭に出されたので、挿画も手加減されており完全本とまではいかないようだ。

「ボムペイの美術」A5版で、原浩三著で、昭和二十八年頃に作品社から予約受付をしていたようだが、出版されたかどうか。これはかの有名なイタリヤ政府が認めているナポリ秘密博物館や秘密室や、ボムペイ遺蹟の絵画を紹介したもの。ダイジェスト的な同著者による「人間探求」誌の昭和二十八年五月号にある。「バイロス画集」これは、耽美的な画家、フランツ・フォン・バイロスの黒と白の素描芸術として、まことに繊細な感覚と装飾的な構図を以って、夢のような、えきぞちっく、えろていっくずむの絵巻をくり展げ

たもので、私の最も好む作風だ。戦後も、予約出版されたようだが不詳。ただ、私は、ある風俗文献誌に、口絵となっている「ヴィナスの花苑にて」を所持しているだけ、女の同性愛的なムチを持った嗜虐的なモチーフが多い。

◇かの、緊縛責めの大先駆者、いまは亡き伊藤晴雨画伯(「奇ク」にも旧号に、その一文が掲載されたようですね)が、その芳年などの無残絵のグロ味を薄めて、エロチシズムを強調した被虐美術が今は懐し、あの大正より昭和の初期にかけて、マニヤの絶讃を博したが――、この時代が、大体、いまの責め絵流行の、そもそもの発生になるらしい。この世相は、関東大震災の復興景気からの、いわゆるエロ・グロ・ナンセンス時代で、軍国主義が、ようやく、そのシッポを、少しチラツカセはじめたとき。東の間の刹那主義が、バク発したといっても、まあ、平和な時代でもあった。この時代の絵は、新しい画風が取り入れられた――、またより刺激的なものが、読者の要求で発表された。

◇終りに――雑談って、切りのないもの。しからば、昔も今も、世に責め絵の、SMの世界はつきまじき――という落ちで、やめておきましようか。

読者通信の女性たち………

(三十九年度の読者通信から)

Mの女性

△芳野眉美▽

A 伊東恵子(明石)さん

三十九年一月号読者通信に、伊東恵子さん
にあてた通信が三通ある。

その一

「三十五才になる会社員です。そしてSで
す。今迄幾度となくM女性の投書があり乍
ら、生来の弱気の為に投書の機会を失って
おりました」
気の弱いSですこと。

「美しい顔につんとすまして鎮坐して居る鼻
を身動き出来ぬ様に縛って(以下略)」

とありますが、難解すぎやしませんか。

彼、局止めを指定しています。

「真面目なプレイの御交際を、お願い致しま
す」

と結んでいる。

その二

「私には貴女の間々のお気持ちが、手にとる様
によく分ります」

とあり

「私は至って温厚篤実の紳士と些か自負して
居ります」

結構なことです。彼も局留を指定

「心ゆくまで、貴女を慰めて上げたいと思
います」

やさしいSですこと。

その三

「土曜日の午後一時頃、国鉄神戸駅の改札口
に来て下さい。日印に週刊紙を持ってい下



さい。私も丸めて持って居ります」

それだけです。簡単ですね。

誰だかわからない人のところに、簡単にノコノコで来ると思っているのかしら、彼。こんな手紙が一番失礼な手紙だとは、お思いになりませんか。

前者二人は一応局留を指定、彼女の手紙を待って、それから自己紹介なり、人物を判定してもらい、信じてもらえば交際、という段取りを踏むわけでしょう。

プレイをとまなう男女の交際なのでですからやはりそこにはルールがあり、日常の礼儀があつてしかるべきです。

二月号にも彼女あての通信が二通ある。

その四

「経験がなく、相手になって下さるM女性のさがし様もないので困っております」

誰でも悩みは同じということ。

「連絡先は編集部へお問合わせ下さい」

とありますが、編集部では絶対手紙の回送や問合わせに応じないことを、繰り返し宣言しているはずでしょう。

自分勝手な考え方は編集部に失礼ですよ。

その五

「我々には異性なんて、とても高嶺の花でし

たが……（以下略）」

なさけないSですこと。それに「我々」とは誰を指すのでしょうか。

「とにかく、一度お便りを下さい」

とありますが、彼の連絡場所は指定していない。これでは手紙にもならない。

——と、Sの男性諸氏（自称）をコキオロしておいて、伊東恵子さんの通信をさがしたら、あった。

三十八年十二月号読者通信。

「すてきな男性にアパートの一室に閉じ込められて、しばらくあぐく、さんざんもてあそばれたく思います」

とは泣かせるねえ。

いいですか、右の五人の諸氏。伊東恵子さんは「すてきな男性」と、ことわつてあるのですよ。

「お乳を、背中を、お尻をマッサージ」

ときた。

「いやがるわたしに浣腸をして、しばって放っておかれたいなんて思います」

彼女、二十一才のBG。

「どなたか本当にまじめな方で、私をなくさめてくださる方はいらっしゃいませんか」

その結果を、私は知らない。

B 森田峰子（布施市）さん

三十九年七月号読者通信に、森田峰子さんあての通信が三通ある。

その一

「私は三十六才、妻子もあります。妻は私の願望に全然理解がないばかりでなく、嫌悪さえ抱き一時は離婚に迄発展しそうになり……（以下略）」

家庭不和ですか、おだやかではありませんね。

「十年近くK誌を愛読して来ましたオールドファンですが、通信欄に投書するのは始めてです」

この「始めて」という方が非常に多いのに驚きます。それにしても、オールドファンと自称するなら、編集部で連絡先を聞いてくれという言葉は書けないはずですよ。

彼、この一言にて失格。

その二

「誠にあつかましいと思うのですが、ご紹介願えませんでしょうか」

まったくあつかましい。彼も失格。

「職業がら（税金関係）責任は十分取らしてもらふ決心です」

誰でも云うことは同じということ。

その三

「昭和六年生れ、未婚、気の弱い人間です。体の貧弱な、風采の上らない男です」

まったく「気の弱い」方ばかりで、書いている私のほうが腹が立ってくる。

「あなたへの申し込みの連絡の通信が、たくさんきているだろうと思うと、ぼくも、すこしゆううつになります」

やめた。

ところで、森田峰子さんの通信は六月号にある。

「お恥しいことながら、一度モデルとして使っていただけないかと、胸をおのかせております」

とつつましく

「私は若くはないので、駄目でしょうね」

二十七才の洋裁店に勤める女性。

「小柄なので年よりは二つ三つ若く見えますが、肌の色は小麦色」

モデル志望ですね。

となると、右の三氏はSだと思ふのだが、まるでMの手紙を読んでいるみたいなのがする。

(Mでも、あんななさない手紙は書きたく

ないな)

このモデルの件、十月号に

「編集部からは是非モデルに、という有難いお言葉にも、自分の身体に自信がないため、お断りしてしまいました」

とある。残念でした。

C 冬木尚子(大東市)さん

三十九年八月号読者通信

「私の春のめざめも、お恥しいことながら、男の方から乱暴されるという空想から起ってまいりました」

「化粧室に一人いるときや、トイレから出てきて誰もいないときなど、誰か若い男の人が自分に襲いかかって来ないか、という恐怖と期待が胸をおのかせます」

おだやかではありませんね。

「二十何冊かの貴誌が私のマスコットとして机上を飾っております。若し私に恋人ができて、この私の愛読書を見たら、どんなに驚くことでしょうか」

驚かない人もいますよ、きっと。

「私とてもそんな勇氣はないんですけど、若し縛られて写真をとられたとしたら、最高じゃないかしらと考えたりしています」

花嫁修業中。母娘二人の生活だそうです。

彼女の通信は十月号にもある。

「自分の書いた文章が活字になったのを読みかえてみますと、まるで自分が裸にされて人前にさらされたみたいで、思わず顔を赤らめてしまいました」

いいな、この感じ。冬木尚子さんって、とても可愛い方なんでしょうね。

「男の方って、せっかちですね。やはりゆっくり文通をかさねてから、二人の気持がぴったりした上で、自然のなりゆきのようにお逢いするのだったら、ロマンチックだと思います。すぐプレイだなんて、とても考えられません」

そうですそうです。

「私のデリケートな心理をよみとって下さる方っていないかしら。Oさんのような野卑なのはきらい」

その「きら」われたO氏の通信は九月号にある。面白いから書いてみましょう。

「尚子、もう変にとり澄ましますまい。ともかくこの俺と話し合う機会をつくり給え」

「君が本当に自分の性向に忠実になりたいのなら、俺に従う事だ」

「恥かしがったり不安がったりする閑があっ

たら、一度白日のもとで俺と会って、俺をよ
くよく見極めることだ」

通信だけで「見極め」られちゃったじや
ないの。残念でした。彼、一方的すぎる。

「S傾向六割、M要素四割という、少々変っ
た性向の持ち主です」

って云うけど、別に「変って」いないじや
ない。普通の、SMに関係のない、K誌の存
在も知らない一般の人と変らないってことで
すよ。その四分六というヤツは。

「かといってこの性傾向のおかげで、哲学的
にも文学的にも視野が広くなり、情操面が培
われた事を喜んでいます」

オソレイリマシタ。

さて、この九月号に彼女あてのが外に三通
ある。計四通。

その二

「八月一日・八日・二十二日の各土曜日の午
後六時より六時半迄の間に、環状線京橋駅の
外廻り（天王寺行）ホームの中央時計附近の
ベンチに腰掛けて御待ち下さい」

「目印として左手にハンカチを巻き、バッグ
をひざの上において、週刊紙を見ていて下さ
い」

逢うための苦労右の通り。しかし、これじ

や不成功間違いなし。御苦勞様。

彼、図う図うしいよ。

「どなたか、小生とプレイして下さる女性の
方いらっしやいませんか」

彼女、これを読んで怒ったでしょうね。

その三

「貴女様と紳士的なおつきあいが出来れば、
どんなに遠くても都合つけてはせ参じます」
彼、関東。彼女は関西。それにしても「は
せ参じ」は古風すぎるし「紳士的」にいたっ
ては云う言葉なし。

その四

「スリップとパンティ一枚にされて、両手首
をロープで縛られて頭上高く吊り上げられ、
宙吊りにされる」

「尚子に対し、白状するまで逆さ吊り、ハリ
ツケ、梯子責め、水責めなどでありとあらゆ
る拷問がまっている」

彼二十四才、柔道二段。

「貴女の納得のいくプレーをしたいと思いま
す」

十月号の冬木尚子さんの返書でも、彼だけ
は完全に黙殺されている。あたりまえだ。

勝手にくだらねえと空想されたんじやかな
わない。そうでしょう、尚子さん。

ロマンチックなデリケートな冬木さんに幸
あれ。

○ 小島寿子（芹屋）さん

「一度ハンサムな青年に、手も足もがんじが
らめに縛りあげられ、口には一杯の猿ぐつわ
をはめられ、身動き一つ出来ないようにされ
……（以下略）」

三十九年十月号読者通信

「どなたか私を思いきり泣かせて下さる方
は、いらっしやいませんか」

二十二才のBG。アパートに一人。身長一
五九、バスト八三、ウェスト五三、ヒップ三
五。化粧品の準ミス、だから美女。

誰でも「泣かせ」てみたくなるではありませんか。では、さっそく男性諸氏の通信を調
べてみましょう。

まず十一月号に四通。

その一

「年令三十才、身長五尺七寸、体重十七貫、
そして勿論独身です」

三十才になって、何が「勿論独身」かよ。

「二回日からプレイという様な方法など良い
いのではないかと思っています」

プレイ、プレイ。

その二

「私は一目見て、自分の今迄探し求めていた人に、やっと巡り合えたという感動を押さえる事が出来ませんでした」

よかったですね。

「自分の生活に絶えず忍びよる不安、それがつまり自分の探し求める人が得られないという寂しさだったと思うのです」

俺も、こういうラブレターを書いてみたいよ。

その三

「縛るのは好きでも肌に傷のつくような責めは絶対に嫌です」

皆さん、こういうことはよくおっしゃいますね。だから、東雪枝さんがフンゲキするのですよ。それでもSかってね。空想的なソフトなSなんてあるはずがない。多くのS氏は皆さんがセンチメンタルでいらっしやる。先を読きましょう。

「三十二才、絶対なる紳士ですから御安心下さい」

どうして「紳士」という言葉をこう使いたがるのだろう。そんなに、御自分に自信がないのですかねえ。

その四

「ただ月に一度発行される貴誌を、本屋で求める事によって、自分自身をなぐさめているのです」

「どうか私を救って戴けないでしょうか」

「もし交際が許されるなら、出来るだけの事はする覚悟です」

「ある程度の金銭の出費も覚悟致しております」

絶叫型の見本。

十二月号に二通。計六通。

その五

「僕は貴女を水着姿とか、ファンデーション姿で縛ってみたいのです。モメンのひもで高手小手に縛ったり、股間縛りにしたり、足も美女らしくゆうがな姿で縛ってあげます」

御丁寧なことで。

「猿ぐつわは、あなたの身に付けているナイロン・ストッキングで、口にはめてあげましょう」

その六

「二十六才になるM傾向の男子です」

彼、小島寿子さんの通信をよく読んでいないとみえる。Mには関係がない。

そこでだ、右の八氏よ、小島さんはこう書いているんだよ。

「どうか二十五才から三十五才までのハンサムで、お優しい男性の方、私をいじめて下さい」

E 中川芳子（大阪市）さん

「貴方のお好きなように飼育されたいと思います。好きな方のためなら、どんな恥しいことでもいたしますわ」

なんとやさしいこと。

「貴方のお好みのアイデアで、私を教育して下さい。私は身も心も捧げてお好きなようになります」

三十三才独身。三十を越さないとい、こういうほんのりした抱きしめたくなるようなことは云えないな。身ぶるいする。

「貴女の手でなさるのでしたら、私は喜んでお受けします。どのようにでも飼育下さってかまいません」

三十九年十月号読者通信。こう云われると誰でも飼育したくなっちゃうよ。ネ。

さて、中川芳子さんあての通信は、十一月号に三通、十二月にも三通ある。計六通。

その一

「貴女との出会いに、先ず美しい飾りのついた。コルセットをプレゼントしましょう。そ

して先ず貴女は風呂へ入る時以外は、夜寝る時もそれをつけて休むのです。そして、そのサイズの小さいコルセットによる緊縛感から始めて、だんだんと私の奴隷として飼育して行きます」

「貴女は私と二人きりになると、生理バンドかゴムのオシメカバーをはかされます。そして腰をしめつける革の腰枷から股帯が下り、それが後から前へ廻って、固定されます」

「貴女はそれを、いつでも、いかなる時でも

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフット、広告、スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれていく「奇クサロン」の欄をこれから益々発展

いかに汚れても、はずす事は出来ません」

「貴女の汚れた身体を清めてあげます。貴女は恥しさのあまり、身もだえして私の仕事の邪魔をしたため、貴女の汚れた下穿きで目かくしをされて、固定されるのです」

その二

「妻を相手に色々と緊縛ポーズを研究し、又お仕置プレイのアイデアを色々と考えては妻に施し訓練を行って来ました。近頃では相当きついお仕置にもよく耐える様になり、妻は

充実させてゆきたいと思います。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に寄せ下さい。

「読者通信」欄へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思ひます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたくのです。誌上に於ける明かるい文通交歓こそ、本誌読者通信の使命だと考えます。どうか、その意味あい、どしどし御投稿下さるよう、お待ちいたします。

(本誌編集部)

マゾとしてよく成長して参りました」

「貴女を立派なマゾヒスティンになる様に訓練をして差上げます」

その三

「貴女をパンティだけにして、エビ責め、股間縛りを始めつつ……(以下略)」

「小生は肉体的責めより、精神的責めの方が好きである」

その四

「サディズムに芽生育って来た私の夢を、耽美な悦虐の妖花でいろどって下さると信じております」

「実際の経験は未だありません」

その五

「美しい鼻をいじめ乳房責めを、又浣腸をして見度い。そして縛られた美しい姿を心ゆく迄眺めて見る事が出来たら」

「今迄一度としてこの様な機会に恵まれたことなく、今日迄悩み続けて居ります」

その六

「こんなのはどうかしら(高手小手あぐら縛り)きつと体が動かないのと痛いので、責められる気分は満足出来ると思います」

「こんな人がいるのかしら、と何回も読みました」

責めのアイデア・オンパレードを期待して書いていったのだが、(その一)だけでしたね。彼なら、中川芳子さんを飼育しそうだ。でも、汚れたパンティの目かくしなどは、私の領分ですよ。

(その二)が本当なら、もっとくわしい報告を読みたかった。妻を飼育するなんて最高じゃない。ガンバレ。

以下(その三・六) 初心者用。

F 宇野淑子(大阪市)さん

三十九年五月号読者通信

「全裸の死体となって、たくさんの人達の目にさらされ、果ては解剖されてみたいという空想の中、いつも、もう一人の自分は死んでいなくて、死んだ自分の死体を多くの人々と一緒に眺めているだけです」

二十三才、BG

「露出症の傾向のある私は」とある。続いて七月号。

「自分が生きながら解剖される、思っただけで胸がわきたつように興奮します。こんな変ったことを考えているのは、自分だけかと思っていましたら、嶋田雪子さんのような同好

の方がいられることを心強く思います」

そして、十月号では、

「私はそんな空想を抱きながら、自己愛的になつていくのを自覚しています」

と告白し

「皮下脂肪のついた下腹部、白い指先。素足などを眺めたり鏡にうつしたり」

と美しく

「鏡にうつすと、それが自分であり、見ているのは他人であるという気持ちにうつれますので、スムーズに空想にはいれます」

「だから、鏡の前でハダカになって、長い時間をすごすことがよくあります」

悩ましい。本当に悩ましい。

露出といい、自己愛といい、それは女性の特権です。現代は露出ムードではありませんんか。ビキニ・スタイルの若々しい健康な宇野淑子さんを、海辺の太陽の下で空想しましょう。

そして、好きな方ができたら「解剖」されたいんだよ。

G 門田澄子(北九州市)さん

三十九年十一月号読者通信

「ある男にだまされて、さんさん苦勞をさせ

られました。人生のドン底の生活をなめ、客をとらないからといって、フンダリ、ケッタリ、マッパダカでガンジガラメにくくられて、ひどい目にあわされたりしました」

赤裸々。だから、この文章は好きである。

「お恥しい話ですが、ならず者で遊んで暮して女を喰いものにしたあの男のことが忘れられないのです。毎日淋しく過しております。こんな私をいじめて下さる人って、いないでしょうか」

面白い気持の変化ですね。

「今の私はどんな苦しい事でもしんぼう致します故、どうか私を呼んで下さい。どんな人でもかまいません。男の方でありましたら」

とある。残酷な気持になれませんか。

門田澄子さんが男から責められたかどうか私は知らない。俺は思い切り責めてみたい。

備考

S的傾向の男性諸氏をコキオロスつもりで書いたわけではありませんが、M的女性を調べていくうちに、結果が自然にこうなっていました。

Sだと宣言するならば、それだけの手紙を書いてほしいと思います。同じ男性として、これではどっちがMだかSだかわからないのが残念に思います。

美しき縛しめ

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。残部が僅少になりましたので、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

樹間にさらされる	(絹川)	美貌を踏みつける	(絹川)	顔枷の装着中	(四方)	首を締めるくさり	(絹川)	木洩れ陽に白き肌	(絹川)
豆しばりの猿ぐつわ	(絹川)	悦虐の園にさまよう	(水本)	鼻孔ゼムピン責め	(絹川)	手吊りのけぞり姿態	(桜井)	叫ぶ捕われの乙女	(大塚)
縄目と裸身の羞らい	(長野)	若肌に襲う白ロープ	(若原)	鼻孔から葉液注入	(大塚)	乳首に咬みつく蛇	(大塚)	汗まみれの被虐	(梨花)
後手首に喰込む縄目	(梨花)	蚊群の襲うにまかせ	(絹川)	豊軀にまつわる黒縄	(若原)	後手縛りと臀部	(絹川)	洋服タンスに吊る	(大塚)
荷造り縛り人形	(大塚)	きびしき縄目に喘ぐ	(加茂)	ピンクカバーと豆絞	(絹川)	ピンクの腰巻さらし	(東浦)	全裸にてもだえる	(関谷)
バンド着用しぼり	(遠藤)	麗しき裸身の縄目	(絹川)	斬首処刑フォト	(新宮)	重圧に耐える表情	(大塚)	黒縄地獄	(四方)
替ゴム猿ぐつわ虐め	(東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り	(愛川)	両手首吊りさらし	(大塚)	強烈アグラしぼり	(絹川)	るせつの裸身	(梨花)
ゴム布に包まれて	(梨花)	あえぐゴム布嵌口	(大塚)	後手足首逆エビ縛り	(梨花)	ボリウムの誇り	(桜井)	セーラー服を縛る	(梨花)
椅子利用エビ縛り	(東浦)	美しい顔をなぶる	(梨花)	丈なす黒髪	(大塚)	鏡にうつす裸しぼり	(山路)	首縄から膝縄まで	(大塚)
敵しき胴絞	(絹川)	飛び出す双丘と後手	(長野)	貴衣からのぞく乳房	(大塚)	惜しみなく晒す裸身	(大塚)	高々と上った後手	(梨花)
輝く白肌をさらして	(関谷)	首縄胴縛り股間縛り	(絹川)	美貌放心の表情	(梨花)	ゴム帽子麗身晒し	(梨花)	くびれた胸と腹部	(大塚)
荒縄黒皮フンドシ	(大塚)	被虐に耐えた表情	(水本)	後手強烈しぼり	(梨花)	首絞めに苦しむ	(大塚)	カクテルドレスの女	(絹川)
野性的な緊縛模様	(絹川)	生首フォト	(新宮)	従順なるマゾの発散	(竹野)	麗身をもだえさす	(絹川)	浣腸責め	(大塚)
全裸のいましめ	(愛川)	祭壇のささげもの	(大塚)	手錠足錠首くさり	(四方)	猿ぐつわの苦悶	(加茂)	首のくさに悶える	(絹川)
白晒六尺フンドシ	(遠藤)	パンプス開股しぼり	(大塚)	白晒六尺フンドシ	(大塚)	黒縄にもだえて	(大塚)	黒のズロース	(絹川)
百CC浣腸器責め	(大塚)	越中フンドシ緊縛	(大塚)	ガンジガラメの縄目	(絹川)	全裸の手吊り責め	(大塚)	破られたズボン	(梨花)
荒縄のトゲに喘ぐ	(大塚)	飛びだした双丘	(加茂)	首縄胴絞め股間縛	(桜井)	ゴムの猿ぐつわ	(絹川)	正面立姿全身縛り	(大塚)
両手吊りさらし	(桜井)	塩水を無理に飲まず	(大塚)	引き回される裸身	(絹川)	汚れた縄と輝く白肌	(絹川)	くさにに捕捉される	(山路)
M女性の本領発揮	(梨花)	胸部と臍窩の魅力	(遠藤)	豊胸を彩る茶の縄	(大塚)	手首足首椅子しぼり	(梨花)	亀甲型股間しぼり	(大塚)
足錠をつけられる	(四方)	臍窩を狙う蛇の舌	(梨花)	捕われの女学生	(竹花)	あえぐ夫人の表情	(関谷)	長襦袢と腰巻	(館)

直腸検査と蛙腹のこと

羽 鳥 水 江

五月号おもだか・しのさんの「直腸鏡検査の事など」を読んで、大変興味をそそられました。治療のためとはいえ、人間をモルモット扱いにすることを何とも思わない医学残酷物語——などといったら、神聖な職業にたずさわっていらっしゃる方がたからお叱りをこころむるかも知れませんが、人間の——



ことに女性の羞恥心を完全に無視し、普通ならば考えることもできないような目にあわされても、まったく正当なこととして文句をいうことも許されないのが医療の世界だといえましよう。口に出していうこともできないような恥かしい目にあわされて、少しの抵抗も許されない一種独得の世界——サド・マゾヒズムの治外法権ということも出来ましよう——の出来事は、たまたま必要にせまられてそこに入って行かなければならない人達にとっては、大きなショックを与えるかも知れません。

入ってしまったら最後、否応なしに自由を奪われてモルモットになります。外から見てもサド・マゾヒズムの治外法権の世界も、内部では、きびしい、一寸の妥協をも許さない無感情の世界です。甘美なSMプレイなどといわれるものもちがって、その何倍かものショックングなとり扱いが、ただ必要に迫られて何の感情もなく、どしどし行なわれている世界、そこでは甘美さとか、不徹底さとかいうものは、入りこむスキもありません。徹頭徹尾、非情の世界です。まずこのことを最初に念頭において、そういう不思議な世界の出来事を見るならば、背筋をゾクゾクと走るよう

な、とっておきのサド・マゾヒズム、たとえば、鋼鉄製のサド・マゾヒズムを、わたしたちは味わうことができるのではないのでしょうか。

女が結婚して子どもを産む過程で、女は否応なしに、この世界に足をふみ入れることとなります。第一に結婚——人間もまた他の高等動物と同じ方法によってしか繁殖することが出来ないという冷厳な事実の前に、まず女は、少女時代のロマンチックな空想をショックにも奪いさられます。二度と帰ってこない娘時代と永久におさらばをして、女は夫との二人の生活に入るのです。新しい発見によって娘は女になり、夫にたいする羞恥心を失いません。男性開眼といってもいい、男性に対する見方がかわるのです。娘はそこで人間もまた動物である。つまり彼女自身が女であるということを、頭によってではなく、体験として知るようになるのです。順応するということがどういうことであるかを、身をもって知るのです。

第二に、女が受胎し、妊娠し、分娩する過程を考えてみましょう。彼女はまず、いいようもない体の変調をはじめて体験し、婦人科医の診察台にのせられます。今まで夫とだけ

の秘密の部分だったところが公開され、医師の無情な指がそこに侵入します。それはほとんど、彼女の全人生観を根本からひっくりかえしてしまうような体験です。もうどうにでもなれというギリギリの覚悟を彼女に強いるものです。キモがすわってしまえば、かえって驚かなくなるのかも知れません。女はこうして第二のショックな断崖をたびこえて、本当に女になるのでしょう。毎月毎月だんだんと大きく孕らんで来る腹部を、定期的に他人の目にさらして、無抵抗にいろいろ弄られながら、最後に恥も外聞もなしに、胎内で育ったもう一つの生命を、自分の体から外に出す——このあられもない自然の過程が自分の体について起こるところを、何人かの人——職業的無関心をよそおっているとはいえ、同じ人間であることはまぎれもない他人——が見ている前で演じることになります。考えてみれば、不思議なことでもあります。

つい話が別のことにそれてしまいました。しかし、これから述べることに関係がないわけでもありません。そこで「直腸検査」のことに話をもどしましょう。「肌着まで取って丸裸に成りました」というのですが、そこまで必要かどうか、それから、台にのせられると

ころが詳しく書いてあります。「一糸纏わぬ丸裸の両足を高く広げて眺めるのに丁度よい高さの所へお尻の穴を出さされたまま、身動きも出来ないように手足を縛付けられて……、男女の人達に見物されていなければなりません」

どういうことになるのか細かいところまでは分かりませんが、脚でバンザイをしたような恰好になって、下半身を見せるということになるのでしょう。それから肛門に太い器具をさしこまれて、検査される、そのときにポンプで空気を送りこまれる、とあります。しの方は空気のことはそれほど興味がないとみえて、簡単に書いてありますけれども、わたしが興味をもったのはむしろこの点です。検査のためですから、かなりの量にはなるのでしょうが、必要以上にそれほど多く空気が送りこまれるのではないでしょう。そのように読み取れます。しかし、直腸検査にかこつけて、入れることが出来る最大の量の空気を腸内に送りこんだらどうでしょうか。しのさんは仰向けに寝かせられて、下半身を宙に浮かせてバンザイをするような恰好で固定されたのですから、蛙のように腹がふくれるところがよく観察できるわけです。こうして、四

月号高野原美さんの「啓子散華」にあるように強制空気浣腸によって臨月のお腹位にお腹を孕らませてしまふ、としたら……

実際には臨月の妊婦みたいに、ということとは不可能でしょうが、お医者さんの診察台の上で、こんな目にあうとしたら、どうでしょうか。本当は悪くもないのに、肛門科のお医者さんに行って、いかにも、まことしやかに訴えたら、そういう目にあわされるでしょうか。それでも、お医者さんの指示とあれば、不平をいうことも許されず、お医者さんの方も患者にたいしてですから正々堂々と大っぴらにどんなことも出来ます。文句もいえず、みごとな蛙腹にふくらまされて、大ぜいの人達にあられもない姿を堂々と見物されなければなりません。見物される方も、堂々と、つまり疚しい気持をさとられる心配なしに、いかに嫌でたまらないような態度で、内心のひそかな趣味——マゾ趣味——を満足させることが出来るでしょう。医学とサド・マゾヒズムとの秘密の結合がここにあります。もちろん、ただ患者をよそおって行くのでは、内心では、もっとと叫んでいても、お医者さんはあっさり止めてしまつて失望するかも知れません。でもお医者さんだって人間ですか

ら、中には………と思いますけれども。

医療器具を製造する会社で、改良された空気送入装置のついた直腸検査鏡の試作品の試験——人体実験をする場面を想像したら、どうでしょう。美しい女秘書が因果を含くめられてモルモットになります。十何人がの好奇心にみちた見物人たちは、お医者さんなどではなく、器具についてはそれほど専門的ではないのですが、メーカーの説明会という名目のいわば特別サービスを期待しているのです。会社のためという大義名分で、本心はともかく、泣く泣く承知させられて実験用モルモットの役を引きうけさせられた美貌の若い独身の秘書嬢がハダカになり、特別製の装置で実にあられもない恰好に固定されてしまします。やがて太い器具を肛門にさしこまれ、みんなでかわるがわるのぞきこまれながら腹の中にどんどん空気を送入されて行く。朝から食事をとっていないのでペシャンコだった腹は徐々にふくらんで、見る見る蛙腹になって行く。腹部が大きいくふくれ上るとともに、腹が突っぱり、苦しくなっていく。それでもポンプは容赦なしに送り続けて、もうこれ以上大きくならないところまで、腹がふくらみ続けて行く。こんな空想を、わたしはついし

てしまいました。

右のようなことが、実際に行なわれることがあるのかどうか、もちろん、わたしは知る術ありません。しかし、近ごろの世相からいってあり得ないことでもないという気がします。いつか奇クの読者通信でも、新しい浣腸薬の実験——浣腸の実演——が薬屋さんを集めてメーカーが催した説明会で、若い女社員をモルモットにして興味本位に行なわれたというような話を見たことがありますし、また、新薬の人体試験に社員をモルモット代りにして、そのうちに死亡者が出たために、人権問題として訴えられた最近の例があります。また、大学病院などでは、看護婦さん達の実習用に、無料で入院分娩させるかわりに、妊娠中は教材として自分の体を提供する制度のことも聞いたことがあります。最後の例などは必要なことなのでしょうが、特殊な、三つ児とか四つ児を妊娠したような場合は、費用は病院持ちで、大切な研究材料としていろいろなことを要求されるでしょう。これも、もちろん、医学の進歩のために必要なことですから。

実際には本人の人権を尊重して、そこまでは行なわれないでしょう——少なくともマジ

メな大学病院などでは——けれども、産科学の講義に、大ぜいの学生たちが見下している階段教室で、品胎とかそれ以上の多胎妊娠の——そういう患者が都合よくあれば、の話です——貴重なチャンスだから、というので——とてつもなく大きな腹をした臨月の妊婦

を実物教材として見せる、すっかり裸にして観察させる外、いろいろ必要な場所を診察したり、検査したりして見せる、というようなことは、マジメな目的からして有益なのでしよう。瀬沼さんなど大いによろこばれるでしょうが、わたしなら、医学のためという大義

名分で、いつでも、喜んでそういうモルモットにでも教材にでもなりましょう。しかし、それも空想の世界でのことのようにです。その点、安原さゆりさんや田中美佐子さんは、本当にえらいと思わないではいられません。

〔新版〕 女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13 種) 焼付各組一枚一組(送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1 ゴムの猿ぐつわ (梨花)
Z 2 囚女第六十三号 (柳)
Z 3 猪型手足吊り (梨花)
Z 4 逆エビ強烈縛り (大塚)
Z 5 ローソク責め (四浦)
Z 6 豊臀への珍責め (絹川)
Z 7 淫らな変型縛り (愛川)
Z 8 ザリガニしばり (梨花)

Z 9 引き回しシーン (東浦)
Z 10 全裸後手高手小手 (加茂)
Z 11 豊満な肌の被虐 (大井)
Z 12 黒髪いたぶり (大塚)
Z 13 足吊り媚態責め (絹川)
Z 14 黒縄高手小手縛り (四方)
Z 15 強烈荒縄しばり (梨花)
Z 16 肌に喰込む白い縄 (東浦)
Z 17 くの字の足指苦悶 (桜井)
Z 18 裸身にいどむ縄 (前本)
Z 19 無茶な猿ぐつわ (竹野)
Z 20 ハリツケの女体 (梨花)
Z 21 おへソなぶり (大塚)
Z 22 逆手足吊り (竹野)
Z 23 美肌のいたぶり (絹川)
Z 24 仰向きの鼻いじめ (加茂)
Z 25 恐怖の表情一瞬間 (若原)
Z 26 火箸で責める乳房 (梨花)

Z 27 全裸の海老責め (熱海)
Z 28 ベッド上の痴態 (絹川)
Z 29 足の裏の擦り責め (大塚)
Z 30 閨の女体飾り縛り (竹野)
Z 31 首絞め晒しもの (大塚)
Z 32 鼻孔に加虐 (若原)
Z 33 悦虐責放心状態 (梨花)
Z 34 手枷足ぐさり (四方)
Z 35 寝室でのプレイ (花本)
Z 36 猿ぐつわの妙味 (梨花)
Z 37 首縄、柱しばり (絹川)
Z 38 巻煙草責め (大塚)
Z 39 尻立て縛りポーズ (桜井)
Z 40 厳しきエビ責め (東浦)
Z 41 ゴムのカバ―縛り (竹野)
Z 42 ワンピースの縛り (花本)
Z 43 荒縄縛り竹棒責め (梨花)
Z 44 尻を突つ立てて (大塚)
Z 45 鏡に映す縛り裸像 (山路)
Z 46 苦悶に喘ぐ柔肌 (大塚)
Z 47 酔後の淫らしばり (絹川)
Z 48 逆十字エビ縛り (大塚)

Z 49 全裸縛り猿ぐつわ (東浦)
Z 50 欄間に宙吊り (梨花)
Z 51 全裸逆エビ縛り (絹川)
Z 52 荒縄のお仕置室 (梨花)
Z 53 庭園の惨酷風景 (館)
Z 54 被虐の果て (大塚)
Z 55 痛められた裸身 (大塚)
Z 56 鏡の中の全裸像 (愛川)
Z 57 セーラー服縛り (梨花)
Z 58 檻の中の緊縛裸身 (愛川)
Z 59 全裸の股間縛り (絹川)
Z 60 オムツ逆エビ責め (田中)
Z 61 胴縄に膨らむ腹部 (桜井)
Z 62 ゴム人形の女 (竹野)
Z 63 荒縄のトゲ責め (梨花)
Z 64 女子大生恥態責め (田中)
Z 65 白肌露出の全裸縛 (絹川)
Z 66 強要する開股縛り (絹川)
Z 67 強烈縛り全裸の晒 (愛川)
Z 68 亀甲縛り乳房責め (梨花)
Z 69 ベッド上のもだえ (愛川)
Z 70 恥しさに耐えて (館)

「SMよ、今日は!」

○○○○○○

△奇クよ、健やかであれ▽



保藤久人

○ “奇ク”に親しむ、ということは、多少なりともSMの真理らしいものを知っている、ということになり、ひいてはアブマニアらしい人ということになる。そして、これは誰も自分以外の人に余り知られ度くない部分ではないだろうか。

いまさら、こと新しくいうのも愚かしいが人間の心の中にはありと凡ゆるものが詰まれているらしく、それを、十人十色とか、千

差万別といった言葉で表現されている。それ程、万化に富んでいる人間の心であるから、その雑多の中には、自分だけのものにしておきたいものや、他人に知られ度くないものも沢山あるに違いない。併し、その秘めておきたい部分を何時までも制圧し内蔵しておくことは、常人には、むづかしいことで、やがては、その人に心理的な苦痛を与えるばかりでなく、その生活態度にまで影響を与えないとは断言出来ない。正常な社会生活を営んでい

る人は、その処世作法として道義道理を教え込まれて来たし、秩序の倫理として、衝動的行動は直に抹殺される運命にある。

“同病相憐れむ”ということわざがあるが、他人に知られたくない秘めた部分、自己の性向、欲望に似通ったものを、ふと、そこに見出した時、何ともいえぬ近親感を覚える。これは、もう大部前、私が奇クを見出した時の偽らぬ心境である。その古い読者の私が改めてSやMやと書くこと自体がおかしく、私は

今日までSMをそんなに固苦しく考えたことではない。奇クを楽しんで読み、自分の心の中に感じる「何か」があれば良いと思い、自分だけでなく、大方の読者もそうであると思っていたものである。私のこの考え方は今もお変っていないし、これからも持続して行く事と思う。

しかし、一昨年来の悪書追放問題から自粛。それ等一連の社会事情によって私のこの、ささやかな心の慰安も妨げられようとしている。慌てずにはいられない。今にも奇クが目が届かない遠い所へ持去られて行くような不安な気持の中で、私は改めてSMを考えなければ不可なことを悟った。SMは果して「悪る者」なのだろうか……と。

ここ暫らく、悪書問題に絡んだSM論議が賑々しく誌上を飾っていて、皆さんのいわゆるその論点が読者の意志と心理を代表しているようで、私は何時も静かに拝聴していたものである。私が今から書こうとしていることも、その方々の垂流に過ぎず、あるいは一部は、ひ謗しているような結果になるかも知らない。といっても、私にはSMを論じる程の知識もなく文字を綴る才能にも恵まれてはいない。けれども奇クを愛しているという事だ

けは確言出来るのである。そういう見地からこの一文を書き出した、と、ご諒解をお願いして――。

○

こういうことをいったら叱られそうだが、今更SMの本筋などということ論じたって始まらないのじゃないか、と思う。誰方もご存知のように、サディズム乃至マゾヒズムは元来が学術用語であって、現在、私などが口にするSMとは、言葉の上では同義語でも根本的にはなほだしく差違のあることは間違いない事実であり、この玉石混同が、一般社会に与える（と、一部の人に予想された）影響の結果が「悪書」という厳しい現実になって舞い戻って来た、と思えるからであり、それならばなお、正しいSMを、ということになるのであるが、もともとSMには本筋も傍系もあり得ないと思えるからである。だが、SMはともすれば誤解を招き易い。その殆んどの名称が冷徹な学術用語で定められているためであり、事実、見た目に異様と感じさせる要素のいくつかが見出せるからである。

確かに、写真も絵も、非現実的なものであるに拘らず、余りに生々し過ぎたようである。そこには「美」は存在していた――。が

それを美と感ずるのは、マニアと写真家の眼だけであり、社会の眼には、仮令、道德という色眼鏡を掛けていなくても、それが、「異常」「残酷」と写るはずであった。実際にその場面は落花狼藉であり、痛々しく緊縛された裸女の姿態は、乱暴。暴行。それにつながる不慮の事態への予測をも感じさせる。良識ある大人は理解し、受入れ得ぬ人は忌避することが出来ても、刺激そのものを追い求めているような一部の人間には、きっと激しい衝撃を伴って写る、と想像し得る程のものであった――。

私は末席ながら大正生れ、従って戦中派といわれる部類に属するが、青少年時代から見聞きしたもので、直接、衝動的な影響を受けた事は少なかった。もちろん、今のよう凡ゆるものが、はん濫していないし、統制下の鑄型の中に押込まれてはみ出ることを許されなかったためでもあるが、しかし、現代は個性が横行し自由があり過ぎるために……。なお、その上、世相の歪までが加わって影響を受ける個人差というものは、私達の想像以上のものがあるように思えるのである。そして、その辺りに、SMを異行とし、奇クを悪書とする要素の一つが存在するように考えら

れるのである。それが自粛という線になりグラビヤ頁はなくなってしまった。読者には物足りなくとも世相と睨み合せた場合、これは当然の措置といえるし、それよりも先行きの方が心配になって来る。

この事は、今日までの長年月数々の苦境を耐え抜いてこられた経験豊富な編集部にお委せしておけば良いのであるが、自分達も何等かの方策を見出して、幾分かでもお役に立ちたい、奇クをなくし度くはないというのが過般来の皆さんの論議の目的だと思っている。

○

私は、新しい時代のSMには人臭さと人間味が必要だと思う。そしてまた、限られた一部の人のものでなく、大衆の代表である小市民に愛されることが必要だと思う。

人間臭いということは、人間的な豊かな感情を持つことであり、SとMも、男も女も、大らかな心を大切に保持することであり、そういう意味から私はセックスも、また大切な要素だと思うのである。——人間から、セックスを取り去ることは出来ない。人生途上でその人が求め得る最大の愉悦は、セックスなわけではないか。人の生活からセックスを抹殺したなら一体、何が残るだろう。それは

器物化して、既に人間でないといえるのではないだろうか。

SとMが極く自然に人の心に入り込み、そして生活の上で一つの役割を果しているとしたなら、そこにセックスの底流があつてこそ自然であり、若し、セックスを無視したSとMばかりなら、それこそ、お誂えむきに学術用語の見本の実態となつて浮き上つて来る。『愚かしい』『エロだ』『俗悪だ』とおっしゃる方も実生活では絶対にセックスを度外視しない筈だし、そうでなければ奇妙な歪んだ病的なものになつて仕舞うだろう。

そこに、セックスの底流があるが故に、SもMも至極、自然な人間らしい豊かなものになつて来るのだ、と私は思う。

○

今年の「日本拷問刑罰史」については、もう今までに沢山の意見も出尽したし、それぞれの観点から映画そのものも御覧になつていふことと思う。私も観ている。そして私は、今のところ、二度と見たいとは思わない。(その当日は一回半観たけれど……)「拷問」「刑罰」という表題なので、その過程で血腥ぐさいのは仕方がないとしても、しまいには私は顔をそむけなくなった。これは私だ

けの気弱きなのかも知れない。が、実際に、資料参考や細部の文獻的史実に興味のある方以外は、私のように感じた方もかなりあるのじゃないかと思う。

確かにそれは「残酷美」であり、思わず息を呑む昂奮も、ゾクツとする戦慄も、身も以つて知ることとは出来たが、到底、快楽を感じることとは出来ないと思ふ。映画はSMの本質からいっても賞讃される可きものであり、史実、資料という意味では佳作であつたかも知れぬが、しかし、その実態は、一般に公開することのはばかられる非情無残な残虐行為と殺戮の連続である。あの映画を観て愉悦を感じる程の人は、学術的な立派なSだと思ふが、私はそういうSMに抵抗を感じるし、また、そのようなSやMになりたいとも思わない。

……余談になるが、私はこの映画についての皆さんの感想文の中に、女優森美沙に対する賞辞が少いと思う。その容姿の可憐さに惹かれた私だけの賞讃かもしれぬが、出演している俳優の中で演技も抜群だったと思う。この森美沙の演じた部分を除いたなら随分とつまらぬものになつていただろうと思うのである。火刑ということで何のトリックも出来

ず、積み上げた藁を燃やすだけで直接刑死場面を見なかった為なのだろうか。初めの清楚な町娘（愛を知り初めた女性の悦びが表情に出ていた）から、無実の罪科で数々の凄まじい責苦に逢い、耐え切れずに夢中で肯定した形となり絶望の中で尚、「私は無実です」と叫びつづけた白々とした表情を、私は神々しい、と見、真実の悲愴美を見た、と思ったものである。（一回半見たのは、もう一度この部分を見る為でした）……

○

女性が「女」であるが故に「女」である部分を責められて差しめられて……。当然、そこには際どい場面が展開される。それは愚劣なエロ趣味かも知れない。が、しかし、私はそれで良いと思っている。今日までの奇ク誌上で、佳作と称されるものの総ては多少なりとも、そういう場面があったはずで、そこに始めて、被虐の中の愉悦も嗜虐の果ての快楽も生じ得るものであろうし、男と女の人間としての悦楽の部分も存在するのではないだろうか。ただ小説とした場合の発想と表現が問題になるのであって、それをSM論議に結びつけるのはお門違いの気がするのである。『花と蛇』が好評なのは登場人物、特に被虐

女性の人間味が豊富な為に「生人形」として読者を惹きつけているのだと思うのである。

長く続いた『宇宙の何処かに』も、現在の西条さんの『心傷たむ遍歴』も、男女の差違こそあれ、定められた一人が、これでもか、これでもか、というように、冷酷非情に扱われ突ばなされていて、本人以外は何の人間味もない器物化した加虐役者のようで、何か寒々とした世界を感じさせる。読んでいてSMとはこんなものだろうかと思気なくなってくる。しかし、現実には、これもSMなのである。うし、SMの本質と見る方も多いと思うが、その実は、全く人間離れしているのではないだろうか。

何時も芳野さんの文章を読んで私は思うのである。これこそ真実味のある人間的なSMであると——神酒一辺倒（そうでしたね芳野さん）であると仰言っている芳野さんの文章には、全く翳りの部分がないのである。総て明快であり健康的であり、しかも、その真髓に触れている。『美歌夫人に関する小品』は実記とも読めるし、それ以上に自身で仰言っている『神酒恋愛』こそ、本格派としての最高のセックス謳歌ではないだろうか。奇クはマニア誌である、といわれている。

事実、告白、手記が誌上を飾り、通信も多彩である。SMを愛する方々は、この文の始めに書いたような、他人に知られたくない、という理由で、しかし、自分のことは知って貰いたい（元来、SMマニアは露出趣味であるらしい）という欲求から、自然に、奇クという媒体物を通じて恰好な仲間を見出そうとする。そして、他人の目を逃れて肩を寄せ合い、寄り集まろうと努力する。今、表通りの雑踏で、「サジスト・マゾヒスト」と大声で叫んで見たらどうなるだろう。狂人と思われるのは当たり前だが、その言葉だけで殆んどの人には眉をしかめるはずである。その実際の意味は判っている人も多いはずなのに、その辞句は社会でタブーとされている。SMはこのような、公然と表通りを濶歩出来ないのである。従ってSMを好む方々は、その好む心を内側に押込んで仕舞う。進歩的な現代であるが、これが実情であり、変節させることは人間社会では不可能に近い。奇クがマニア誌であることも、また、仕方のないことだと思う。そして、そこに語られている赤裸々な文字こそ本当の生きたSMなのだと私は思う。ただ、奇クがより多くの方に愛されるにはマニア誌である部分を少しでも減して行かねば

ならぬのではないだろうか。

○

もう十年近く前になるが、前触れなしに若い男女に奇クをしめした事がある。

男性は五人(学生三人。会社員一人。工員一人)。「やあ、凄いやノ」「もっと良く見せろ」「二、三日貸してくれないか?」これは学生三人の言葉である。彼等の友人同志では(三人共下宿していたので)秘かに、という秘密めいた点はないらしく、笑いながら、ひやかし半分で見たいという自分達の欲求を明るくしめし健康的であった(本当の内心は判らぬが)。

会社員はチラッと見ただけでソッポを向いた。後で知ったことだが、彼は既に何度も見ていたらしい。工員は「何だノ奇譚クラブか?。変った人がいるもんだ。しかし、チョット刺激적でおもしろいノ」とニヤニヤしながら学生に説明をし始めた。私は工員の表情が一番自然で平然としているのを、感心しながら見ていた。

女性には四人(学生二人。BG一人。美容院の助手一人)。彼女等は「いやーね」と一斉に顔をそむけた。「××さん(私のこと)はHよ。そんな本を女に見せるものではないわ。

いやな方ノ」ろくろく内容も見ずに助手はいう。既に奇クの存在を知っていたのである。

「ねえ、この本そんなにHなの?。この写真凄いいじゃないの。何だか、ぞくぞくする」

グラビヤの裸女のポーズに目を走らせながら、学生の一人がいい、もう一人が「およしなさい」と止めるのをきかずに手にとって内容に眼を惹きつけて行く。「いいじゃないの見たければ。だって店で売っている雑誌だもの」助手は学生の後ろから覗き込んでいた。

残った二人(学生とBG)は瞳を見合せていた。その様子は、見たいという心と、何となく罪悪視したいような心と、そして好奇心とを合せ持っているように見受けられた。

ごく一例に過ぎないが、私は彼女達の奇クに対する思考を見出したように思ったものがある。SM誌を誰でも一度は読んで知って見たいらしく、そして、その内容がいかに刺激的であっても、一般の人は読後に感銘を受けながら(良い意味と悪い意味の両面で)理性が勝ち、自分の感情の中への取捨選択に迷うこともなく健全に消化して行くようである。ただ、一般の人の大半、ということとは出来ても全部と断言出来ぬことが残念である。だが、小市民的サラリーマン(私もその一人だが)によって代表される大衆は意外に健康的なものであり、しかも一時代昔とちがって、

マイ・ホーム、マイ・カーを人生途上の目的とする程、生活の水準が高い。世相の動きを左右することさえ出来る、この人々に理解されるSMこそ本当のものだといえるかも知れない。そして、また、SM心理は誰の心の中にも存在するものである。

○

人間臭いSMというと、どうしてもその中へセックスを挿入すると、愚劣・俗悪・エロといわれるものに近づきそうで、なおのこと賢者先生の弾効に遭いそうである。どうすれば良いか、などといっても、これは先様の判断次第で左右され、論じてみても結論も出ない、はなはだ、むづかしく、また、あやふやな問題である。

大衆に好まれ(好む人は限定されるだろうが)しかも人間味のあるSMを書く為には、それ等(俗悪的な、刺激的な)を包含して、なお、かつ、エロチシズムを忘れずにサラリと書き流さなければならぬ。要は文才であると思う。困難なことではあるが、奇クの執筆者は健筆の方も多いので不可能ではないはずである。自然に人々に親しまれるようになりそういう奇クに掲載されているSMこそ、真に現代のSMといえるものだと思う。「SMよ今日は——」こういう明るいものと私は常に願っている。

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 縦) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しぼり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しぼりと浣腸器	(玉田)
G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぼり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌に刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぼり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)
G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胴絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)
G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺禪巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

今昔断想

中 康 弘 通

.....切腹研究夜話.....



旧臘を以って「裏窓」が廃刊になった。筆者の小著「切腹——悲愴美の世界」（久保書店刊）は、その内容の半ばは主として本誌、また、人間探究、新勢力、民主評論、救国維新、特集人物往来などに掲載されたものであったが、また、半ばは「裏窓」に掲載されたものであったから、廃刊の報には何か深い感慨をおぼえる。

小著は、丁度二十七年夏から三十四年末までに発表された数百枚の原稿から、十三篇約四百枚を撰択集録したものであるが、当時の掲載誌では、特集人物往来を改題した歴史読本と本誌とが存続するのみではあるまいか。十余年の才月を顧りみると、今昔の感が一入深い。

本誌は殊に箕田編集長のご配慮で、比較的未整理の資料をさえ、心覚えに書き記したものでまで掲載して頂いたので、まだまだ整理補筆を要する原稿が少なく、（例えば「切腹の文献」——本誌二十九年五月号所収——など）それらは、小著から省かれている。

従って二十七年以降、今日に至る間の拙稿を編めば、更に「続・切腹——悲愴美の世

界」を刊行するに足るであろう。

しかし、筆者が「切腹」の研究に手を着けたのは終戦直後のことであつたから、まだまだ努力の足らなさを思うべく、今後、ほそぼそながら史資料の蒐集と記録、著述を続けたいものである。

何分にも、健康にも時間にも、もちろん、資力にもめぐまれないので、どうにも進まないながら、最も注意を払っているのは次のような研究対象である。

- 1 古典に現われた切腹の図絵
- 2 近代文芸作品における切腹のモチーフ効果
- 3 演芸における切腹の演技
- 4 声調による演芸における切腹の扱い方
- 5 近代世相による切腹史
- 6 終戦時殉国烈士女の事蹟

こうしたテーマ別の資料をご所持の方々のご協力、乃至ご教示を是非お願いしたいものである。新聞雑誌の切り抜きでもよいのである。

かつて、福岡のH氏、香川のT氏（筆名岐溪秀峰氏）など音信を賜わりながら、筆者が先年病臥している間に音信の絶えた方々も少くないのが、いま更のようにおしまれる。

また、田谷敬生、川合伊都子、池田敏夫、法谷四郎その他の方々とは、音信はなかったが、今後誌上でも、ご協力ご示教を願いたいと思う。

二

1から6までに記した研究対象を更に少し詳しく記してみよう。

古典に現われた切腹の図絵は、おおむね木版本から複製した軍記、合戦記、読み本の類に見られるようである。絵本太閤記などは幾種類も眼に触れた記憶がある。同じ秀次主従自害の条りでも、複製される原本によって挿絵もちがうのである。

こういう文献を集録するのは、一つの文化遺産ではないかと思う。

演芸における切腹の演技も、昔の操浄瑠璃や歌舞伎からはじまって、軽演劇（ヌードショウ）に至る間、文楽、歌舞伎系統の古調と新劇、前進座辺りの写実調、更には剣詩舞、邦舞、レビューにおける様式美、女剣戟の特異な美意識、ヌードショウにおける艶笑的傾向と、多種多様である。

今日ではTVドラマ、映画などでもそれらの何れか、または、TVドラマ、映画独自の

もので、切腹の演技が行われているから、このすべてを記録することは困難であるにしても、スチルや報道写真のあるものだけでも集録したいものである。

最近のTVでは、関西テレビの「里見八犬伝」是は倉丘伸太郎、佐治田恵子両優の主演であるが、この中で雛衣の自刎があつた。妖怪が化けた舅姑に迫られ、夫の見守る前で決然と唇を引きしめ懐剣を引き抜いた雛衣は、着衣のままながら、上腹部へ突き立てる。そこで白光ほどばしり妖怪斃れてめでたしとなるが、この女優さんお名を逸したが悲愴の表情で好演であつた。松山容子さんが伏姫に扮し自刎する場合は、懐剣を抜いて胸へ向けるだけであとは珠がとび散るところで終つたが、この景が暫らくタイトルバックに使われた。

同じく関西テレビ「三匹の侍」の「静狼流転」では大友柳太朗扮する盲剣士が、妻の妹で昔の恋人である美女（北条きく子さん）にすがられつつ、悲壮な立ち腹を切るところがあつた。義妹に扮した北条さんの秀麗の美貌が、哀しみに研ぎすまされて憂愁の美を象徴するかに見えた。

毎日テレビの「忍びの者」でも、切腹ではないが、鈴村由美さんが石川五右衛門（品川

隆二氏)の愛人たもに扮して、自刃の決意で草原に端座して懷剣を咽喉もとに擬し、女丈夫らしい愴美感を表情に漲ぎらせた。但し五右衛門に制められて未遂に終る。

声調による切腹の描写も、また、幸若、狂言、古浄瑠璃など古来のものから、義太夫、琵琶、詩吟、近代では浪曲、映画説明、更には文芸作品の朗読、いわゆるラジオ小説、あるいはラジオドラマに至るまで、是また枚挙にいとまないが、レコーディングされているものはごく少ないようである。

しかし、故実文献だけでなく、小説の類はもとより、こうした舞台写真、フィルム、絵画、レコード、テープ等をも集録するような資料館は、日本中につくくらいあってもいいのではないかと思われる。

例えば浪曲にしても、昭和十年ごろのラジオで聴きおぼえの女流で、名を逸したのは残念だが、こんな話が読み込まれていた。

——日露戦役当日、愛知県下の農村の一青年が応召しながら、即日、帰郷になり、帰郷したものの、家の中へも入らずに庭に端座して、愛用の鎌で腹一文字にかき切ってしまう。うめき声で妹が気付き、見に来るなり、「あにさん、腹切った」

と騒ぐのを、彼は、

「どうせ助からぬ身、このままにしておいてくれ」

と息を引き取るところで終る。

この浪曲などは戦時意識の昂揚に資したと思われる。

三

世相から見た切腹史も、明治初年帯刀の禁に続いて切腹の刑は廃止され、事実上、切腹は廃れ切るべきであるのに、日本がいわゆる軍備を放棄し、自衛戦力を保有するのみという今日でも、市井の切腹事件は、四季を通じて地域を問わず、折々に新聞ダネになっているし、ならずに終わったものも、また少なくないであろう。

明治百年史上、ただ移り変わるのは、その事情や様相であって、そこに世相史の一齣一齣で見られるのは、何ンともいたましい現象である。たとえば今から四十年ほど前、妙令に達した丙午の女性が、世をはかなんで切腹自殺した悲話も、一再にとどまらなかったのである。

文芸作品における切腹のモチーフ効果に至っては、戦前戦時の娯楽誌(キング、講談ク

ラブ、富士など講談社系の雑誌や、日の出、講談雑誌、オール読物、あるいはサンデー毎日、週刊朝日の四季の増刊号など)には時代小説が多く、その時代小説の幾つかが、いろいろの様相を尽くして切腹を描いていた。

例えば村上浪六氏「一文字」「変り種」「鬼奴」とか、鷲尾雨工氏「葉研藤四郎」「吉野朝太平記」「吉法師信長」「覇者交代」「伊達政宗」あるいは、今日では作者名を失念したが、「腹切り佐次郎」(是は戦後も久我藏多郎氏「腹切り小普譜組」、野村胡堂氏「腹切り陣内」などと同じ趣向の作品であったと思う)同じく作者名も題名も記憶にないが勤王浪士もの、桜田事件もの、葉隠もの、あるいは堺事件、神戸事件に取材する作品など枚挙にいとまがない。

牧野吉晴氏の「御楯」は草刈海軍少佐の割腹を描いていたし、笹本寅氏の「会津士魂」は郡長正の切腹を描くもので、同じ主人公を扱い昭和五、六年ごろの少年クラブにも、長正が将に割腹せんとする図入りの小説があった。

是らは主に昭和十年代の文芸作品で、今日検索しようとしても、その大部分は図書館や古書籍からも姿をひそめている状態である。

戦時中、戦力増強版として用紙の特配を受け、久し振りの厚冊に「逃げず降らず腹を切れ」と題する論考のあったのは、今も記憶に生々しい。

後述する終戦時の自決者の記録文献や事蹟実話などと共に、もし読者の方々に、ご所持の向きがあれば、是非譲渡もしくは、ご貸与をお願いしたい。小著「切腹」(久保書店

「悦虐小説と悦虐写真」特集号

△第一集から第五集まで全部売切れ▽

○従前分譲写真として広告しておりましたR組並にY組は分譲中止になっています。尚、目下分譲中のZ組七十集も、近い中に分譲打ちりの予定ですので、ご入用の方は、お早い目にお申込み下さい。

○臨時増刊号「花と蛇」が売切れになってもう半年近くなりますが、未だに毎日申込みがあります。折角お申込み下さっても残部がありません故御承知願います、尚再版の有無をお問合せになる向きもございますが、その予定は全然ありません。

○本誌の旧号のうち相当以前発行の分につき在庫の有無の御照会や或は御送金になる方がございますが、「本誌既刊号在庫一覧表」に在庫していると発表しているもの以外はございません。

刊)と交換でも結構である。

四

終戦時の自決殉国者については、かねがね本誌に田谷敬生氏その他が執筆しておられるが、その他、殉国者名簿によれば五百名を超える海陸軍人、軍属の方々が自決しておられる。例えば、ある女子タイピストは、終戦直後、上司に乞うてその検分の下に拳銃自決を遂げたという話もある。是は手段こそ切腹ではないが、拳銃を手に端座して上司に告別する彼女の心情は、まことに想うだに悲痛、その姿また壮烈というべきであろう。

こうした事例もほとんど秘匿され、あるいは目撃者の死亡などにより、埋まれてしまっているが、神州の精氣いづくにありやと慨嘆される今日の世相を思えば、こうした純烈無垢の精神と事蹟には、この際、後世に伝える努力がなされねばならないのではないか。

もとより自決者の中には陸海軍の将官の方々のように、終戦の悲運に引責の自決をされた方も少くない。

こういう精神は、昔、たしかキングか何かで読んだ話にもうかがわれた。

第一次大戦時ドイツの某将軍が、独仏戦線で要塞を死守するうち、移動を命ぜられたと

き洋刀を以って割腹した由である。この将軍は日露戦役で従軍武官として乃木将軍に親しく接し、尊敬やまず、後年乃木将軍の殉死を武士道の権化と仰いでいたという。

是も戦時中だが、新聞報道でも、たとえば長崎丸の営船長とか、支那事変当時敵地に不時着した航空兵、あるいは上海クリークの架橋に挺身した中村工兵隊というように、切腹した将校兵士の事例は少くなかった。

古い新聞記事で思い出されるのは、昭和十三年ごろの毎日新聞文化欄でパリ遊学の画家の方(氏名失念)の随筆である。

彼の地で、切腹について、どこをどう切るか、などの質問が多いので、ある席上、あり合わせたナイフで一文字の切腹を模してみせたところ、血を見て、婦人連が色を失ない座が白けたので、後悔したという趣旨のものであった。是もいま検索出来ないのは残念である。

ともかく牛歩を以ってしても、散在する資料を収集に努め、次々と紹介して行きたいものである。

娘相撲物語

とよさんの告白

海野美津男

とよさんの告白

とよさんは、長いこと仏壇の前に坐って念仏を唱えていた。その後ろ姿は、いかにも力なく、寂しそうだった。

「うちのばあちゃん、あんたのばあちゃんとよっぽど仲が良かったんだね。ゆうべのお通夜の時も、一睡もせずに死んだ太田のばあちゃんの傍に坐っとったよ」

とよさんの孫の良江が、亡くなった太田ふみの孫の忠子に、小声で話しかけた。

知らせを聞いて関西の紡績工場から飛んで帰り、やっと今日の葬式に間に合った忠子は

まだ目を泣きはらしていた。

葬式も無事に終り、天寿を全とうして亡くなった者の場合、この地方ではどこでもそうするように、華やかな酒の席も終えた太田家には、ごく親しい者だけが残って、故人の思い出を話し合っていた。

日もすっかり暮れ、浜に打寄せる波の音が聞こえていた。

「ばあちゃん、いつまで拝んどるのね。悲しかろうが、もう仕方の無か事じゃ。こちへ来んね」

良江が、とよさんに声をかけた。

「良ちゃん、ばあちゃんば、しばらくそんままにしちよってやれ。太田のばあちゃんと、うちのばあちゃんと、それに田代のばあちゃんはんは人も羨やむ仲だったもんなあ。それが三年前に一人欠けて、今度は太田のばあちゃんに死なれて……ばあちゃん、一人残されてしもうたんじゃから……」

良江の母のさち子が言った。

実際、太田ふみ、浜田とよ、そして田代かよの三人の仲は、若い頃から人も羨やむほどであった。年も同じであったが、三人の間に

は、何か強い糸でも結ばれているような、深い結びつきがあった。

その深い友情が、戦争や海難で男手を全べて失なった三人の家族を支え、孫たちを立派に育てることのできた力にもなっていた。

九州の西の涯の、漁村の生活は決して楽ではなかった。

昔から、女も男と一緒に網を引かねばならなかったが、そうしてクタクタになるまで働らいても、生活は常々にぎりぎりであった。

男たちは遠洋漁船に乗り、或いは商船の船員になって働らき、仕送りをしなければならなかった。

不幸なことに、そうして船に乗っていた太田ふみと浜田とよの主人たちは、二人がまだ三十五の時、遭難して死んだ。田代かよの主人は終戦の年病死した。

その上、太平洋戦争は、三人の息子たちを次々と奪ってしまったのだった。

あとには、それぞれの娘や嫁と、その小さい子供たちだけが残された。

だが、三人は齒を食いしばってがんばり抜いた。三人の友情がそれを支えた。

太田ふみの長男の嫁、美恵と、今は嫁いで北海道に行っている長女。浜田とよの嫁のさ

ち子。田代かよの娘で、婿を戦死させていたくみなど、嫁や娘たちも力を合わせて生活の重荷に耐え、子供たちを育てた。

それぞれの孫たちは、そうして今では立派に育つことができた。

「考えてみれば、私たちや兄ちゃんたちが何とか一人前になれたのも、ばあちゃんや母ちゃん同士が仲良う力を合わせて、がんばってくれたおかげだね」

田代かよの孫の洋子がしんみりと言った。良江の一つ上で、今年二十三になる洋子は良江と仲良く、隣の港町のカン詰工場で働らいていた。

「うん、そんな通りだ。兄ちゃんたちも、みんな立派な船乗りになったもんね」

良江が、大きくうなづいた。

「でも、兄ちゃんたちが、ここに一人も来れなかったのは残念だね」

と、忠子が言った。忠子は今年二十一だった。

洋子の兄の、三十になる孝一と、忠子の兄の二十七の忠義は捕鯨船の船員としてともに南氷洋に行っていた。良江の兄の今年二十六の民造と、洋子の次兄の二十三の孝二は、遠

洋漁船に乗り組んで、東支那海とインド洋に出漁していた。

「兄ちゃんたち、無線で知って、みんな今頃悲しんどるじゃろうなあ」

良江が、そう言っ、そつと涙を拭いた。母親たちも涙を拭いた。

とよさんは、仏壇の前に坐ったまま、まだ何やら口の中でつぶやいていた。

良江が

「それにしてもばあちゃんたち、良うがんばったもんだね。気も強かったけど、からだもよっぽど強かったんじゃろうね。」

しんみりした空気を打ち破るように、明るい声で言った。

「そう言えば、病氣したのを見たことないなあ」

と、洋子が言った。

「強かったんだよ、ばあちゃんたちは」

良江が繰り返した。

もう一時間以上も仏壇の前に坐ったきりだったとよさんが声を出したのは、その時だった。

とよさんは仏壇の方を向いたまま「そうだよ……ふみさんは……強かった。何



しろ…かよさんを負かしてしもうたもんね」
と言った。

みんなは、驚いて顔を見合わせた。

良江が、小声で母のさち子に言った。

「今、ばあちゃん何とか言うたな……かよさんを負かしたとか何とか……」

「うん、ふみさんが、かよさんを負かしたと聞こえたが……」

さち子は、けげんな顔をして、とよさんを見た。

「うちのばあちゃん、どげんかしてしもうたのかな？ ゆうべから口きかんかったのに、

おかしなこと言い出して……」

良江も心配そうに振り向いた。

さち子は、「んにや、まさか……」と言うと、とよさんに問いかけた。

「母ちゃん、今、何と言うたね？ かよさんを負かしたって、何の話な？」

さち子のその声を聞いて、とよさんはハッと我に帰った。

心の中で『しもた！』と思った。口に出した時は自分でも気付かなかったが、言ってしまったあと、自分が何を言ったのか気が付いたのだった。

とよさんは、だが、『あのことは、三人で誰にも言うまいと約束していたことなんだ、今までも誰にも言わなかった。ここで言うたらいかん』と、心に誓った。

そして、みんなの方を振り向くと

「ええ？ わしが何か言うたか？」

と、ごまかした。

だが、みんなは、そのままでは承知しなかった。これまで、家族のうちには何の秘密も無かったのだから、それは当然だった。

「たしかに言うたよ。ふみさんがかよさんを負かしたって」

良江が言った。

「あんなに仲が良かったばあちゃんたちが、まさかけんかなんかする筈はないし……何があつたのね、浜田のばあちゃん」

と洋子も問いかけてきた。

とよさんは、あきらめた。『口をすべらしてしもうたのが運のつきじゃ。これ以上黙るとる訳にいかんようだ』と思った。

『それに、あのことは別に悪いことじゃないしな。娘たちは驚くかも知れんが……ここまですれば、もう仕方なか』と、とよさんは覚悟を決めた。

「三人で、誰にも話さんちゆう約束して、今まで話さんかったんじゃが……仕方なかな、口に出してしもうたから……。良江が、強かった、なんと言ふもんじゃから、ついつられてしもた。あん時のことば、ちようど思い出しちよったもんじゃからねえ」

とよさんは、良江と洋子の間に坐ると、ゆっくりお茶を飲んだ。

みんなは、膝を寄せ合い、とよさんの方へ身を乗り出した。

「あれは、ちようど三人とも十八になった年じやった。或る日、ふみさんとかよさんがわしを浜に呼び出しに来てな。二人とも恐ろしか顔しちよったから、わしは何ごとかと思つて浜へ出て、話ば聞いたんじゃ。そうそう、かつお漁が始まったばかりじやったから、春の終りのことじやった。そん年の正月頃から二人の仲が急に悪うなつてなあ、わしは心配していろいろ尋ねてみたんじゃが、二人とも黙つとるから何で仲が悪うなつたのか、わしにはそれまでわからずじまいじやった。浜で話を聞いてみると、それもその筈、二人は今で言う三角関係になつとつたんじゃね」

洋子が

「私、ちつとも知らんかった」

と言つて目を丸くした。知らなかったのは孫たちだけではなかった。

「へー！／＼うちの母ちゃんかねえ……」

と、洋子の母の美恵も驚いた。

「美恵さんは知つとるかも知れんが、その相手は、中村清さんと言つてな、商船学校の生徒さんじやった」

「ホー！／＼あの、商船学校を出て直ぐ遭難して亡くなつた……」

「うん、そうじゃ。清さんは、みんなの憧れの的じやった。ともかく、その清さんを二人が好きになつてしもうた訳じや。わしは、いろいろ話してみたが、仲良しの二人も、こればかりはどげんもできんと言つてな。清さんは、二人が好きになつたちゆうことを知らんかった訳じやから、わしは『清さんに話ばして、清さんの好きな方が嫁さんになれば良か』と言つたが、二人とも、それはできんと言つてな……わしはホトホト困つてしもうた」

とよさんはそこで言葉を切つた。ホーツと息をつくと、仏壇の方へ顔を向けた。その表情には、その先を話すことか話すまいことかというような迷いが見えた。

しかし、とよさんは、心を決めたと言ふよ

うに、良江たちを見ると

「わしは……二人の頼みを聞いて驚いてしもうた。お前たちもきつと驚くじやろつ。じゃが、魂がらんで聞いちよくれ。」

と言つた。

良江は、『ばあちゃんたち、クジでも引いて決めたんかな』と思つた。みんな、とよさんの次の言葉を待った。

とよさんは、お茶を一口飲むと

「ふみさんとかよさんはな……『相撲取つて決まりをつけたいから、あんた行司になつてくれ』と言つたんじや」

と言つた。

良江は、思わず「エッ！」と声を上げてしまった。それは、とても想像のできないことだった。昔、その村に女相撲があつたことは知つていたが、『まさか、ばあちゃんたちが……』と思うと、みるみる顔が火照つてきた。洋子や忠子も、真っ赤になつてうつむいていた。

とよさんは続けた。

「その頃はまだ、この村でも女相撲が盛んな。祭りの日には、みんな白いじゆばんの上から赤いまわしば締めて、盛んに取つたもんじやった。そんな訳じやから、二人が相撲取

ったと言うても、そげんおかしか事はなか訳じゃが……女相撲は結婚したおなごだけが取ることになっちよったし、男同士でも相撲で決まりばつけたちゆう話は聞いたことも無かったから、わしは驚いてなあ。ほかにどげんしようも無かとか？とわしは言うたが、かよさんが「海ん中へホタリ投げてやりたか位じゃが、友だちだと思えばそげなことはできん。じゃから相撲取って堂々と決まりばつけることにしたんじや」と言うてな。ふみさんも「そんなに決めたんじやから、あんたに勝負を見ちよってもらいたいんじや」と言うた。二人だけでは、けんかになるかも知れんという訳じゃね。わしはあきらめて、よし、それならやらせてみるかと思った。それまでの間、良うけんかにならんかったもんだと思うと、嬉しくもあってなあ。それで、ともかくわしは行司を引き受けることにして「勝負は一度で決めるんか」と聞いた。そしたらふみさんが「一度や二度の勝負じや心残りがするから、六回以上取って勝ち星が相手の倍になつたら勝ちとするが」と言った。かよさんも承知して、いよいよ勝負をつけることになった。場所は沖小島に決めて、その晩六時頃じやったか、三人でかわるがわる伝馬を漕い

で島に渡った……」

みんな、息を飲んでいた。誰ももう言葉をはさむ者は居なかった。

「わしは舟を漕いどるうちに、武蔵と小次郎の決斗ば思い出してな、まるで巖流島じゃねえ」と言うたが、二人とも黙っちよった。そげな冗談など言える時じゃなかった訳じゃからね。浜に舟を着けた二人は仕度にかかった。わしが手伝うて、白いじゅばんの上からまわしを締めてな。まわしは、二人ともおふくろさんのものを黙って持って来ちよった。締め方は、みんなおふくろさんたちが相撲に出る時手伝つとったから知つとった訳じや。仕度ができて、サアと言う段になってわしら困つてな。土俵をどげんするか考えとらんかったんじや。まるを画いても、夢中で取つとる者はどこが土俵だかわからんしな。いろいろ考えたんじやが、良か考えは浮ばん。ふみさんは「土俵なしで良か、投げた方が勝ちにすれば良かよ」と言うたが、かよさんは「相撲なら相撲らしくせんないかん」と言うてね。わしは、フト良か考えが浮かんだので、二人に「こげんすれば良かよ」と言うて砂に円を画いた。そのまるの中の砂は掘って外側の砂と段をつけねばと思うてな。あれは良か

考えじやった。民造たちに教えてやったことがあるが、あれは、そんな時に考えたもんじやった。土俵も何とかでき上って、二人はその真ん中で向き合った。そんな時の二人のきびしか顔は、今でも良う覚えとる。わしは、おなごもいよいよとなればこげなきびしか顔するもんなんかなと思うた。二人とも村ではべっぴんの方でやったが、そんな美しか顔が、おなごのわしにも「きれいかなあ」と思わせるほど引きしまつてな。わしも身内が引きしまる思いがした。わしは、若しけんかにでもなつたらいかんと思うて、二人に「絶対、相撲の手でいけよ」と念を押した。二人はうんと大きくうなづいたので、わしは「用意はじめてかかれ」と言うて、右手を軍配がわりにサツと差し出した……」

とよさんはそこまで一息に話すと、湯呑みに自分でお茶をついでグツと飲みほした。

良江は、からだ中が汗じつとりになつているのに気付いた。そつとハンケチをとり、腋の下の汗を拭いた。

洋子と忠子の額にも汗がにじんでいた。

洋子は、フト顔を上げて忠子を見た。彼女は、何だか自分が、忠子と向き合つて構えているような気持になつていた。二人の視線が

一瞬かち合った。

「あん時の二人の相撲は、一番一番良う覚えとる。しっかり見届けないかんと思うちよったせいじゃろう。二人とも、相撲は初めてだったせいか、はじめノ」とわしが言うても、立ち上って構えたまま、どげんして良かかわからんちゅう風で、しばらくはそんなまましちよった。隙をねらっちよったとかも知れんが……。じやが、どっちかと言うと気の短かかったかよさんが、パツと組みついていって、二人はお互いに腕をつかんで押し合いになった。二人とも一步もひかんとがんばっちよったが、ふみさんの方が力が強かったんじゃね、じりじり押して行って、かよさんの足は土俵についてしもうた。かよさんは一生けんめいこらえちよったが、ふみさんは頭を低うしてぐんぐん押した。両手をうんと伸ばして足を突っ張ってな。わしは、かよさんが負けるなと思ったがいきなりかよさんは、つかんでいたふみさんの腕をウンと引いた、気張って押しちよったふみ



さんは、アッと言うて土俵に匍ってしもうてなあ。二度目は、ふみさんが先におつかって行った。砂をかまされて悔やしかったんじやろう。パツとぶつかると、かよさんの前まわしをつかんで、息もつかせず寄り切ってしもうた。三度目は、はげしか相撲じやったなあ。お互いパンパン突っ張り合うて……。男の相撲んようなはげしか突っ張り合いじやったねえ。わしは、若し撲り合いにでもなったらと思うて構えちよったが……。相手の隙を見てかよさんが、まわしを取りにいったからホツとした。ふみさんもまわしをつかんで、二人は四つに組んだ。だいぶ長いこと組んだまま

じやったと思うが、今度は、はげしい投げ合いになってな。じやが、ふみさんがとうとうかよさんに投げられてしもうた。たしか下手投げじやったろう。折り重なって倒れた二人は、からだ中砂まみれになってしもうてな。砂が湿っちよったし、からだも汗だらけになっちよったんじやろう。わしは「海でからだを洗うて来い」と言うた。少し休ませた方が良いとも思ってたからな。二人は、じゅばんもまわしも取って海へ入った。そんな次の相撲からは、わしがすすめて、二人ともじゅばんを脱いで取った。突っ張り合っとるうちに二人ともじゅばんを破いてしもうとったからな。

それ以上破いてしまおうと、家の人に危しまれると思うて、わしが脱いでしまえと言うたんじゃ……」

洋子がプイと顔を伏せた。良江も、自分が素裸になったような気がして真っ赤になってしまった。

忠子は、さっきから顔を伏せたままであった。

だが、母親たちはそれほど感じなかった。

母親たちが娘の頃は、浜で男たちの見ている前で、裸になって着物を着替えても何でもなかった。

さち子は、顔を伏せた娘たちを見て、あとでそのことを話して聞かせようと思った。さち子は、今より昔の方が、ずっと健康な感覚を持っていたと信じていた。『娘の裸を見ておかしくなる今の方が間違っとるんだ』と思っていた。

とよさんは娘たちに構わず話を続けた。

「海から上った二人は、からだを拭くと、素肌にまわしを締めて向き合った。四回目はふみさんが勝った。あっと言う間にかよさんが後ろに倒れてしまったからたしか突き倒しじやったろう。わしは、お互い二勝二敗になったので、こりやあ中々勝負はつかんぞと思った。果たして六回目までは、星は同じじやった。全く五分五分じやったなあ。七回目、ふみさんがかよさんを打ちやっけて勝ったが、二人とも疲れてしまったので、わしは『明日、もう一度続きを取れば良か』と言うて、その晩は帰った。あくる晩も月夜じやった。二人とも前の晩の相撲で慣れて来ちよったと見えて、その晩の相撲は、だいぶ相撲らしくなっちよった。どっちかと言うと、かよさん

の方が身のこなしがすばやかかったから良うからだを動かした。じゃが力はふみさんの方が強かったようじやった。肉付きも良かったし背も幾分高かったからな。組めばふみさんの方に分があつた。自分の得意の差し手もわかつたんじやろう。かよさんは左四つ、ふみさんは右四つじやった。前の晩から数えて八回目の相撲は、ふみさんが右四つになって、上手投げでかよさんを投げた。ふみさんの星が五つ、かよさんが三つになった訳じやから、あと一つ負ければだめになるかよさんは、九回目には必死でぶつかっていたよ。突いて突いて突きまくっておいて、土俵際までふみさんを追いつめたかよさんは、押し倒して勝った。ふみさん、こらえる暇も無かつたね」

美恵が、口をはさんだ。

「浜田のばあちゃんは、相撲の手に詳しくかねえ」

「うん、詳しいじやろう。相撲を見つとが好きじやつたし……あとから話すが、わしもふみさんやかよさんと三人で良う取つたもんね。見とるだけじや、こげな風に話すことはできん。アナウンサーのようじやろうが」

とよさんはそう言うのと、初めて笑った。みんなもつられて笑った。良江たちも、恥かし

いような気持はだんだんうすれていた。

「ふみさんは、あと一番、という時に負けてしもうてほんに悔しかったんじやろう、唇をぎゅっと噛んどつたが……そんな次は二回続けて勝つてな。二回とも得意の右を入れて、かよさんのまわしをしっかり握って動かかんかった。相手の疲れを待つとる風じやつたね。そしてかよさんが焦って技をかけてくるのを待って一気に寄り倒すか投げを打つかの作戦で勝つた訳じやね。星は七つと四つになった。

最後の一番という時、かよさんのからだはふるえちよった。わしは、まわしを締め直してやる時それに気付いて何とも言えん気持ちじやつた。どっちが勝つてもわしは嬉しくなかつた。じゃから、からだをふるわしとるかよさんを見て、わしは胸のつまる思いじやつた。わしの合図も待たずにかよさんがぶつかつていったので、わしはやり直させたが、かよさん、わしを睨んどつた。じゃが、直ぐごめんねという風にうなづくと、今度はじっくり腰を落して仕切つた。どれもこれもはげしか相撲じやつたが、最後の相撲が、やっぱり一番はげしかつたねえ。立ち上つたかよさんがいきなりふみさんの頬を張つたから、ふみさんも負けじと張り返した。そりやものすごか張り合

いじやった。パンパンと音がしてな……月の光じや良う見えんかったが、二人とも頬は真っ赤になっとったろう。しばらく張ったり突っ張ったりしちよったが、ふみさんに隙ができたんじやろう、かよさんが左をサツと入れた。ふみさんは上手が取れん。そこをかよさんがぐいぐい寄っていった。ふみさんの足は土俵にかかってしもうたが、ようこらえた。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

○本誌は現在地方にては、非常に入手が困難な状態だと思われまますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重

かよさんの上手を取って寄り返したふみさんは土俵の真ん中でじっくり構えた。二人は長いこと四つに組んだままじやった。かよさんは、うっかり技をかけると、前みたいに負けると思ったんじやろう。今度はじっと動かなかった。動かんでも力はいれとる訳じやから二人の息使いはだんだんとはげしくなってきた。わしはよっぽど水を入れようかと思った

包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何ヶ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますの、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

が、そのままにしちよった。二人とも上手下手を取ってまわしをぐいぐい引き合った。やっぱりふみさんの方が力があつたんじやね。かよさんのからだを引き付けると、一気に寄っていった。かよさんはけんめいにこらえたがだめじやった。とうとう寄り倒されてしもうてね……」

洋子が、ホーッと大きく息をついた。忠子は、もう顔を伏せてはいなかった。

良江が

「太田のばあちゃんが……勝ったんだね」と言った。

「うん。とうとう勝ったわけじゃ。じゃが二人とも立派じやった。倒れたまま二人はしばらく動かんかったが、ふみさんが先に立ち上ると、かよさんば引き起して背中の中を砂を払ってやった。そして、かよちゃん、大丈夫か?」と言った。わしは嬉しかったね。そんなふみさんが……。かよさんは、下を向いて涙をいっばいたためちよったが、ふみさんを見て「私の負けだね」と言うてニコッと笑った。ふみさんはかよさんの手ば握って涙を浮べた。かよさんも泣いとったが、それは、もう悔やし涙とは違うとった。わしも何とも言えん気持になつてなあ……。泣いてしもうた。

やっぱり二人は仲の良か友だちじゃった、と
思うたらな……」

胸がいっぱいになったのか、とよさんは言葉
を切ると、目をつぶった。

美恵が

「良かったねえ……」

と言って、くみの方を見た。

「うん、ほんとに良かった……」

くみも、大きくうなづいた。

とよさんはフト目を開くと、仏壇の方を振
り返りながら

「……清さんが亡くなったのは……それから
二カ月もせんうちじゃったよ……」

と言った。とよさんの目には涙が光ってい
た。

忠子と洋子も涙ぐんでいた。その忠子の膝
に、良江がソツと手をおいた。

「二人はすっかり仲を取り戻して、かよさん
などは、ふみさんが清さんを好いと言う
こと、私が清さんに言うて上げるんじや」な
どと言うちよったじやが……。清さんが遭難
したと聞いて、二人ともひどく悲しんでなあ
……」

沈黙が、またしばらく続いた。

だが、とよさんは、気を取り直すように明

るい顔をして

「話というのは、それだけだ……しもうたね
え、言うてしもうて……じゃが、もう仕方な
か。ふみさんもかよさんも草葉のかけで許し
てくれるじやろう、きつと」

と笑った。

「相撲で決まりをつけたちゆうことも、清さ
んが好きじゃったことも、じいさまたちは知
らんかった。じゃが、じいさまも草葉のかけ
でわかってくれとるじやろう。二人とも清さ
んのことは結婚する前にすっかり忘れること
ができたんじやから。それとも今頃、天国で
じいさまたちに、こげんこげんじやったと言
うて二人して話して聞かせとるかも知れんな
あ」

とよさんは、おかしそうに笑った。みんな
もつられて、明るい声で笑った。

さち子が笑いながら

「たしかに魂がる話じゃったが、そげん心臓
の止まるような話じゃなかった。何故死ぬま
で言わん約束ばしたんじや？ もっと早よう
話しばして良かったと思うがなあ、わしは」
と言った。

「相撲ば取ったちゆうことは、何でもなかこ
とじやが、やっぱり相撲で決まりをつけたち

ゆうのが恥かしかったんじやね。おなごがそ
げなことしたちなれば、やっぱりどうかある
じやろうが……」

良江が、母のさち子に言った。

「母ちゃん。やっぱりあちゃんたち言えん
かったとが当り前よ」

さち子は

「お前たちには、おなごが相撲取るちゆうこ
とも考えられんじやろうからねえ」

と言った。良江は、そうだと言わんばかり
の顔をしていたが、とよさんの方へ向き直っ
て聞いた。

「さっきばあちゃんは、自分も相撲取ったっ
て言うたけど、いつ取ったのね？ 三人で取
った言うたでしよう」

「うん、それはいつだったかなあ……」

とよさんは首をひねっていたが

「そうそう、かよさんが結婚するひと月ほど
前じやった」

と言って、膝を打った。

「かよさんの結婚話が決まったのは十九の年
の夏じやったが。あのことがあってから一年
経った訳じやね。わしは、かよさんが嫁
に行くのかと思うとさびしくてなあ。ふみさ
んとかよさんば誘うて或る晩浜へ出たんじや

が、いろいろ話とるうちに、わしはフト、三人で相撲取ったらどうじやろうかと思うてな……二人の相撲ば思い出しとるうちに、そう思うてな。二人に言うてみた。かよさんが、「よし、取ろう」と言うて賛成した。ふみさんも「うん」と言うて。それから、わしらは毎晩のように相撲取ったんじや。星を争ったり、二人抜きや三人抜きばしてなあ。わしらが嫁に行ってから取った村の女相撲で強かったとは、そんな時三人で鍛えちよったせいじや

った。じいさまたちが「お前ら相撲に強いがどこで覚えたんか？ いろいろ手も知っとるようじゃが」と不思議がって聞くほどじやった。わしら、黙って笑うちよったが……」

洋子が尋ねた。

「三人のうち誰が一番強かったね？ 浜田のばあちゃん」

「うん。初めのうちはふみさんが一番強かったな。何しろ力があつたもんね。じゃが技を覚えてから、わしやかよさんも強ようになって

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

な。五分五分じやったよ。わしら、嫁に行ってから久しぶりに三人顔を合わせて思い切り取ったが、わしが嫁に行つて三年経った頃じやから大正五年頃じやつたらう、村の女相撲は取組みが無くなって、土俵入りと角力取節の踊りばかりになってしまつてなあ。三人とも「さびしかねえ」と残念がったもんじや。相撲取れば、とにかく気が晴れするもんで、残念じやつたよ」

とよさんは、笑顔で得意そうに話していたが、フト黙りこんでしまった。

若く元気だった娘時代を思い出すのは、たまらないことだったのかも知れない。みんなも、フト曇ったとよさんの顔を見て、それを察していた。

とよさんは立ち上って、黙って仏壇の前へ坐った。

美恵が、茶を入れかえに台所へ立って行った。台所の戸を開く音がして、美恵の声がした。

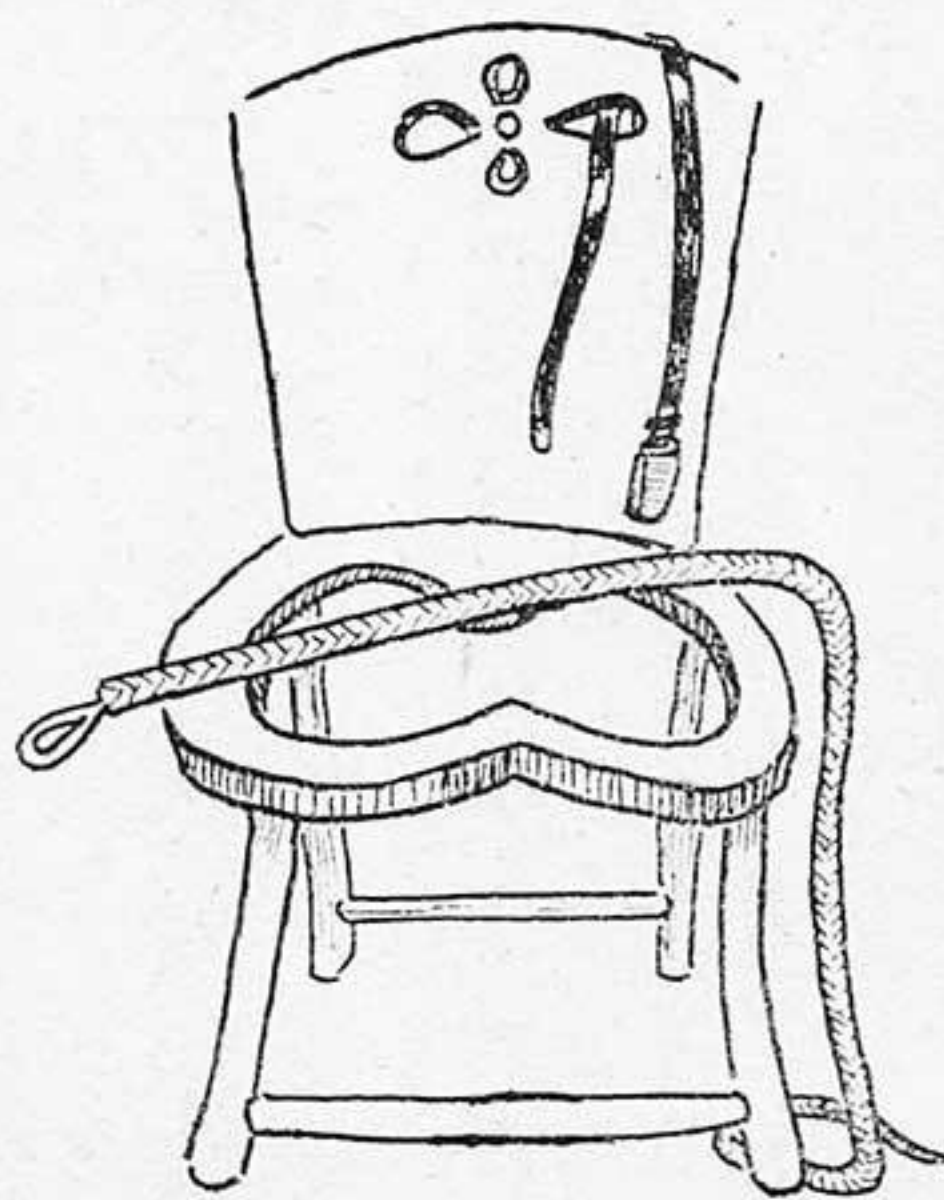
「おお……今夜も良か月夜じや」

遠くでまた、波の音が聞こえた。

婦人刑務官イヴェット・ヴラディ

心傷たむ遍歴 へ第十一章そのかみのこと(十一)へ

西 条 操



同じくその春四月の或る朝、ダブル四個の金ボタン輝やく濃紺の制服に身を固めたイヴェット・ヴラディは、写真付き着任命令書を示してコンピエーヌ刑務所の正面通用門を潜った。彼女の身分は法務事務官三級職。パリの北東約七十軒、緑滴たるコンピエーヌの森の一面に、五米のコンクリート塀を繞らせて建つ此の近代的な建物は婦人刑務所だ。コンピエーヌ、リヨン、カンヌ、ツーロン、アンジェー、そしてサンテの女囚と計六カ所ある婦人刑務所のうち、コンピエーヌとリヨンは

原則として初犯女囚を收容し、改悛の情顯著な累犯者はカンヌへ移送されることもある。そして環境のいいコンピエーヌには官舎群を挟んで、更に近代的な建物群がやや低いコンクリート塀を繞らせて居た。未成年犯罪者を收容する少年刑務所と、非行少年少女を矯正する感化院の施設だ。

男性を混えた門の守衛連中は、真新しい制服を着たイヴェットを、うさん臭げに、しかし新米の仲間に対する親愛の情を示しつつ丹念に調べた。広い前庭の向うに、監視塔を頂

いた本館の建物が見える。塵一つない通路、手入れの届いた芝生や植込み、建物の窓々はピカピカ光って、クリーム色の壁は陽に映えては居るが、矢張りどことなく世の常の場所とは違った雰囲気漂って居た。耳を澄ませば、数百名の女達の呻吟の聲が聞えても来る様だ。本館の広い玄関、その水色の敷石を磨いて這い回って居る二人の女が、近づくイヴェットを見るやあわてて飛び退いて道をあけ、ちらと見上げた眼を忽ち伏せた。ここで刑に服して居る女囚だ。炭色に赤土色の横縞

の囚衣、その胸の前後に番号を記した大きな白布、かぶった粗い黒ネットで髪をキツチリと束ね包み、勿論絶えて久しく手入れしたことはない其の顔は、年の頃の見当をつけ兼ねるが、案外に健康そう。規則正しい生活と労働の御陰なのだろう。飛び退いた時に鳴った腰の連鎖が哀れだった。そして更に、腰鎖の後ろに取付けた鉄の玉がカラカラと乾いた音で高く鳴った。あたりには監視者の姿はなく、こんな時には可哀想だが、鎖も音響器も当然の処置だ。とは云え、其の哀れな姿に顔をそむけかける。それを辛らくもこらえ頭を真直に立てて、新任婦人刑務官イヴェットは努めて冷然と装おい、女囚達が飛び退いたあとを靴音高く通ったのだった。

先ず顔を出した総務課には、同じ新米が既に一人来て居た。あとからやがてもう四名が現われて嬉しげに挨拶を交わす。アンリエットにカレン、ガロアンヌにロゼット、それにミリアム、皆刑務官養成所の同期生だ。

「案外明るい感じね。学校みたい」

「そうね、一応此の建物だね。あら、あんたの制服、少し手を入れた方がいいわ。ここんところを詰めて絞っちゃうのよ」

「そのようよ。金ボタンだって少しいぶして

艶消しにした方がエレガントだわ」

騒いで居ると、やがて全員六名、刑務課長に呼ばれた。直属上司であるマルチーヌ刑務課長は、この本来の業務たる刑の執行を直接担当する部門の責任者、冷たく整ったマスクに栗色の髪豊かな三十七、八の女性だ。デスクの前に並ばせて立たせた新しい部下六名を一人一人見やりながら、淡い藤色のスーツの胸許に光るネックレスを白い指でいじる。

「では申告しなさい」

婦人課長はそう云い、切れ長な眼をキラリと光らせて端のガロアンヌを見据えた。どんなあばずれ女囚でも此の課長の前に曳き出されて一睨みされると、脚も震えて口が利けなくなる。と云われる位で、法の権威を鑑つて君臨する其の刑執行の冷たさ加減は、膝下に踏まえつけられた全女囚の恐怖の的だ。着任申告をするガロアンヌの声は少し震えて居た。

「次ッ」

アンリエットが踵を鳴らせた。

「あなた、制服に手を加えたのね？」

「は、はいッ。すみません」

「謝まらなくても、それにいいわ。未だ若いんだものね。けど、その制帽のかぶり方は何？ スチュワーデスやバスの車掌じゃないの？」

よ。そんなに横っちょにしないで」

「はい」

アンリエットは制帽を留め直した。イヴェットは靴の磨き方を指摘された。

「よろしい。では立ったまま楽にしなさい」

婦人課長マルチーヌは、坐ったままで訓辞を初めた。

「知っての通り、ここは初犯者ばかり収容して居ます。少しは累犯者も居るけど、それは特別の情状の者です。監舎は六ブロック。一ブロックに通常監房が六」

マルチーヌ課長は、ここでニコリと笑った。特別監房と云うのは、つまり懲罰房のことだ。

「通常監房の定員は六名。つまり一監舎が七十二名、半グロスね。全定員は三グロス。現在約八十%で三四八名。監房四ヶを四人で担当するのが建前ですが、刑務官の定員は充足されない勝ちの状態です。配属はあとで係りから聞きなさい」

婦人課長は言葉を切って、又も眸をキラリとさせた。

「そこで、あなた達に云っておくことがあります。学校では行刑の理想に就いて、いろいろと教わったことでしょう。そして、ここは

其の理想に基づいて、一度だけはチャンスを与えると云う見地から、教化矯正を眼目として運営されて居ます。教育刑、まことに結構です。人権を尊重してやり、善導して社会に再復帰させる、ほんとに立派です。しかし、しかしです、現実はその甘いものでは決してありません。戦時中は別として、戦前十年間と戦後今までの統計を見ても、処遇や行刑方針の変遷に拘わらず、この出所者の再犯率は略々七十五%と一定で、むしろ増加の傾向さえ見せて居るのです。私達の努力にも拘わらず、数字は此の有様なのですよ」

課長は眉をキリリと上げ、デスクを平手で叩く。

「現在の平均刑期は三年六カ月。ここを出してやると、四人に三人は再び罪を犯すのです。環境や社会や政治のせいにするのは安易な逃道ですが、もっと悪い環境や暮らしの中で正しく生きて居る女性達も多勢居ることを忘れないで」

マルチーヌは、又もデスクを叩いて声を励ました。

「受刑者達には、そりゃピンからキリまであってよ。でも、ピンは稀でキリばかりだと考えて間違ひありません。俗な云い方ですが、

あなた達は決して彼等にナメられては駄目よ。受刑者達に安価な同情や憫れみを示したり甘やかしたりしては絶対にいけないのです。彼等のために生活や身体生命を傷つけられた善良な人々の居ることを決して忘れない様にしなさい。教化とか善導とかいった所で、所詮それは、刑を厳正に執行した上でのことなのよ。ここは学校じゃないんですからね。社会の最下層の人達よりも楽をさせることはないのです。刑をまじめに受ける者に対してこそ、初めて善導の手を差し延ばしてやればいいのです」

婦人課長は、煙草を長いホルダーに差し込む。

（此の課長さん、未だ若くて綺麗なのに、昔ながらの考えなのね。でも、実際の所はそうかも知れないわ）

イヴェットは、脚を踏みかえつつそう思った。

「よしんば、たとえ扱いにミスがあったり、時にはきびし過ぎたかと思うことがあっても受刑者にひけ目を感じる様では落第です。あなた方は支配者なのよ。如何なる場合でも頭を下げたり非を認めたりする必要はありません。正しいのは常にこちらなのですよ。勿論

どんなに些細な事柄でも反則を見逃したり黙認したりしてはいけません。ビシビシ取締って懲罰を加えてやるべきです。それが大きな慈悲と云うものなのよ。分るかしら？ いいこと？ 些細な紀律の乱れが累積して事故が起きるのです。懲罰件数が如何に多くとも、それはあなた達の勤務成績には絶対に無関係です。学校の先生ではないのですよ、あなた達は。細かいことは所属の看守長から教わりなさい。以上は根本的な心構えについてです。分った？」

課長は漸くマッチをすった。

「あ、それからね、学校じゃどう教わったか知らないけど。ここでは勤務中の化粧は禁止してないのよ。好きな様にしていいいわ。女囚達に遠慮することは絶対ないことよ。身の程をいつも思い知らせておくにはいい手段ね」

イヴェットは、入念な化粧のマルチーヌ課長を眺めながら思った。

（でも、可哀想だわ。私、口紅だけ、それも極く薄くだけにしよっと）

課長は紫煙を吐き出して口調を柔らげた。「カレンとガロアンヌは既婚者なのね。官舎は空けてあるわ。イヴェットは、お母さん」

一緒に住みたいのね。寮で少し待ちなさい。すぐ空くわ」

六名の新任婦人看守は踵を鳴らして課長のデスクを辞し、庶務係から装備品一式を受領した。鎖の極く短かい手錠一對、鎖のやや長い手錠も一對。何れもよく手入れされ磨かれて、ピカピカ光るニッケル鍍金には油が塗られ、革のホルダーにキチンと納められて居る。新品を貰った者も居た。鎖の長い方は環も大きくて、かなり太い足首にも嵌めることが出来る。両方に共通の鍵を一個。紛失すれば減俸ものだ。其の平型の鍵に合う鍵穴は細く狭く、錠は精功頑丈で、針金やピン位では如何に閑にまかせて器用にいじくっても、開けることは先ず不可能だろう。革ホルダーを通して吊る革の腰ベルトも渡された。両端に錠金具のついた三米の細く強靱な革ロープ一本、伸ばせば六十センチ、畳めば十五センチの金属棒、それに警笛を一個。写真入りの身分証明書と黒革表紙の刑務官手帖も貰った。それらを身に着けて彼女達は所長室へ顔を出した。出勤したばかりの所長は初老を通り越した男で、穏かな顔に退屈げな色を浮べて椅子をすすめた。

「ま、何だな。要するに二度と過まちをしな

い様に教育し直してやって、社会に復帰させてやるのが我々の職務だよ。いろいろと大変だろうけど頼むよ。中には、そりやもう手に負えないものも居ることだろうがね。決して腹を立てちゃいかんな。云って聞かせるのが第一だよ。懲罰権を乱用しない様にな」
朝だと云うのに所長は疲れた様な声でボソボソと、ありきたりの理想論をしゃべった。

「全然頼りない、おじいちゃんねえ」
「そりやそうよ。来年は停年だもの」

所長室を出た彼女達は、それでもホッとして笑い合う。

「朝っぱらから眼をショボショボさせてたわね。あれじゃ女囚だって相手にしないわよ」
「かもね、きつとマダムが凄くてさ、昨夜もむしられたのよ。フ、フ、フ」

子もなく三十を過ぎて未亡人となったロゼットが、そう云って肩をすくめた。

六棟の監舎は本館の裏手に並んで、コンクリートの灰色を見せて建って居た。窓々には太い鉄格子が嵌まり鉄蓋がつけられて、流石にいかめしく暗い感じた。それに、出入口と云うものが見当らない。監舎への出入りは、すべて本館からの地下通路を通るほかないのだ。各監舎からの地下通路は本館の地下広間

に口を開き、其の広間から階段を昇ると刑務課の横手に出る。階段を昇った所は勿論いかめしい鉄格子が遮ぎり、刑務課長のデスクから窓越しに出入りが眺められると云う寸法だ。広く高い鉄格子の一部は大きな鉄格子扉、更に其の一部に小さく狭い鉄格子扉があって、鋼鉄の錠箱が鈍く光る。錠と鍵で幾重にも遮ぎられ隔絶された世界の第一関門たる其の扉の本館側にデスクがおかれ、当番の婦人看守が鍵の輪をいじりながら坐って居た。案内してくれた女の子はスカートを齧えしてそこで去り、鉄格子扉が重々しく開かれた。

「配属監舎は分ってる？ 通路に番号が打ってあるわ」
扉が背後で再び閉じ、錠がビシーンと鳴った。

「心細くなって来たわ」
「何だか、こっちも女囚になったみたい」
「制服とバッジが頼りね。えーと、五号監舎は、と……」

六人の新米婦人看守は肩をすくめ合い振り返りつつ階段を降り、薄暗い地下広間で別れた。各監舎に丁度一名宛配属だ。広間に並んで口を開く六本の狭い通路。少し離れてやや広い通路の口は炊事場へ通じて居るらしい。

イヴェットは三号と記された通路を進んだ。むき出しのコンクリートが上下左右を冷たく固め所々に点もる鉄網付きの電球が心細く照らす一米半の地下通路には今は人影もなく、彼女の靴音だけがコツコツと響いた。

罪を背負い刑を打たれた女達が、味気なくも哀しい想いを胸に噛みしめ打ちうなだれて、朝な夕なに行き来する此の通路の壁や天井には、其の溜息と恨みの数々がしみついても居る様に思えた。二、三度曲がると階段、それを昇ると又も鉄格子だ。今度は鉄格子の向側にデスクがあつて、婦人看守が電話器と鍵輪を前に雑誌を読んで居た。聞きしに勝る嚴重さだ。しかし、逃げたい一心の女囚達を多勢、それも直接戒護を出来るだけ避けて拘禁し、そして少数の刑務官で支配監督して行くには、此の位の警戒と設備は必要かも知れない。

「あーあ、ほんとに退屈よ。監舎日直は制服着た女囚と同じだわ。あなた、何て云う名だったわけ？ 連絡あつたけど、忘れたわ。失礼をば。私、キャスリーヌ・メリル。去年からよ」

鉄格子扉を開けて入れてくれた若い婦人看守が、そう云つてあくびをした。美人ではな

いが敏捷そうな顔と体つきの娘だ。

「看守長は、ジョアンヌ・ガロアって云うの。子供が三人居る四十三才の身持ちよき未亡人。まあ、あれじゃ身持ちよくなっちゃうのが当り前かもね。性格、容貌、スタイル共、六人の看守長の中で中位ってとこ。今、居るもんですか。労役状況巡視中よ。但し喫茶室でね。電話したから戻って来るわ。ひとめぐり見る？ 今は誰も居ないわよ。あ、一人ブチ込んでたわけ」

鉄格子を潜つて、すぐ右手には看守詰所がある。照明は柔かく、ソファやテーブルも並べられ、窓の鉄格子のほかはちよつとしたサロン風。スチームの蛇管もあるし、壁にはシッター付きの通風孔があつた。

「これ、クーラーなの。夏になると、ここから出るのが嫌になるわ。暑くなると、これも有難いわ。でも、気の利いた飲物やなんかは自前なのが玉に瑕ね」

キャスリーヌは、そう云つて、隅の調理台に並んだ電気冷蔵庫を叩いた。隣室は看守長室で、広いスペースを取ってデスクが二つにロッカーの類。人間らしい気持を感じて過ごせるのは其の一画だけで、詰所を出ると忽ちきびしくも冷たいたたずまいが取り囲む。数

十名の女の群が囚われの身の悲哀に悶え哭く施設が並んで居るのだ。詰所に接して広間があり、窓側の壁際にはカーテンもないシャワー場、床にはデスクや物置台が数個、横手の壁の戒具棚には、鎖錠や枷の類が鈍く光り、革鞭や連鎖が幾条も吊られて居た。詰所の側に寄せて六卓の細長いテーブル、其の片側にそれぞれの長椅子、テーブルも腰掛けも鉄製むき出しで床に造りつけ、各々十二名分宛の仕切り線が白い。戒具棚に並ぶおぞましい道具の数々を見て眉ひそめたイヴェットは、其の一つを示して訊ねた。分厚い革ベルトがT字型になった物で、縦の一本は細く、其の中央部あたりは鉄環二個が金具で連結された構造になって居る。ベルト端末には何れも錠金具が光って居た。二個の鉄環はステンレス鋼製で角張った長楕円形、それぞれ舟形に彎曲し、やや小さい方の環の内側には鋭い針状突起がビッシリと植込んである。

「ああ、それはね、貞操帯よ。フ、フ、フ。『ベルト』って云うの」

キャスリーヌは笑つて教えた。

「不埒なことをするのよ、どうしてもね。眼に余る者には、これを掛けて締め上げちゃうの。大抵シユンとするわね」

キャスリーヌは事もなげに云った。植え込んだステンレス鋼の針の群には液体以外のものは、マッチ棒一本たりとも通さないであろう。

「まあ！ けど、こんな物、正規の戒具じゃないでしょ？」

イヴェットは頬を少し赤らめて呟いた。

「そりゃそうだわ。けど、使用しちやいけないと云う規則もないのよ。どこの婦人刑務所にだってあるわ。だってねえ、本当に凄いのよ。今に分るわよ。労役でいくら絞ったって、あれは別と見えるわ。風紀は保持しなくちゃね」

「なら手錠かければ、いいじゃありません」

「駄目。同房の者が居るもの。六名が雑居房なのよ。手錠付きで独房に入れると世話が面倒だしね。それにこれはい見せしめになるのよ。勿論、昼間だって外してやらないで労役させるの。泣き出すわね」

イヴェットは眉をひそめた。女のさがとはそんなにも哀しく不潔なものなのか。

「彼等は刑を受けてるのよ。二年や三月はそんなこと考えずに暮らすのが当然だと思わない？ ね、イヴェット。ホラ、此の二個の鉄環を連結してる此の金具ね。この金具に環が

ついているでしょ。手錠を前でかけてさ、それを此の金具に結合しちやうの。衣類の関係があるから寒い時には少し可哀想だけど、そうしてやると、とてもじゃないが切ながるわ。ガミみたいに脚をひろげてね、背を丸めたまま唸るわね。何しろ、両手の指先が其の近くにありながら、どうとも出来ない訳だもの。フ、フ、フ。そのまま歩かせると、吹き出しちやいそうに滑稽よ」

イヴェットは驚いて頭を振った。残酷なことを考え出すものだ。

「あら吃驚したのね。ひどいと思う？ 私だって最初は、そうも思ったわ。けど、そんなに甘いことじゃ、とてもじゃないが駄目なの。あなただって今にすぐ分るわ。何しろ、此の窄衣で締め上げてもケロリとしてるのが居るのよ。そりゃ、中にはしおらしくて感心のも居るわ。でも大半は箸にも棒にもかかりやしないことよ」

「初犯者でも、そんなのですの？」

「初犯だろうが累犯だろうが、罪を犯す様な女は同じことね」

イヴェットは、そっと溜息をついた。

検身や食事や出監準備、その他もろもろの行事に使われる広間の向う側つまり看守詰所

の反対側には、厚いコンクリートで固めた独房が六個広間に向いて並び、鉄扉をビッシリと閉じて居た。特別監房、つまり懲罰房だ。一名入れられて居るらしく、呻き声が時々微かに洩れる。

看守詰所、大きな広間、それに特別監房群と片側に並んだ其の反対側には、広い通路を隔てて通常監房が十二個、三米宛の鉄格子をずらりと端から端まで並べて居た。通路の向うの端は勿論コンクリート壁の行き止まりで、掃除用具等の置場。通常監房は扉も鉄格子で左側に寄せてある。房内は隅々まで通路から見通せる仕掛だ。房内はどれも今は空で、鉄格子扉はすべて外方へ九十度開いて整然と光って居た。房内は幅三米に奥行八米位。右側の壁に端を接して鉄製ベッドが六個、壁に垂直に並べてある。勿論床に造りつけで、高さは三十センチ位とえらく低い。幅は狭くて寝返りを打てば落ちること必定だ。麦藁のマットに灰色のシート、其の上にも毛布と枕がキッチンとたたんで置かれて居る。今は消してあるが、天井には鉄網付きの埋込み電灯。壁も天井もコンクリートの灰色だ。左側の壁とベッド群との間に、ずっと一米程の通路、其の突き当りの壁際の床に便器が一

個、そして其の上に窓。

看守詰所の窓は大きくガラスも透明で鉄格子は外側だが、監房の窓は小さく摺りガラスで鉄格子は内側、それも窓ガラスには手の届かぬ距離を隔てて居る。そして更に、窓の外側には厚い鉄の蓋が設けられて云々と云う嚴重さだ。

中央通路は端から端まで明るく照明されて四十数米。詰所前の監視デスクから眺めると、左側に十二個の通常監房の鉄格子群、右手には広間の大半と懲罰房の鉄格子群とが一目で見渡せる。

「監房の窓や鉄蓋は、ここで開け閉めするのよ」

キャスリーヌはそう教えて、デスクの操作盤を示した。操作盤の横に赤い大きなボタンがある。

「これは非常警報装置。詰所の中にもあるわ」

「二階は何ですか？」

監視デスクの前から昇る鉄階段を見てイヴェットは訊ねた。

「上は監舎内労役場。うちは今日は舎外労役だから空よ。案内して上げたいけど、私デスクから離れられないの」

イヴェットは独りで昇って見た。中央に並ぶ柱の他には、仕切り一つない大きな作業場だ。多くの作業台が並べられ、ミシンや作業灯も設備してある。階段側に、小高い監視席や材料工具倉庫、道具棚や製品置場が整然と並ぶ。物入れと云う物入れには、すべて頑丈な錠がかけてあるのは云うまでもない。鉄格子が外側の大きな窓は透明ガラス。明るい春の陽光が塵一つない床に鉄格子の影を落とし、見渡せば高い塀越しにコンピエーヌの森の緑が望まれた。二十米程離れて隣りに見える四号監舎の二階の窓は一つおきに開かれて居て、作業台に並んで身を屈める女囚達の黒ネット頭が鉄格子の向うに見えて居た。降りて来てイヴェットは訊ねた。

「何させてますの？」

「主に既製服を作らせてるの。婦人用や子供用のね。それに、此の辺の刑務所の囚人服も引き受けてるわ。ビーズ玉とおしやハンドバッグの安物を作ったり、雑誌の付録の綴じ込みなんかもね。封筒も張るし、造花も作るし、クリスマスや巴里祭の前は忙しいわ。ともかく廉いんだものね」

懲罰房の鉄扉の一つが内側から鈍い音を立てた。

「叩いていますのね。泣いている様じゃありません？」

と、イヴェットは眉をひそめた。

「肩か頭を当ててるのよ。革手錠だもの、手は使えないわ。気にすることなくてよ。けど、ちょっとうるさいわね」

キャスリーヌは、広間を横切って其の房の前に立ち、鉄扉の上方の小窓を開いて叱りつける。

「静かにおしッ。くつわをかけて、鎖も締めてしまふよッ」

開いた小窓から、女囚の悲痛な声が流れて出た。

「か、かんにんして下さいまし。お赦し下さいましッ。も、もう決して……」

「うるさいわね。一週間と決められたんだらう。いくら喚いたって駄目。もう、お前は一年以上になるんじゃないの？ 泣いたって、どうもなる世界じゃないこと位は分ってるわね」

泣き声に混って、床を引き摺る鉄鎖の音がした。かけられた足錠を更に床に留められて居るのだ。

「こ、この手錠だけは解いて下さいまし。腕がねじれて、苦しくて痛くて、もう……」

「フ、フ、フ。それが懲罰と云うもののなのよ。何を寝言云つてゐるの。今度騒ぐと、身動き出来なくするわよ、いい？」

キャスリーヌは嘲けつて、視察窓を音高く閉じた。

幅広の分厚い革ベルトを腰に締められ、それについて居る同じく幅広の革バンドと金具とで、両手首をそれぞれ腰の両側や後しろ、腰骨のあたりでガッシリ固定されて仕舞うと、肩から腕にかけてが振られ曲げられて、苦しくて堪らなくなるのだ。

「あ、あッ。か、かんにんしてッ。窓を、窓をあけて下さいまし、少しでいいの。真暗だと恐ろしくて気が狂いそう」

視察窓がガチンと隙間なく閉じられ、一きわ大きく鳴った鎖の音と喚き声が不意に小さくなって途切れ、ビーツとほとぼしる悲鳴が微かに洩れて出た。

「窓あけると臭いでしょ？　いくら水を流しても駄目ね。」

「そうお？　私、気がつきませんでしたわ。

あの、何か着てますの？　それとも」

「あなた、重屏禁のこと教わらなかったの？　覗いて見りゃいいのに。四月から九月までは糸一本なしよ。冬には、それ用の物を着せる

の」

二人の婦人看守は、肩を並べてデスクに戻った。

「あのひと、何して懲罰されてますの？」

「あら、鉄扉に掛けてある札読まなかった？

反抗したのよ。一昨日のひるから重屏禁一週間。出してやったら、ここ当分は番号呼ばれただけで震え上がるからね。あれと革鞭が一番利き目あるわ。どんなあばずれでも、当分はあの鉄扉を眺めて身震いしてるもの」

其の恐怖の効果を計算してのことだろうが食事は全員が懲罰房の方を向いてする仕掛けになって居る。むごいことをさせるものだ。

「看守長おそいわね。何してるのかしら。又テレーズ小母ちゃんと駄弁つて腰が上がるのよ。テレーズ小母さんは六監の看守長でボス格ね。一番きつくて、懲罰房にはいつも二、三人ほうり込んだかないと気が済まないらしいわ。ね、詰所に入ってコーヒーでも飲まないこと？」

二人は詰所のソファに腰を沈ませた。柔かいソファに安楽に坐って居ると、イヴェットは先刻の重屏禁の女囚のことが哀れに思えて来た。身から出た錆、規則だから仕方ないこととは云うものの、暗黒の穴ぐらで革手錠足

錠は辛かろう。

「ね、キャスリーヌ。反則しなきゃ、そうひどい扱いをすることはないんでしょ？」

「そりゃそうよ。まじめにさえしてりゃ、手錠一つかけはしないわ。舎外に出る時に腰鎖つける位のものよ」

「そうでしょうね」

イヴェットはホッとした。彼女には、気にかかる人が一人あるのだ。

（私に勤まるお仕事かしら。お給料に釣られて何の気なしに選んでしまったけど、並大抵の神経じや勤まりっこないわね。でも、あの方に少しでも御恩返ししなくちゃ。神様、どうかあのお方がここへ送られて来ます様に）

キャスリーヌがコーヒーを啜って

「でも、あなたも知ってるでしょうけど、受刑者が守らなくちゃならない規則って、とてもしゃないがきびしくて大変なのよ。がんじがらめのもの。覚え切れない位よね。反則取ろうと思えば、何だっていつだって取れるわ。

態度不遜、官吏侮辱と云うのはオールマイティなのよ。フ、フ、フ」

そう、そうなのだ。極端に云えば、眼の玉一つ自由には動かせはしない獄則なのだ。

「所で、あんた、刑務官なんか志願する前は

何してたの？」

「私？ 私ねえ」

途端、鉄格子戸の外で、ガラガラ声が突如驚き渡った。

「メリル日直看守ッ、どこへ行ったのッ」

看守長ジョアンヌ・ガロアが重いみこしを漸く上げて戻って来たのだ。

「うへッ。大変」

首をすくめたキャスリーヌが、飛んで行って扉を開ける。

「デスクに居なくちゃ駄目じゃないの」

「すみません」

「まあ！ コーヒーなんか飲んでたんだね」

立ち上って居たイヴェットは看守長にジロリと見られて、更に踵を鳴らせ姿勢を正した。

「出入簿をお見せ。おや、あの新任者を記入してないじゃないの」

「すみません。すぐ記入します」

直立したままのキャスリーヌは、隙を盗んでイヴェットに片眼をつぶって見せた。

「おや手錠をどうしたの？ 誤魔化そうたっ

て駄目よ。ホルダーが空かどうか位、一目で分るんだから」

「すみません」

キャスリーヌは、デスクの抽出から自分の手錠を二対取り出し、腰のホルダーに納めた。重いので出して居たのだ。

「気をつけるんだよ。いつ如何なる時でも油断しないで。さて、と。あんただね。今日来たのは？ こっちへおいで」

ジョアンヌ看守長は、はち切れそうな腰をゆるがせて、イヴェットに顎をしゃくった。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊

写真と絵画

文献

特集号

直接お申込を、定価五〇〇円（〒共）略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、

女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れまですと補充がつきません故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折返し急送いたします。

〔第一グラビヤ〕

（十六頁）

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成

「私の乳房を見て」……………長野 良子

露出癖の充足……………長野 良子

後手縛りのワンカット……………大塚 啓子

転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子

新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

〔巻頭口絵〕

（オフセット八頁）

△絵物語▽白ターバンの女……………四馬孝・画

第一図章△捕獲▽……………第五図章△美容▽

第二図章△飼育命令▽……………第六図章△洗腸▽

第三図章△調教▽……………第七図章△矯正▽

第四図章△訓練▽……………第八図章△仕上げ▽

棒責め愉悅……………新井マリ子

ムチ打たれる肌……………新井マリ子

サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる

顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子

押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子

餅肌はくびれて……………東浦ひかる

柱縛り首縄……………梨花悠紀子

海老責二態……………梨花悠紀子

黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

〔第二オフセット〕

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞い……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憶れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめっちゃくちゃにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
嚴重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り

松本アサ子

エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐
絵物語「白ターバン」の女……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子

光と影の表と裏

梨花悠紀子

縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙かれた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット写真〕

(十六頁)

美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニンフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

「約束腹」のこと

宗^{ムネ}
川^{カワ}
一^{カズ}
子^シ



○私の名

私の名は「一子」と書いて「カズシ」と読むとは誰も思わないことでしょう。これは父に男兄弟が七人ありました。そのうち六人までは若くして死んだためもあり、特に中の一人は軍人として、あのシベリヤ出兵に従軍して戦死してしまっただけでなく、祖父は女の子を育ててみたい。また軍人として再び戦死という悲惨な目にあわせたくないという理由から、はじめての孫でもあるため、字でいうと女のように「一子」と名づけたものといえます。しかし、私に弟妹はなく、只一人の子として成長しましたが、その祖父母も、また父母もあの太平洋戦争の空爆に散ってしまったのでした。

○奇せきとぐう然

私は成長してある運輸会社に就職しました。郷里からは遠いので、その町の荒川という今は美容師をしています。当時理髪業を営む方で間借りしたのでした。ご主人は陸軍中尉で、よく私とも親しくして下さいましたが、このご主人も終戦時は応召の身として内地勤務であり、また予備士官（当時大尉）で

あり乍ら、玉音放送を聞いて切腹自決された
とのことでした。

「奥様は終戦時二十五才、花も恥らうという
年令でしょうか、そして東京で身体をこわし
たという病氣勝ちの荒川さんの妹さんが昭和
十九年の春疎開を兼ねて、身を寄せたのでし
た。その妹さんの名がぐう然にも「一子」

(かず子) ということです。私もこれにはおど
ろきました。しかし荒川さんには私の名は
「数志」というように話してあったので、別
に問題はありませんでした。もう一つの奇
せきというのは、あまりにもこの一子嬢が私
に似ていることと年令が同じということとし
た。これには本当にビックリしました。まる
で鏡でも見ているかのような気がしたのでし
た。まあ強いと言えば私は頭髪を男性型にし
多少色黒である外、骨格が男性的というよう
なものでしょうか。

それ程までに似ているので、近所の評判に
ならない筈はありません。会社でも上役や仲
間から「お前この前町で女装して歩いていた
ナ」と言われ、そして「非国民」ともののし
られたものです。また一子嬢も「男装」して
歩いていると言われたそうです。困ったあげ
く、これを証明するために、よく二人で歩い

たものでした。同じ家に住む、若い二人で一
緒に歩くということは、何を意味するでしょ
う。急速に熱烈な恋愛に落ち入ったのも当然
なことでした。当時のことです、町中の大評
判となりました。

○ 変った婚約

一子嬢の義姉、つまり荒川夫人は立派な人
でした。世間はどうかあれ、かえって私達をは
げまし、ゆくゆくは二人結婚させようとも考
えたようでした。それ故にわざわざ私達が二
人きりで逢える機会を多くしてくれるという
理解者だったのです。

昭和十九年の六月でした。私も帝国軍人の
卵として徴兵検査を受けたところ、「甲種合
格」という当時としては名誉ある宣告を受け
て帰ったのです。そしてその秋も十月、
「昭和二十年一月十日、現役兵として入営」
という証書をうけたのです。当時の気持は
今においては考えられないことですが、日本
人としての名誉と考える心の中にも、一子嬢
と別れなければならぬという、悲しさも大
きくあったのです。

その証書を受領した晩のこと、荒川夫人に
(ご主人はすでに応召) その旨伝えたところ

午前一時頃だったでしょうか、スーッと私の
部屋にはいつて来た者があったのです。よ
く見ると一子嬢です。入営証書はまだ誰にも
見せていませんでしたが、和装に美しく化
粧した一子嬢は、その入営証書を見せろとい
うのです。何んのことかわからないが、只名
前を見られるのが恥かしいばかりに、暫らく
押問答の末に見せたところ、

宗川一子

という字を見て、ビックリ、私は事の次第
を前記のとおり話しますと、一子嬢は非常に
近親感を浮かべ、いよいよ二人で一身体と
いう気になったようで、遂に『結婚』してく
れと頼むのでした。私は自分はやがて戦場に
行く身であり、当時各地での玉砕の報を聞く
とき、やがては私もその運命にあるを思うと
どうして結婚できましよう。今まで熱烈に恋
愛した結果の別れるつらさは死にも勝る心地
であり、これまでして只軍隊という別世界に
逃避することは耐えられない事ではあります
が、私の戦死後この娘に「未亡人」というレ
ッテルをはらせたくないと思ひ極力思い止ま
るように話したのでした。そういう日が一週
間も続いたのです。荒川夫人は荒川夫人で、
あの手この手で言ってくる。それなら勇をこ

してこの家を出ればいいのですが、ご主人が出征するとき、「不在中をたのむ」といわれた立場で、逃げ出す術もなかったのです。

一週間目の深夜十二時だったと思います。

柱時計が鳴り終ると、寝ようとする私の前に一子嬢が、白無垢姿で現われて、私の前に座ったのでした。その美しく、この清純な娘を本当に妻にしたいという心もないではなかったのですが、自分の戦死後不幸を背負わせたくないという考えの方が先走るのでした。

黙ってすわった一子嬢は、白鞘の短刀を出して、「あなたが結婚して下さらないなら、あなたの前で潔く自決します」というのでした。この只ならぬ様相、しかし私の部屋は茶室として造ったはなれでしたから、荒川夫人にはわからなかったことでしょう。私はどうしたものか、しばらく目をとじてためらっていましたところ、

「お返事できないとおっしゃるのなら、わかりました」

と言いつつ鞘をはらったではありませんか。いつの間にか彼女は、その膝を腰緒でしばっていました。私はビックリしました。これを押し止め、その短刀をとりかえして申しました。

「それ程おっしゃるのなら、はっきり申しませう。私とてあなたを死ぬ程好きだ。どうか死なないでくれ。私ははっきり言います。婚約しますと。しかし結婚は私が軍隊から帰って来てからにして下さい。これ程まで折れたのだからわかってほしい。そして結婚するまで、清らかな身体でいようね」

私の言葉に彼女は納得して帰りました。

私も前に申したとおり一人子です。それ故この身体の弱い彼女を父母は嫁として受け入れるかどうか、九十九パーセントまではダメという考えがありました。しかしその時はその時と心をきめて、翌日荒川夫人に一子と婚約する旨話しました。一子嬢もホッとしたようでした。しかしまたその晩も丁度十二時というときは、寝ていた私を起したのでした。ビックリして飛び起きた私は事の次第を聞くと、婚約をはっきりとした二人のものにしようというのです。それはどういうことなのか？ という和服を着てくれというのです。彼女も一旦引きあげましたが、約一時間もすると、訪問着姿の正装で現れました。私はこれまたビックリ、急いで羽織を着て向い合って座りました。その時の彼女の美しく、天女のようなそして美の女神のよ

うな姿は、この世に二人とあろうかとも思う程でした。

彼女は真剣な態度で言うのです。

「私はあなたの妻となって、生死を共にします。身体が弱いので、子供は産めないでしょう。でも……」

そして

「あなたは私のことを考えて、軍隊から帰ってからと申されます。しかし、今の戦争はそれが保証できるとは思われません。近所にも戦死者が出ました。帰った骨箱は空だそうです。それであなたは私を処女のままだに征こうとなさいます。有りがたい気も致しますが、私はそれで日本婦人と言われるでしょうか、しかし私はあなたの言葉を信じます。故にここで私の身体に、その痕跡を残していって下さい」

というのでした。どんな事かという、昨夜の短刀をまた出して、

「二人で約束腹を切り合ひましょう。あなたはその腹を、私はあなたの腹を同じに切るのです。お願いできますか」

この話には私は一時たじろぎましたが、彼女のこの心、私の心も同じだと思い承諾しました。時刻は午前一時三十分です。幸い翌日は

会社は休みでしたから……。

十月末の夜は、やはりヒヤリするものがあります。彼女は切腹の場をつくりはじめました。私の敷布団を二重に敷いて、やわらかい油紙をその上に敷き、その上にまた彼女持参の白布を敷くという念の入れよう。自分の部屋から菊花の花びんを運んだり、そして二時になりました。どうするか聞くと帯をとき乍ら

「ヘソ下一寸のところを、横に五寸の長さ、そして深さは二分にネ」

と言って正座しました。私は言われるままに彼女の後から抱くように片ひざ立ててピタリとすわりました。帯を解いた彼女は出血でその衣裳を汚してはならないと油紙を胴に巻いていましたが、それを取り、襦袢の襟を開くと、乙女の胸の乳房がフツクリと象牙の腕を二つ組ませたように現われ、思わず私は手を引きました。彼女は胸を開いて、こんどは腰巻をも開きました。もう私は覚悟をきめたのでした。腰巻の下はむっちりとした白い太股が見えました。

前を開いた彼女は、短刀のさやをはらって私へ渡しました。そして物さしで計って口紅でしるしをつけて、さあと私を促すのでし

た。私は覚悟をきめたとは言え、目をつむり彼女の手誘導されて切っさきを左脇腹に突き立てて、一いきついて、ゆっくりゆっくり右へ引きました。大体十分余りたったでしょう。ヒヤリする晩なのに私は汗ビッシヨリ、切り終って刀を返して腹を見ていると血が静かに流れ出して来ました。それまで齒を喰いしばっていた彼女は思わずニッコリ。こんどは私の番です。同様にして彼女に切ってもらいましたが、そう痛いという感じはありませんでした。きっと夢中だったせいでしょう。こうして約束腹を切り終えて、お互いに相手の切り口を口で吸いあったわけです。そうしてはじめて彼女は本望といおうか安心といおうか、ほっとした表情で、今から宗川一子と呼んでくれと言います。私は彼女の手をしっかり握って、彼女の為にも生きて帰ることを誓ったのでした。

○彼女の死

運命は異なるものです。終戦となって私は昭和二十四年、シベリヤから帰って参りました。それは帰りついたのは八月十五日の晩だったのです。一旦私の郷里に立ち寄ったところ私の一家は空爆の犠牲となっており、すぐ

一子の待つ荒川家に急いだのでした。着いたのがちょうど度夜中の一時、日付ではもう十六日になっていました。

戸口まで入ると何かプーンと線香の匂いです。ハハア、誰かの法事かなとも思いましたが、待てヨ、一子がもしや病気でも、と思ひ裏からはいると、どうでしょう。薄暗い電灯の下で、荒川夫人は荒川大尉の写真に向い、一子は私の写真に向い香をたいて、短刀で自決しているのです。後で聞いたことですが、荒川大尉は終戦の日、自決されたそうですが、一子のためをおもって夫人は生きて来たのです。しかし私の死亡通知を手にした一子を見て、世をはかなんだものとのことです。それなら私の死亡通知とは、つまり満州でのドサクサに私が戦死したものとされて、空の骨箱がしかもその十五日に伝達されたもので、私の身寄りがいないため荒川姉妹が受領し、仏間に安置して後を追ったものだったとのこと。私はこの二人を直ぐ医師に連絡して手当してもらいましたが、危機一発のところ荒川夫人は助かり、一子はよみがえりませんでした。

一子の遺書には、宗川の骨箱が空なのはさびしい、宗川のところにいくのだから、それ

に入れてほしいというようなはしりがきがありました。

私は声をあげて泣きました。しかしどんなに泣いても一子はもどりませんでした。荒川夫人の全快まで、一子の葬式は出ませんでした。五カ月たってやっとわが家へ帰った夫人は逆に傷心の私を慰めるのでした。

それから私は会社もやめて、お店を手伝うこととなったのでした。五つ年上の夫人との関係についてはあらぬ噂をした人もあるようでしたが、私は夫人のことを、そういう眼で見たことはなく一子のこのみ目に浮ぶのでした。

○一子の身代りとなる

よく考えてみると、どうしたことか、市役所には私が死亡して一子がまだ生きているようになっています。それは三年ばかりたって戸籍謄本をもらってわかったことでした。

夫人つまり奥様は「めんどうだし、あなたが一子に名前も顔も似ているからいいじゃないの」と言います。そして「私も一子に会いたくなかったが、あなた、一子の着物を着てごらん、かつらはお店にあってよ」と言われて着たのが、私の女装のはじまりでした。はじめ

て女装したときは念入りに奥様は化粧して下さり、その姿を鏡に見た時の私のおどろき、死んだ一子がそこにいるではありませんか、奥様は「会いたかったわ、一子ちゃん一子ちゃん」といって私に抱きついて泣くしまつてした。

私の骨箱には一子の骨がはいっています。おそらく一子は私にのり移っているのでしょう。そういうことを考えて、大変なことに思いつきました。その骨を粉にして飲むことです。少しずつ少しずつ、そして五年かかりました。つまり七回忌には、一子の骨は完全に私の体内にはいったことでした。

奥様と二人で相談しました。これからは二人の間では姉、妹という間柄とすること、としたのです。そして一子の命日には私が一子の正装をすることとしました。しかし七回忌目の昭和三十年八月十五日には、荒川夫人つまりお姉様の指導で三十五才の私乍ら、十才も若返った程の徹底した女装をさせてもらいました。

○一子をしのんで

その日は、お店も休みでした。店員さんもない広い家に二人きり。割にすずしい日で

したから、暑いとはいうものの、すっかり外は閉めてのことです。

風呂から上った私は閉め切った店にいつて散髪してもらい二階に上ってみますと、そこには布団が敷いてありました。上にビニールが敷いてあり、それに促されて寝ますと姉はプロバリンを飲むようにといわれました。そのとおりに、毛布をかけて眠ったわけです。

日もトップリ暮れた八時頃目をさましたところ、これいかに私の頭髪をのぞいて一切の毛がないではありませんか。これは脱毛剤で全身をとったのだそうで、本当の一子にする為に（一子は無毛症だったことから）こうしたのだそうです。つるつるとした自分の身体、女体もいいものと思いました。すずしくなった夜、もう一度入浴して化粧から着付けがはじまりました。その日の服装は花嫁姿でした。姉として一子の、この高島田（かつら）の晴れ姿を一目見たかったのでしよう。午後十一時、すっかりできた花嫁姿に、泣いてみている姉に、私は私なりに涙を落しました。

しかし、それだけで、その夜の行事が終ったわけではありませんでした。一子をしのんでそれは姉として一度は死を考えて腹を切った

経験者、あの時を思い出したのかもしれない。一子と私の約束腹をも知っている一人です。私も一子のそのときの苦しみを味ってみようと、その姿で鏡を見乍らやってみることにしました。といって死ぬ程切るのではありません。長さ十五糎、深さ一糎、そしてヘソ下三糎（以前の時の跡あり）のところですよ。

私はあの一子です。美容室を業とする家です。三方に大きな鏡をしつらえた部屋もあります。ここは一子の息をひきとった部屋でもあるのです。

十糎の厚さのマットが二枚重ねで敷かれました。その上に白のビニールの布、そして白布です。当時の短刀はもうありませんから、お店のカミソリを使うことにしました。そのカミソリはよくとんでいます。それを三方にのせて正面に置きます。そしてその前には香がたかれました。花も飾られています。只二人だけの部屋、準備はすっかりできました。鏡の一子は終始ほほ笑みかけております。

やがて帯をほどいて着物をぬぎ、襦袢のみとなりました。そして白足袋にビニールの特製腰巻です。この特製布は血がはねたときこれであたりをよごさない為です。

私は死の即席にすわりました。胸には豊胸

パットをつけて、全身まっ白に白粉をつけてのことです。一見、人形といってもいい程の姿、襦袢の前をひろげると、ムッチリとしたパットの乳房が出て来ました。そしてお腰の前をひろげると白くつるつるした下半身が目に見え飛び込みます。切るときの便利を考えてパティははきません。

準備はできました。時刻は十二時です。その音と共に切るのです。高島田の一子、いつもこうしていたいと思う程でした。時計が鳴りました。姉さんに小声で「お先にします」と一礼して予定したところにジリッと差し込みました。痛いっという感じがしましたが、静かに静かに右に引きまわします。五糎ばかり引いたら血が流れ出しました。ヘソの下に来ると痛さも大部ありましたが、出血も多くなりました。鏡を見ると一子のこの悲愴美、十二時三十分までかかって切り終わりました。こうして私は一子になったのです。もう「かずし」ではありません。

○ その後の私

それから私は、もう一子になった気であり、姉も満足しております。そして今では毎日女装しており、洋装で外出しても気付かれ

ないようにになりました。本当の一子になる為に一週に一度は全身脱毛もやっております。今年は一子の十七回忌です。どんな行事をしたらよいか、今からあれこれと、たのしみです。

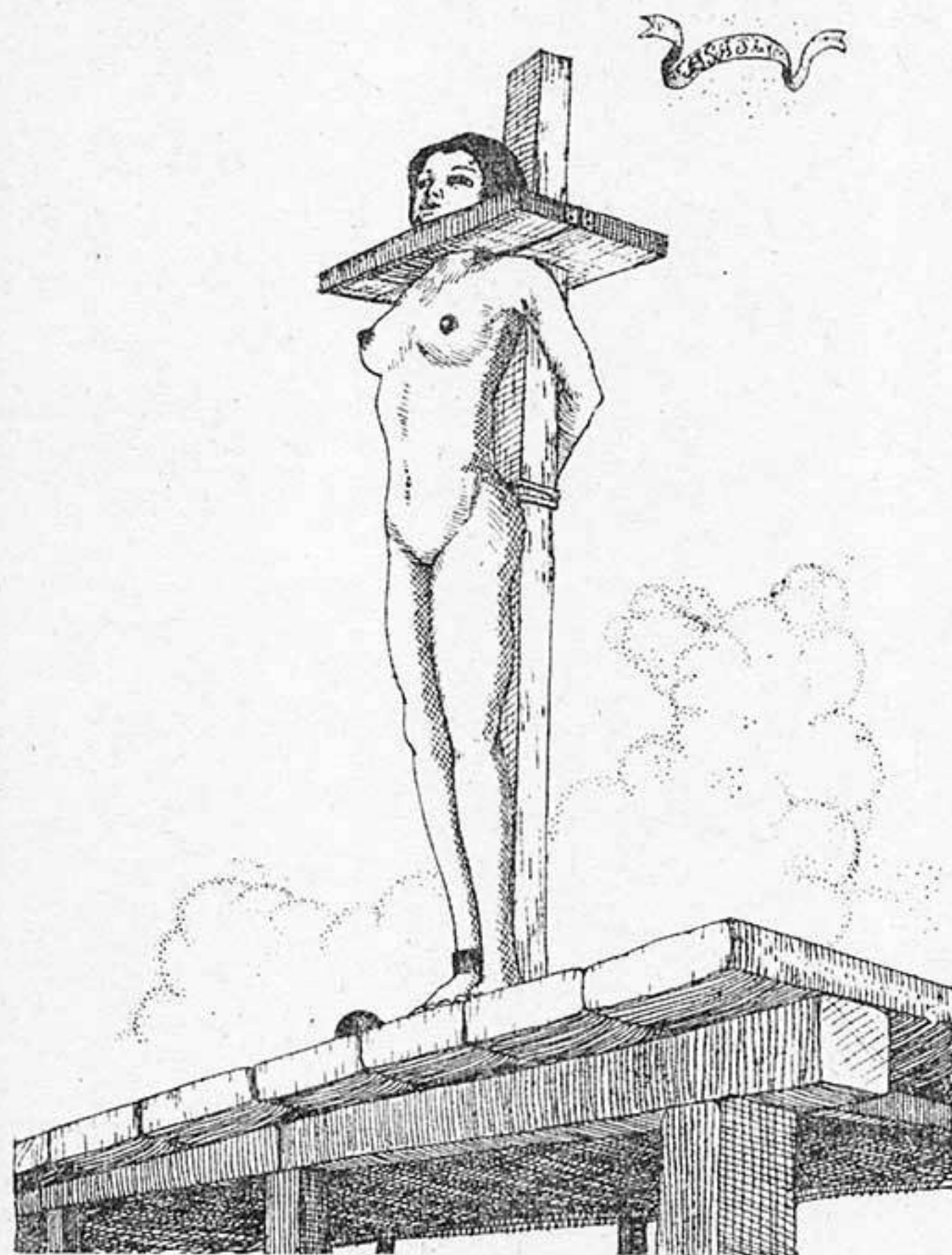
本当の女になる一歩として昭和三十四年には卵丸摘出をしてもらいました。そしてそれ以来、女性ホルモンを使用しています。姉はすっかり性転換したらよいと言いますが、その経費がバカにならないので、暫くこのままということですよ。でも、それも遠くないでしょう。私にはこの道に理解ある助力者姉がいるためです。

こうして最後の願いとして、本当にハラワタを出すくらい切ってみたく、と姉さんと作戦を考えたりすることもあります。姉さんもその気があります。敢えて死に急ぎはしません、一子を慕うあまり、いつかはそんな運命になるかもしれません。

若しそんなチャンスがあったなら、私は男女二人の一子となって、思いきり腹を切ってみたくと考えております。文字通り一人二役のこの演技には、姉も大いに乗気になっております。

処刑される女

(斬首刑)

××××××××
××××××××

黒田 寿

(室井亜砂路画)

“ズシン!”

巨大なギロチンの前に引きだされた十三人の若き女死刑囚。その先頭をもって、エレオノラの美しい首が血しぶきと共にころがりおちる。順番をまつ残りの女たちの口から恐怖の叫びがあった。

続いてフランソアーズがおしあげられ、首を穴につきだすとみるや、惨酷な刃はその首を胴体から切断してしまふ。三人目はデボラらしい。一分とたたぬうち彼女の首も永遠に斬りはなされ、前の二人の首の間にころがった。

続いてズバリ、ズバリとまるで大根か人参でも切るように、美女の首が斬られてゆく。五つ、六つ。ナタリーの如きはあまり切れ味がよすぎて、首はバスケットをとびこえていった。

キムは首がおちた瞬間、のこる胴体がスツクと台上にたちあがった。両脚をふんばり、首のあったところから血を噴きだしながら、二秒、三秒。やがて横ざまにどっとくずれおちる。

悲惨なのはクロード、斧がおちても首が完全に斬れず、しかもまだ生きていた。刃と台の間にはさまった首を、刑吏が前方からわし

ずかみにしてグルグルとひねる。恐ろしい叫びをあげつつネジ切られてしまった。

ミレーヌが最後に、いかにも死ぬことなんかなんともないといわんばかりの恰好で、足どりも軽く台上に立つ。だが残念にも殺す方でも人間の首を斬るとは思っていないのだ。ごく無造作に、葉巻の先をハサミで切るように、チョキンと片付けられてしまった。

親友佐出須登の作品中、ギロチン処刑をまとめると以上ようになります。私は私なりに考えたものもありますが、まず実話からひろってみましょう。

☆

日本代表としてはまず夜嵐お絹こと原田キヌ。明治四年九月に二十七才の若さで、大勢の見物人を前に一刀のもとに首を打ちおとされ、小塚原刑場の獄門台に梟け晒しものとなっていてます。割におちついた最後といわれませんが、辞世となった「夜嵐の……」の句は彼女の作ではないそうです。

その晒し首をみた人によつては、「京人形を思わせる程美しい」とも、「そうとびつく程ではない」ともいわれています。勿論私は前者の説を採用しています。いずれにせよ

獄門に梟けられた最後の女性として名を残しました。

一方彼女と並ぶ高橋お伝は、明治十二年一月三十日に斬首されています。ところで獄門が廃止になったのは、その年の一月四日で、わずかの差で晒し首はまぬがれ、しかも処刑は監獄内で執行されたので、一般人は見ることができませんでした。

彼女はときに二十九才。自分の前に殺されるのがガタガタふるえているのをみて、「臆病ねえ」と冷笑していましたが、いざ自分の番となると、目は吊りあがり、うわずった声で悲鳴をあげてあばれまわりました。

そのため、首が一度でおちず、三度目には遂に押し倒して刃を直接頸にあて、無理矢理ネジ切った話は御承知でしょう。

これだけならまだしも、首なし死体は解剖にせられ、性器をえぐりとられてアルコール漬になり、東大医学部に送られました。

以後終戦の年まで六十五年間も多くの目にふれたことは、お絹の晒し首三日間とは比べにならぬ話です。現在は警察大学に保存されており、世界にもこれ以上の晒しはあまりないようです。

明治十五年からは、死刑は絞首刑のみとさ

れ、お伝の名は最後の斬首女性として後世に残ることでしょう。

☆

英国にはヘンリー八世という話せる王様がおりました。美女の生首が何よりも好きというのです。

さしたる罪がなくとも、女官侍女の首はいつ胴をはなれるかわからず、彼女たちは毎日出仕する前に親子姉妹恋人と別れの水盃をする有様。王はまた王で、毎晩伽にくる美女に對し

「余が望みさえすれば、いつでもそなたの美しい首をコロリと落せるのじゃ」とささやきました。これこそ本当の「殺し文句」でしょう。

とにかく王妃でさえも二人が死刑になり、貴族に属するものが七人というのです。

アン・ボレーン王妃の場合は、姦通罪が表面の理由ですが、笑い声で王の氣にさわったのが真相ともいいます。首斬り役人の腕がよすぎて、王の前に運ばれてきた生首には、少しの苦悶の色もみられず、王は不満をもらしたとか。

カサリン・ハワード妃の如きは、処刑前日独房のなかに斧と首斬台をもちこんで、役人

を相手に念いなりハールを行いました。恐怖にふるえる姿をゆっくり観賞し楽しんだ恐るべきサディスト。とんでもないところに嫁にきたと、さぞかし彼女は後悔したことでしょう。

それでも練習の甲斐あって、翌日の処刑では彼女の首もまた一撃でおちました。せめてものなぐさめです。

英国死刑史上、最も悲惨な最期をとげたといわれるのは、反逆罪で殺されたサルスベリ伯爵夫人です。

彼女は絶世の美女で、どうしても王の意に従がわなかったためこの運命となりました。

一時は刑吏の手からのがれ

“助けて！ 死ぬのはいや！”

と叫びつつ、ロンドン塔内を逃げまわりましたが、遂に力つきて倒れたところバツサリ首をおとされました。

その首は十数米も血を噴きながら孤を描いてふっとび、フサフサした髪の毛が木の枝にひっかかって、首は恨みに燃えた目を刑吏の方にむけながら、ブランブランとゆれていました。

今でもロンドン塔を訪れると非業の最期をとげた美女たちの呪がたちこめ、鬼気迫るものがあるそうです。

十八才の若さで死んだジェーン・ガレイ姫もそのひとり。

“世界で最も美しく、最もかっこいい”といわれた彼女の首が、ふりおろす斧と共にむなしくおちてしまう。しかし彼女の頸骨は意外に固く、斧の刃が欠けたことが記載されています。

いかなる美女、王妃王女であっても、首がおちてしまえばただの物体と化し、無造作に袋につめて穴にほうりこむ。これはちよっとひどい話ですが、その極端なのはやはりフランス革命でしょう。

☆

わたしはバスにひとりながら、うっとり自分の身体をみつめていた。宮廷随一といわれている二十八才のみずみずしい肉体。王女として生れ、王妃の親友という地位は、革命さえなかったら、どんなに楽しい毎を送れたろう。それが、いつ首をとられるかわからぬことになろうとは……。

突然侍女キティのけたたましい叫び声。わたしははっとして立ちあがった。ドアが破れんばかりにたたかれている。狂暴化した市民の襲撃か。遂におそるべきものがやってきたのだ。

わたしはバスタオル一枚だけをつかみ、窓から飛びだした。同時にドアが破れ、どっと群衆がなだれこむ。一瞬ふりてかえったわたしの目にとびこんだのは、バスに投げこまれた若い女、わたしに最も忠実だった侍女サティの生首ではないか。

侍女でさえ首を斬られる、まして、わたしが無事ですむ筈はない。わたしは必死で逃げまわったが、後方にも多勢の群衆が立ちふさがっている。もうだめだ、わたしは殺されるのだ。しかも全裸という、女性として最も恥ずかしい姿で。

“ギロチンにかけられるのは、もうのがれられぬ。だがせめて身につけるものだけは許してもらおう”

そう願おうとしたわたしは、たちまち、四方からとびかかる群衆のために、おし倒された。

“ここで首をとるつもりなのか”

わたしはあきらめて目をつぶった。しかし刃のおちたのは首すじでなく、わたしの下腹であったのだ。

わたしは悲鳴をあげた。けんめいにもがこうとしても、四肢を固くおさえられては、どうにもならぬ。そのうちにも鋭い、非情の

刃はわたしの下腹を十文字に切り裂き、なにかつかみだしている。

わたしはある革命指導者が、王妃の心臓と肝臓をシチューにして食うことを公約したのを思いだした。わたしもそうになってしまうのだろうか。

「この女は王妃の親友だ。生首を槍先につきさして見せてやろう」

誰かの声が聞える。

わたしの目に、ズタズタに切りさいなまれた無惨な自分の姿が浮んできた。群衆の行進する先頭にかかげられているのは、わたしの生首だ。そのあとを、まっぴだかの胴体が足でもって引きづられ、心臓や肝臓がやきどりのように槍に刺されている……。

「いやだ、いやだ」

わたしは必死で叫んだ。

△伝言板▽○東浦かおる様、さきの通信で電話番号並に連絡場所をお知らせ下さる旨附記してありましたが、用件がありますので至急御連絡下さい。○原由貴子様、返送を求められました下絵は、杉原虹児氏の手元へ回してありましたため、お返し出来ませんでした。悪しからず御諒承下さい。

「さ、早く首掻いて、楽にさせて！」

しかし、次に刃のくだされたのは、わたしの乳房であった。

ザクリ、ザクリ、

それから数時間して、ようやく死という救いがやってきた。

☆

ランバル夫人の無惨な最期は、わたしの最も興味をひくもので、デユマ、ツワイクを始め無名の作家にいたるまで七冊ばかり読みました。

「四肢を切断された」あとで、「全裸の死体の足首を引きずって」とある不思議な本もありましたが、いずれにせよ前代未聞のやり方で惨殺されたことは事実です。

串刺しにされた親友の生首をみつめ、きつと群衆に相対した王妃。そのあとから一糸まとわぬ胴体が、最後に串刺しの内臓がぐいとつきだされる。

さすがの王妃も、この内臓がなんであるかを、はっきり認めたたん、気絶したと伝えられます。女性にとってこれ以上惨酷な、恐ろしいものはなかったからでしょう。

貴婦人たちの生首には賞金がかかって、ランバル夫人の場合、自分が首を斬ったとか、

自分が首を持っていたと称するのが、各々十人以上もあらわれたそうです。

彼女の生首は人形師のところに送られ、蠟人形になりました。この女主人は彼女とは顔なじみ、あまりにも変りてた姿にさめざめと泣きました。

フランス革命では実に多くの女性が死んでいます。そのうちでも雄々しい最期とたたえられるのが、マリー・アントワネット。ローラン夫人。シャルロット・コルデーです。

二十五才の処女シャルロット嬢の生首が、一説にはアルコール漬に、または剥製となつて残された話。首がおちたとき、マラー派の刑吏が荒々しくひつつかみ、その頬をはげしく打ったところ、さつと顔が紅潮した話があります。

死体解剖の結果、処女であることが確認されたところ、そんな馬鹿なことがあるかと怒りわめいた詩人。彼女をたたえすぎて自らもギロチンにかけられたアダム・ルックスの話は御存知ですか。

これら女性たちは、すべて雄々しく死んでいったとされるなか、ただ一人の例外はドバリー夫人です。なんでもあばれすぎて顔が斜めに斬れ、二度目でやっと頸部から斬りはな

したとか。

首を斬られた女性はまだまだあります。エリザベス女王との戦に敗れ、王侯貴族の見守るにか三度目の斧で、やっと首のおちたメリ・スチュアート。首と胴と別々に火で焼かれ。灰としてまきちらされたブランブリエ夫人。ナチスに反抗した十八才の女子学生ゾフィー嬢など。

一九三七年。二十八才で死んだマルタ・ローエンスタインは、ウィーンの鬼女とまでいわれていますが、それにしては、あまりにも若く美しい女性でした。もしナチスの進駐がもう一年おそかったら、彼女は五年位の刑ですんだでしょうに、非情の裁判官は容赦なく斬首の死刑を宣告したのです。

普通のギロチンなら、斧が上から落ちるの、その重量だけでも確実に斬れます。しかし彼女の処刑に用いたものは、首をつきだした両側から、刃がバネ仕掛でとびだしてチョン斬るものでした。もしやりそこなったら、もう一度バネをもどさねばならず、再度の執行まで三十分は血まみれのまま放置されるところでした。

幸い、一度で首は冷雨ふるなか前におちました。

ベアトリス・チェンチは十六才とも二十才ともいわれますが、美人だったことは明らかで、彼女の斬りたての生首を吊台にのせ引きあげる時、どうしたことか台が傾むいて、首はコロコロ地上をころがった話。

また一説にはコメカミをハンマーで撲って気絶させてから首を斬り、更に四肢を切断して刑場の四隅に吊したという説があります。いずれにせよ、この美少女の死体は晒しものになったのですが、その前は群衆で引きもきらなかったそうです。

☆

わたしは断頭台上に、あおむけにねかされた。重さ六十キロ、幅八十センチの巨大な刃は、わたしの頭上二メートル二十センチの高さに輝いている。

わたしは目を大きくみひらいて、その恐ろしい刃がわたしの首すじにキスしようと、舌なめずりしているのをみつめた。

「グワァン！」

わたしの首は一瞬にして胴体からはなれ宙をとんだ。地上が空が、ぐるりとひっくりかえるのを感じたが、そのままわたしの首は血を噴きだしながら孤を画いて、バスケットのなかにころがりこむ。

サンソンはわたしの首をわしずかみにすると、血の滴るのもかまわず例の如く高々とかげた。多勢の見物人の顔、顔、顔が、こちらをむいている。

「眼瞼をみる、まだピクピク動いているぜ」
こんな声も聞えてきた。

一方わたしの胴体はとみると、台上にあおむけのままグッタリと横たわっている。両脚をこころもちひろげてのぼし、両手は脇にダラリとたれたまま……。

サンソンが足をあげてけとばすと、わたしの胴体は一回転して地上におちた。助手が二人で抱きかかえ、小さい手押車のなかに頭を下にしてポンとほうりこむ。はみでた二本の脚がピンと上をむいている間に、血の滴るままのわたし首が投げこまれる。

わたしは死刑に処せられ首を斬られた。首だけになったわたしには、もはや何の感情も苦痛も感じない。これが死というものだろうか。

やがてわたしの眼の前に、すーうっともやのようなものがかかり、それは次第に濃く、すべてが暗黒のなかに消えてゆく。

それは丁度、夢の中であがく手足の動きのように、さだかではなかった。

奴^ど隷^{れい}

(マゾ小説)

読者原稿

人 伏 平

序 章

「岸上君、今日は高速道路を行ってくれたまえ」

いつもより三十分も早く家を出た私は、いらいらしながら運転手に命じるのでした。何か急用があると察した運転手は、グッと車のスピードを増しました。後部シートのクッションに深々と身体を沈ませた私は……（何と云う、うっかり者だ!!）……思わず舌打ちをするのでした。

昨日、愛読して居るK誌の通信販売で入手したマゾ写真を、うっかりして、会社の自室の机の上に置き忘れて来た私は、少くとも女秘書の出社前に鍵のかかるロッカーにしまわなければならぬのです。若し、秘書にあれを見られたらどうしよう……何と云ってごまかそう……あれこれと想いをめぐらして居るうちに、車は事務所のある、Tビルの玄関に横づけになりました。運転手がドアを開けるのもどかしく、私は車を降りると、足早やにビルの中に消えるのでした。

丁度九時五分钟前、私は社長室のドアを開けました。何時もより一時間も早い、私の出社

に、何事かと、いぶかしげに見入る社員達の眼も、私の念頭にはありませんでした。

秘書の太田かおるが、まだ出社して居ないのを確めた私は、思わず、ホッとためいきをつくと、早速机上のダイアリーの間にはさみ込んで置いたマゾ写真を確認する為、手に取ったのです……。

アア、一体どうしたのでしょうか。昨日確かに挟んだ筈のマゾ写真が、影も形もないのです。私は、机の抽出を、かたっぱしから開けて見ました。だが、何処にもそれは見当らないのです。真青になった私は、椅子に腰を落とすと、ジッと目を閉じて、考え込んでしまったのです。日頃少壮実業家として、一応は社会的にも認められ、社内に於ても、青年社長として人望を集めて居るはずの私が、マゾ写真を、ひそかに眺め、一人マゾの世界を夢見て居る変態性慾者だと云う事が、若しも社員の方達に知れ渡ったら……。

私は、次から次へ想いを走らせると、居ても立ってもいられない気持になるのです。そうだ!! 秘書の太田かおるが持って居るのでは……。若しそうだったら、何とか、うまく話をして、絶対に秘密がもれない様にしなければ……。

「社長、お茶をどうぞ」

秘書の太田かおるの澄んだ声に私は我にかえりました。

「遅くなって申し訳けございません。こんなに社長さんが早く来られるとは存じませんでしたので——」

太田かおるは、本当にすまなそうに云うのでした。少くとも、あのマゾ写真を見た女性の顔ではありません。私は又不安が強くなってきたのでした。一体、誰が持って行ったのだろう。とうとう思いあまって秘書に問いたです決心をした私は、部屋の隅にある太田かおるのテーブルを見るのでした。その私の視線をさえぎる様に、太田かおるが立って居りました。

「社長、こんなものを会社にお持ちになってはいけませんわ」

秘書は平然とした表情で、こう云うと、あのマゾ写真を、わざわざ表向きにして、私の机の上に置くのでした。一番上に乗っていた写真が私の目に入ると、はずかしさに、顔の赤くなるのを、どうする事も出来ませんでした。犬の首輪をつけて、女王様に鎖りを引かれた、あわれな男が、裸で四ッ這になっているものです。恥かしさで赤面すると同時に、

私は、マゾヒストとして此の様なチャンスのがしてなるものかと云う勇気が、心の中に大きく芽生えて来るのを、どうする事も出来なくなってきたのです。私の理想に合った、五尺三寸、十四貫位はある。ポリュームたっぷりの身体に、美しいが、やや、けんのある顔立ちの、太田かおるを見てみると、私は、とうとう理性の限界を越えざるを得なくなっていました。だが……

「太田さん、あなたは、この写真を見てどう感じます。実は、昨日友人から、面白いものを見せてやると云われて、何の気なしに持ってきたんだけど……世の中には、変な男も居るものだね」

「……………」

「僕には用がないから、破って、捨ててくれたまえ」

私は、自分の気持と全然、反対の言葉が出て来るのを、どうする事も出来ませんでした。……馬鹿者、なぜ、すなおに云わないんだ……。もう一つの心が私を責め立てるので。過大な理性ほど、不幸なものはないと、私は此れほど強く感じた事はありませんでした。

「かしこまりました」

私の気持とは、おかまいなしに、太田かおるは、其の写真を、ズタズタに破ると、屑かごの中へ投げ捨てるのでした。

二

次の日の朝、何時もの時間に出社した私はフト、机の上に、真白い封筒が置いのあるのに気がつきました。又バーの請求書か位に思つて封を切った私は思わず、頭の血が、全部抜き取られた様な気持で、心臓だけが、はげしく脈打って来るのでした。

それは、太田かおるの書いた手紙でした。

そう云えば、今日は、まだ出社して居ない様です。

平伏人ノ お前は、なんと云う、だらしの無い、情ない男なのノ お前が、あのマゾ写真を、わざわざ机の上に置いて帰ったのは、私に見てもらいたかったからではなかったの。私は、お前が、マゾヒストだと云う事位、ずっと前から知って居たわ。私の目を盗んで私の鼻紙を、クチャクチャ口の中で、かんで見たり。もう、そろそろ決心して、私の足下にひざまづくころだと思つて居たのに、何さノ 昨日のさまは、あれでも男かいノ

私は、白状するよ、私は女サジストだよ。

それも、お前の趣味に合う様な男を、思いきり辱めたい希望を持って居る女王様だよ。

女の私が、此れだけ云ったのだから、お前も素直に、自分の気持を云ったらどうだい。今日は、会社は休むから、若し、お前が決心をし、私の思つて居る様な男だったら、今晚六時に電話をしなさい。そして、明日からお前が関西へ出張する間、私と一緒に、お前はお供をして来るんだよ。

太田かおる

平伏人へ

私は、あまりの嬉しさに、胸の高鳴るのをどうしようもありませんでした。

三

万事太田かおるとの話合のすんだ私は、超特急ヒカリ号のシートに、二人で並んですわりました。……

大阪で、Gホテルの特別室に落ちついた二人は、早速、早めの昼食を取るのです。

「社長、今日中に、仕事は全部すませて、明日から、三日間は、いよいよ私の奴隷になるのよ、よくって」

かおる様（もう様をつけて呼ばなければならぬと思います）は、えん然と笑うのでし

た。一日中走り廻って、仕事をすませた私は急いでGホテルへ戻りました。

部屋へ入った私を、かおる様はやさしく迎えてくれました。

「社長、お疲れでしょう。早く、シャワーを浴びて居らっしゃい」

私は、あまりに親切な、かおる様のお言葉に、一寸とまどいながら、シャワー室へ入るのでした。一日の汗をすっかり流して、サッパリとした私は、腰にタオルをまいたまま出て来ると

「太田さん、夕食はどうしますか？」

と尋ねました。東京から持参したガウンをお召しになったまま、ソファアに腰をおろして居られたかおる様は、私の言葉を聞くと、スックと立ち上って、

「バカヤローノ 奴隷の分在で、その言葉使いは何です。さっさと、裸になって、此れを身体に着けるんだよノ」

と、おつしやると、私の足下に、黒い革製の紐の様なものを投げるのでした。

私が、その革紐を腰にはめると、丁度、褌をした様な姿になりました。そして、その革紐には、白ペンキで、奴隷と、鮮やかに書かれてあるのです。革褌が、腰や股間を強く締

めつけて、何とも云えない感情が身体中を走るのでした。

「早く、四ッ這いにおなり」

かおる様の叱声が飛びます。私は、急いで床の上に、四ッ這いになりました。

四ッ這いの私の前に、かおる様は、立ちはだかります。黒のストッキングに、黒のハイヒール、黒の小さいパンティーを着けたのみのお姿で、手に、よくしなう革鞭をお持ちになったままで、私を見下します。

「マゾのお前を、今から私の奴隷として飼ってやるから、有難くお礼を申し上げなさい」
かおる様は、おごそかに申し渡されます。

「かおる女王様、平伏人は、唯今から、貴女様の賤しい奴隷として、飼っていただける事を、心からお礼を申し上げます。」

あわれな、そして幸福な男である平伏人は、うやうやしく言上上げるのでした。再びソファーに戻られたかおる様は、

「奴隷、此処迄這っておいで！」

と、お命じになります。あわれな姿で、かおる様の足下迄這って行った私の背中に、美しい、ボリウムのある脚を、お乗せになったまま、

「今から、お前の奴隷としての誓約書を渡す

から、良く読んで、血で署名するんだよ。若し、いやだったら、今すぐ解約して東京へお帰り。」

と、おつしやいます。私はうやうやしく、その誓約書なるものを手にとりました。

「声を出して読むんだよ。」

御命令通り、私は、四ッ這いのまま、読み始めました。

誓約書

私、変態性マゾヒストたる、平伏人は、只今から、太田かおる様を、尊き女王様とあがめ奉り、奴隷として、お仕え申上げる事を誓約致します。

尚、女王様の下し置かれる、左記の各御命令及び、条項を了承の上、血にて署名し、此処に誓約の証と致します。

記

一、奴隷は直ちに住居を変え、女王様と共に生活する事

一、奴隷は、女王様の生活に要する費用一切を負担する事

一、女王様との住居を新しく定め、奴隷の調教に必要な、諸設備をととのえる事

一、社会生活は、特別の御慈悲を以て、従来通り行う事

一、奴隷より、其の身分の解約を申し出る事は出来ない。但し、女王様より申出た場合は、直ちに、相互の関係を解く事。

其の場合、この住居と、金二百万円也を奴隷は、女王様に対し、お礼として差上げる事

一、女王様は、特別の御慈悲を以て、奴隷の身体に、重大な傷を与える事は行わない。

右各条項を基本として、具体的には左の各条を申し渡す。

一、奴隷は、特別の命令なき場合は、常に全裸にて、奴隷用革褌を着用の事

一、奴隷は、特別の用なき場合は、常に四ッ足にて立ち、みだりに、二本足にて立つ事は出来ない。

一、奴隷は、許可なく、女王様の傍らに近よってはならない。用なき場合は、特別製犬小屋に入り、常に御命令を待つ事

一、奴隷は、女王様より、常に遅く寝につき常に早く起床する事

一、奴隷は、台所仕事、掃除等すべて行う

事

一、奴隷は、特別の許可なき場合は、常に手枷、足枷を着ける事、此の場合、通常は、鎖の長さは、三〇糎とし、日常の労役に差しつかえない様に配慮される。

一、鼻輪を装着するのに便利な様に、鼻腔内に、穴を作る事

一、奴隷は、御命令ある場合は、犬・馬と

☆男性モデル募集☆

○左記要項にて「男性モデル」を募集いたします。○年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）など記載の上お申込み下さい。○当方の求めているものは、禪美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装などです。○口絵には掲載しません。○分譲写真として可能の方。○日曜祭日を除く昼間（10時から20時）出演可能の方。○時間の都合上、京阪神奈良和歌山在住の方を望みます。○お申込次第、撮影の日時場所など、お知らせします。

（編集部）

して、家畜となる事。此の場合、いささかも、人間たる事を思わせない様、充分に自ら訓練する事

一、奴隷は、家畜となる場合、アノスに特別製の尻尾を、そう入する事

一、其の他奴隷は、一個の道具として扱われる事

一、奴隷は、女王様の御慈悲を以て、残飯を下し置かれるが、飲料水は、特別の場合を除き、常に、女王様のネクタールを与えられる事

一、奴隷は、女王様の便器として、御使用される光榮を与えられる事

右、各条項に違反した場合、及び、女王様の一方的意志により、奴隷は左記の等級に従い罰を受ける事。

罰一等 全裸にて鞭打、鞭打の回数は女王様が適当に定める。

罰二等 全裸、緊縛にて鞭打。

罰三等 全裸緊縛にて、屋内に放置する。此の時間は、女王様が適当に定める。

罰四等 全裸緊縛にて、屋外に放置する。他は右に同じ。

罰五等 一昼夜の断食、但し、此の場合、女王様の排泄物のみが与えられる。

右各条項を、心より喜んでお受け申し上げます。

奴隷 平 伏人

太田かおる女王様

何度か、とぎれ勝ちになりながら、私は、中ば、夢見る様な気持で読み終わりました。

「伏人、お前、この誓約書に署名出来る？」かおる様は申されます。

「ハイ、喜んで署名させていただきます」

私は、すべてを捨てて、尊いかおる女王様にお仕えする決心をしたのでした。

（つづく）

（追伸）

次回より、二人の新しい、生活を、出来るだけ詳しく、書きたいと存じます。

そこには社長の位置から転落して、一匹の奴隷として、女の前に屈伏する男と、秘書から女王の位置に変身する女の生態が描かれる筈です。

或る医師の診療メモより

☆ 虫垂炎手術記 ☆

津山 茂夫

☆

患者 畑山左知子

年令 二十一才

職業 女子大学生

☆

月曜日の朝、

いつものことながら、月曜日は外来患者がたてこむ。昨日の日曜は医師会のドライブで逆瀬川から仁川へ出て甲山の頂上まで歩いたので、いささか腓がいたむ。

「次の方、どうぞ」

という看護婦の声に、一人の女性患者が入ってきた。身長一メートル六〇センチ、体重

五五キロぐらいの色白、中肉中背。

服装は白のブラウスに黒のタイツという女子大生の標準スタイルである。

冷たい顔立ち、こういう女性を所謂お高くとまっている、というのだろうか。一見インテリ風という表現がぴったり。

知人の内科専門医からの紹介で、急性虫垂炎の疑いということで、一時間前に電話があったが、その患者らしい。

「どうぞお掛け下さい」

型通り回転椅子に座らせる。

「いつから痛みましたか？」

「昨夜からです」

「嘔吐しましたか？」

「三回ほどしました」

「熱は？」

「今朝は三八度ぐらいでした」

「便通は？」

「昨日より便秘しています」

「生理は順調ですか？」

「はい」

学生らしくハキハキした答えぶりである。

大きな瞳をまばたきもせず話す様子は、ちょっと近寄り難い感じである。

検温――。

三八度三分。

「では胸の方を拝見しますから、上半身をお脱ぎ下さい」

彼女は何のためらいもなく、白いブラウスを脱いだ。その下は薄いブルーのスリッパ。一瞬、こちらの視線に注意を向けながら、肩よりスリッパを脱ぎ、ついでピンク色の胸をちらつかせながら、ぴっちりしめつけたブラジャーのホックをはずす。

乳房は良く発育し、はりきった円錐状を呈し、桃色の乳頭が細くふるえている。

胸部並に背部の打聴診――。

異常なし。

「では、お腹を見せていただきますから、向うのベッドへ寝て下さい」

ブルーのスリッパを更に下までさげ、タイトのチャックをゆるめさす。触診を行うが、腹壁は少し硬い感じで、やはり緊張している様子である。局所所見は急性虫垂炎の定型的所見を呈する。

「もう少しよく診るために、肛門から触診を行いますから、腹這いになって膝を曲げ、手を前について下さい」

そう言われると、彼女は瞬間、顔面を硬くし、心持ち頬を染めたが、意を決したようにふらふらと立ち上り、タイトスカートのチャックに手をかける。スカートを脱いでスリッパを膝まで下げさせる。

その下には、うすいナイロンのピンク色のパンティである。可愛いレース編の飾りがついている。豊満な大腿部にピタリはりついた様になり白い肌が透視出来る。

「はい、そのまま膝を曲げ、手を前について下さい」

もう彼女は全身真赤である。汗腺の一つ一つより汗が噴きでているに違いない。

高くつき出している臀部より、はぎ取るようにして一気に膝までパンティを下げる。

「ああ……」

彼女は言葉にならない声を出す。

「口を開けて、お腹の力を抜いて下さい」

ゆっくり指袋を人差し指にはめ、ワセリンをつける。

彼女の固く閉じた瞳から、一筋、二筋、真珠のような涙が流れる。

「では結構です。拝見しましたところ、炎症はまだ広がっていませんが、やはり手術した方が良いと思います。入院して下さい」

まだ大きく息をはずませ、赤く頬をほてらせて服を着ながら無言でいる。

「分かりましたね？」

「はい」

術前処置――。

一、絶食

二、グリセリン浣腸一〇〇CC

三、下腹部から会陰部にかけ剃毛清拭

四、下着は新しい清潔なものに替えておくこと。

約二時間後、手術室に入る。逆性石鹼液にて両前腕を十分間洗う。手術着を着てから患者を入室さす。

彼女は直腸診、浣腸と大分精神的にもショックであったのか、大きな瞳がうれいを秘め

顔面には元気がない。

「それでは、着ているものを全部脱いで、手術台にあがって下さい」

彼女は目を閉じ、ふるえる手でブラウス、タイトスカートを、スリッパ、ブラジャーをはずす。最後に真新しいブルーのナイロン・パンティが残る。

「それも脱いで下さい」

両手で顔面をおおいながら、全身を再び真赤にし、ふるえながら手術台の冷たいレザーの上に横になる。

腰椎麻酔施行――。

「右を下にして両膝を手でかかえて下さい。眼を開いて、お臍を見るようにして下さい」
麻酔施行後、再び体を上に向けさせ、両手を頭の上に組ませる。

「もうこれで痛くありませんよ。すぐ終わりますからね」

コンプレッセンを腹部にかけ
「メス、ペアン……」

約二十分にて終了。

術後二日目、肛門より排気あり。
四日目より普通食。
七日目に退院す。

舞台につづく遊戯

柴里雷九



白根裕子は「ミュージック・ホール・トウキョウ」の踊り子として、「リニー・白川」となっていた。

或る冬、この劇場では「白い奴隷」と題する一幕をプログラムに組んだ。

それは三人の踊り子が女奴隷に扮し、

「この三人の女奴隷は主人の命令は何でも聞きます。今日は御来場のお客様方がご主人という訳です。どうか存分にいじめてやって下さい。なるべく変った縛り方で女奴隷を喜ばせてやって下さい。もし、縛られるのをいやがって逃げるようなことがあったら、私が鞭

で打ってやりましょう。お客様の手練を期待します」というような解説と共に、各人十米ロープを持って登場し、ロープを使った踊りを少々踊ったのち、客席に降りて、観客に縛らせるという趣向であった。

◇

楽屋では、誰がこの女奴隷三人に選ばれるかと、色々うわさされたが、リニーを含む若手三人が決った。

キャストイングが決ってから、演出家山田修造は、この「白い奴隷」に出るリニー達三人に、ことに熱心な指導をし、深夜におよぶ

稽古でも、実際に縛ってみて、体の動かし方などに何回もダメを出した。

リニーは、この一幕に出るよう言われてから、深夜の稽古を通じて、初日が開くまで、だんだん不安がつわっていった。

今までも、舞台で縛られたことはあったが、それは、ほとんど手首に縄を巻き、縄尻を自分で持っていて、いつでもほどけるといいうしろものであった。

◇

「すごいお客が来て、痛く縛られはしないかしら？」

「体に縄を巻かれ、変ないたずらをされはしないかしら？」

「縄で、本当に縛られたら、体に傷がつきはしないかしら？」

リニーだとて、関東地方のT県から、都会の生活にあこがれて、高校中退で単身上京し、生活のため、リニーと同年輩の娘としては比載的高給がとれるという目的だけで裸になったのではなかった。

愛くるしい大きな瞳、発達した乳房を多くの他人に見せたい。見られたいという、自分では意識しない程度の露出症的傾向がなかったといえない。

しかし、はじめは、自分の裸身を見せたいという気持はあっても、恥かしさが先に立って、とまどったこともしばしばだった。

ストリップパーになって一年半以上、今では踊りも大分上達したし、観客の反応を確める余裕も出てきていた。

「白い奴隷」を演じるについても、この一年半の経験から、或る程度のことは予想し、覚悟はしていた。しかし、この劇場が所謂、

『山の手人種』サラリーマンや学生の観客が多いことからか、初日から心配していたこともなく、かえって、客席へおり、ロープを差

出し、両手を背中に組むと、テレや恥らいから、下を向いてしまったり、目をつぶってソップを向いてしまう観客にいかにも縛らせ、演出効果をあげさせるかに困る程だった。

たとえ、縛ったとしても、ゆるく手首を巻き、十米という長いロープをもてあまし、ドラドラと胴に巻きつけ、なお余ったロープは床をひきずるなどということが、しばしばだった。

そんなわけで、リニー達三人は、楽屋で、出を待って雑談するとき、世の男性の気の弱さや、消極性、たよりなさなどを話題にし、リニーと一緒に縛られ役をやっている他の二人は、リニーより一つ二つ年長のこともあったか、その縛り方が物足りない、などとも言いがたりしていた。



リニーも、初日から七日目の一回目のステージまで、一日三回、計十九回の舞台では、時々、「ちよっと痛いかな」と感ずるぐらいで、初日前の不安も、どこかへとんでしまっていた。

ところが、七日目、第二回目のステージで全く思いがけなく手痛い目にあわされた。前から三列目、通路脇の席に、冬だという

のにチャックをはずした皮ジャンパーの下はシャツ一枚、眉が濃く、鼻が高く、唇の薄い精悍な風貌の若い男が居るのに気付いたリニーは「白い奴隷」の時、その男の所へ行つて、ロープを差出し、両手を後にまわして、「ねえ、縛って下さらない。でないと私、叱られちゃうの」と甘い声で誘ってみた。

すると、男は大きく頷いて、「よし！じゃあ、両手を前に組みな」と言った。

そのブッキラボウな言い方は、少々面白くなかったが、リニーは言われたとおりに、すらりと伸びた形のよい両腕を彼の前に差し出した。

それからが大変だった。

リニーは男に命ぜられるままに、前をむかされたり、後をむかされたり、中腰にさせられたり、いいように弄ばれてしまった。

男は十米ロープを、二つ折りにし、その折ったところで、リニーの前に合された手首を思い切って強く縛った。

それは、思わず「いたいッ！」と声が出る程の強さだった。

ついで、ロープは両方の、脚の間を通された。

「いや、いや！ やめて！」

パンティー一つのリニーは恥かしさで、顔に血がのぼり、思わず叫んで、後ずさったが、男はリニーの思いなどにおかまいなく、次々とロープをさばいていった。

股間を通されたロープは背中をつたわり、首の近くまでひきしぼられ、そこで一つ結び目がつくられた。そして、さらに一本ずつ首の両脇をまわして、胸の方へひっぱり、乳房の上、下、臍の所と三つの結び目がつくられ一つになった手首の上を、一本ずつ胴を交互にまわして、きつく縛りとめられた。

多数の男ばかりの観客の強い視線の中で縛られるリニーは、驚いているひまもなく、ただ夢中で立って、男のいいなりになっていたが、観客や、仲間のストリップパー、コメディアン、さらに裏方など、皆、あっけにとられて、なりゆきを見守るばかりだった。

男はさらに続けてリニーを縛った。

結び目を利用して、乳房を中心に菱形を二つ作り、胸に揃っている二の腕にからませ、その腕の下に、おしつぶされている乳房をひっぱり出した。

ピョコンと腕の下から顔を出した乳首に男の手が触れたとき、リニーはすでに、きつく

縛られて不自由な体をもんで避けようとしたが駄目だった。

それでも、やっと

「ねえ、ゆるして、お願い」

とだけ言った。

「白い奴隷」に予定された時間は、とくに過ぎていたが、ニヤニヤしたり、

「兄さん、泣かせるなよ！」

「女のうらみを知ってるのか！」

などと声を掛けて喜んでいる観客を裏切って、次のプログラムに進むことも出来ず、舞台裏では進行係が気をもんでいた。

リニーは、どうにも自分の身の置き場がないようで、体をしめつけるロープの痛さとともに、本当に泣き出したくらいだった。

そして、衆人環視の中で「女をなるべく変った縛り方で縛れ」という劇場側の注文を堂々と実行する、この若い男の得体の知れない神経に恐怖を覚えると同時に、何かひきつけられるものを感じ出しているのだった。

それは、弱い者が、強い者にひきつけられるという自然の法則に従っている動物的本能であったかも知れない。

ロープの最後は膝の上を縛った。
十米のロープを十分に使いきった男は、リ

ニーの背をポンとたたいた。

すでに相当の時間がたっていて、暖房があるといっても劇場の中は、客席のコンクリートの床からしのびよる冷気と、所謂、楽屋風と称する冷風でひえきり、リニーの全身は鳥肌立ち、青ざめていた。

ハッとして我にかえり、簡単な縛りで間をもてあまし、舞台上で音楽に合わせて、勝手に踊っている二人の仲間のところへ帰るため。歩きだしたりリニーは、膝の上を縛られているので、ヨチヨチ歩きしかできず、舞台への階段は、たった四段ではあったが、腰を振り、ぎゅうぎゅう虐られた上半身をくねらせてバランスをとらねばならず、その様子に、ドッと笑い出した観客の目を背中に受け、そのなさけなさ、恥かしさに、一年半のキャリアもどこへやら、気も顛倒せんばかりであった。

やっと舞台にたどりつくと、二人の先輩踊り子は

「気分はどう？」

など小声でなぐさめともひやかしともつかぬことをいった。

台本では、三人が縛られたまま「苦悶の踊り」を踊ることになっていたが、時間がなかったためか、リニーの異状な縛られ方に同情

して気をきかしたのか、三人が舞台に揃うとすぐ、音楽はやみ、照明は溶暗になり、幕が下ろされた。

すると、次の出番の人をのぞいて、殆んどの踊り子とコメディアンなどが楽屋のリニの周囲に集り、早速、ロープをほどこにかかり、いろいろと感想をもとめてきた。

楽屋に帰って、やっと落着きを取り戻したリニは、集って来た連中が黙って縛られていた自分を小馬鹿にし、あざけて、何かノーマルでないものを見るような眼つきをしているように感じ、その上、ロープはなかなかほどけず、イライラしてきて、思わず声を荒立ててしまった。

「リニ、だいじょうぶ？」

「早くほどいてよ！ 体にアザが残っちゃうでしょう！」

そばで、この様子を見ていた戦争中、海軍にいたというコメディアンは

「こいつあ、船乗りのロープさばきだ。リニ、しまりがいいだろう」といった。

「何よ！ 人の気も知らないで！」

リニがイライラと体を動かすので、ロープは益々ほどけなくなり、ついに鉄が入れた。

ロープがズタズタになって床に落ちたときリニの裸の上半身には、ロープのあとが赤紫色にくっきりと彫られていた。

仲間の踊り子の一人は、そんなリニの体を熱いタオルで包み、全身を揉んでくれた。

暖かいタオルの感触と強い縛しめからの開放感に、リニはあらためて、自分を縛った精悍な若者の容姿を思い浮かべていた。

「あの人、ひどい人、だけど、ちよつと素敵！」

「まだ若そうだけど、何をしている人かしら？ 本当に船乗りなのかしら……」

「ストリップを見に来るようで、恋人はおるかしら……」

リニは思わず微笑んでしまった。

「どうしたの、ニヤニヤして」

「いかれちゃったんでしよう、あの人に」

「いやだよ、この娘は。『あの人になら、もう一度、縛られてみたい』っていうような顔をしてさ」

「ああーあ、しびれちゃった」

仲間のひやかしを、体を揉まれながら聞くともなしに聞いていたリニは、この言葉にギクンとした。

『もう一度、縛られたい』という言葉で「恥

かしい」と感ずるということは……。

◇

その晩、リニは、本名の白根裕子に戻って、ベッドの中でハッキリとロープのアトを残す体を抱いて、一人寝の淋しさを痛い程感じていた。

スタンドを消しても、眼は冴えるばかり、両脚はほてって、一日中、踊っていた疲れを感じさせるのだが……。

裕子は仕方なく、窓ぎわのカーテンをとおしてもれる月明りで、天井の節穴を数えつづけた。

そのうち、上睨が下って、すーうつと眠りに誘われた。

すると、天井の節穴は、昼間、劇場でリニ、すなわち裕子をひどい目にあわせた男の目鼻立ちにダブった。

「明日もまた、あの人、来てくれないかしら」

裕子の淡い期待も虚しく、あの若者は、それっきり一度も現れなかった。

しかし、あの日、受けた強烈な印象は、裕子の体の縄目が消え去ってから、消えさることなく、日がたつにつれ、ますます、濃く鮮かに浮彫りにされていった。「未完」



〔SM〕 より見た世界史シリーズ

殉教の娘バジリカ

一 嬰 淵 黒

不滅のローマ帝国。

永遠のローマ帝国。

それは過去二千年間に亘る全世界の神話的
信念だった。此の偉大なる名を持つ組織体は
幾度か危機に瀕しながら、その度に奇蹟の如
く立ち直った。

拝火教徒を率いて帝国を脅かしたペルシヤ
王の末裔は、ヘラクリウス帝の奮戦に依って
打倒された。

回教を奉じてコンスタンテノポリス城壁下
に迫ったサラセン帝国のアラビヤ人は、新兵
器希臘火に依ってタウルス山の彼方に撃
退された。

セルジユク、トルコ族はローマ帝国のアジ
ヤ領全部を侵略し、正に首府を呑み込まんと
する寸前に、コムネフス朝諸帝やその一族の
精勵と術策で招致された十字軍に正面衝突
し、消耗せしめられた。

偉大なるチングス汗と、その後継者達の、
所謂「蒙古の嵐」もヨーロッパ深く吹き荒れ
ながら東帝国の首府は避けて通った。

ゴート人、アヴァール人、ブルガリヤ人、
マジャール人、スラブ人等々。コンスタンテ

ノポリスの大城壁は一千年に亘り幾多蛮族
の無益な攻囲を嘲笑しつつヨーロッパとアジ
ヤの関門に立ち続けた。

併し、最後に興ったオスマン・トルコ族の
進撃は不可抗だった。ローマ帝国自体も老衰
し、西欧は分裂してその二強国は百年戦争の
最中であり、十字軍時代の宗教的情熱は失わ
れていた。

オスマン・トルコ族はヨーロッパに深く侵
入してアドリヤノポリスに首府を定め、英主
バジヤジット一世^{イルテリム}雷電王は、その領土を拡張
して東ローマ帝国を海以外の全側面から囲繞
した。若しも、チャガタイ汗チムールがバジ
ヤジットの背後を衝かなかったら、東ローマ
帝国は歴史よりも半世紀早く亡びていたに違
いない。

弱体化したローマ帝国は僅か数千の常備軍
を維持する事も困難だった。そのコンスタン
ティノポリスの殆んど眼前で、同じ回教徒で
あるトルコ王と蒙古王は、十四万と十六万の
大軍を以て相会し、惜し気もなく一日でこれ
を消耗した。一四〇二年九月一日の史上特記
さるべきアンゴラ会戦に於て、バジヤジット
は敗れて捕虜になった。巷間広く伝えられて
いる処では、彼は鉄檻の車に収容されてバク

ダットへ送られたと言われる。更にアラブシヤはバジヤジットの妻妾達が後ろ手に縛られて此の檻車を曳いたと記録している。

チムールは支那（明帝国）を征伐せんとして東に転じ、その途中で病死した。一四〇五年だった。彼の大帝は遊牧国家の常として忽ち瓦壊した。

チムールの死後、オスマン・トルコは急速に立ち直った。ムラッド二世を経て一四五一年にムハメッド二世が二十一才で即位した。彼はローマ帝国の名を保つ最後の遺物を狙っていた。而して、嘗て人口一億二千万、面積百六十万平方哩を有した大ローマ帝国の残片は、首府コンスタンティノポリスを含み、黒海からプロポンティスに至る長さ五十哩、幅三十哩の矩形内に圧縮されていた。（これは面積・形状共大抵鳥取県に相当する）

此の頃。正確には一四五二年の春。

コンスタンティノポリスのテオドシウスの二重城壁とコンスタンティヌス内城壁に挟まれた工匠区に、オルバンというハンガリヤ人の砲匠が住んでいた。

彼の本当の年齢は解らない。白髪で皺も多く、老年に見えるが或は見掛けより若いのかもしれない。

当時フランスでは、既に砲匠ギルドが発生し、後世の「死の商人」も現れていたが、東ヨーロッパでは製造と販売が同一の手にあった。従って造砲自体が家内工業でありながら儲けも危険も大きな仕事だった。

オルバンも以前は盛んな時代があったらしい。広い工場は空虚な廃趾となって残っている。嘗ては弟子も多く、帝国軍に優秀な製品を納入したという事だが、ローマ帝国が貧窮化してからは受注もなくなり、元来放漫な性格だった本人が酒に溺れたせいもあって、今は極貧の底に沈んでいた。弟子達は去り、設備の大部分は売られ、工場は抵当にとられていた。少し前まではオルバンの技術に対する信頼から、銃の修理を頼みに来る老兵も居たが、最近ではそれもなくなった。オルバンは全くの失業者だった。

彼には一人の娘が居た。年齢が開いているので孫のようでもあるが、ここでは娘としておこう。名はバジリカ。母親は東洋系だったらしい。後にジプシーと呼ばれた種族に属する。ジプシー族はオスマン・トルコと同じく蒙古の嵐に追われてヨーロッパに落ちた枯葉の一枚だが、トルコ旅程好運に恵まれず、今日尚遊牧の性格を保ちながら漂泊している。

バジリカはその血を受けて唄と踊りが上手だった。母親が死んだのか、逃げ出して放浪しているのかは解らない。

男の子は居なかった。尤も居たとしても此の親なら家出されたに違いない。現在は父親一人娘一人だった。

バジリカは婚期前で未だ若かった。十七才としておく。美人である方が面白いのだが、特記されていないから傑出した程の美貌ではなかったのだろう。若し優れた容姿を持っていたら早々に良家の嫁になっただろうから。

平凡のようで愛嬌あり、力量を要する父の仕事は幼時から手伝ったので身体も丈夫で、体格はそれ相当に大柄、庶民の娘ではあるが農民や牧羊者の女とは異った都会的感覚を身につけ（下町娘とでも言うべきか）父の職業上、軍人や官吏に接する機会も多かった時代があったので、言葉や礼儀も洗練され、機械や技術にも幾分か通じていたとすれば一番都合がよいようだ。

オルバンはハンガリヤ宮廷に永年仕え、ラディスラウス王が、東ローマ帝国と同盟した時、皇帝ヨハネ・パレオロゴス二世から重俸で誘われてコンスタンティノポリスに移ったものだった。娘のバジリカも共に移住した。

従って親娘共、マジャー語とギリシヤ語を同じ位巧妙に話した。身体的特徴は明らかに東洋系で、バジリカは丸顔、小麦色の膚、黒い瞳と捲かない黒髪を持った孝心の篤い娘だった。

オルバン親娘の家計はバジリカの羊毛紡ぎで辛うじて維持されていた。オルバンは未だ腕に対する自信を失っていなかったから、何時も仕事したいと歎いていたが、それが叶えられない事は殆んど確実だったので、彼の楽しみは酔う事に限定された。バジリカはよく働き、パンを節減しても父親の唯一の慰安の為に安物の麦酒を求めた。蜂蜜酒や葡萄酒には手が届かなかった。

三月の或る日。バジリカにいつものように紡いだ毛糸を親方に納め、デユカット銀貨二枚と若干の飼貨を持って帰路を急いでいた。籠の中には、フェナル門の市場で買ったパンと酒壺があった。此の市場は市内で最も安いという評判だった。

市場から工匠区までは城壁に沿って四軒以上ある。既に日は暮れ城壁に沿った道は暗かった。併しバジリカは距離も暗黒も厭わなかった。彼女は丈夫だったし、麦酒を前にして喜ぶオルバンの顔を早く見たかった。

何日もの習慣通り、彼女は廃墟になっているアリウス派教会堂の中庭を横切った。家への近道だった。暗かったが破れた壁の位置はよく解っていた。併しバジリカは塀の隠に潜んでいる者の存在に気附かなかった。

バジリカは塀の裂目を通り抜けようとした途端、闇の中から首筋を掴まれた。驚愕の聲が洩れるより早く、他の掌が口を塞いだ。更に二本の手が彼女の腕を背後から羽交締にした。よくは解らないが相手の男は二人。他にもう一人が出番を待っているようだ。

バジリカは大柄で、女にしては腕力もあったが三人に掛られては、何うする事も出来なかった。何よりも恐怖で足が竦んでしまった。

一人が口を抑えている間に他の一人が両手を背に廻させた。第三の者が重ねた手首に粗い縄を巻きつけた。バジリカは抵抗する気力も逃走する意志も失っていたが、縛られる触感が軟い女のような手だと思った。

両手の自由が失われた後で、口を封じていた掌が外された。併し戦慄が救助の叫喚を制した。

「許して。」

バジリカはやっと、それだけ言った。何の為に縛られたのか解らないが、相手が善良な

市民でない事は確かだった。

「殺さないで。デユカット銀貨と飼貨が少しばかりあります。それを取っていいから命は助けて下さい。」

バジリカは哀願したが相手は無言だった。

暗闇の中で相手の外輪が漸く判別出来た。三人の内一人が指揮者らしい。その指揮者は少年か女のように見えた。他の二人が長い縄を出し、バジリカの胸から足にかけて嚴重に縛りあげた。物盗りにしては念の入った縛り方だった。若しかしたら目的は彼女の身体なのかもしれない。

「お金も上着もあげます。それだけしか持っていないのです。わたしは貧乏な鍛冶屋の娘です。」

バジリカの声が少し大きくなりかける、忽ち開かれた口の中に海綿様の物質が詰め込まれた。勿論発声も中断された。続いて唇の間を弾力ある布地が割り、更にその上をもう一重、革臭い厚いものが広く掩った。バジリカは呼吸が止るのではないかと思った。

一人が彼女を持ち上げた。他の二人は大きな袋のようなものを拡げた。バジリカの身体は袋の中に封じ込められ、袋の口は頭の上で締められた。

二人の手が頭と足を持った。バジリカは抱えられた身体が高い方へ運ばれて行くように感じた。続いて今度は綱のようなもので急速に吊り降されているような気がした。事実、彼女の身体はテオドシウス城壁を越えて市外に運び出されていた。

水の音が聞えた。これは革舟で水濠を渡る音だった。此のあたりからバジリカの記憶が薄れた。どうやら猿轡の中に麻酔剤バクシが入れてあったらしい。馬の上に縛りつけられた処までは覚えていたが、あとは意識を失った。

工匠区の陋屋では、オルバンが遂に帰って来なかった娘の身を案じて一睡もしていなかった。決して酒を待っていたのではない。オルバンは酒が好きだが、それ以上にバジリカを愛し、且つ娘からも愛されていた。酔っていても良い父親だった。

早朝、回教徒らしい男が二人やって来た。国際都市コンスタンティノポリスでは、アラビヤ人もトルコ人も珍しくなかった。その一人がオルバンの前に見覚えある籠を置いた。バジリカの持物だった。もう一人は短刀を見せながら言った。

「汝の娘に会いたければ黙ってついて来い。」
オルバンは腰を抜かした。

一方バジリカは、朝日の明るさで眼を覚ましていた。牢獄か穴倉のような所を予期していたのだが、壁と天井のアラビヤ風の透し彫に先ず驚かされた。起きようとして、右足と左手に鎖がつけられている事に気がついた。併し全身の縄目や猿轡は外されていた。

身体の下には軟い寝具があった。鎖の末端は寝具の傍で床の鉄環に繋いであった。バジリカは、鄭重だが嚴重な監禁の意味を理解出来なかった。何の目的で庶民の娘を此のような場所へ誘拐したのか。

間もなく人の気配がした。頭布ターバンを巻き、半月刀を吊った男が五人。アラビヤ風の衣裳を纏った女が三人、室内に現れてバジリカを凝視した。一言も発しなかったが、相手がトルコ人である事が解った。

「此処は何処ですか。」

バジリカは鎖を絡ませながら半身を起し、ギリシヤ語で聞いた。併し誰も答えない。

「わたしは何うされるのでしょうか。」

今度はマシヤール語で問いかけたが、トルコ人達は何の反応も見せなかった。バジリカはトルコ語もアラビヤ語も話せない。どうやら意志を通じさせる方法は無いらしい。

トルコ人の中央に威厳のある老人が居た。

衣裳も風格も立派だった。バジリカは恐怖に慄えていたが、此の老人が首領らしい事に気付いた。他の四人の男は、老人の四方を固める位置で、腕を組んで立っていた。バジリカは或る恐しい事を思い出した。

スルタンハーレムの後宮。

気付くと同時に泣きだした。涙を流しながら、態度で哀願した。トルコ人の首領は無言の俣バジリカを眺めていたが、やがて踵を返して出て行った。四人の男がそれに従った。

アラビヤ風の女が三人残った。その内の一人は際立って背も高く、東洋風の装身具を飾り、香料を塗っていた。身分ある貴婦人らしい、面紗ヴェールを深く垂れて容姿は解らないが、澄んだ大きな黒い瞳が透けて見え、手はトルコ人らしからぬ白さだった。

他の二人は労働に適した服装をしていた。

バジリカの鎖を一旦解き、身繕いや簡単な化粧をさせた。バジリカは抵抗しなかったが、知っている限りの言葉で歎願した。彼女は商売上種々な国民出身の傭兵と話す機会が多く言葉の断片なら数箇国語が出来た。併しその何れも通じないらしく、相手は一切無言だった。貴婦人は身振りだけで指図し、他の二人は能率よく働いた。

サブウィーン
軽焼菓子と芭旦杏とシエルベツト水が運び
び込まれた。トルコの貴婦人はバジリカに食
事するよう手で合図して出て行った。身体に
は足鎖だけが加えられ、手は自由だった。粗
食しか知らないバジリカは、給された食事を
見た事もない豪華なものと思った。併し心配
の為に幾らも食べられなかった。次には何が
待っているのだろう。

夕刻近く、建物全体騒がしくなった。武装
したトルコ人が二人現れ、バジリカの前で丁
寧に一礼したので、何をするのかと思つたら
彼女の両手を後に廻して縛り始めた。バジリ
カは最早事態を理解しようとする努力を抛棄
していた。無抵抗で相手の意志に従つた。

バジリカは足鎖を外されて隣室に曳き立て
られた。隣は広間だった。床も壁も大理石で
天井は斑岩だった。室の中央に堅木と金属で
作られた丈夫な椅子があり、バジリカは其処
に繋がれた。胸も脇の下も入念に縛りつけら
れた。足も膝も揃えて縛られた、椅子の脚に
固定された。最後に固い猿轡が噛まされた。
何か儀式めいた事が始まるうとしているよ
うだ。

マメリユック
先刻の威厳ある老人が四人の侍衛を従
えて現れ、上段の席に着坐した。侍衛は

先程の男達と同じ連中らしい、今度は正規兵
の服装をしていた。続いてこれも先程見た貴
婦人が乗馬に適したような軽装で現れ、バジ
リカの傍に立った。面紗は半ば掲げられ、腰
には細身の半月刀を吊っていた。その顔は意
外な程に若かった。二十才位だろう。

広間の外に数人の気配がして扉が開いた。
マメリユック
侍衛 四人が一人の貧相な老人を連れてい
た。老人は眼隠しされ、兵の二人に両側から
手を引かれていた。

猿轡の下でバジリカが呻いた。それは精一
杯に呼び掛けたものだが、只の唸り声にしか
聞えなかった。入って来た老人はオルバンだ
った。此方は眼隠しの為に娘の存在を識別し
なかった。

兵士がオルバンの眼隠しを外した。オルバ
ンは物々しい室内の有様に先ず胆を潰し、次
に呻き声の意味を知って仰天した。

オルバンが次の動作に移るより早く、二人
の兵が半月刀を引き抜いた。二本の白刃が彼
の眼前で交差した。オルバンは半歩進み出た
姿勢から床の上に膝を落した。

ユフリタ ジュンニヤ
「魔神よ、魔女よ、許して下さい。私は貧乏
な鍛冶屋です。身代金に出せるものは何も有
りません。併し娘を助けて下さるなら、何で

もします。娘だけが私の生命なのです。」
オルバンは手を組み合わせ、泣きながら哀
願した。

トルコ人の首領はオルバンの態度を凝視し
ていたが、やがてオルバンを招き、意外な事
に明瞭なギリシヤ語で言った。

「オルバン並にその娘よ。余はアラ一の御名
代ムハメッド二世陛下の首席大臣カ ril パシ
ヤである。ギリシヤ語とマジヤール語はトル
コ語と同じ程度に理解出来る。又、これに居
るは余の娘にしてスルタンの妃曉星。ラテン
語とギリシヤ語が話せる。汝の欲する言葉で
語るがよい。わけあって汝等を招いたが、決
して害意はない。汝等から財貨を奪わんが為
でもない。」

マメリユック
二人の侍衛が重そうな箱を運んで来
た。箱は床の上に倒された。中からは燦然と
輝くクラウン金貨とアスペル銀貨が現れ、床
一杯に散乱した。

「金銀なら、我等の方から積み上げて遣わそ
う。オルバンよ。汝は今でこそ職を失って居
るが、嘗てロマヌス門の両側に備えられた大
砲を鑄造したのが汝である事はよく知って居
る。且つ汝は自ら鍛冶屋と称して居るが、百
姓、市民の道具を作る程に身を落す事の出来

ない男である事も解って居る。オルバンよ。汝は大砲を作らせたなら当代一の名人であるそうな。だがローマ帝国は、汝を用い得なかった。スルタンの御慧眼は汝を見出し給い、御仁慈は汝に大業を授け給う。オルバンよ。スルタンの勅を畏んで大砲を作るなら、此の金銀に十倍する財宝を与えよう。否と言えば。」スーピアが半月刀を引き抜き、縛られているバジリカの顎の下に擬した。バジリカは身を慄わせて呻いた。

併しオルバンは、それを見ていなかった。娘も金銀も念頭になかった。既に思索は全く別の次元に飛躍していた。

「俺に大砲を作れと言うのか。」

独り言だった。視線は虚空に向いていた。

「オルバンよ。返答如何。大砲を鑄て富貴を得るか。それとも娘と共に生命を失うか。」

カリルパシヤは催促した。スーピアは白刃をバジリカの頭に触れせた。だがオルバンは応じなかった。放心虚脱の態に見えた。

「そうだったのか。俺に大砲を作らせてくれるのか。」

カリルパシヤは、どうやらオルバンのキリスト教信仰を買い被っていたらしい。

金が欲しいのではない。娘の危機に屈伏し

たのでもない。只自分の腕を試したいという職人の気質は、遊牧民から成り上ったトルコ人には理解出来なかった。

オルバンは、眼の前に居る者が専制帝国の大臣である事も、返答如何で娘の首が飛ぶ事も、只一言で彼の所有になる金銀が推積されている事も忘れていた。今度はトルコ人共が驚く番だった。

オルバンは突然に、狂った如く笑いだした。オルバンの歎息は咆哮のような呻き声で中断された。バジリカが猿轡に遮られながら、必死で何かを訴えようとしていた。オルバンは娘の存在とその悲境を思い出した。慌てて駆け寄り、先ず猿轡を外した。バジリカは縛を解く隙も与えずに叫んだ。

「お父様、回教徒に大砲を作って与えてはなりません。お父様の大砲でキリスト教徒が撃たれるのです。どうを背教者にならないで下さい。」

オルバンは娘の縄を解きかけた手を止め、彼女の黒い髪を撫で上げながら言った。

「バジリカよ。許しておくれ、大砲を作らなければ私達は二人共、酷い殺され方をするだろう。大砲を作ったら一生富裕になれる。生命は惜しいし、金が欲しくないとも言わな

い。だがそんな事より、私は只大砲を作りなさい。それが何に使われようと構わない。地獄に陥る事も覚悟した、だが背教と言うなら大砲のような破壊の道具を作る職業自体が罪ではないのか。私はハンガリーでも大砲を作った。その大砲はキリスト教徒がキリスト教徒を殺す為に使われた。バジリカよ。キリスト様が私達に何をしてくれた。教会や司教様に税を納め、貧乏の底に沈められただけではな

カトリック

オソドックス

いか。ローマ正教だとかギリシヤ正教だとか私達には何うでもよいような僅かの字句を争って異端だとか邪説だとか互に非難し、排撃し合い、何処に真実があるのだろうか。来世は天国も要らない。私は此の腕で大砲を作り、能力の限界を試したいのだ。」

バジリカはもう何も言わなかった。父オルバンの気持はよく解った。時代は十五世紀。オルバンの年配の者にとって殉教は懷疑だった。キリスト教自体が分裂し腐敗していた。

数十万の民衆を東方へ駆り立てた十字軍の情熱は過去のものとなっていた。一方、バジリカは若齢であるその年よりも更に純情で篤信だった。孝心と信仰の間に挟まれ、重圧に耐えずして只泣くばかりだった。

カリルパシヤも、並居るトルコ人も、理解

し得ない親娘の対話を呆れて聞いている。

オルバンは娘の縄目を解きかけた。トルコ人はそれを妨害しなかった。オルバンが大砲の鑄造を決意した事だけは解っていた。縛を解く行為を阻止したのは縛られている本人のバジリカだった。彼女は漸くにして妥協点を発見した。

「解かないで下さい。お父様が信仰に反してトルコ人の為に大砲を作る事を承知なさったのは、娘を助ける為だと仰言って下さい。それに違いありません。そう誓言して下さい。罪はわたしが負います。」

バジリカは縛られた身体を揺すって、四方を見廻しながら更に言った。

「大臣様。王妃様。それに侍衛^{マメリツク}の方々。

早くわたしを責めて下さい。大砲を作らなければ娘を殺すぞと脅して下さい。父は信仰を棄てません。お父様。バシリカは殺されません。大砲を作る事を承知して助けて下さい。」

これは五百余年も昔の話である。併し筆者は秘かに考える。回教とキリスト教の対立を政治上、経済上の或る主義に置換し、十五世紀の最高軍事技術を二十世紀のそれに變えてみたら、その俚現代に通用する物語が出来るではないか。歴史は繰返すと言うが浅間しい

限りである。

トルコの史官は絶大の得意を以て、ムハメッド二世の間に対するオルバンの奉答を記している。

「私はコンスタンティノポリスに住んでいました。故にあの城壁が如何に堅固なものか、よく存じて居ります。併しそれが伝説に残るバビロンの石壁より頑丈であるとも、必ず打ち崩す機械を作って御覧に入れます。世界一の堅塁と此の腕と何方が強いか。それを試したくてならなかったのです。」

ムハメット二世は首府アトリアノポリス城内に砲工廠を作って与えた。三箇月の後、オルバンは彼の壮語を実現した。彼が鑄造した真鍮製巨砲の口径は十二掌尺あった。敢て近代語を用いるなら四十八インチ攻城臼砲である。二十世紀に入って近代式旋条砲が「巨砲時代」を再現したが、それは遂にオルバンの大砲を凌駕する事が出来なかった。

一九〇四年。巨いなる驚の巢^{ポットアーサー}旅順口を破壊し極東の大魔王と呼ばれて恐怖の対象となつた乃木軍の攻城砲隊は二十八糎榴弾砲、即ち十一インチ砲で編成されていた。

一九一四年。堅塞リュージュを一週間で爆砕したクルップの傑作は四十二糎臼砲、

即ち十七インチ弱の口径だった。

一九四一年。鋼鉄芸術の極致を太平洋上に創造し、全世界の戦艦を一夜にして^{アウトレンジ}凌駕し去った二十世紀の恐竜大和の主砲も十八インチに過ぎなかった。

一九四二年、百年の伝統を秘めたセバストポール要塞を二十七日間の砲撃で基礎より覆えし、マンシュタイン将軍をして「砲煩技術の奇蹟」と叫ばしめたドーラ砲と雖も、口径八十糎即ち三十二インチに足らなかった。

世は誘導弾時代に入り、火砲の巨大化に終止符が打たれた現在、恐らくドーラ砲が人類の到達した最終巨砲となるものと思われる。

斯く觀じ来れば、オルバンの鑄造せる四十八インチ臼砲が如何に偉大なものであるかが解るであらう。

後年、大砲主クルップは彼の誇る四十二糎臼砲に令嬢の名を冠し、今日に至る迄攻城砲の代名詞としてベルタ砲の名を残した。オルバンも亦、彼の芸術品に、これと同じ程度に愛する者の名を附けた。史上に顕然たるバジリカ砲がこれであり、バジリカの名は後に巨砲を意味する普通名詞に變化した。

バジリカ砲の試射は^{イエハンヌマ}世界監視塔の前庭で行われた。その前日に布告が行われて騒動を予

防した。砲声は十二哩圏内を驚愕させ、宮殿の硝子窓は大破した。砲弾は一哩飛翔した後土中に六フィート陥没した。その重量は八百ポンドあった。

此の超威力兵器を運搬管理する為に一軍隊が組織され、荷車三十台を連結し、六十頭の牡牛が挽曳した。二百人の砲兵が重量安定の為に左右に配置され、二百五十人の工兵はアドリヤノポリスから牡牛の渡し海峡に至る百五十哩の道路を平坦にする為に先行した。此の難行軍は四十二日を要した。

一九四二年のドーラ砲は六十台の機関車を以て複々線上を運ばれた。五世紀を隔て、動力は異ると雖も、人類の創造せる最初と最後の超巨砲に於て、その運搬に要した機関の数に神秘なるピタゴラス的暗合を見て感嘆するのは筆者だけであろうか。

二

東ローマ帝国の式部長官フランザが生れたのはアンゴラ会戦の前年である。彼はマヌエル帝、ヨハネ・パレオロゴス二世、コンスタンティヌス十一世の三代に亘り侍従官を務めローマ帝国の最後を自ら体験し、帝国史の最終部分を書き綴って後世に伝えた。哀哭切々

たる亡国の悲譜である。

一四四八年ヨハネ・パレオロゴス帝が死ぬと、東ローマ帝国の皇座には最後の皇帝コンスタンティヌス・パレオロゴスが即いた。新帝は即位十八才。未婚の童貞だった。繊細的病弱な、寧ろ女性的な感じのする美男子と記されている。併し信仰と勇気だけはローマの伝統に恥じない確固たるものを持っていた。

フランザは新帝の配偶者を決定する為に、二年に亘り諸国を巡った。これは単なる皇后の選定ではなく、結婚を通じて同盟国を獲得する重要な意味があった。フランザはゲオルギアの王女を皇后に撰んだ。

フランザには二人の子供があった。姉の方がカタリナ、弟はヨハンネスと言った。

一四五二年も末の或る午後、カタリナは聖ソフィヤ寺院の鐘楼に上り、牡牛の渡し海峡の彼方を眺めていた。

カタリナは今年十六才。当時習慣に従って婚期前の数年を尼僧として過す為、東教会の総本山聖ソフィヤ寺院に入っていた。

彼女は憂鬱だった。世界一の大円屋根を支えた大伽藍に今は香煙絶え、参拝人の気配もなく、祈禱や讚美歌の声も消えて、空虚がすべてを支配していた。

コンスタンティヌス十一世が西欧の援助を懇求する為、東帝国はギリシャ正教の信条を棄ててローマ正教を受け容れる旨、ローマ法王に歎願したのだ。法王代理官としてロシヤのカーディナル・インドルスが到着し、聖ソフィヤ寺院に入った。ギリシャ正教に固執していた東帝国の臣民は一斉に背を向けた。ローマ正教とギリシャ正教は同じキリスト教徒でありながら、共同の敵たる回教トルコを前にして斯くも融和せず、無益な抗争を続けていた。

聖ソフィヤ寺院に残された司教や僧侶、尼僧等にとって、為すべき務めは殆んど無かった。カタリナにとって、唯一の楽しみは間近に迫った父フランザの帰朝だけだった。フランザはここ数年殆んど家に居なかった。衰耗の極にある東帝国に援助を獲得する為、東西に奔走し、外交に専念していた。そのフランザが二年ぶりで帰国する期日が到来しようとしていた。カタリナは海上遙かを眺め得る鐘楼に上り、此処で午後一杯を過すのが慣例だった。

陽が少し傾いた。今日も、父の船は見えない。だが、視力の鋭いカタリナは海峡を流れて来る異様な浮遊物に気附いた。

海峡の水は常に黒海からプロポンティスに向い相当な早さで流れている。そして漂流物は必ずコンスタンティノポリスの岬角で一旦渦巻いてからプロポンティスに流れ去る事実が経験的に判明していた。

カタリナは、漂流物を筏の如きものと認めた。その上に何か乗っている。彼女はそれを横臥した人間であると思った。気附くと同時に鐘楼を駆け下りた。

金角湾に臨む港には多くの渡舟が客を待っている。カタリナは近くの船頭を急かした。「急いで港外へ出て頂戴。聖ソフィヤ寺院の崖下よ」

船頭は一寸嫌な顔をした。カタリナが指定した場所は湍汐の難所だった。黒海から流れて来る海流と金角湾から出る水とが交差し、汐の干満に伴って複雑な渦を作る所だ。併しカタリナがビザント貨一枚を与えると、法外な報酬に眼を丸くして舟を漕ぎ出した。

カタリナの推定は誤っていなかった。筏は既に崖下に流れつき、大きく円運動しながら漂っていた。そして筏の中央には若い女性が仰向けに寝ていた。

意識はない。生きているのか、死んでいるのかも解らない。麻の粗衣一枚だけを着てい

た。両手は身体の下になっっているが、後ろ手に縛られているらしい事は、直ちに推測出来た。腰から脇を通って肩に、幾重にも太綱を掛け、足首も膝も固く筏の木材に縛りつけてあった。

船頭は、漸くカタリナの意図した事を知った。筏の女は舟に移された。

「何の罪を犯したのかは知らないが、酷い目に遭わされたものです。もう死んでいます」船頭は女を寝かせた。大柄な割に童顔の娘だった。黒い髪が濡れて海草のように垂れている。

カタリナは尼僧の常として、医療の心得もあった。睨を返し鼻孔を調べた。

「此の方は水を飲んでいません。多分薬で眠らされたのでしょう。未だ息があります。早く連れ帰って手当しましょう」

船頭が急いで漕いでいる間に、カタリナは娘の着衣や内側を調べていた。

「十字架があります。多分トルコ人に捉ったキリスト教徒なのでしょう。回教に改宗しない為に此のような迫害を受けたのかもしれない」

フランザ家の邸は金角湾に面した港区にあった。専用の碇泊所もあり、其処から船頭が

救出した娘を運び入れた。弟のヨハネスと母のマルキアも事情を知って協力した。

二日経った。フランザは此の騒動の最中に帰って来た。女が意識を回復したのも丁度此の時だった。

女はハンガリー系の帝国市民でバジリカと言った。彼女はコンスタンティノポリスで誘拐されてから八箇月に亘る出来事を話した。

「父はオルバンという名でした。キリスト教徒でありながら、トルコ人の為に大砲を作りその天罰か、熔解した銅の中に落ちて死にました。或は大砲を作らせて了えば用はないというので殺されたのかもしれませんが。父が死ぬとわたしも厄介者となり、回教に改宗しないという理由で死刑の宣告を受けました。その執行を引き受けたのが、ブルガリヤの王族で背教者バルタ・オグリという男でした。海軍の不得意なトルコ軍で艦隊の指揮を執っていました。併し少しはキリスト教的良心があったものか、必ず助かる方法でわたしを放ってくれました。筏に縛りつけて海に流せば助かる筈もないと説明してスルタンを納得させムハメット二世の眼前でわたしを縛りました。が、縛りながらそっと教えてくれました。此の辺の海流は悉く暗記している故、必ずコン

スタンティノポリスに明るい間に流れ附く場所と時刻を選んである。金角湾と崖の間で半日は漂流するから、キリスト教徒が救ってくれるだろう。そう言って麻酔剤を嗅がせてくれました。あとは覚えていないのです」

フランザ一家は、バジリカの冒険に感嘆した。同時にトルコ王が今や恐るべき破壊兵器を入手した事も明らかになった。フランザは参内して青年皇帝に皇后決定の報告を行い、合せてバジリカの一件も上奏した。

「ローマ帝国も余の代で亡びるのだろうか。トルコ人は首府の門前に迫っているというのに、内では教会や大臣や市民が互に争っている。腹藏なく話し合える者は卿を除いて他にない。余は皇座に登って日も浅く、宮廷にすら味方が居ない。早く皇后を迎えて余自身の党派を固め、外には同盟国を得てトルコに對抗しなければならぬ。フランザよ。卿は明春早々ゲオルギアに向い、皇后を迎えて貰いたい」

皇帝は寂しそうだった。フランザは努めて若帝の気を引き立てようとした。

「勅命には従いますが、それ程家を留守にしていると、私の妻は他に夫を捜すか又は尼寺に通れるかもしれません。どうか此の点も御

配慮下さい」

コンスタンティヌス十一世は漸く笑った。

「卿の外遊は今度が最後だ。トルコ人の攻撃は開始されるだろう。無事に切り抜けられたら卿を大宰相に任じよう」

皇帝の予感はずっていた。

皇帝は又、孤児バジリカをも閲見した。

「汝の父オルバンの腕を見出し得ず、トルコ人に利用されたのは決して汝等親娘の罪ではない。余の不徳不明の致す処であった。ローマ帝国は窮乏して切角戻って来てくれた其方に何も授ける事が出来ないが、余の十字架を譲る故、主が余に代って恩恵を下されるであろう。今後とも余と帝国を見棄てないで貰いたい」

バジリカは感泣した。

「不肖微力ではありますが、火薬の調合、銃砲の修理、其他火術について父より習い覚えた聊かの心得があります。どうか帝国軍の端になりと加えて戴きたいと存じます」

皇帝はこれを許可した。バジリカはフランザの管轄する兵器庫で働く事になった。

同じ頃、スルタン・ムハメッド二世は東帝國の潰滅と首府コンスタンティノポリスの攻略を終生の目標として執念深く窺っていた。

彼は奇しくもコンスタンティヌス十一世と同年。即ち今年二十二才だった。東洋的専制君主の典型で、智勇と残忍を兼備していた。彼は兵卒の姿に変装してロマンス門を自ら偵察した。砲座は何処に築くべきか。地雷は何処で爆発させるべきか。彼は自ら設計し、自ら作戦を案じた。夜中に撓ね起きて大臣を呼び図上演習を命じたりした。

ムハメット二世は、酒と女を近寄せなかった。習慣通り三人の正妻と多数の第四夫人を持っていたが、何れも子供を生ませる道具としてしか考えていなかった。美しい女性を献上された時、愛慾の没入者でない事を証明すると称して軍隊の前で、その美人を自ら斬った。尤も大臣カリルパシヤの娘スービアだけは例外的に寵愛した。それは彼女が聡明で美しいだけでなく、武技にも堪能だったからである。スービアは容姿と武勇に於て自身に必敵する女官若干を従え、陣中にもスルタンに同行した。尚、ムハメット二世は男色には相当な執心を示し、宮廷や陣中に多数の小姓を擁していた。彼の残酷な性格を証明する例として常に引用される事だが、最も寵愛されるべき小姓十四人がメロンを盗んだ嫌疑を受けた時、彼は「調べてみれば解る」と言って十

四人共逆さに吊るし、自身で曲刀を把って一人宛腹を裂いて廻ったと言われる。

当時、スルタンの後宮は、未だ形成期にあった。スービアの如き大臣家の出身者は、御用のない時は父の家に帰っている事も出来たし、父の仕事を手伝う事も可能だった。カリルパシヤは大砲鑄造や艦隊建設等でトルコ軍の近代化に努力していたが、東ローマ帝国の討滅には反対だったから、娘にも自分の意見を時折聞かせていた。

「ローマ帝国の首府は障害にならない。我が領土の中央に残しておくべきだ。ギリシヤ人はトルコ帝国を脅かす程に強くないが、我々に貢納を出させる程には富裕で、且つ商工業の教師であり仕上人でもある。コンスタンティノポリスの富裕は貿易と金融組織にあるのだから、一旦破壊した後占領しても富財の源泉は手に入らず、宦官、後宮、腐敗官吏、贈収賄、陰謀等の悪いものばかりトルコ帝国の中に継承する事になるだろう。ギリシヤ人は殺さない程度に貢納させるべきだ」

此の売国的意見はスービアから筒抜けにスルタンの耳に入った。ムハメット二世はカリルパシヤがローマ側の首相ルーカス・ノターラスと個人的通信を交している事実に関心

ていたが、故意に不知を装った。

「スービアよ。汝は父と余と何方を撰ぶか」
スルタンは寵姫に問うた。

「父もわたしも含めて全回教徒が陛下のものです。わたしの生命さえ、陛下の愛と較べたら軽微なものでしかありません」

「よい返答だ。余はコンスタンティノポリスが欲しい。協力してくれるだろうな」

牝牛の渡し海峡の対岸には既にトルコの要塞が築かれていた。ムハメット二世はヨーロッパ側にも砲台を築かせた。全海峡はトルコの大砲の射程下に収められた。スービアは一隊の騎兵を率いて工事の督励に赴き、東帝国を挑発した。石材は教会堂を破壊して獲得された。スービアはギリシヤ人の畑に一晚中馬を放置した。収獲前の畑は大損害を受けた。遂に小規模な衝突が起り、双方に死傷者が出た。スルタンは喜んで紛争拡大を内示し、刈入れに従事していた農夫四十名が殺された。

形式的な最後通牒が交されたが、宣戦布告は必然の勢だった。東ローマ皇帝の忍従は限界に達していたし、スルタンは凡ゆる口実を設けて開戦を求めようとしていた。トルコ側は直ちに大軍を集結した。

ローマ帝国軍の兵力はフランザ自身の登録

調査により、正確に伝えられている。その数は四千九百七十三名だった。

衰耗の極に達したと雖も、コンスタンティノポリスは避難民を含めて十万人の人口を擁していた。古代の動員率を適用するなら二万五千の男子が武器を把り得る年齢に属した。カルタゴ、コリント其他嘗てローマが破壊して来た都市の例に見る如く、国家非常時に際して女性も奮起する例が少なかった。にも拘らず、最後のローマ市民はその大部分が修道僧や無頼漢や臆病者となり、ローマ正教との論争に於てのみ勇敢だった。

斯かる状況であるから、ゼノア人ジョン・ジャステイニアニと、その傭兵隊の到着は絶大な歓喜を以て迎えられた。四百人のゼノア人と、千六百人のイタリヤ、フランス其他の混成兵は何れも勇敢且つ老練であり、諸隊長は何れも西欧的騎士だった。傭兵には多額の賞与が前払いされ、ジャステイニアニには後日レムノス島を授領する契約が交された。

兵は少ないが軍事技術家として有名なドイツ人ヨーハン・グラントも参加した。

コンスタンティヌス十一世から秀頼を、ルーカス・ノターラスから大野修理を、フランザから木村重成を、ジャステイニアニやグラ

ントから後藤又兵衛や真田幸村を連想するのは筆者だけではあるまい。

コンスタンティノポリス市民は、皇帝と傭兵隊長の名に、帝都建設者と東帝国中興の英主の名を看取し、此の結合から吉兆を見た。

ビザンチウムの古名を現在の名に改めた君主は勿論コンスタンティヌス大帝であり、近代イタリア語のジャスティニアニは東帝国のユスティニアヌスに当った。併し一部には、西ローマ帝国滅亡に際し、

最後の皇帝アウグスス・ロムルスが、同一人格の中にローマの建設者の名と帝政創始者の名を二つ共採取し、且つ汚した事実を思い起し、兇兆に戦慄する者もあった。

山原清子 対抗 女相撲 女斗美 女斗場面

女相撲連続写真

相撲禪着用、四つ相撲
大手札 十枚一組 略号(めれ)一〇〇〇円

互いがぶつかりと四つに組み合った二女は、上手下手の両まわしを充分にとり合せて、上手投げ、下手投げ、内掛け、外掛けと隙を見て術をかけるところを、刻々の変化を狙って、シャッターを切ったもの。躍動する女体の筋肉がよくキャッチされている逸品。

女相撲連続写真

相撲禪着用、投げ術
大手札 十枚一組 略号(めよ)一〇〇〇円

はいよいよ機熟して、投げ術の応酬は、サバ折りから高々と吊り上げに至るまで、激しい女相撲が展開されてゆく。投げのきまつた瞬間を狙ったシャッターチャンスが、マニヤの方々の眼を、どのよう楽しませてくれるか。

女相撲連続写真

女斗美 女斗場面

相撲禪着用、投げ合い
大手札 十二枚一組 略号(めわ)一二〇〇円

首投げ、下手投げ、出し投げ、内掛け、外掛け、小股すくい、等々お互いに激しい投げの打ち合いを重ね、その術のきまつた瞬間など、優美な筋肉美の躍動する女相撲が、二人の肉体美女性によって、所狭ましとくりひろげられてゆく十二枚の組写真。

女斗美 立業

黒フン白フン着用
大手札 十枚一組 略号(めた)一〇〇〇円

黒フンドシ白フンドシをりりしく締め込んだ二人の裸女が、激しく両手で組み合い、ヘッドロックから、腕の逆とり、首絞め、片足どり、腕後手固めと、白い裸身をからめあつて縦横無尽に暴れまわする二人。躍動するメトマーズの美しさをごらん下さい。

女斗美 寝業

黒フン白フン着用

大手札 十枚一組 略号(めな)一〇〇〇円

立業の激しい斗争から寝業に入つた二人のメトマーズは、しなやかな真白い四肢に渾身の力をこめて、相手を屈伏させようと必死になつて押さえ込む。手と足と、足と手とが、悩ましくも妖しく交錯するメトミのエロシズム。

女斗美 固め業

黒フン白フン着用
大手札 十二枚一組 略号(めそ)一二〇〇円

激しくも悩ましい寝業の激斗を経て、ここに優秀の位置がはつきりしてくると、相手のメトマーズに最後の止めを刺す固め業に入つてくる。しかし、押え込まれた方も、むざむざと敵の軍門に降参はない、苦痛に歯を喰いしばりつつ、反撃のチャンスを狙つて、悶え、もがきまわる。

女斗場面 (白、黒禪)

髪のかみ合い
大手札 十枚一組 略号(めか)一〇〇〇円

これはルールも何もない女と女の憎悪をむきだしにした斗争である。

髪をかみ合い、馬乗りになり、擦りあい、禪一本の裸身のあるかぎりの力を奮つて、只相手を痛めつけようという争い。

女斗場面 (黒、白禪)

押さえ込み合い
大手札 十枚一組 略号(めね)一〇〇〇円

相手をお互い自分の膝下に組み敷いて降参させようと、二つの裸身がうごめきあう筋肉と筋肉の交りあう美しさ。

女子レスリング

首絞めの業
大手札 十二枚一組 略号(めつ)一二〇〇円

肉づきのよい太股で、或はふくよかな腕で相手の首を絞めつけ、オールしようとする女レス。

女子レスリング

押え込みの業
大手札 十二枚一組 略号(めお)一二〇〇円

豊かで美しい裸身が、ねじれ合い、からみ合い、互いに押さえ込んで、女体相搏つ女レス。

やく よけ おんな ずもう
 危除女角力

円 山 景 三

危 除 女 角 力

昔からよく言われるのに危年（やくどし）

と言う言葉がある。中でも男の四十二才と女子の三十三才を大危（だいやく）としているが、なる程男子ならば社会的にも一応の安定を得て何か事業をやりたい、或は男らしい仕事がしてみたい野望の起ってくる年令でもあり、女子ならば家庭的にも一家の主婦として仕事も多くなり、子供も大きくなって来てなやみもふえる年頃で、男女共肉体的精神的に転換期にきているのだろうと思う。

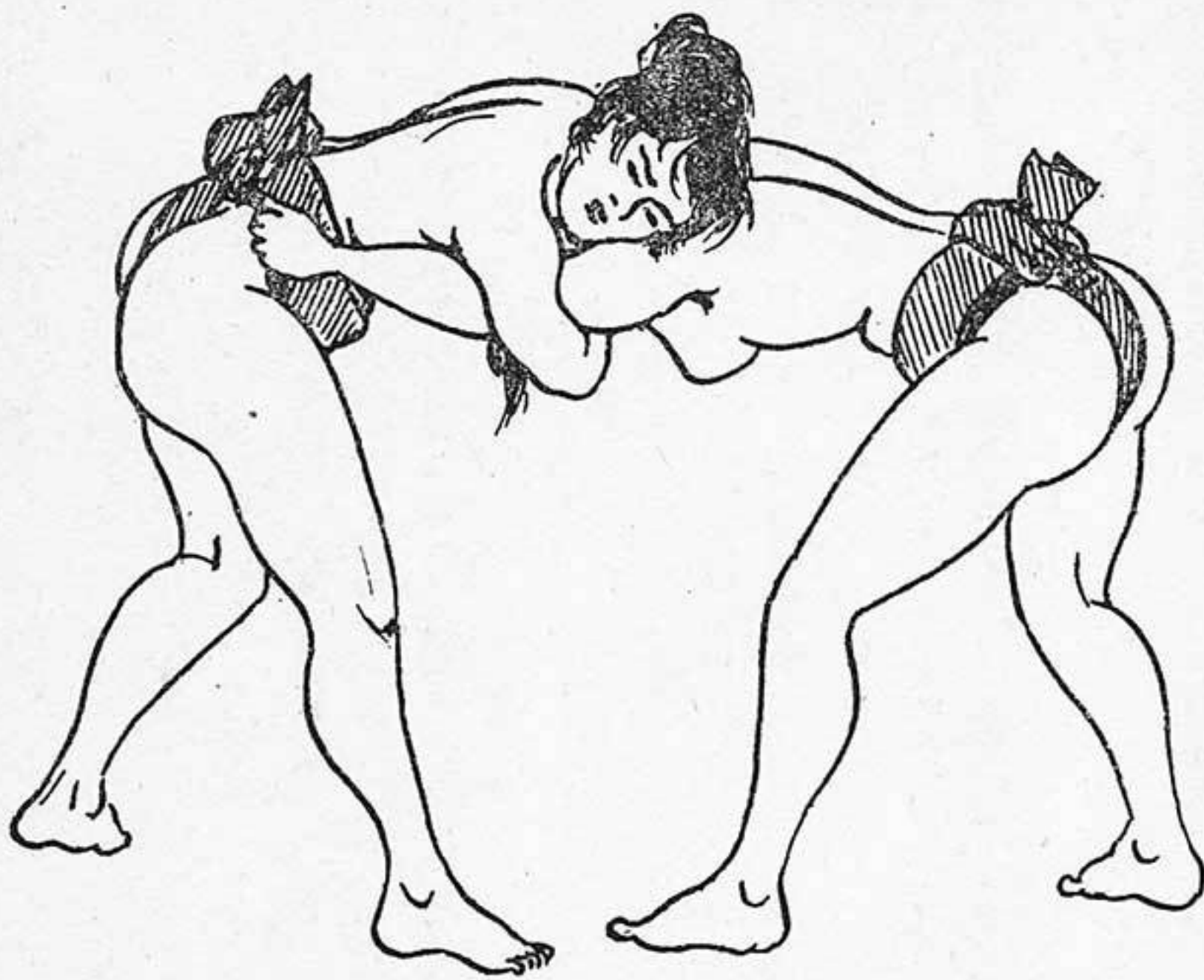
そこで、この危年を無事乗り切る為には暴飲暴食をつつしみ、よく運動して節制すれば例外は別として肉体的には切り抜けられるの

ではないかと思う。危年も迷信と言えば迷信だが、科学的には一応の理論がないでもない。その為、全国各地で色々と危除（やくよけ）の行事が行われているが、ここ畑中村の大杉部落と千原部落に行なわれている危除角力も大変めずらしい行事と言えよう。

この畑中村は七つの部落よりなっていて、この内大杉、千原の両部落は畑中村に合併する迄は一つの村であったので、その為両部落共同で行なう行事も多く残っている。この二部落合せると四百戸近くあり、人口も約二千五百人にもなる。大部分は農家であるが、勤め人も多く又農家も半数が栗や柿等の果樹園

も経営していて比較的農村としては恵まれている。しかし何と言っても田舎の為、昔からの行事も多く、中でも四月三日の危除角力（やくよけずもう）は、特筆すべき行事であると思う。

なぜこの様な行事が残っているかと言うくわしい由緒は分らないが、この村では女性が数え年で三十三才になると『さんざん』と言いい女性の大危（だいやく）と言われているが、その危払いの為、その危女達が両部落中程の山腹にある鎮守様で危除祈願と豊作占いを兼ねた対抗角力を取って大杉部落が勝てば、その年は山豊作、千原部落が勝てば里豊



年と言われ、代々行なわれて来たが考えて見ると、危年に角力などとも思えるが、運動すると言う事は中々理に会った事で、昔の事なのでバレエ等も無く自然と角力になったのだらうと思う。

その為か年寄りになると腰の曲った人が多くにもかかわらず、この村では一人も見かけ

ない処を見ると、やはり効果が現れているものと思える。しかし時代と共にその風習も次第にさびれ、昭和十二、三年頃には全く跡絶えたが、大東亜戦争も終りの昭和二十年四月の或る夜のこと、その年三十三才の危年に夫を召集されている婦人の内六名が人々に内密で山に登り社前で裸になり夫の武運長久祈願

の角力を奉納した。間もなく終戦でこの部落も多く尊い戦死者を出したが偶然にも角力を奉納した六名の婦人の夫達は無事元気に復員したことから、それが動機となり社会事情も治まった昭和二十五年頃より再び危険角力が奉納される様になったが、四五年も経ぬ内に年毎に角力に出る人も少くなったので、それではと年令に関係なく女性であれば誰でも出られる様になった。

だが、それでも非常に少くて、毎年十数名の婦人達で行なわれるだけだったが、その姿もシャツとパンツの上に褌を締めての取組みで昔の様に素裸に褌一本と言う姿は見る事が出来なかった。それが数年前、偶然の事から最後の一番に危年の婦人が裸体に褌一本の姿で取組んだ事があり、それを契機

として最後の取組みだけでも普通り危年の婦人同志で、との話から今では最後の三番は危年の婦人の中で両部落三名ずつ選出し、その六名の婦人が裸体に褌一本の姿で取組み、その勝負によりその年の豊作を占うと言う行事である。

選ばれた婦人こそ迷惑な事だが、そこはよくしたもので、その六名の婦人には両部落の区費から各々一万円が支度金として支給され、又節分に危年の婦人達は代納金として幾らかのお金を寄進するならわしで、その代納金は危険除豊作占い角力に勝った三名にご祝儀として渡される仕組みになっていて、危険角力に出て勝てば五万円から多い年では七万円にもなるので体力に自信のある婦人で出場を希望する人があっても、次の様な選出方法が有る為希望者が出られる訳でもない。

その選出方法は、その年の危年の女性達と同数の古老達一同が三月五日の夜、投票により選ぶのであるが、昔から比較的美人で体格の良い人が選ばれているので、この危険角力に選出される事は一種のほこりとなっている。さて選ばれたとなると一応は辞退するが、よほどの理由がない限り受けられないから選ばれれば当日迄約一カ月の間、熱心に稽

古させられるのである。

いよいよ四月三日の当日は、昼過ぎから男子の角力を行ない、青年壮年の角力も終ると十数名の婦人達による角力が行なわれる。見物人の喚声の内に勝つ人や、又寄倒されてベソをかく人又投げられる人もあり、番数も次々と進み三人抜き等も行なわれ、陽も西に傾むく頃になると、最後の危女達による危除豊作占い対抗角力が行なわれる。

荒れた土俵もきれいに掃き清められ拍子木のキが入り東の控えからは千原部落の山田綾子、熊田美代、藤田初乃の三人が素肌の上に美しい長じゅばんに細紐姿で入場すれば、西方に之又美しい長じゅばんを着た大杉部落の北出静子、青谷房枝、小杉典子の三人が溜りへ入る。

神主は先ず東方、続いて西方とお払いをする。お払いを済ますと、籤の乗った三宝を神前より下げ順に籤を引いて、いよいよ取組みである。最初は誰かと万場見守る中、呼出しの今田老は扇子を開き声も高らかに

「東しー山田綾子さんー 西しー、小杉典子さんー」

と二人を呼び上げたのである。観衆はどつとわき、拍手喝采の内に細紐を解き長じゅば

んを脱いだ山田綾子さんは、よく太った立派な体を万場の中にさらしたのである。いくら覚悟を決めているとはいえ、やはり恥かしさで顔を真赤にしたが、それもつかの間で、やはり女性も一家の主婦となり三十三才にもなると少々の事には動じないと見え、力水をつけ塩を手によれば、西方の小杉典子さんも長じゅばんをとると稽古禪をキリリと締め込んだ美しい太った体をゆさぶり力水をつければ行司は、

「こなた山田綾子さんー 片や、小杉典子さん、典子さんー 一番角力に御座居ます」

と呼び招けば二人は土俵へ上り力強くどすんどすと四股を踏む。観衆はヤンヤの喝采である。山田綾子さんは大工の奥さんであるが、田畑も五反余り耕作していて、五尺三寸五分の十七貫と言う立派な体で、しかも白い肌の受嬌のある顔立ちである。西方の小杉典子さんは、この部落では数少い街の工場へ勤めている人の奥さんで、この人も田地を三反余り作っており、体も上背は五尺三寸で、目は方十九貫と言う良く太った婦人で体に似合わぬ仲々の美人である。双方のご主人も会社及び仕事を休んでの応援である。

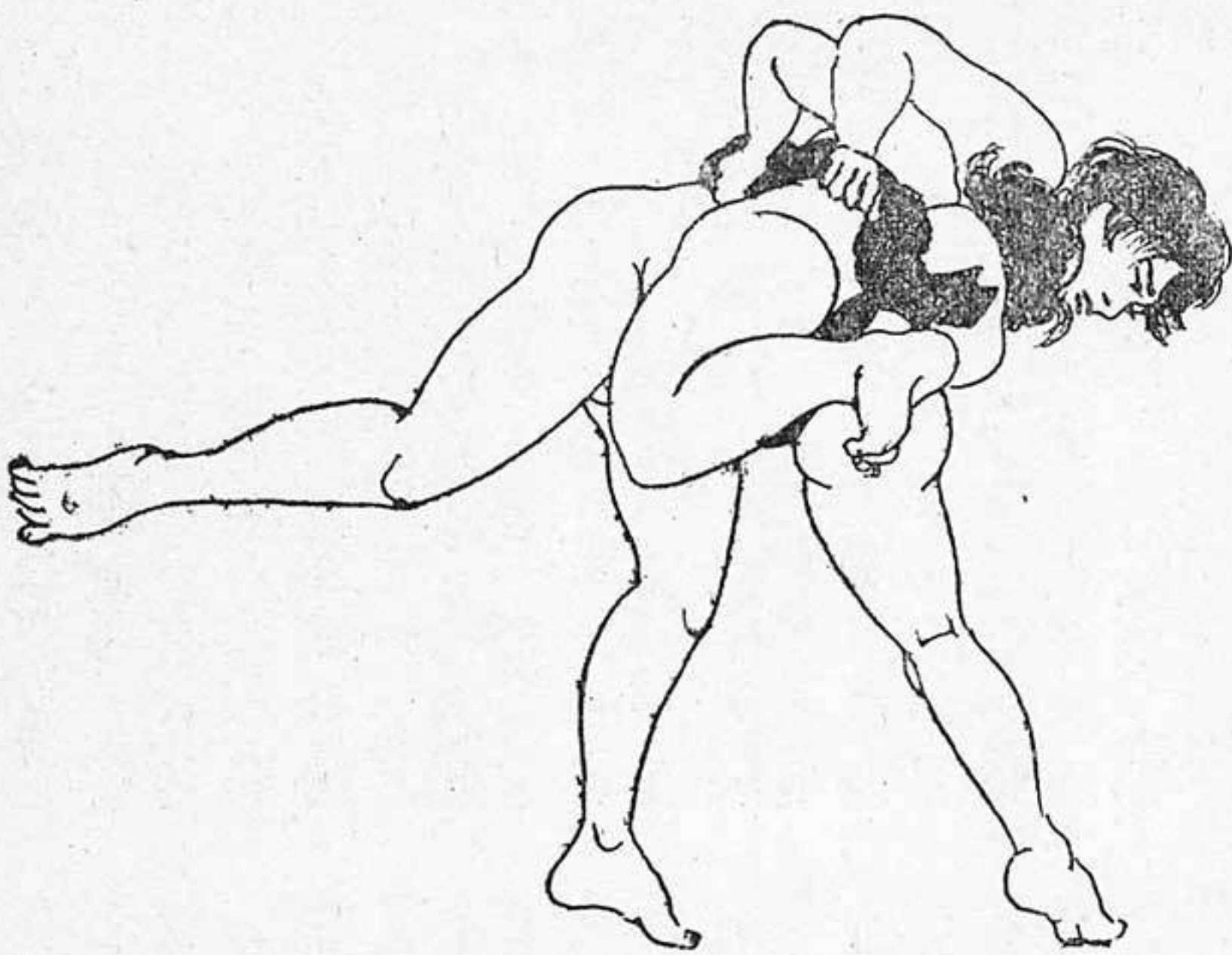
向いあった二人は、よく太っている為、仲

々重量感もあり仕切に入ると、大きい臀部はまるで白い臼のようである。しかし何と言っても女性なので、つやがあり色気があふれている。仕切一回目は気が合わず二回目、同時に立ち上ったが綾子さんの方が踏込みが早くパツと前禪を取るとだだっど寄って出る。典子さんずつと後退し乍らも咄嗟に体を開き、右からのすくい投げを放てば綾子さん危うく倒れそうになったが、相手の禪を取っていた為によく残し逆に寄返す。典子さん、何をとばかり寄り返そうと力を入れた処を、綾子さん下手投げを放つと典子さん、ぐらぐらと傾き一瞬ハッとしたが、良く立ち直ると、右を差し禪をしっかりと取る。観衆はウァーウァーの声援拍手喝采である。

二人は上手下手と充分に引き合って、ガツプリ四つに組んでの寄合いで、只相手を寄出そうと一生懸命もみ合っていたが、その中、体重の勝る典子さんが、じりじりと寄って出て綾子さん土俵を割るかと思ったが、綾子さん、最後土俵際迄来ると顔を真赤にしてこらえて逆に寄り返さんとした刹那、待ってましたばかり引き落し気味の上手投げを放ち、決まらないと見ると続いての上手投げで、さしもの綾子さんもたまらず土俵中央見事に横

転したのである。

負けた綾子さんは背やお尻の砂を払う事も忘れ恥しさの余り顔も真赤になりうつ向いて逃げる様に控室へ引上げれば、勝った典子さんは「勝角力にかなう典子さん」と行司より鏡餅と御祝儀を貰ってにっこりとしたが、



見物の中より「女大鵬」と声がかかると、一ぺんに顔を赤らめ足早やに控えへ引上げたのである。

さて次は二番手であるが、土俵溜で待機している四人には籤ですでに相手が誰であるか知っており、その相手も数メートルを距ててお互い向い合っている為、如何にも冷静をよそっているが心臓は早鐘の様にトンと脈打っているのではなからうか。昨年出場した婦人に聞いた処、その時は只勝つ事だけしか考えないので、もし負けたらという考えが浮び、負けた時の事を思うと、その恥しさは一しおなので溜で待機している間は、なんとも言えない気持になるそうである。

○

二番手は誰かと見守る中に呼び出しは「東しー熊田恵美さん、恵美さんー西しー青谷房代さん房代さんー」と呼び上げたのである。さあ大変な取組である。この二人は部落では勿論の事、村の婦人会の中でも特に美人として聞こえの高い人で、中年太りの為か共によく肥えて立派な体をしている。見物人もこの角力は面白いどころが強いのか「恵美さんだ」「い

や房代さんだ」と、大さわぎをしている。なぜこのように観衆がさわぐかと言えば、これには次の様な理由がある。

この二人は部落こそ違うが、夫達が親友であった上、婦人同志も気が合ったのか非常に仲が良く互いに親類の様に付合っていたが数年前、房代さんの夫の正雄さんが交通事故で亡くなり、その時は恵美さん夫婦は親類以上に奔走し何かと親身になって世話をした。

幸い房代さんには子供が無いので、少しの田畑は年寄りがすると言うので村の農業組合へ事務員として勤める事も出来、皆非常に喜んでいた。一昨年市場の青果会社の招待による一泊旅行があった時、房代さんは仕事の都合上、外の婦人六名と共に参加し、その時に恵美さんの夫と只ならぬ関係が出来たと言う事である。両家で一もんちやく起きたが、恵美さんには十才と六才の二人の子供迄あるので、どうにか治まり、それ以後両者の仲は剣悪となり未だに道であっても挨拶さえ交さないと言うことである。この二人が抽籤のいたずらでこともあろうに観衆注視の真只中、禪一本の裸で取組む事になったので、見物人もこの角力は面白い大変な角力だと拍手喝采である。

呼び出しに応じ二人は、この一番是非勝たねばと斗志をひそめて立上り、恵美さんが前禪をポンと叩けば、房代さんも長じゅばんを捨て同じ仕草をして土俵に上る。恵美さん房代さん共に上背は五尺三寸体重も同じ十七貫と全くよく似た体格である。

二人は浪の花をパツと勢よくまき、蹲踞の姿勢で対峙し型通りチリを切ったが実に見事な肢体で角力には打ってつけの程よく肥えた体、大きな乳房、重量感のある餅腹、彫の深い臍がのぞき、それにハチ切れんばかりの太股、誠に形容しがたい姿体で肌の艶などを見ていると、とうてい三十才を過ぎた女性とは見えない。しかも美人同志であるこの二人が女性の意地として互に負けられない角力を取るのだから、見るものとして興味深々全くこれ以上の見ものはない。見ていても全く力が入る。他の観衆も同じと見え息をつめて見ている人や興奮した婦人の中には「恵美さん、負けたら恥よ。頑張って」と声援すれば「房代さん、気張って返り打ちにおし」との声も掛かる。皆思い思いの声援が乱れ飛ぶ場内は興奮のルツボと化した。

二人は恥しさも忘れ土俵の上赤房白房の下で四股を踏めば、その度に肉付きの良いし

むらもビリビリと震動し、大きな乳房もブルンブルンとゆれる。その躍動は実に見事なものである。

行司が「かたや恵美さん、恵美さん、こなた房代さん、房代さん、一番角力にござります」と差し招けば、土俵中央蹲踞の姿勢で向いあった二人の顔にも真剣な斗志があふれていて双方の眼には火花が散っているようである。見ていても一段と力が入る。仕切一回目、房代さんが少し早く仕切直して二回目は恵美さんが早すぎ、三回目ほとんど同時に立上り激しい突っ張り合いから恵美さんが房代さんの頬を一発パシッと張ったので、房代さんもパシパシと二発張り返すと又もや恵美さん張れば房代さん負けじと張り返して双方張り合いとなり、一瞬ケンカ状態となったが房代さん咄嗟に頭を下げ、さっと右を入れたら左も入れて双差しとなりぐいぐいと寄る。恵美さん後退し乍らも両上手を取り踏みこたえ、盛んに巻返しをねらうが房代さんもさるもの仲々巻き返えをゆるさない。瞬間二人の体が動いたと見た時、素早く恵美さんは巻き返したが、その時房代さんが下手投げを放った。恵美さんぐらぐらと傾き一瞬ハツとする。素早く立直ると上手投げを放ったが房

代さんは下手投げを打ち返し、投げの打ち合いとなり、その度に大きな尻が二度、三度回転する。観衆は拍手喝采大喜びである。土俵上上手下手充分に取っての激しい寄合いが続く。

この時、行司『待った』である。あまり激しい角力で恵美さんの立禪がゆるんだので行司は締め直し、房代さんの方も締め直しているが、二人の白い肌も赤くなり、きれいにセツとした髪の毛も乱れ一すじ二すじ汗にまみれた頬にいき息づかいもハッハッと荒く腹は波打ち、彫の深い臍が睨み合っている。

二人の伯仲した好勝負に観衆も拍手喝采で「好い勝負だ」「頑張れ」「負けるな」「気張って」と声援の内、禪を締め直した行司は双方の背を「パシッ」と叩き戦斗再開である。瞬間二人の太股は躍動し腕に力が入る。

房代さん相手を引きつけ腰を落し「グイ」と吊って一歩二歩出たが、恵美さん、足をバタつかし大きな尻を左右に振って防いだので吊り切れず残されてしまう。咄嗟に左足を飛ばして二枚げりを見せたが決らない。幾分房代さんの方が優勢である。又もや四つに組んでの寄合い押し合いの大角力となり、全くの力競べ根競べとなった。見物人も房代さん、

恵美さん、頑張って、しっかりと声援は飛びに飛ぶ。二人の体からは脂汗が出てつかれきった様子である。

「もう一息だ」の大きな声援に恵美さんの曰のようなお尻が左右に振れた瞬間、房代さんの上手が切れたと見ると恵美さん、腕を返し曰腹をしやくり乍らぐいぐいと寄る。房代さん懸命にこらえるも、じりじり寄られあわや土俵を割るかと思えたが、両上手を取り剣が峰、顔を真赤にして打ちやろうとする。恵

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

美さんの大きな乳が房代さんの乳におっかぶさり頬と頬とがくいつき曰腹が餅腹にのしかかる。恵美さんの女体が房代さんの女体を上から圧して二個の女体は一体となつてずしんと地響を立てて土俵下に転落した。

恵美さんの寄倒しの勝ちで軍配はサツと東に上る。「ウワー」と言う何とも言えない様な大喚声が上がったが、二人は仲々起き上らないので喚声も次第にと切れ、一瞬、息をのんだが、漸くして先に恵美さんが起き上った。

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますが、ご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

恵美さんは、髪は乱れ禪は今にも解けんばかりの姿で、太股を打ったと見えしきりにもんでいたが、禪のゆるんでいるのに気付き急いで直し、それでも元氣に行司の「勝角力にかなう恵美さん」と勝名乗りを受け鏡餅と御祝儀を受けた。

一方負けた房代さんは、倒れた時、足を痛めたと見え、次の北出静子さんに手を貸してもらい起上ると、左足をかばい乍ら引上げたが、乱れた髪から背中一面お尻迄も溜の土が付き禪もゆるみ無惨な後姿であった。見物人も負けたとは言え根限り斗い善戦健闘した房代さんにも、われる様な拍手を送ったのである。

○

いよいよ本日最後の取組みとなり、東方藤田初乃さん、西方北出静子さんである。初乃さんは五尺三寸で十六貫五百。静子さんは五尺三寸五分の十八貫と言う、よく太った婦人である。こんなこの場の雰囲気にもなれ、呼出しに応じて土俵へ上り元氣に四股を踏む。観衆も四股に合せ「よいしょ」「よいしょ」と掛声をかけている。行司も「段々と取り進みしたる処、片や藤田初乃さんー初乃さん。こなた北出静子さん、静子さんー。こ

の角力一番にて千秋楽にござります」と二人を招く。やがて仕切に入り行司の「睨み合っ

て」の声。仕切二回目、ほとんど同時に立上

り激しく「ブチッ」と音をたててぶちかま

す。素早く右を差した初乃さん、間ばつを入

れずに右からの下手投げを放つと、二足三足

よろよろと前にのめりかけた静子さん、危う

く向き直ったが、ここぞとばかり突いて出る

初乃さん、突き出されそうになったが、俵に

沿って巧く逃げ咄嗟に相手の褌を取ると、さ

ればと初乃さんも上手を取る。静子さん左も

入れたと見ると右ひざを相手の股に入れ、大

きな櫓投げを放てば、攻守逆転。初乃さんの

体が半回転し、きれいに決り初乃さん土俵中

央どしんと地響を立てて叩きつけられたので

ある。

余りにも見事に決り見物人も「ウワ」とも

何とも言えない喚声が上った。起き上った初

乃さんは余りの痛さの為、目に涙がたまっ

いた。一方勝った静子さんも自分でも驚いた

様子であったが、観衆の拍手が起り、始めて

にっこりと勝名乗りを受けて引上げたのであ

る。

村人も

「今年の角力は良かったなあ」

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の

「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を

本年二月に刊行しましたところ、多数のマ

ニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体

緊縛写真アルバムとして刊行いたしました

「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちの

うちに売切れとなり、今では見ることもさ

「ほんとだ、今日のが一番だ」

「それにしても、来年は君んとこのかあちゃ

ん、危年と違うか、仲々のグラマーだから出

されるか分らんぞ」

「そうだなあ、今晚あたりからでも手をとっ

て教えるか」

「何を教えるんだか、分ったもんじゃない」

など話しつつも満足して家路についたので

ある。村人も今年は大杉部落が勝ったから、

明日から果樹園の手入れに精を出すことであ

ろう。

（終り）

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここ

に限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りま

した。本誌グラビヤ口絵では種々な制約の

ため、思いきった企画編集を遂行できませ

んので、直接販売の限定版写真集によって

ファンの方々のご期待に応えたいと思いま

す。

今度、限定版第二号として、前集とは、

いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作

製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇

る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美し

さを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するために、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

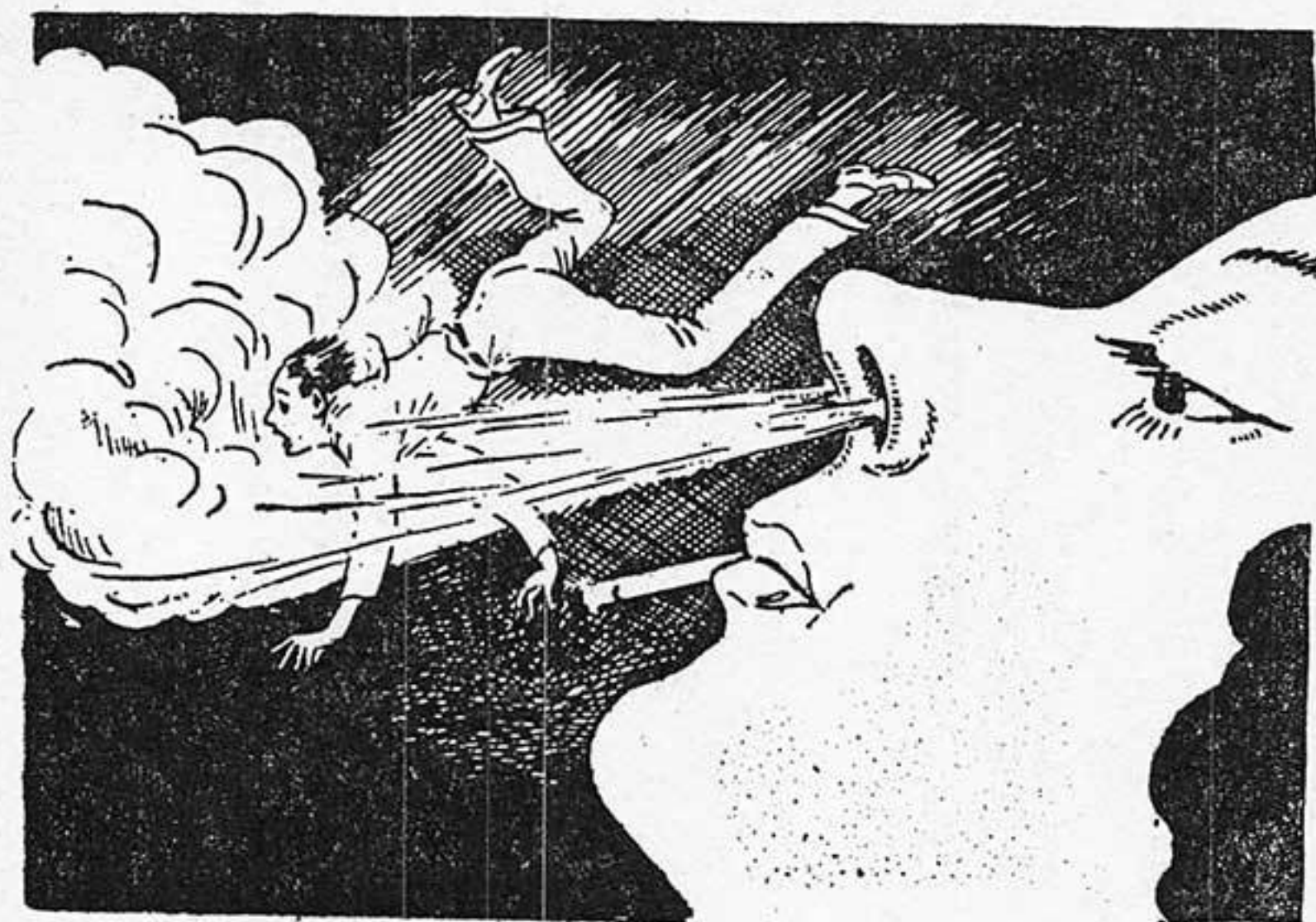
「美しき縛しめ (第四集)」

- (一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
 胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
 (二)、グラマーの縄目……………長野 良子
 むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
 (三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
 うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
 (四)、鼻をいためつける……………長野 良子
 指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
 (五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
 とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
 (六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
 白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
 (七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
 責め抜かれてぐったりとなった女体。
 (八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
 アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
 (九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
 恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

- (一)、首締め縛り……………新井マリ子
 のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。
 (二)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
 開股しぼりの上に非情の猿ぐつわが。
 (三)、開股棒しぼり……………新井マリ子
 革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
 (四)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
 縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
 (五)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
 責められて急所の痛さに思わず呻めく。
 (六)、首縄と足縄……………大塚 啓子
 首に掛った縄と足の縄が女体を変えろ。
 (七)、縄に狂う……………大塚 啓子
 悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
 (八)、足首の縄目……………大塚 啓子
 反りかえった足の指が縄目に可愛い。
 (九)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
 二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
 (一〇)、緊縛美の誇示……………長野 良子
 誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
 (一一)、美しき肢足……………長野 良子
 投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
 (一二)、全裸緊縛の羞らしい……………長野 良子
 はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
 (一三)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
 両手両足を縛られて一本棒に晒らされる。
 (一四)、けがされぬもの……………五月亜紀子
 清純な美しさが、この全身に漂っている。
 (一五)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
 晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
 (一六)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
 荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
 (一七)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
 珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
 (一八)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
 厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

- (一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
 縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
 (二)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
 瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
 (三)、棒責めの序曲……………新井マリ子
 両足首の両端に縛られて、さて、
 (四)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
 さあ、打って、とながし目の艶なこと。
 (五)、素晴しき美身……………長野 良子
 輝くような美しい裸身もあらわに。
 (六)、ポリウムを縛る……………長野 良子
 縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
 (七)、むくれた双丘……………長野 良子
 情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
 (八)、開股しぼりの表情……………大塚 啓子
 開股しぼりになった女の顔のアップ。
 (九)、開股しぼりの全貌……………大塚 啓子
 両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
 (一〇)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
 ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
 (一一)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
 放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
 (一二)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
 押し入った強盗は女を縛って転した。
 (一三)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
 家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
 (一四)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
 台所で縛られていたぶられるシーン。
 (一五)、美しきトルソ……………大塚 啓子
 胸、臍、ウエストが縄によって捕捉。
 (一六)、遅ましき臀部……………大塚 啓子
 くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
 (一七)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
 後手高小手の美しさは素晴らしい。
 (一八)、ビニール・コード……………大塚 啓子
 柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

S
の
女
性



読者通信の女性たち ::::::::::::::

(三十九年度の読者通信から)

< 芳 野 眉 美 >

A 横溝とみ子 (東京都) さん

三十九年七月号読者通信。

「潜在的なサドから現実的なサドになったのは、あるきっかけからでした」

とあり、

「いつもより三十分位早く家を出て登庁しました。そして私の椅子の上に私の仕事着用のスカートをひろげて顔をうずめている牛乳配達の少年を見てしまったのです」

明快な文章で好感がもてます。

「私の近づいたのも知らないで椅子の上に顔をふせているのです。今迄きちんとたたんで机にしまっておいたスカートが、時々くずれていたり、サンダルがベトベトにぬれていたり、おかしいことがあったのですが、たいして気にもしておりませんでした。」

横溝とみ子さんは見つけられて真赤になった少年を激しく詰問します。そしてその結果「暗い階段のおどり場、足の裏を舐めさせた後、彼の顔の上に足をひろげて立った私も流石に次の動作はためらってしまいました」

おどおどしながら自分の性癖を告白する少年、詰問された女性の足の裏を舐めさせられる少年、まるで絵に書いたようではありません

んか。

「一週間後、ふたたび、この様なことをしようとしたが、人が来てしまい断念してしまいました」

とある。少年も残念だったことでしょう。で――

「マゾの男の人達に私の体験を話し、もし気に入った人がいたら、プレイをしてみたいと思います」

五尺四寸、十四貫、二十四才のB.G.

「私の希望としては弱々しい小柄な人を相手にしたいのです」

さて、横溝とみ子さんの手紙に受けて立った男性のMの手紙を通信にさがしてみると、まず八月号に二通――

その一

「自慢にはなりませんが、腕力には全く自信がありません」

という二十六才独身のサラリーマン。

「都内のある一流大学を卒業して」

プレイに一流大学は関係ないな。

「現在私の身のまわりの人達、親、兄弟をはじめとして誰も私の性傾向を知る人はいない筈です」

だから、どうなんだ、という答は書いてあ

りません。これでは舌たらずな文章になってしまう。

「どうしてもプレイをとはいいません。どこかの喫茶店で、お話しを交わすだけで結構です」

プレイをしたいくせに。

「未だ一度もプレイの経験はございません」

その二

「マゾといっても初歩ですので、貴女の御気に召すか解りませんが、一度お会いしてお話をしてみたいと思います」

四十五キロ足らずの小男氏の手紙。

「御気に召されれば、私の全身を捧げてくありません」

結構なことです。

九月号には三通――

その三

「女王様にパンツ一枚にされ、四つんばいにされ、女王様にのせ歩き廻り、それからくすぐり責、鞭打ち、針責、ローソク責等、どんな責めにも耐えるつもりです」

空想的な幼稚な手紙の見本。

「この便りが掲載されてから、翌週と翌々週の月曜日の午後三時渋谷駅のカラーテレビ前に、左脇に週刊誌を持って立って居ります」

二十二才の男性。彼、これで横溝さんに会えると思っているのかしら。

自己紹介もしていない一面識もない男に、若い女性が訪ねるものですか。それに、渋谷駅前に左脇に週刊誌を持っている男の数がいったいどのくらいあるか知らないのかしら。

無用な手紙は書かないのと同じでしょう。

その四

「私は小柄でまだ幼い顔をした。二十一才になる青年です。七月二十六日(日曜日)一時から一時十五分まで代々木駅の伝言板のところに週刊紙を右手にもって待っていますから、(××さんの弟ですね)と、およびかけ下さい。私は(横溝様のお姉さまですか)とお答えいたしますから」

これを読んで笑わない人はユーモアを解すること知らない人だ。俺もこんな手紙を書いてみたい。とても吹き出しちゃって書けないよ。精神年令小学生。

これまた一方的な手紙の見本。

その五

「強い肉体的苦痛には堪えられませんが、憧れの女王様の犬になる事ならば何事も厭いません」

三十一才の「既婚M男性」のよし。

「個人的な秘密は厳守致しますし、一切御迷惑は及ぼしません」

これはプレイのルールでしょうね。

最後に、十月号の一通を紹介すると――

その六

「私はM傾向の男子ですがM傾向も軽度のものを好み、ムチ打ち緊縛等は好みません。女性のふくらはぎで顔を押し込まれたり……」

これなら普通のSEXじゃないの。

「足裏からふくらはぎ、ふとももに足なめと接吻が出来たら幸です」

これも普通のSEX。ペッティング。

「私は性格も貧弱ですから、貴女にこわさを覚えさせる様な男ではありません」

御丁寧なこと。

「奴隷云々と人間性を無視したプレイよりももっと御互いに温い気持で民主的に研究して話し合って、御互いの快感をデイトの度に倍増すると云う様な方向に持って行きたいと思っています」

「民主的」にね。結構なこと。

以上六氏とも御自分の連絡場所は指定してありません。せめて局止めでもと思ったのですが。これでは連絡がとれないからデイトをしたくても出来ませんね。もっとも、六氏と

も編集部が回送してくれるだろうぐらいな気持なのでしようが。原則として編集部は回送しないのでしよう。

一通ぐらい、M的男性らしい手紙を拝見したかったのに残念でした。

横溝とみ子さんが相手をみつけてデートしたかどうか私は知らない。

B 有光令子（東京都）さん

「男性の顔を足で踏みにじって、私の汚れたパンティをすっぱりかぶせたら素晴らしい事でしょうね」

という、私の領分の通信が十一月号にあった。

「ドレイの男って、どんなプレイが一番好きかしら。お尻かしら、足の裏を舐めさせる事かな。それともパンティかな。何んでしたら犬にしてあげますわ」

名文です。いいなあ、この文章。好きだ。

「ドレイの男を私が命令一切服従させるなんて、やっぱり女王なのね……」

で、この通信は終わっている。

「顔、スタイル自信ありますのよ。フフフ、……会社の方は白川由美に似ていると……」
おわかり。二十一才のBG。

「マゾの方で私のドレイとしてプレイしたく思います。思う存分奉仕させるつもり。だって私は私の若さと美貌を誇り守る為にドレイが必要じゃないかしら……」

女王様がやさしい手紙を書くと、どうだろう。長い手紙が十二月号にある。その一部を紹介。

「今は過渡的な暗黒時代です。有光令子様のような、人間の中でも女王となるべき方が奴隷を一文もお持ちにならず……（以下略）」
とにかく、こういった調子でエンエンと続くのですから、読むほうがクタビレてイヤになる。まあ、続けましょう。

「私の本来の居場所は、貴嬢様のお尻の下なのでございます。今日まで馳せ参ぜず仮の姿とは云え、人間の方々並みの生活を送っていた私の罪をお宥し下さいませ」

珍文の見本。

「でも幸い、私奴はまだ二十七才、女王様のお召しが掛った今日という日まで、つがいにもならず一匹だけで暮して居りました」

「つがい」ね。

「令子女王様はもう御不自由なさらなくて済みます。お腰掛けになるお椅子、お好きなどころへ歩ませる馬、いつでもお気軽に御用を

お足しになる移動トイレが、すべて兼用の一匹で整いました」

とか、

「私は始めのうち、きつとひどい下痢に悩まされるでしょう。何故なら貴女様の下さる餌にまだなじめないからです」

非現実的な手紙を書いて自己満足なさっているのなら、それで結構ですが、いつまでたっても御自分の手にSEXを握ることができないのではないでしようか。

空想がSEXだと思っていいたら、女なんか知らないよ。現実には、女がいるんだぜ。

四十年一月号に二通――

その二

「貴女様に穿き汚されたパンティを頭からかぶせられ、その一番汚れた所の臭いを嗅がされたり、仰向けにねかされた頭の上に貴女様の偉大なるオヒップがのせられ、息もとまらんばかりに敷き潰されたいのです」

こういう手紙が、Mの手紙というのだろうか。私は抵抗を感じるのですがちよっとね。

「貴女様が御使用済みになったチリ紙をなめさせられることを夢みます。よじれ、破れたチリ紙をおし頂き、その臭気にむせび、神酒のかぐわしい味に、うっとりとなることこそ

小生の夢であります」

ささやかな夢ですのね。まあ、いいでしょう。

「最後に小生の鼻・唇・舌がチリ紙の代りにされることを願いつつ、この一文をわが女王令子様に捧げます」

その三

「私はM的な性格の強い者です。平素は慎んでおりますが内面は二重人格なのです」

二重人格はいけませんね。絶対いけない。

「浣腸責め、舌奉仕等、羞恥的なものと、肉体的な激苦とがミックスされたプレイが私の理想とする処です」

理想ね。

「どんな激しいムチ打ちでも私を征伏するとは出来ません」

これを、もし東雪枝さんが読んだら大層怒るでしょうね。ムチ打ちの苦痛も知らないでイイキなものだ。

「征伏の宣言は、貴女が私を便器にする時です」

これで続いて三氏とも、女王の便器になりたいことが書いてあるわけですが、便器の意味が理解されているのでしょうかね。

これだけは誤解されたくないですから、は

っきりことわっておきますけど、そう簡単に女王の便器になれるものではありませんよ。

知らない人が、こう書くから困るんです。

私は、この道の常連だから一言書いておきます。私は女性の神酒は好きだけど、便器にはなりたくありません。神酒を愛することと便器になることは違います。

そうやたらに便器にされたらかなわない。

さて、この二十二才の彼は、

「私はいままで一度もサド女性との経験のない未熟者です」

とある。それならそれで、Mの手紙が書けないものでしょうか。それを云いたかったんだ。背のびする必要はないよ。

素直な現実的な手紙こそ空々しい空想的な手紙より、女王様の胸を打つと思うのですがいかがなものでしょう。

四十年二月号に三通――

その四

「有光令子さんのような女性によって縛られ自由にされる男性のほうが、むしろ女性崇拜というか、美しきものに服従するという事で自然であり、女性もまたふだん服従させられている男性を思うがままに自由に出来る痛快さを味う事は、ストレス解消とともに必要で

はないかと思ひます」

せめて、この程度の通信を読ませて下さいよ。

その五

「有光令子さんの記事を読みました、お会いして話し合い、その上でよろしければ、出来るだけのご満足を得られるよう努力いたしたく思ひます」

あつさりして、普通の手紙と同じですね。最初はこれでいいでしょう。ただし、

「連絡方法、奇ク通信欄へ願ひします」

はいけませんね。御自分から連絡先を指定するような勇気がなければ、相手を得ることは出来ませんよ。そうでしょう。

「小生外国航路の高級船員」

とある。文章も上手です。

その六

それでは、局止めを指定した三十四才氏の通信を。

「私も平常は社会に出ている身体ですので、秘密とあまり永い時日のプレイや顔面にキズつくようなお仕置だけは女王様のご慈悲を以ってお許し頂きたいのです」

といいながら

「どんなに責め鞭打たれても、必ず女王様の

足下に服従をお誓ひいたします」

とあるのはちよつとおかしうないかしら。社会生活とプレイの谷間を埋めるのが上手な人こそ、プレイを味あうことの出来る人なのでしょね。

彼が有光令子さんの美容のために奴隷にされたかどうか私は知らない。連絡先を指定したのだから、有光令子さんの命令書を受け取る可能性はあるわけですからね。

C 下原八重子（東京都）さん

三十九年十二月号読者通信。

「貴男の通信を読んで約半月考えましたけれど、どうしても貴男でなければなりません」

という幸せな呼び掛けがある。嗚呼。

「絶対に奉仕なさい。命令します」

いいねえ、この言葉。

「貴男の思い通りの最高のプレイをやって差上げます」

二十八才、四五キロ、一五六センチ。

その「思い通り」とは、九月号に、彼の通信がある。即ち

「女王様の奴隷犬として飼ひ馴らされて参りましたが、此の度本国に帰られました」

とあるから、外国婦人の犬になっていたの

かしら。

「今迄の体験や経験でいろいろと奉仕させて頂き度いと存じます」

とは、

「足なめから始まって体のクリーニング、その態度が悪いと蹴とばされ口の中にパンティを押し込まれたり、棒でたたかれたり、メンスバンドのボタンが外されイルリガートルが入られる。そして人間トイレ」

というもの。おわかり。

「三十六才、会社役員、一米六五、六十キロ女王様に奉仕する奴隷犬」

下原八重子さんのトイレになっている彼の顔が見たいものだ。

下原八重子さんは、どうしても彼でなければいけないというのだから、うらやましいこと。

四十年一月号に彼の連絡がある。

「通信欄にのった日から毎週日曜日、午後七時から七時半まで、渋谷駅忠犬ハチ公銅像前に、左手に白いハンカチを巻き、右手に週刊紙を持ち、待っておりますから声を掛けて下さい」

というもの。外に、もっと良い手はなかったものでしょうか。何はともあれ、その後の

結果を知りたいものだ。それにしても男性諸氏は、デリケートな若い女性の心理を考えなさすぎる。

待ち合わせ場所を公表したら、かならず非常識なヤジウマがその周囲に居てニヤニヤしていることを考えなければ、相手の女性に対して失礼だとは思いませんか。待ち合わせ場所は、二人だけの秘密であるべきです。

D 津田亜紀子（東京都）さん

「お知らせ」

連載小説 『花と蛇』

今月休載！

連載中の団鬼六作「花と蛇」続篇第九回は作者の都合により今月号は休載のやむなきに至りました。都合つき次第、引き続き連載の予定ですから、何卒御諒承のほどお願い致します。

○ 本誌編集部宛、代理部宛通信をお出しになられる際は、左記宛に願います。

大阪阿倍野局私書函第十四号

天 星 社

三十九年六月号に津田亜紀子さんあての通信が二通ある。

その一

「もとより貧乏で無学で賤しいやもめの僕には、応募資格がないものと自覚していました……（中略）」

こういう手紙の書き方を、私は最もケイベツします。自分でそう思っていれば世話ねえけど、なんと悲しい人生ですこと。

その二

「私は津田様に自ずからを捧げるべく生命以外の全ての社会的人間的権利を津田様に委託するものである」

とか、

「私に加えられるすべての肉体的精神的損傷に対しては、私はすべて権利を放棄した事になり、何ら法律的権利も有さない」

とか、誓約書なんだそうです。

空想を楽しんでいると云ってしまえば、それまでだけど、津田さんは現実に奴隷を募集したんでしょう。空想と現実をごちゃごちゃにしないほうがいいのではありませんか。現実に不可能な誓約書のどこに価値があるのでしよう。そこまで考えたことあるのかしら。

何が、「社会的人間的権利を委託」だと云

いたくなくいますよ。

七月号に三通。

その三

「おみやげとして亜紀子さんの使い古したメンスバンド（メンスを充分にすいこんだ線をつけて）とナイロン・パンティを頂ければ幸いです」

とか、

「人間トイレ！ 素晴らしい。どうぞ遠慮なさらずに（プレーに遠慮は禁物です）亜紀子さんの凡ての排泄物を頂きたいと願っています」

このほうが、ぶしつけすぎるけど、まだ現実的で好感が持てます。

「どうしても声が出てしまうので困るようでしたら、パンティやブラジャーを口中に十二分に入れ、黒のストッキングで猿轡をして下さい」

凡ての排泄物が頂けるものかは知らないがこの程度なら実行可能。しかし、ちよっとひっかかることを彼（四十二才の商店主）が云っている。即ち、

「プレー終了と同時に理性をよび戻し、正常な状態になるべきは申すまでもありません」とは何事か。何が、申すまでもだ。

彼は、プレーをしているときは正常でないらしい。これは困りましたね。正常でない人は社会人として失格です。

私は神酒を飲んでいる最中でも正常です。御安心下さい。

その四

「御気に召しますか如何か、一度テストして頂けませんか」

「日時場所を御指定下さいませ。御命令次第参ります」

あっさりしていてよろしいんですが、御自分の連絡場所を指定しなければ無意味でしょう。

その五

「貴女が要求される奉仕は百パーセントして差し上げる積りですが、程度を越えた肉体的苦痛や乱暴なことは、やりたくありませんし御断りします」

とか、

「ゴムプレイの楽しみを追求する以外は、お互いにプライバシーを侵さぬ事」

とか

「契約成立の後、プレイに必要な品物を購入する際は費用は折半で結構です」

こういう手紙もあるということ。なんとな

くプレイに対する熱意が、ぴんとこないんだなあ、読んでいても。よけいなことばかり心配しているっていう感じなんだ。

最後に八月号に一通――

その六

「縄で縛って戴いてゴム合羽ですっぱり包んで人間椅子にでも、又女王様の夜のベッドにも御自由に御使用賜れば幸甚に存じます」

「トイレばかりでなく女王様の生理帯の代りの御用でも御勤め致します」

「手足をくくって天井から吊し、靴ばきのままでブランコ遊びなどなさっては如何で御座居ましょう」

空想って面白いですね。非現実的な話。いつまでたっても現実にプレイできないまま、いつかは忘れていってしまうのでしょうか。津田亜紀子さんの「奴隷募集」は、三十九年五月号の奇クサロンにある。

十二月号の「奇クサロンに寄せて」でも触れたから、くわしくは書かない。その中に、「自分一人では、どうしても出来ない人間トイレもぜひ使ってみたいのです。もちろんユニンの方だけで結構です」というのがあるのです。

さて津田亜紀子さんの最近の通信は、四十

年一月号にある。

「ゴムマニヤって案外たくさんいるのじやないかしら。結婚なんてつまらない。私にはゴムの生活があります」

明快で気どりがなくて、これが普通の手紙で、読んでいても安心していられるというものです。せめて、こういう手紙を男性諸氏も書いて下さいよ。

では優雅なゴムの生活を紹介しましょう。

「風呂桶の湯はぬるま湯にしておきます。ゴム浮輪に七分目ほど空気を入れ、二つに折りまげて半月形にし、ひもでゆわえます。これでゴムのお鞍ができ上ります。ゴム長ぐつをはきゴム帽子をかぶります。これが乗馬スタイルです。湯に浮かんだ鞍の上にまたがりますと、ゴボゴボと長ぐつの中へ湯が流れこみ重くなります。これはゴム長ぐつの接しよくを良くすると同時に、おもりの役をします。風呂桶のふちに両手をかけ、上体を浮かせるようにしながら、ハイドハイドとお馬のけいこです」

美しき津田亜紀子さんに幸あれ。

(この項・終)

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13型) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

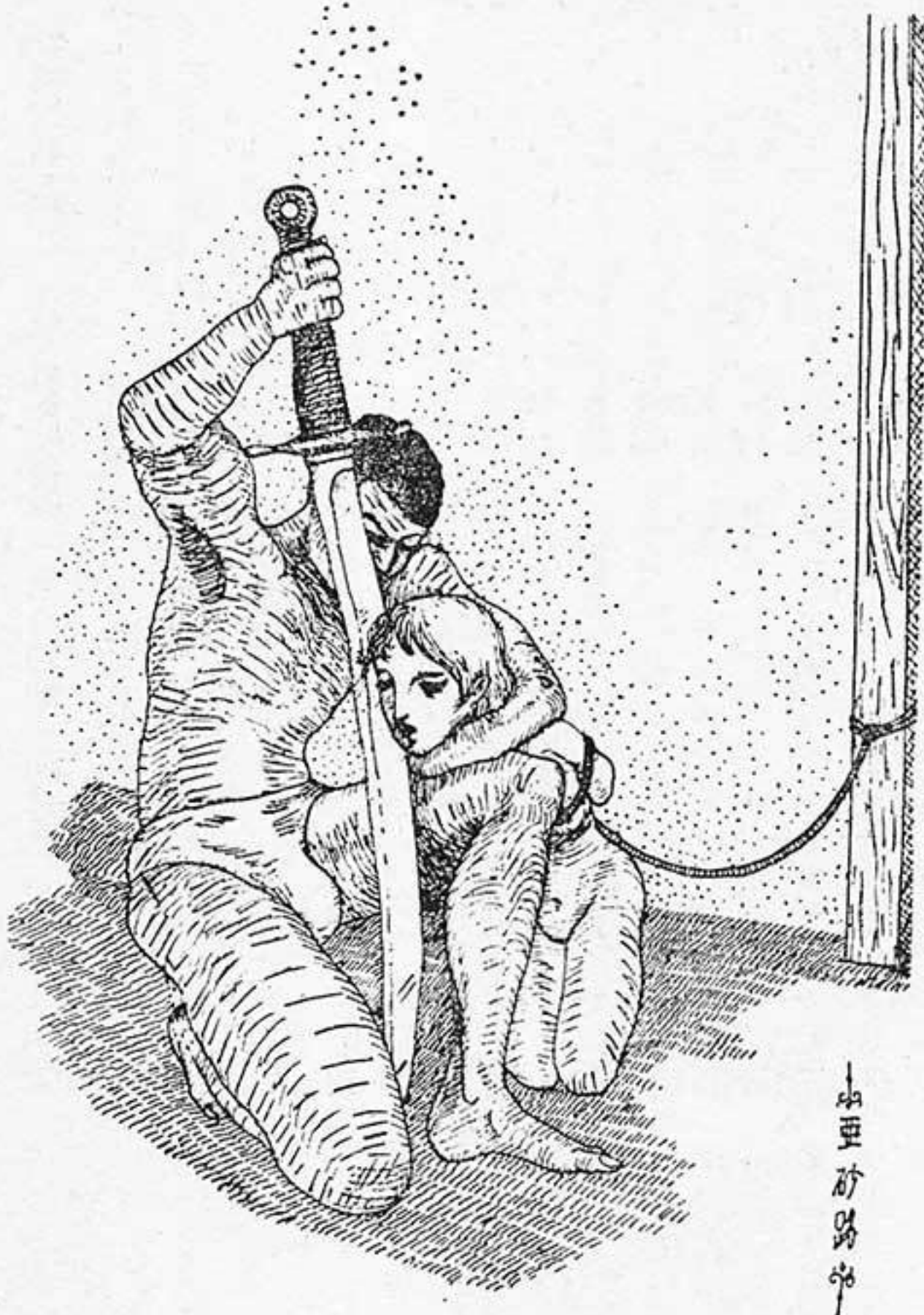
E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	臍そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しほり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しほりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ(東浦)

「見世物」に関するメモ

夜乃探郎



室井亜砂路画

— 室井亜砂路画 —

幸にして、ぼくの「見世者放浪記」が、本誌5月号に掲載された。この一篇3月号の「奇クサロン」『僕のイメージ画』室井亜砂路さんの、SM世界のエキゾティックな、そしてロマンチズムな画と文章に刺激されて、創作されたものです。ぼくも、「因果物の見世物小屋の通りのドロドロした不思議なイメージ」を、こよなく夢み愛しているからです。せめて、夢をみる事も出来ない時代に僕は創作という世界で、僕の「幻の現実」を続けて行きたい——。

◇

今回は、ぼく、耽美主義者、夜乃探郎が、妖しき見世物小屋の数々を、御説明しながら、御案内致しましょう。ほうら、そういつてるまにも竹笹が、カサ、カサゆれて「キャッ」という女の悲鳴がきこえて来ました。御存じ「幽霊屋敷」——。看板には『「度胸鍛錬、お化け大会」弱い者も強くなる。強い者でもこの化物小屋を無事におどろかずに通る者があったら代はいらない』など、でかか大書してあります。この見世物は、いまではまことに珍しい部類に入り、それでも中年の方など、遠く昔、地方の小都市の祭りな

どで、穴地に小屋掛されたものを、御覧になった思い出もありましょうか——。

香具師が小屋をかけて、その中に池を掘り橋を渡し、築山をきづき、一面に竹笹を植えて、その、ところどころに、種々と珍奇な張子の人形、化物などを仕掛する。乱塔場があるかと思えば、番町皿屋敷があり、（お菊のユウレイが、一枚、二枚と皿を教えるアレデス）羽鳥水江女史が、よろこびそうな、安達ヶ原は鬼婆の出刃を片手に、美女の生胎解剖図も、チャンと用意されています。まア、百鬼夜行、オバケ・オンパレードですネ。さて、丸太で組んだ小屋を、幕でスッポリとつつみ、薄暗くし、裸の豆電球が、申しわけ程度に、二、三カ所位、灯いてます。客は恐いもの見たさで、夕涼みがてらにゾロゾロ入る。香具師が数人、皿屋敷の床の間とか、橋の影とか、アチラ、コチラにかくれて、適当に、糸を引いて、お化けをヒュウドロと出したり若い娘と見れば、竹笹の下あたりから、毛むくじやらの腕をニューウツと伸ばしたり、けっこうやる方も楽しみ、客も、おどろくという、スリル満点の世界だ——。

ところで、つい、五、六年前ごろになりますようか。世は上げて「リバイバル・ブー

ム」という言葉が流行しました。そこで、この昔風のお化け達も一役買って、花のお江戸ならぬ、大東京は空の下で、名称も「お化けショー」となって、お目見得した。この当時の、新聞切抜を、スクラップしてあるので、御紹介しましょう。こちらは、香具師の手によるオールソックスなものでなく数百万円もかけたオール電気仕掛の、コンベア・システムだ。『お化けも「リバイバル」』というタイトルで、「ライトがふっと消えて「ヒュードロドロ」の無気味な音楽、あちこちからあがる「キヤーツ」「ワーツ」という悲鳴——

都内多摩川園及び後樂園の遊園地にもうけられた「お化けショー」はグレン隊も海から帰ってきた今日この頃、むしろ盛夏より多いお客さんで賑わっている。後樂園の「お化け屋敷」は五九五平方メートルの面積一ぱいに竹ヤブがつくられ、時価一万円〜二万円もするという人形セットが六つ、本所七不思議や安達ヶ原、戸板流しと、やはり古風な「名所」ばかり。工費二百万円、アルバイト二十人を雇っての涼味サービスだが、場内を勝手に歩きまわるお化けもいる。これも一時間交代で雇われているバイト学生の一人。『立っているだけでも楽しいですよ。セットをのぞいた

瞬間にそーっと近よるんですよ、するとびっくりしましてネ。でも男は中・高校生など「ナーンだ」って別におどろきませんネ」と楽しそうだ。首すじをなでるはすの葉、空中からとび出す髪ふり乱した死人の顔、ロープにつないだ人形と分ってはいても、たしかにキモは冷えるお膳立て。しかもキモは冷えるが場内は暑い。約十五分恐しさからのがれて外へ出ると、みんなヤレヤレといった表情だ。

一方、多摩川園では三三〇〇平方メートルの会場に、五百万円をかけて造作。一ツ目小僧、釜ユデ場、化け物バーベキューなどオール電気仕かけのコンベア・システム。しかし恐がらせの「本番」となるとやはりバイト学生がけん命な作業、中には「なんだ、こんな人形か」とひっぱるカミナリ族もいて、天井から「やめて下さい」と逆に悲鳴があがるから愉快だ。このお化けショーは、一日平均二千人。土、日曜には、五、六千人の入場者があるという。

以上、適当に抜萃したが、この記事には「人間バーベキュー」という珍奇な写真があり、全裸の美女らしき？ が、串ざしになっており、そばの石の上には鉄棒をもった一ツ

目小僧が立って、はなはだ、えきぞていっくな残酷風景を示していた。

◇

「曲乗りオートバイ・ショー」っていう見世物を、僕はK市の祭りで二、三年前に見たことがある。これは高さ約七メートル、周囲が約十五メートル位のたる型の実演場の中を曲芸師がオートバイで一周する。まことにスリル百パーセント。ものすごいスピードで、下より、上まで疾走、また下るというわけだが――。見物人は、仮設されたカイドンをのぼり、上部のたるのふちから、内部をのぞく。会場は、万国旗が、秋風にはためき華やかだが、郷愁としての残酷さを暗示し、ぼくは、オートバイが疾走する度、ガタガタとゆれるたるのふちをつかみ、ハラハラして見ていた。ぼくの隣りにいた商人らしき中年男が、かつてのショーを見物最中、たるのふちから曲芸師が、オートバイもろとも、外に飛出し惨死した現場を見たことがあると、語ってくれたが……。

このショーの呼物は、革のジャンパーに身をかためた若い男が、白い綿のマフラーも、さわやかに、オートバイにまたがり、後の台には、美女が、日の丸の小旗を二本、両手に

かざし、両者一体となって、たるを一周するというものであった。美女の笑顔が、見物しているぼくの顔前に、一瞬、クローズ・アップされて、また離れる、この一場面は、いまも、ぼくの頭に、生々しい印象をともなっている思い出させるものだ。

◇

見世物の、そもそものはじまりは、まことに古い。いま手もとに持っているこの種文献にも

「軽業は、軽芸とも書き、香具師の方でもやはり同じこと、外の呼び方はない、これは少しも秘密にする必要が無いからであろう。奈良朝時代支那から伝来したもので、放下蜘蛛舞から、さらに一変したもの、これが見世物の元祖というから、今日続いて興行されるものの中では最も古い歴史を保持しているわけである。延宝年間、江戸境町芝居見物番付に、日下開山かごめけ師、竜王連之丞という者が元祖であるよし――。」

となっているとところから、現在、ジントの音も、懐しいサーカス小屋の、原形は、すでにこの時代から、一般大衆のファンの拍手を浴びて続いてきたわけだ。

◇

ラジオも、テレビもない昔は、何んといっても、庶民にとって手軽なおあそび場所、で、チヨット位、それが、色っぽいといっても、年に一回のお祭り日か、短期間の仮設興行、その筋でも、あまり、取締りはやかましくなかったようだ。ぼくなども、小学生の身で、けっこう、もろ肌ぬぎの、熊娘のお身体あらためなど、ろくにわかりもしないで、見物席の前に陣取って、見物したものだ。そう、若い年になってからも、雀百までの、ヤジ馬根生ぬけがたく、あそこで、「ライオン・ショー」をやっていると耳にすれば、仕事など、そっちのけ、バスはおろか、汽車に乗っても、見物に行く。終戦まもなく、東京に商用で出かけた時、浅草で、久し振りに、その名も「ナントカ曲馬団」という（サーカスとしないところがうれしい）ものを、見物したが、ぼくは、あの「旅のつばくろ淋しくないか、おれも淋しいサーカス暮し……」の、メロディーを耳にして、思わず、まぶたの底が、ジーンとした。この浅草は、昭和26年11月号刊『あまとりや』によると「好色見世物抄談」松浦泉三郎が、次のようなことを書いて

いる。

“チン列のはなし” 浅草、観音堂脇の仮設

見世物小屋といえ、浅草人種は先刻御承知の、終戦以来唯一の六区における見世物小屋で、たしか、関東甲州屋、稲村興行社の経

四馬孝画

倒錯美緊縛画集

大中判印画紙焼付五枚一組 一〇〇〇円
略号(えと)

(美女のいけにえ)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられているのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台上にころがさず、のに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしか、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であろう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その

営。劇場興行のストリップに対抗して終戦直後かなりえげつないストリップをかけ、まかりならぬとおさえられた時は、すでに、当時

大切な顔の中心に位して女性変貌の中心をなすもので、男心をそそのかる中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちり瞳いたつぶらな瞳。房々とした丈なす黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むっくりと肉がのっているが、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。如何にもうまそうに

五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終つて、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとっては何となく悪夢の一夜であつた。その受難のいまわしい悪夢の一夜ページが、ここに展開されている。

の金で二十万円近くも上げちゃった、というぬけ目のなさ。ストリッパーがたつた二人で、レコード「港の見える丘」その他で数分間の舞台を公開するだけだったが、入場料はタツタ十円というのと、「サアサアいまが始り、始り、果して港が見えましようや否や」てな、見世物独特の呼込みで、押すな押すな盛況だったが……。

ぼくは、実は「ナントカ曲馬団」を見たときか、それとも、二回目の上京のときか。とにかく、このストリップを見た。十円出した組の一人でした。はたして、港が見えたか、どうか？ いまでは忘れましたが。あの観音堂の脇で、おでんとか、やきとり、焼そばなどの屋台がズラリと並んでおり、(現在は、有名なひょうたん池も、埋まって、ナントカ、おあそびデパート化してしまつた。)そのときはひょうたん池は、健在で、ぼくは、遠くいまでは幻となつてしまつた十二階をしのびながら、この池のふもとで、佇み、ストリップ小屋に入ったものです。そう、江戸川乱歩の探偵小説には、よくこの、浅草風景が描かれてますネ。それも、映画街の通りでなく、おどろに妖しき、観音堂の脇あたりの、夜更けです。

昔（大正十五年十二月の初旬から約三カ月連載）東京・大阪両朝日新聞に出た「一寸法師」もそうでしたし、昭和五年頃、文芸倶楽部に連載された「猟奇の果」ETCなど。いや『新青年』には、大正十五年九月号に「浅草趣味」という随筆を出してる位だ。『江川玉乗り一座のなくなったのは淋しいが、時々小屋掛けのサーカスも来るし「花やしき」には昔ながらのダーク人形、山雀芸等もやってるし、平林・延原両兄が乗った木馬館もあるし、因みに、これには僕も乗ったし、最近では横溝正史君が乗って、大いに気をよくした由である。また僕の大好物の安来節もあるし、そこへ時々女角力なんて珍物も飛込んで来るのだ』（傍点は筆者）などを、ぼくはいまでも、よみ返している。

現在『奇ク』で、山原清子、大塚啓子対抗「女相撲」の女斗美フォト・シリーズまで、分譲品が発表される盛況だが、この「浅草趣味」の随筆によると、大正十五年九月当時頃には、まだ、女相撲が東京でも、時々は興行されていたことを知る。見世物への郷愁とはしよせん、それが、いまは淡い追懐につながり、現実的には、衰亡の一途をたどる。仮設興行への哀歌ともなっているところに、こと

四馬孝力作画

時代風俗女体切腹図絵

大判判印画紙鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号「ゆい」

一、座敷牢の美女切腹

無実の罪によって座敷牢に押し込められた美しい武家の娘。牢内に白布を敷きつめ、双肌ぬぎになるや、恋人の顔を見ている前で、真白い下腹をあらわにして、短刀できりきりと切りさばき、左の乳房の下に止めの一刺し。天晴れ覚悟の美女の切腹。

二、介錯に果てる美女

上半身の豊かな肉づきの肌もあらわに庭に端坐した娘。ふつくらと脂づいた左脇腹から臍下にかけて、脇差でしたたかに切り回せば介錯の刃がきらりと一閃。麗わしの美女の細首が、さっと散る血しぶきと共に身首異にする凄絶のひとと

さら、僕のろまんちしむと、えきぞていっくな心をかりたてるようだ。



やいばの付いている丸いハガネが、グルグルうなりを生じて廻り、美女が切断される「大魔術ショー」。可れんな少女が、後手に廻した手首をギリギリしばられ、大きな袋に入れられ、箱づめにされ、奇術師の鳴らすピストルの空砲によって、いつのまにか、ふたをあけると、あざやかな微笑をふりまく、肉

き。

三、駕籠の中の姫君切腹

駕籠で送られる姫君が、気にそまぬ縁談をいとい、腰巻一つの裸身となって覚悟の切腹。守刀を抜き放って豊かな臍下を十二分に切りさばいた上、更に鳩尾へかけてはね上げて、凄惨な十文字腹の切腹。

四、男装の美女の切腹

小姓姿に身を変えた男装の美少女が、豊かな乳房もむきだしに着物の前をくつろげて、白く輝く下腹に突き刺す懐刀の切先。深夜の御殿にくりひろげられた倒錯美絵巻。

五、美女裸身の切腹

も早や逃れられないと決心した美しい腰元は死んで操を守りぬこうと、麗しい白肌のすべてをさらけだし、守刀の短刀で下腹の皮下脂肪を切った上、咽喉元に止めのひと突き――

体美人と入れ代っている。または、片腕をもぎ取られるのもいとわず、ライオンと対決する猛獣調教師によるショー。ぐるてすくな一寸法師が、きりっとした美女の鳴らすムチに、悲鳴を上げ、それがこっけいだど、ゲラゲラ笑う見物人（その中に、僕もいた。）による因果物の見世物など……。あまりにも妖しき、スリルあるSM的な世界の数々を、ぼくは、走馬灯のように、ペンを走らせながら、思い出している。

(終)

〔嗜虐の歴史〕

「東雪枝女史との一日」



三原 寛

命令はその女性から一方的に通達された。

そして、彼女の出頭命令を受けて或る喫茶店の一隅で、初めて彼女へお目通りがかなった時、私はもう身も心も彼女に魅せられてしまっていた。小柄ながら肉付の豊かな、それでいて均整のとれた肢体、そして、整った容貌は理想のサディスティンとして胸の中に描き続けてきた女神像と余りにも一致していた。彼女の前に出た時、既に私は蛇に見込まれた

蛙同然だった。

ホテルの一室、パンツ一つの裸体にされた私は彼女の足下にひざまづいた。

「スリッパを脱がせて！ 口で！」

彼女のおみあしが、私の頭を床に押しつけて土下坐した私の背中に痛烈な鞭の第一撃が走った。

まるで、鞭を手にしてこの世に生れた様な女性であった。鞭一本で彼女は自由自在に、

私を叩かせ、のたうち廻らせ、そしてうちのめした。

しびれる様な鞭の陶醉等という甘いマゾヒストの夢は、最初の一撃でけしとんでしまった。息の根も止るほどの脇腹への一撃、皮膚がはじけ、灼けつく様な背中への一撃。そして思わずとび上る様な一撃が臀の肉を切り裂く。ただもう一撃一撃の苦痛に必死に耐え、これが彼女のサディスティックな快感を満足させるのだというマゾヒストの喜びだけが辛うじて気力の支えとなった。

事実、これは、彼女のサディスティックな快感を満足させて頂く為の饗宴であって、私はその道具に過ぎなかった。鞭の恐しさを身にしてみても思い知らされた。私はプロボクサーだった。全身の筋肉は鋼の様に引締まり、体だけを元手に稼いでいた頃の名残りは、今でも残っている筈だったのに、固く喰いしばった口からは哀れな悲鳴が金切声となり、情なく彼女の足にとりすがった。鞭の一撃を許して貰えるのなら、どんな事でもしただろう。鞭によって心底から、彼女に屈服したのだ。私の首には犬の首輪が取付けられ、それに鎖が繋がれた。

鎖を手にした彼女はベッドに横になる。彼

女の投げ出したおみ足を丹精をこめてマッサージ。彼女はビールをお命じになる。行動はすべて四つん這い。ベッドの傍にうずくまっていた控えている私の前の床に彼女の吐き出したチーズの一片が、スリッパでぐしゃとふみにじられる。私は這いつくばって、それを舌で戴く。ビールのお代り。ビールが震えるグラスから一滴床にこぼれた。

「こぼしたね。こぼしたただけ鞭を上げるからね！ 四滴こぼしたね！ どうなの！」

ピシッと鞭が空を切る。

「ハ、ハイ。四滴こぼしました」

「嘘おっしゃい。六滴よ！ 六滴だね！」

「はい」

「ようし。それでは、その二倍の十二鞭上げよう」

私は心の底から震え上った。背中一面、やけどをした様に腫れ上がり、一寸触れただけでもとび上る程なのだ。十二鞭どころか、一鞭浴びただけで、背中が皮膚が裂けてしまうのではないか……。

彼女は鎖をひきづり上げて私はベッドの上に背中をさらす。彼女の残忍な笑み。

「おまけを二つつけて十四。さ、お礼をお言いい！」

鞭がぴゅっとなると、思わず

「有難うございます」

「そう、欲しいのかい、これが！」

ぴしっ

「さら、お礼は？」

「あ、ありがとう、ご、ございます！」

ぴしっ、ぴしっ

「さら、お礼を言わないか！」

ぴしっ。漸く十四の鞭打が済んで半死半生の身を、ぐったり横たえていると、鞭打はこれで済んだのではなかった。

それから、いろいろと私のミスを取り上げてはお仕置の鞭が加えられ、その度に私は七転八倒の苦しみを味い、鞭を持った彼女の前に私は徹底的に卑屈な犬となり下り、残忍な笑みを浮べて立はだかる彼女の姿が、後光がさす程、私にとっては絶対的権力の女神に映った。

彼女はバスに入り、私にもパンツを脱いで従う様にと命じられた。恥しさに顔も上らぬ私に彼女は前を押えている手を離して直立不動の姿勢をとる様に命じ、バスの中からゆっくりと觀賞する。浴室の隅に洋式の便器がある。床の上に仰向になって顔を便器の上に差し出す様にとの命令が下る。

遂に待望の神酒！ 今や私にとって絶対の権力を揮う女神の地位にある尊いお体からの排泄物、私はこの時はじめてマゾの期待に思わず全身の筋肉が痙攣を起しそうになり仰向けになる事をためらった。

「何をぐずぐずしてるの！」

自分を思うさま鞭で苛んだ女性をマッサージまでし、その上、頭からネクタールをかけられる。私は彼女のお臀の下でもがき屈辱にうめいた。ぐったりとのびた私の身体に湯がざあっと、ぶっかけられる。全身を灼く電撃！ ずっしりとした体重をかけて彼女の足がぼろ屑の様に私の身体を踏みにしり容赦なく湯を浴びせられ、私は氣息奄々として床の上にのびていたのだった。

浴室の鏡を見て私は愕然とした。背中一面を走る赤紫の筋。みみずばれの跡。私は現実には引戻された。家での説明がつかない。夏の間中、上半身裸でいる習慣の私が、この鞭跡は誤魔化しようもない。私ははじめて後悔の念に襲われた。

浴室から出た私をそば近く呼び寄せた彼女は、私の腕をつかみ煙草の火を押しつけた。うーっとうめく私に

「未だ火が消えてない！ 灰皿の代りにもみ

消してやる！」

冷然と言い放つ彼女。

「そうだ、汗にぬれたお前の額を灰皿に使ってやろう！」

迫る彼女に必死で懇願した。身体に家人に判る跡のつく事だけはお許し下さい。と、半泣きで嘆願する私を漸く彼女は許して下さった。

ぐったりと床に崩折れた私に馬乗りになった彼女は「これなら跡もつくまい」と擦り責め。擦るという字は手で楽しますと書く様に、何となく色気すら感じられると思うが、実際には苦しみからいえば鞭打ちにも劣らない。呼吸も出来ぬ苦しみ。のたうち廻る私を体重で抑え込み、彼女の残酷な指先が私の全身を情容赦なく責め苛み、私の身体は彼女の意の尽に弓なりに反り返り、縮み上りそして脇腹の巧みな擦りにあって遂に私は仰向きになる。

私にとり、理想的な美しさをもつ峻烈な女神の前に全身をさらけ出した死の屈辱、彼女の冷酷な指先に私は死の苦しみにあえぎ乍らも、私に自分が男であるという惨じめさを思い知らされ、それが彼女の嘲笑によって、火の出る様な恥しめを味う。マゾヒストの恋：

。神の様に崇めるお方の前に、全身を露呈し、その反応を観察される……しかも、全身を間断なく襲う責めの苦しみは全く私から自由を奪い去り、身動きすら思う通り出来ないのだ。

頻死の状態で床に投げ出され、喉は焼け、息はつまり、寧ろ生きてるのが不思議な位だった。覚えている事は浴室にひきづり込まれ又もや、ネクターを浴びせられて、深い眠りに引き込まれそうになりながら、ながながとのびていた事だ。

そして、あれ程ひどい目に遭わされ乍ら、そして、鞭の跡を家人に隠すのに、いうに言われぬ苦勞をし乍ら、彼女の鞭の一撃を背中に欲して恋い焦がれているのである。しかし彼女は私の余りにも耐え性のなさに失望され、ご不満を示された。私の自負は彼女の鞭の下に余りにもろくも打ちのめされたのだ。

彼女の名は——東雪枝様——

前稿のソバイの記録の翻訳が遅れた。

読み進むうちに私はペン女王の神格化された冷厳さに、東雪枝女王様に通ずるものを見た。ソバイはシャム族の勇士であった。勇士が捕虜となり、敵方の女王の残忍な仕置をうける例は多い。革命前のベトナムで、ゴ

・ジンジエム大統領の邸を爆撃した飛行士がとらえられた。彼はゴ・ジンヌー夫人邸の地下室の床に等身大のカメを埋め、そのカメの中に放置された。夫人は、ガソリン自殺を遂げた僧侶を坊主のバーベキューは面白いと冷笑した。高貴な実在の女王である。その彼女が地下に生理めになった男にどの様な刑罰を加えたが、又その男がどの様なエサを与えられていたのか明らかにされてない。しかし、革命後その飛行士は救出され、英雄として、少尉から一躍大佐の位を与えられたが、廃人同様の身体であったといわれる。

権力を握った高貴な女性の冷酷な性格には共通したものがあられる様に思える。そして、この権力はマゾヒストに対する時、鞭一本で得られるのだ。

ペン女王は、充実した武力を用いて、着々と勢力を拡張して行った。捕虜の奴隷の無償の労働力がその経済を支える基盤となった。

ソバイの記録にも激しい戦いの状態の描写があるが、その中からマゾヒストにとって、或はサディスティンを喜ばす様な部分を選んで少しずつ、訳してみたいと思う。

(未完)

S
M
カメラ・ハント

……△増田喜代司・みゆき夫妻の巻▽……

「鼻責版 夫婦善哉」

辻
村
隆

「鼻責版 夫婦善哉」

三月下旬、編集部経由で、私は一通のかなり部厚い手紙を受取った。裏を返すと、増田生とあり、一向馴染みのない名前である。

左記にその原文を紹介してみよう。

『前略御免下さい。ボクは六年前より奇クのファンです。そして、特に辻村様の書かれたものは、すべて楽しく面白く読ませて頂いております。単刀直入に言って、ボクは辻村さんのカメラ・ハントのうち、M七〇生の鼻責めの記録に、最も激しい興奮をおぼえ、もし願わくばボクと妻を鼻責めの実験台として、又カメラ・ハントか、鼻責め同好者への分譲

写真としてお使い願いたいのです。このことは無条件でお願いする次第です。

ボクは昨年の十二月に妻を迎えました。世間でいう新婚ホヤホヤ時代です。ボクは大阪へ来て既に四年になりますが故郷は鳥取県の倉吉市で、山陰線の上井という駅で下車し、三朝温泉行のバスの乗り場から、歩いて五分許りの処が故郷ですが、妻は同じ鳥取県の鳥取市行徳の生れです。見合結婚で、現在ボクは二十六才、妻は二十四才で未だ妊娠してありません。現住所は、豊中市の服部団地の中の、会社寮〇〇荘に住んでおります。四帖半

一間きりで、道具類をおくと、寝るだけで殆んど部屋一杯ですが、今の処、新しい新ホームです。

ズバリ言って、ボクも妻も、鼻障子を穿孔してあります。今のボクの生活の生甲斐は、毎夜就寝前、妻と交互に行なう、鼻責めプレイの二時間がそのすべてです。ボクが妻によって縛られ、種々の鼻責めを受ける夜もあり、妻を縛って、その可愛い鼻を、さまざまにいたぶる夜もあります。ボク達が新婚僅か数カ月で、どうしてかくもうまくプレイ出来るようになったかは、後で申し上げるとし



て、まずボクの鼻責めの経歴を告白します。

ボクは高校時代から、既に鼻に対して異常なほどの興味を抱き、若し将来嫁さんを貰う時は、是非共鼻責め出来る女の人をと、心中深く決心していました。高校を卒業し、大阪へ出て就職し、会社の独身寮に入った夏、ボクは軽いチクノウに罹り、毎日毎日鼻洗滌に、耳鼻科へ通ううち、耳鼻科の医師の使う、開孔具を鼻穴に挿入され、大きく押し拡げられることに激しい快感を覚えるようにな

ったのです。チクノウは数カ月で治癒しましたが、あの時の、鼻穴拡大の快感や、冷めた水が鼻腔深く流入され、洗滌されるその爽快感が、ボクの心に以前より根ざしていた、鼻への愛着を決定的にしました。

ボクは愈々、人生の転機とも言うべき、鼻障子穿孔の決意を固め、忘れもしませぬ、昭和三十六年九月十三日の午前一時十三分、最初の穿孔の第一針を鼻障子に貫通させました。するどい痛みが全身を走り抜け、木綿針

は、見事に右の鼻

穴より、左の鼻穴に通りました。こ

の俚ぬいてしまう

と、やがて又塞が

りますので、木綿

針に絹糸を通し

て、鼻障子を縫い

通し、糸の両端を

鼻先で結んでおき

ました。

穿孔した個所は

化膿し、ボクはペ

ニシリン軟膏で防

膿し、うまく穴が

あく事を秘かに一心に念じていました。化膿は止り、赤くはれていた腔内も腫れが引いた頃、針の通る穴がうまく貫通していました。

あとは次々と実に根気よく、色々なものを挿入しては徐々に穴を大きく拡大してゆきました。根気のいるこの期間が又実に心秘かにたのしい日々でありました。次にボクが実験した鼻責めについて、始めより列記してみます。

一、鎖の先に鉤を作りビニールで巻いて、両鼻孔に鉤を挿入してつり上げる。

二、医師の使用する開孔具を取揃え、鼻腔を思いきり拡大する。

三、ビニール紐を鼻穴に通し、それで顔面を緊縛する。

四、鎖、ロープ、金輪等いろいろのものを鼻穴に通し、重いものを吊り下げる。

五、鼻穴にロープを通し、それを梁にかけて引張り、鼻穴が吊り上って極限まで耐える。

六、牛の鼻木を通し、四ツ這いになって歩き廻る。

七、鼻孔の中へビニールパイプを挿入して、水を流し込む。

八、石膏を鼻腔につめこんで固める。

九、鼻腔にローソクをたらし込んで鼻腔をため、鼻翼から針をさして、反対の鼻翼までさし通す。

十、ローソクの底部を削って芯を出し、火をあてて柔くし、U型に曲げて鼻腔に通し、ローソクの両端に火をつけて人間燭台になる。

以上、右の様なことに、さまざまに変化をつけ、奇抜なアイデアを考え出しては、時には自縄自縛して、長い間じっと転っているのです。この時間がボクにとって地上最良のひとつときでもあります。独身時代ボクは、ただこの鼻のプレイに耽溺して、同僚の様に遊びにも行かなければ、飲みにも行かず、煙草も未だに吸いません。このプレイを実施しているたのしい時間があればこそ、反って日々の会社の仕事にも励みが出ました。会社の人達は誰一人として、ボクの鼻の穿孔や、この奇妙なプレイを気付きませんでした。

次に妻のことを申し上げます。

妻のみゆき（戸籍上は深雪と申し、鼻に縁のあるお花の名は恵風と申しますが、ボクは平仮名でみゆきと改めました）は鳥取市で高校を卒業すると、某製菓店の事務をしておりましたが、ボクの伯母の仲介で見合をし、案

外可愛い娘なので、結婚に踏切りました。彼女が果して、ボクの性癖を理解してくれるかどうか案じましたが、これは結婚後ボクの努力で理解させ、よきプレイのベター・ハーフになる様に飼育するつもりでした。

妻は結婚と共に上阪し、ボクは会社の独身寮から妻帯者の寮へ移りました。二十四才のままごとの様な新婚期間がつづきました。新婚旅行は三泊四日で、白浜から勝浦そして瀬峡の方へと行き、その新婚旅行でボクはカバンの奥深く、秘かに三冊の奇クを忍ばせていたのです。この三冊はいずれも鼻責めの記事が多い本でした。

新婚初夜から教育するつもりでしたが、流石にその勇気がなく、二日目の勝浦で、ボクは風呂に入る時、わざとカバンから奇クを取り出し、妻の眼につく様にして風呂へ立ちました。長湯をし、或る期待を抱いて温泉から部屋に戻ってくると、部屋の片隅でうつむいていた妻の頬は紅潮し、そっと胸を押えていました。奇クはボクが位置を覚えて放っていた場所と変り、それを確かに妻が手にとったことを確認したのです。

「ボクが君に、どんな告白をしても驚かないね？」

夜、妻を抱き乍ら耳許で囁やいた時、妻はいじらしくコクリとうなづいたのです。

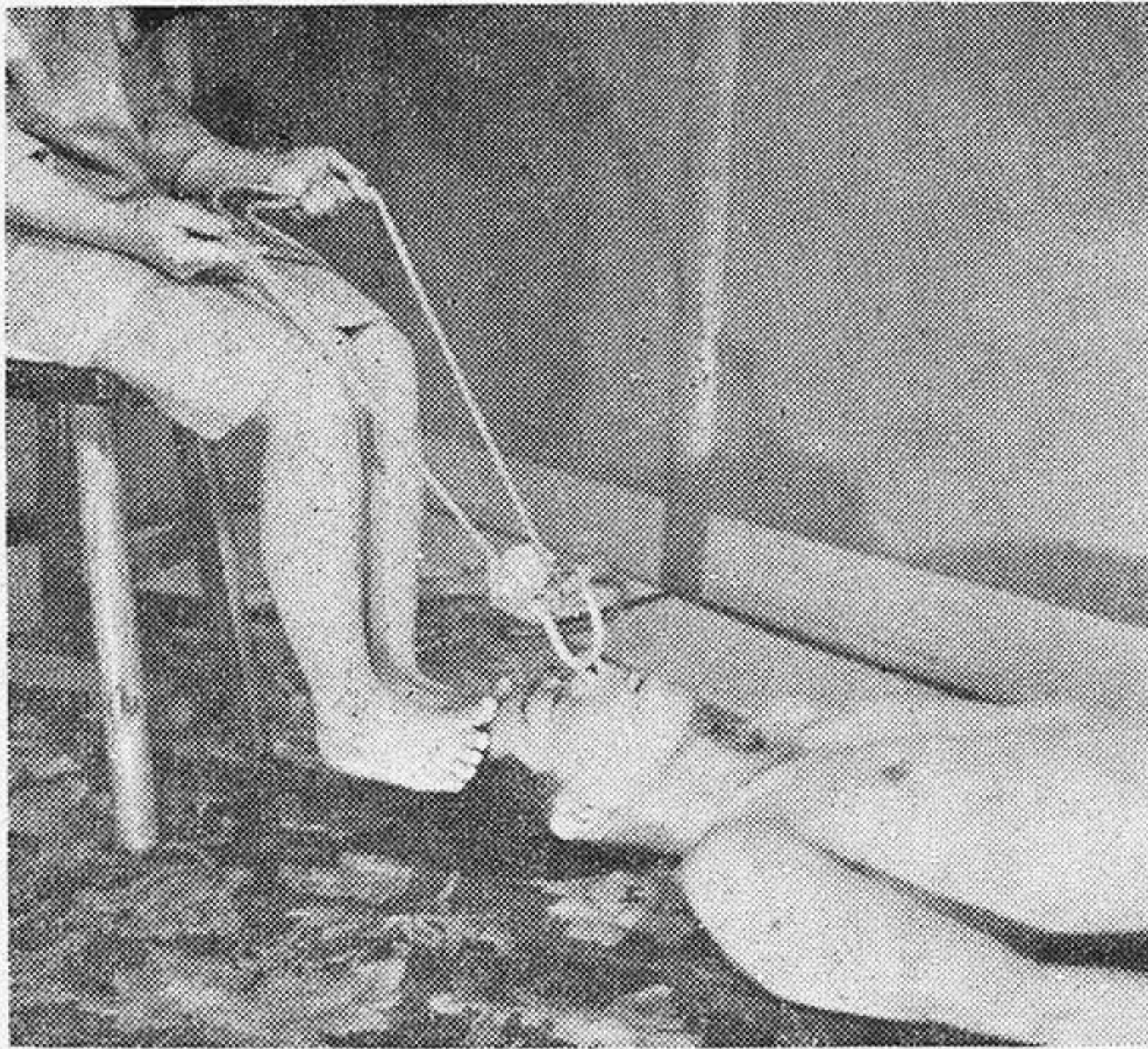
「君は昼間、ボクが風呂へ行った間に、この本を見ただろう？」

と、布団の下に敷いておいた奇クをとり出すと、妻は真赤になって、ボクの胸に顔を深々と埋めました。

ボクはジュンジュンと、ボクの鼻に対する執着ぶりを話しました。ボクを最も喜ばす方法は、ボクの鼻をいろいろにいじったり、責めたりすることであると妻に語ってきかせました。妻は勿論、ノーマルですし、世間知らずですから、あっけにとられ、呆然と、しかし微かな興味をもって、ボクの懇々と話す鼻への道程をきいていました。

「君がボクの鼻に対して、満足させてくれたら、ボクは必らず君を幸福にし、君を一生愛して行くことを誓う。これは誰も知らない、君とボクだけの秘密だよ。分ってくれるね」

妻は大きくうなづきました。さすがに新婚旅行にボクは鼻責めの道具はもって来ませんでしたので、その夜及び翌夜は鼻をつまませたり、小指を挿入させる程度で終わりました。ボクの鼻穴に妻の小指が通り抜けるのを、妻は奇異と驚嘆の眼で、パチクリさせてその小



指は微かに震えていました。

この様にボクの飼育（夫婦の教育方針）はいともスムーズに行き、寮に帰ってから、ボクは毎日妻に、奇クを順次を追って読む様に奨めました。妻はそれを忠実に励行し、二、三日又は四、五日で、一冊づつ読破して行きました。

ボク達の夜は、それと共に鼻責めを中心としたプレイに費す時間を多く持つ様になりました。土曜日の夜など、白々と夜の明けるまでプレイはつづき、妻を縛って数時間もベッドに放置してもそれに耐える様に訓練しました。鉤をつけた鎖を妻の鼻に引掛けて、鼻吊りしたり、開孔器で、鼻腔を押し拡げたりする様になり、又、ボクがなれぬ手付きの妻にひしひしと縛ってもらって、妻の手で、様々の鼻の屈辱をうける夜もつづきました。

このプレイは結婚以来、大なり小なり、何らかの方法で毎夜継続し、その夜のプレイの模様を克明に日記に書きしるし、ボク達二人の、若き日のプレイの記録として残してあります。

妻は日頃は髪をアップにしていますが、夜は髪をほぐし、黒髪を長く垂らし、すべての身にまとったものをもって、全裸となり、私の指導の下に、或る夜は縛られてのたうち、或る夜はボクの鼻を責め、バンドをふるって打つサジスト女性にも変身します。

本当に可愛い、ボクにとって日本一の妻だと自負しているのです。

妻の革命の日がやって来ました。二月十八日の夜です。この日は妻の誕生日でもありません。一大決意と共に、ボクは妻に、鼻障子の穿孔を切り出しました。一応反対されると思ったのに、案外妻はにこやかに、この重大な申し出を受諾しました。その時の私の喜びは天にも昇る心地でした。

「痛くても、苦しくてもキヨシさんのことですもの、我慢しますわ」。

と言われ、ボクは妻の有難い気持と、ボクを愛してくれるこの決意に、思わず嬉し涙を浮べていたのです。ボクは縫針の先を消毒し震える指先に力を籠めて、一瞬妻の鼻障子を突きさしました。「あっ！」と微かな呻きを発しましたが、妻は眼をとじ、ポロポロと大粒の涙を頬に転がせて、歯を喰いしばりました。糸を通して結び、この貫通式は飽気なく終り、風邪と称して、数日寝込む間にこの刺傷は早くも治り、化膿は大してなく、微かな光明が、右鼻腔から左鼻腔に覗かれました。あとは徐々にボクが拡大して行くのです。ボクはこの貫通式に、妻への感謝をこめて、阪急百貨店で、純金のネックレスをプレゼント

しました。

現在ボクの穴の直径は五ミリ、妻は二ミリ足らずです。ボク達は二人とも鼻障子貫通の名実共に足並み揃えた夫婦となった事を喜ばれずにはいられないのです。

妻と共に読む、奇クの毎月号、その中に鼻責めの少ないのが、ボクの何よりの心淋しいことでした。その時、M七〇生の鼻責めの記を見出し、ボク達夫婦は相談の結果、思い切った、辻村様に呼びかけ、ボク等を『カメラ・ハント』の材料に使って貰うべく決心したのでした。

以上でボク達の告白を終わります。ボクの望みは勿論、妻もその日を首を長くしてまっております。そして、若しお許し願えれば、M七〇生や、又同好の鼻責め愛好者をボクに紹介してください。呉々もお願いします。妻からも、くれぐれもよろしくお願いしておいてくれとのことです。

きくところによれば、辻村様は体を悪くしているそうですが、決して長い時間や無理は申しませんから、このボク等の切なる願い、必らず、お聞届け下さる様、重ねてお願い申し上げます。自称花野鼻十郎及鼻子こと

増田喜代司

辻村隆殿 鼻下

妻 みゆき 拝

〔編集部注〕辻村隆氏の右告白文は、増田夫妻の手紙をその俚原文で紹介してありましたが、夫婦間の微妙なる描写及び露骨に亘る個所はカットしましたので、あしからずご諒承下さい。

実に赤裸々なレポートであり、私は増田さんが、結婚後半年にもならぬ、新婚ホヤホヤの細君を、かくも見事に教育したことに一驚した。若し事実であるとすれば、これは私の体の状態など構ってはおられない。ムラムラと意欲が湧き上ってきた。幸い糖尿病の方は食餌療法の結果、小康を保ち、日増しに元気も出て来ている。（こんなところでお礼をいうのも失礼だが、M七〇生様、黒田寿様、芳野眉美様、三隅良信様、剣持逸人様、いろいろと、この病気に関しご関心をもって戴き、中にはわざわざ療養書までご送附賜わり、厚く厚くお礼申し上げます）

私はとりあえず、文面の内容を箕田氏に連絡した。一度騙されるところで、逢って見たらと言う返事なので私の決心はきまった。

私は早速折返し、増田喜代司夫妻へ逢いたい旨の連絡をした。

× × ×

春というのに、肌寒い日が続いて、各地の桜便りも未だ蕾固くいわば冷春異変といおうか――。

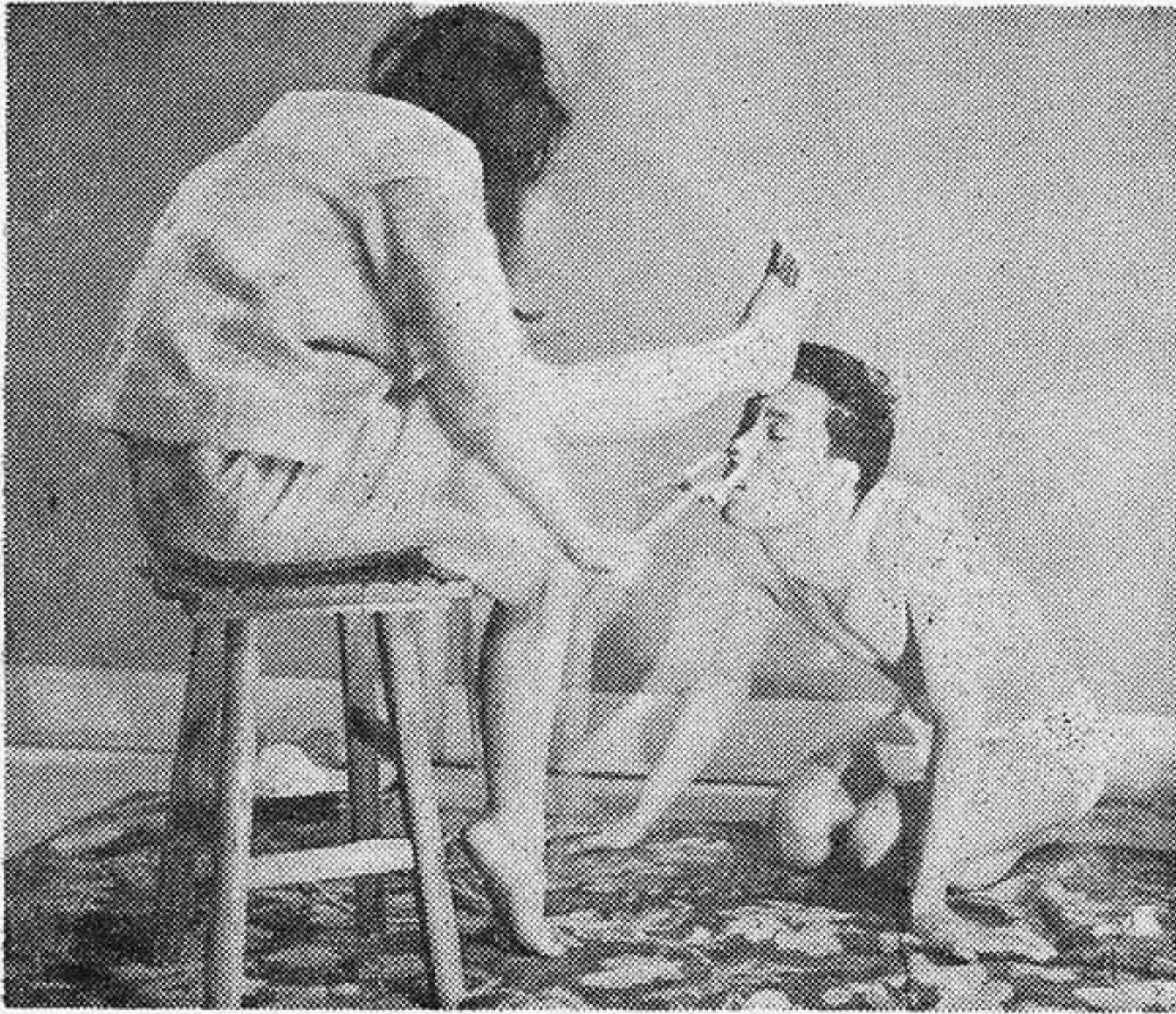
四月四日の日曜日、私は、彼の指定するキタ（大阪駅、梅田界限）の喫茶店Hに、午後一時出掛けていった。喫茶店に入った入口の席に、赤いキャノン・デミを机上において待っているとの連絡なので、扉を押して入ると、増田夫妻は私より早く来ていてすぐ分かった。先方は私の顔を知らないが、私の年恰好、服装、黒バッグ等を指定しておいたのですぐに気付いたらしい。ハッと緊張した様に私を凝視した。私はつかつかと空いた前の椅子に近寄る。

「増田さんですね――」

「ハァ……」

「辻村です」

増田夫妻は、二人とも期せずして頭を下げた。みゆき夫人（夫人と呼ぶには余りにも若い。ひとりで座っておればゼツタイ娘さんだが）は、やはにかんでうつむいた。とりたてて特徴もないが、アップにした髪がよく似合う、可愛らしいお嬢さんタイプの、小柄な色白の美人である。笑うと歯が白く美しく光



っていた。眼元もパッチリしていて、胸のふくらみの豊かさが、新婚そうその新鮮さをみなぎらせている様だ。こないない人と思う様に飼育し、毎夜プレイ出来るなんて、増田氏は幸せな男だな——。中年の私にとって、これは軽いゼラシーである。

コーヒを注文しようとする彼に、私は慌てて断わる。甘いもの一切今の処禁止状態だからだ。彼等も食事は未だだったらしく、スベッシュランチを三人分、彼は立上って注文しに行った。逢ってそうそう、お二人にご馳走になって申し訳ない。ポテト入りサラダを残して平らげる間、二人は無口で、こちらからきくと、それも辺りを気にし乍ら、蚊のなく様な声で返事をする。が、よくはききとれない。

海千山千の私如き輩と違って、

おそらくは第三者を交えてのプレイは今日が臍の緒きって始めてと言う彼等二人にとって見れば、これは当然かも知れない。

手紙がくわしかったので、今更きき出す事も改めてない。

「あの手紙の内容は、すべて本当なんでしょうね？」

「ええ」と彼は微かにうなづく。

「奥さんも、ご承知の上でしょうね」

と彼女に問うと、

「ハイ」とこれも実にききとれぬ

声である。

喫茶店内の喧噪さもひとつは、ききとれぬ原因であった。春の選抜野球優勝戦の、岡山東商高と市和商のプレイボールがかかり、人々の眼はすべて、備付の二コのテレビに吸いつけられ、かしましいアナウンサーの音が響き渡っていた折も折であったから——。

「出ましょうか」

私が立上ると、慌てて彼は伝票を掴んだ。外は冷めたい風がしきり、肌寒く、梅田の雑踏は激しく、寒さにめげず郊外へ出る人、巷へ来る人と、いつも乍ら混雑は激しい。

車を拾って、いつもいきつけのホテルへ一路突っ走る。

「貴方達の部屋でもいいですよ」

と外へ出て声をかけたら、

「いいえ、四帖半に道具が一杯で、狭くてどうにもなりませんので、辻村さんのいいところで結構です」

と婉曲に断わられたのだ。

ホテルの女の子は既に顔馴染。又、新らしい人と現われたなといった顔付で、我々三人を、和室の布団の敷いていない部屋に案内してくれる。ガスストーブに火を点じ、部屋が温まってくると、私は躊躇せず、目的に向っ

て早速敢行することにした。相手もそれを望んで来ているのだから、いわば、腹探りの前哨戦は必要ではない。

「私の撮れないところは、貴方のカメラで、お互いにとりっこしましょう。ではそろそろ行きますよ。先ず奥さんを徐々に脱がして縛ってゆくところから始めましょう。貴方とて下さい」

ハイともいいえとも言わず、増田氏はカメラを持つと構えた。プレイへの誘導者は私である。生れて最初の経験であるみゆき夫人をいきなり手荒なことをして驚かせてはならない。私は黒い縄を握ると彼女に近づいた。深くかがむ彼女の背に私の手は伸びる。ツーピース、シュミーズ、ガーター、ソックス、ブラジャーと、次々私の手で剥がされ、今、ここに彼女の白い裸身が次第に現われてきつつあった。

撮っても撮らなくともいいシーンに、増田氏はしきりにシャッターを切った。ゴクリと固唾をのむ、彼の咽喉仏の動きが分るくらい部屋は静かである。他人の手によって裸身にむかれ、縛しめられようとする愛妻を、彼は不安と期待と昂奮の交錯した複雑な神経で、ファインダーから覗いていた。絶えまなくス

トロボの閃光が流れ、私の一挙一動が、彼のカメラに納められている様だった。

「今からそんなにとって、どうするつもりなの。もっともって凄いのが、これからゾクゾクと続くんじゃないか」

そういつてやりたい気持でも、高鳴る衝動と、妻の無惨にはがれてゆくシーンに、彼の胸の鼓動はいや高まり、逸らずにはおられないのだろう。

パンティ一枚の裸身にして、私は型通り、首縄にし、乳房を強調して後手に彼女を縛り上げる。結い上げた髪をさっぱりと解きほぐして、彼女はつややかな黒髪を自然に垂らし、て乱していた。それは私の希望でもあり、又増田氏もそれを妻に告げたからだろう。

射手交替。奥さんの鼻責めに関しては、経験ある彼の手に委ねた方が無難である。私は愛用のカメラを握って二人の前に立ちほだかった。彼もすっかり脱いで、パンツ一枚になると、妻に近寄り、鼻責め用の数々の道具をとり出した。

事務用に使う、丸環、鼻釣りの金具のついたくさり、開腔用の器具数点、手錠、ビニールパイプ。その他etc。

彼はいたわる様に彼女の鼻をもみ、先ず最

初に事務用丸環を挿入した。それに鎖をつないで引張る。開腔器で、鼻翼を精一杯に押し拡げる、鼻を吊り上げる。

まるでその場に私がおる事を忘れたかの様に、彼は次々と凡ゆる器具を使って、みゆきさんの鼻責めを試みた。流石に連続の鼻責めに鼻の奥が痛むのか、彼女は時々、ぎゅっと眉をしかめ、唇をかんだ。鼻の穴の辺りが赤くなって来た。

「もうその辺りで奥さんの鼻責めはよしして、次に移りましょう」

私は痛々しくなってそう言った。

「次は夫婦連縛の鼻責めをやりたいね」

黒い縄で彼女を縛った俥にしておいて、新たな縄をバッグよりとり出すと、私は彼の背に廻り、簡単な後手縛りとした。縛りより要は鼻責めにあるのだから――。

夫には直径七、八センチもある事務用丸環の最大のやつを嵌めこんだ。スルスルと環はわけもなく通る。

夫の環と妻の環を鎖で接続させる。紐で結ぶ。夫の膝に倒れた妻の鼻環と夫の鼻環は、夫婦の固い絆のようにつながっている。妻の閉じた眼に陶醉の歓びが走り、夫の伸びきった鼻障子に悦楽のかけが流れる。

今こそ、私の眼前に曝された若い二人は、心ゆくまで、鼻責めの歓楽の境地に身も心もひたりきっているのだ。

それは異常な環境で結ばれた強い夫婦愛の姿ともいえた。数多く写真をとって来た私にしても、夫婦揃って、マゾに耽溺し、サドに快楽を覚える夫婦は珍しい。鼻責めを通して、夫はマゾになり切り、時には妻を責めて欲び、妻は責められて夫の心をしっかりと掴



み、夫を臀下に敷き、奴隷の様に扱い、足指をなめさせ、馬乗りになり、力一杯夫の鼻紐を引きしぼって、より以上の愛情を夫に覚えている。見事なプレイによって愛情を発見した夫婦であった。

その証左は次のプレイで証明出来る。

夫の鼻に牛の鼻木を通し、這いつくばる夫の前で、ゆうゆう裸身にツーピースをつけた彼女は、馬乗りになって鼻木のたづなを引き絞り、柔く丸まっちい足の拇指を、夫の口へ押し込む。或いは腰掛に座って、両脚で夫の顔をふみにじり、押しつぶし、鼻っ柱がへし曲る程に手綱を引きしぼって、夫の苦悶に歪む顔を、微笑みを浮べて見下している。

そこには想像を絶した、二人の世界があった。この貞淑な稚な妻は、夫にそうした行為をする事が、夫を欲ばす最大の方法であることとを、早くも生活体験から感知し体得して、虐める事

により以上の愛情を覚えている様である。夫をはずかしめ、恥辱をさらさせ、牛馬の様にこき扱い、ワニ皮バンドで打擲し、その行為が強まれば強まる程、激しい恋情を夫に覚え、と共に、自己の内潜した或る種のサド性をも充分に発揮して、妻自身も又、その行為に喜びを見出しているのではなからうか——夫婦プレイの、夫M、妻Sのシーンはいつ果てるともなく続き、私が注文する迄もなく、彼等の夫婦生活の間で、毎夜行なわれてきたプレイの数々が、実に手際よく、私のカメラの前で開陳されていた。

部屋はストーブの熱気が充満し、私は汗ばみ息苦しくなってきた。

プレイする二人より、パチパチとるだけの遙かにラクな筈の私が、激しい疲労を覚えたのは、あながち私の病いのある体のせいだけでもなかった。熱っぽく続けられる二人のプレイの、或いは毒気に当てられたのかも知れない。

私は大きい吐息と共に一服を申し出た。黙っていたら、何時までやるか測り知れなかったからである。三十六枚撮りのフィルムが既に二本入れ替えられていた。

小憩の間、彼女は居間続きの洋式便所にい

った。夫の執拗なカメラは、飽くことなくそれを追い、トイレの扉を開放して、貪らんに用を足す妻の姿を克明にとっていた。

夫のする事ならすべて柔順に従い、それを拒否しない彼女の素直さが、私には驚嘆に値した。一見鼻責めと関係のない、謂わば芳野眉美氏好みのことすら、夫は追っている。

今の彼にとって、妻の行為はすべてなのかもしれない。それが又すべて彼の探求と愛情につながっている様に、私には思われた。

「鼻責めはこれくらいにして、少し奥さんの緊縛をとりましようや。ね、いいでしょう」

夫はやや物足りなげな顔付で一応私の意見を尊重してくれた。真田紐で全身を縛って、鴨居に大きく開股の逆吊り。是非とって見たいポーズだった。簡単な縛りを数々とするより凄いやつを精鋭主義で少なくとも、私と夫は二人して妻の体をぎりぎり縛り上げる。

妻は無言、私達のなすが儘になっている。

夫は妻の小柄な体を抱き上げて、逆さに足を上にして押し上げる。柔い布で私は急拠彼女の両足を思い切り開いて、左右にそれぞれ縛りつける。そろそろ倒立させ、ぐっと苦悶にゆがむ妻の顔に、夫のハラハラした眼差しが走る。私のカメラは素早くその何ポーズか

をきっていた。一旦降して、次いで後姿の同じ逆吊りポーズ。早々と済ませて抱き降すと夫は優しく妻の赤くなった足首を真剣に揉んでやっていた。愛情の交歓を見せつけられて私は柄にもなく照れる。フィルムを交換して装填の間、私のうつむいた視野のはしに、彼が妻の肌をやさしくなで、軽く頬にくちづけするのを認めた。夫としての最大のいたわりなのであろうか――。

「そろそろ、この位でやめましようか」

「では最後に一つだけ」

私は彼女の疲れを思って、そういったのだが、やめるとなると急に時間が惜しくなったのか、彼はもう一つやるといい出した。準備してもって来た十センチ幅ほどの白いビニール帯を彼女の全身にぐるぐる巻きつけたのである。

首縄を直線にして股に通して背で縛る。ビニール巻きされた彼女は、徐々に体がしまるのか、顔を赤らめてこらえていた。私が二、三枚とる間、彼のカメラは、妻の周囲をかげめぐって、十数回のシャッターがきられていた。

「あのすみませんが、妻を、情婦マノンの様に、両足を辻村さんの背から肩にかけて、逆

さに吊り下げて戴けませんか」

珍らしく彼の注文である。疲れていたが私は、ヨイショと彼の両足をとって引上げ肩にかついだ。私の臀部の辺りで、彼女の頭がうごめいて左右に揺れている。私が体を前かがめにする、背の彼女は上向きにのけぞっていた。私のカメラにははいっていないポーズのひとつである。

やっと彼女を降して、

「もう本当にやめましよう。疲れた」

と私はいった。真実私は心身共に消耗し、エネルギーを使い過ぎた様に思った。

× × ×

ホテルを出て、ビヤホールで三人で一杯のむ。ビール好きの私、小コップ一杯で我慢するのは辛い、甘いもの許りの喫茶店よりはましだ。

増田氏夫妻は、終始無口だった。喜んでいいのか、がっかりしているのか、物足りないのか、不満があるのか、さっぱり分らない。喋べるのは殆ど私一人。お二人は専らきき役の方で、彼は返事をして相変らずもじもじと、蚊のなく様な声。彼女は絶えず微笑みをたやさず、知らぬ振り、小コップをチビチビ啜り乍ら、チャンと私達の会話をきいてい



るらしい様子。

黄昏は辺りに迫り、駅前はこのターミナルは、通勤者の家路に帰る男女の群で、窓越しに雑踏が果てもなく続いている。

何か要領を得ぬまま、私はとも角再会を期して、この雑踏の中で、南北に分れた。

背の高い彼の腕にしっかり掴まって、小柄な妻は、人浪にもまれて忽ち群に消えた。

× × ×

翌々日、彼から速達が届いた。一寸不安に

かられた私は大急ぎで開く。こんなことが書かれてあった。

『四月五日、辻村様、昨日は本当に失礼したと思っております。又ボク自身辻村様にお逢い出来たことを大変嬉しく思っております。』

単刀直入に申しますが、妻に遠慮しておりましたので、夕食をごちそうになっている時、大変不愉快に思われたことと思います。

妻も大変楽しかったらしく、帰って来て、あんなに返事をせずにと叱られました。辻村様の縛り方がとても

うまいと褒めて、ボクのをけなしますので、早速記念に頂いたロープで

辻村様のやられたのを思い出しながら、あれから帰って十二時頃まで、マットの上でやりましたが、矢張り痛いといえます。痛くなく、快よく縛るのはこういうコツがあるのでし

ようか――。

そこで私達の結論を申し上げます。是非私達のよき知人として、おつき合いの上プレイして頂きたく、妻からもボクからもお願いいたします。妻はあの吊りが一番よかったといえます。ボクは内心見えてハラハラしましたが、本人はとてもよかったと、愉しそうに感想を言っておりました。

妻は他のモデルの様に美しくないかも知れませんが、どうか辻村様のお力添えで分譲の一端にお加え下さい。妻の鼻責め写真が、多勢の人に見られているかと思うと最高の喜びです。それが最初の希望でもありました。そしてボクのもよろしければ使用して下さい。無条件で承知させて頂きます。

最後にもう一つお願いしたいのは、誌上にこの写真をのせて下さい。是非お願いいたします。妻の顔もボクの顔も入っても構いません。次回にはM七〇生をお呼び頂き、共にプレイすれば囁かし愉しいと思います。これはボクの夢であります。辻村様のご協力での夢を叶えて下さい。そして又、いろいろと縛りたい女の子を紹介していただけると、人生がバラ色になるかと、そんな勝手なことを考え、辻村様との末長いおつき合いを希望し

てやみません。乱筆いろいろ勝手なる事ばかり書いて申訳なく思っておりますが、おおまかなところおふくみおき下さいます様。又鼻責めには妻は使われて結構ですから、女性の鼻責めをとられる時には、ボクに言って頂ければ、いつでも喜んで連れて参ります。書きたいことがまだまだ一杯ありますが、今日はこの辺で失礼いたします。

増田喜代司 みゆき

辻村 隆様 鼻下

』

つくづくうらやましい好夫婦だ。私はフト何の関連もなく、テレビの「夫婦善哉」を想起した。円満な夫婦プレイの典型的な二組、

(例えば増田夫妻と三隅夫妻等出席されて)

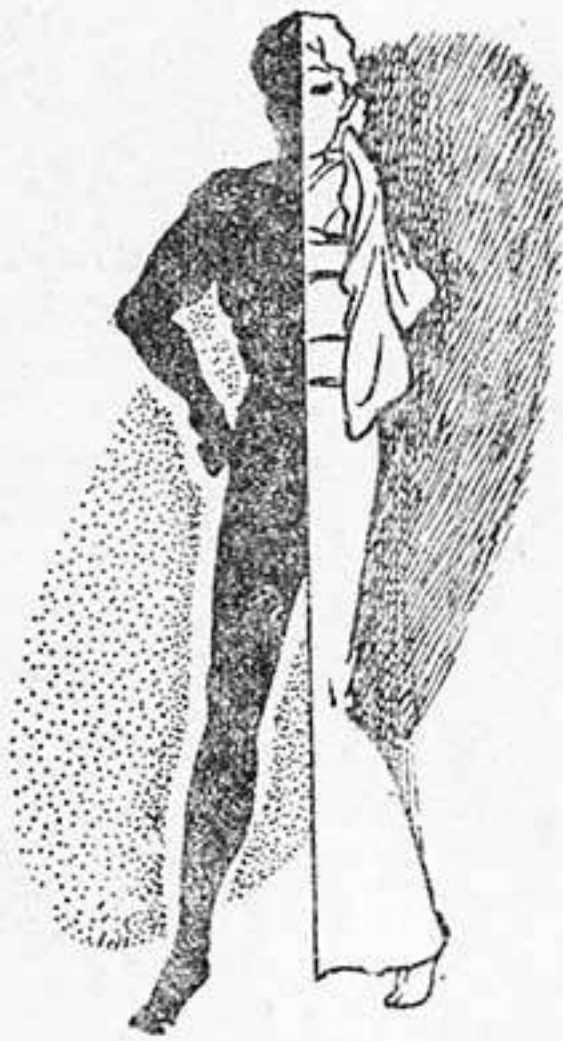
が、蝶々、雄二の司会のもとに、夫婦円満の秘訣はプレイにありなどと、自由に喋べれたら、我々奇ク族にとって、どんなに嬉しい番組になるであろうかと考えた。恐らく夢でしかあり得ないかも知れない。しかし、夫婦のうわべだけを喋べっているあの番組で、今一歩突っ込んだ裏をききだせば、或いは過去、何組かは、増田夫妻のようなプレイによって固い夫婦愛の絆を結ばれたカップルだって無きにしもあらずかも知れない。

とあれ、私のとったネガと、彼のとったネガで現像の依頼された分の数本を一緒に、私は未現像のまままで編集部にすべてを送った。

妻の鼻責めフォト、夫婦の緊縛鼻責めフォト、妻に虐げられ、責められる彼の被虐鼻責めフォト、etc がすべて分譲されるのが彼の希望であり、カメラ・ハントにフォト掲載が、増田夫妻のささやかなる志望であるならば、これが彼等に酬ゆる唯一のプレゼントであるに違いない。病いえぬ体に鞭打ち、増田喜代司の全文に、私の貧弱なりポートをサン

ドイッチして、辛うじて「カメラ・ハント」のお茶を濁すことになった。

「SMカメラ・ハント」の掲載フォトは、このネガの中から自由に選んでいただく様、箕田編集長に一任しておいた。残余はすべて分譲フォトになる予定である。



「美女とオナラ」

——蛙腹と空気浣腸と人工放屁——

川崎進一

「ただの風よりもましならん畑の屁」

「屁をひっておかしくもなし独り者」

「音も香も空へぬけてく田植の屁」

「泡沫無限と坊主が屁」

古来「屁」を題材とした川柳は少くない。

川柳でこそ「屁」と表現しておかしさを感じず

るのであって、一般的には「屁」といえば下品に感じ「放屁」とすればかたくなである。

『オナラ』と表現して色気を感じる。

といっても、これは美女の場合、なんとか

女史、皺くちや婆、まして野郎の場合など全くいただけない。

いささか趣味が落ちるからであらうか、奇クにも事オナラとなると、そう取り上げられたこともないようであるが、小生、少し若き美女のオナラに関心があるようである。

コプロ趣味の変形だなんて、むづかしく片づけないで戴き度い。こんな情景に遭遇して少なからず、お色気を感じるのである。

正月のカルタ会、トランプでもよい。

「アラッ、それよ」

とばかり、手をつこうとした瞬間、真赤な着物の裾からこぼれるように、小さな一発

「プッ」

「あらいやだ、だーれ、よっちゃん？」

「知らないわ、みさちやんじやないの」

「いやよ、私じやないわ」

「最初に言い出した花ちやんがあやしいわ。」

「うそよ、ひどいわ、誰なのよ」

てな具合で、若き美女同士、お互いに犯人をなすり合つての一コマ、いかにも花ひらくといった情景ではなからうか。

会社の慰安旅行は列車の中。四人で一劃を占領した若きBG達、ガムだチョコレートだジュースだと、ひっきりなしにつめこんでい

る中

「ちよっと、そのおせんべとってよ」

と手をのばした瞬間

「ブスッ」と音がして

「まあ、いやだ。山根さん」

「あら、いやだわ、ごめーんなさい」

真赤になる山根嬢、肩をたたいて笑いける三人、斜め向いから、その様子をながめてニヤニヤしている私。

こうした時、私はたまらない魅力を感じるのだ。その一発を洩らして、真赤になっている娘に。

○

勿論、オナラといえは生理現象だ。体内にて消化される食物は、分解することによってガスを発生する。特に腸内にあっては、酵素の働らきによって多量の分解ガスが生れる。それが、胃から食道を経て口から出ればオクビになり、直腸を通過して肛門から排出されるとオナラになる訳である。

若しオナラが出なかったら、腸内に発生するガスがたまつて、膨満を起こし大変な事態になるであらうことは、盲腸等の手術後、一発のオナラを、いかに患者も医師も待ち望むか、敢えてかつての浜口宰相を引き合いに出

すまでもあるまい。

「私は、オナラなんか、したことないわ」

なんておっしゃるお嬢様方、そんなことおっしゃったら、お腹はパンパンに膨れ上つて死んでしまいますよ。或は無意識の中に、或は夜間睡眠中に、又、排便の際に、自然に排出されているのを、ご存知ないのかも知れませんね。貴女の可愛いお尻の穴から。

ところで、一体、その量はどの位であらうか。食物の量と種類による個人差があつて、確たることは分っていないらしいが、大人一日に大体三〇〇CCといわれるから、大変な量である。大部分が先刻申した自然排出で気がつかないのであるが、偶々一氣に排出されると、例の放屁一発となる次第である。

では、その成分は何であらうか。主たる所は炭酸ガス、水素、窒素といった所で、勿論これには臭気はない。それに、カスドール、インドール、メチールメルカプタン、硫化水素などが加わる。これが、特に後二者が、あの、オナラにおける元兇である。

満員電車の中で、どこからともなく鼻をついてくるあの不快な臭気

「野郎、いもばっかし食いやがったな」

と誰しも憤慨する。私はその時、前に立つ

ている後姿の美女、いや美女ならんと想像しつつ、その美女のお尻からにおってくるものと独り合点して安心することになっている。

ともあれ、臭気の元兇はメチールメルカプタン、硫化水素等であって、これは豆類、肉等の蛋白質から発生し易く、サツマイモ等の炭水化物からの発生は少いとされている。従ってあの臭いやつ、それは肉食系のものであって、「いもばっかし食いやがって」は当たらないと言わねばならない。

○

こんなへむづかしいことを申してもはじまらない。小生の交わった女性のオナラに関する体験を申しのべてみたい。

一夜を共にした啓子、年は二十三、一寸グラマーに属する女だった。

さて、事の最中、今や正に感興至らんとする頃、ブツと一発、これは力の配分から当然起り得べき事であるが、

「あらッ、いやだ」

彼女は真赤になって、私の首に巻いていた両手を離すや顔を覆ってしまったのである。

勿論或る種の運動も停止、感興も一時に遠のいたかに見えたが、私の方は逆に、彼女のその失敗の一発から、彼女のあらわな羞恥の表

現に、いよいよ元氣百倍――。

「いいよ、いいんだよ。とても可愛いいいじゃないか。さ、心配することないよ」

とばかり、いやが上にもハッスルするのであった。

又、或る夜、ホテルの一室にて、今宵を共にした文代と、事の終ったけだるさに、共にうとうとしかけた途端、蒲団の裾の方にかすかな音、意識してかしくないか、彼女は身じろぎ一つしない。私は敢えて、右膝でそっと蒲団を持ち上げ、そっと下す。蒲団の中の空気は逃げ場を失って、当然、私達の首の方に出てくる。そこはかたなく臭う彼女から放たれたものの香り。

「ね、君のもの、君の香水？」

「あら、知らないわ。」

「なんだ、起きてたの？」

「いや、知らない、知らない」

「ごまかしちゃだめだよ、ほら、こんないい香り。君がすきだ、君のものみんな好きだ」

「いやー恥づかしわ。」

「もっとこっちへおいで、お腹さすってあげようか。」

「いや、そんなことしたら、又出ちやう」

「いいじゃないか、ほらね。」

と、又再びハッスルするのであった。

山の中の温泉ホテル、谷川のせせらぎを聞きながら、彼女即ち朝子と、二人きりでつか家族風呂の気分もまた乙なものであった。

垢一つない湯舟からは、こんこんと湯があふれ、朝子のふくよかな裸身が、透明な湯を通して薄ピンクの蛍光灯の光を受けた時、大理石のように輝く、恍惚となるような一瞬。相對した二人の真中を割って、足元から大きな泡一つ、楕円形になって、遊ぶように、ゆれ動きつつ浮び上ってくるではないか。

「オッ？」

瞬間、それは湯の表面に浮び出て、パチンと音がするように割れて消えた。あとに、そこはかたない放香。

「あら、あら、ごめんなさいーい。」

「いや、素晴らしいね、どう、もう一つ」

「いやあよ、お恥づかしい。」

「そんなことない、実にきれいだったよ、美事なもんだ、ほんとに。もう一つ、おがませてくださいよ。」

「いや、いや、恥づかしいわ。」

「恥づかしがらんでもいい、二人の仲だもの。よし、こうしてあげようね。」

湯の中の美女の体は軽い。アルキメデスの

原理によって、軽々と抱き上げた私は、朝子を自分の膝の上にのせるや、左手で彼女の腰を抱き、右手で、そのやわらかな真白いお腹をもむのであった。

「いやあ、くすぐったいわ」

身をよじりながらも、彼女は敢えてにげようとしなかった。しかし、とうとう期待の一発にはお眼にかかれなかった。

○

最後に私の夢は人工放屁、例の浣腸器を使って、美女の人工放屁をやってみよう。勿論前もって、浣腸、或いは洗腸をほどこして、腸内の汚物を取り去っておく。美女は緊縛しておいた方がよいだろう。

【訂正】 【追補】

五月号本文巻頭掲載の「高級なる遊戯精神について」(久我庄一)に対して筆者より、左の通り訂正の申し入れがありました。

△冒頭の太宰治にふれた個処で『その処女作集の巻頭をかざる言葉は、たしか「葉」という題であったが、「生れてすみません」ではじまったと思う。』は、『その「二十世紀旗手」の中で、たしか「生れてすみません」という言葉を使っていたと思う。』に訂正して下さい。V

『精神分析学より見た耽美の世界』——久我庄一——(六月号)追補

△マゾヒズムについて(受動的淫虐症)としました。この言葉は、あくまでも既成の「精神分析学」の術語を取ったもので、私の「より見た」という文章の構成上からV私の

最初は、グリセリン浣腸器だ。グリセリンと水の代りに、空気を一杯にピストンに吸い込む。三〇、五〇CCの浣腸器より、馬の浣腸器のような、あの大きな一〇〇CCのがよい。一気に注入。そして、くびれたお腹をグッとはかり押さえつける。今入れられた空気は逃げ場を失って、一気に肛門から、豪砲一発押し出されてくるだろう。

次はエネマシリンジだ。勿論石炭水などいらない。嘴管を彼女の肛門に差し込んで、あとはゴム球を繰り返し押しだけだ。ゴム球とゴム管の境にある二つの弁の働らきによって空気は一方通行となって、私がゴム球を握って押す度に、空気は容赦なく直腸に送り込ま

「S M マニヤの立場」からすれば、この「マゾヒズム」という解釈語は、どうしても(受動的淫虐性)としたいところです。このような問題については、芳野眉美氏及び橋行司氏の御意見に賛成です。

△一二七頁上段右より五行目、カール・メンジャーニーは「メニンガー」が正。

△一二八頁二段左より九行目、「井東寛」は「憲」が正。

△一二八頁の三段右より四行目の谷崎氏のところについては、氏がモチーフとしたのは、「刺青緊縛フォート」をでなく、「刺青」そのもののについてモチーフとしたことを書きたかったのだが、発表せる文章をよんであまいな点を感じられるので、念のため。

△田中英光・作品名は「さよなら」でなく、「さようなら」が正。

れるのだ。下腹は見る見るふくらんで、所謂蛙腹が生れる。ググーッとなる音は、直腸から結腸に空気が押し出されてゆく音だ。情容赦もなく私のゴム球を押す手は休まない。十回、十五回、二十回、もう一五〇CCも注入されたであろうか。腸管は押し広げられ、苦痛に彼女の顔はゆがみ、パンパンにふくらんだ下腹が激しく波打つ。大体二〇〇CCが限界とみた私は、嘴管を抜くや、一気の排出を避けて、手早く用意の脱脂綿を彼女の肛門に当てがい強く圧迫する。

「どうだ、苦しいか。苦しくなければ、もっと入れようか。」

「いや、いや、苦しい、お腹がさけそうよ、許して、早く出さして、ね。お願い」

左手で下腹を強く押しながら、私は右手で圧迫していた脱脂綿を取る。一瞬、ブスーッと長く快音を残して、みるみる蛙腹はしぼんでゆく。先刻の浣腸で空になっっている腸からは、何等の臭気も感ぜられない。

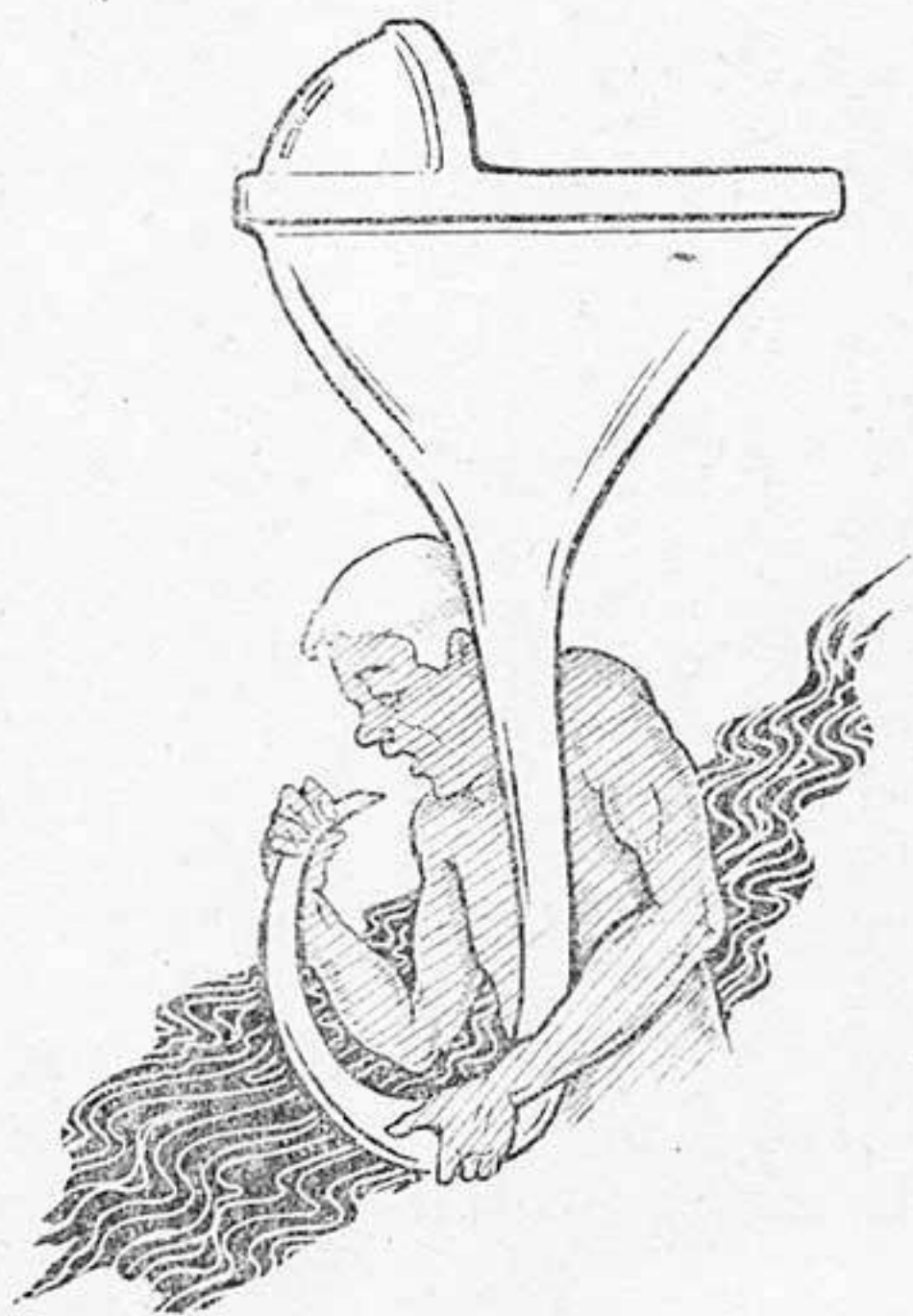
その場合、前もってエネマシリンジのゴム球の中に、シャネル五番でなくてもよい、香水を数滴入れておこう。美女の肛門からは、妙なる芳香をただよわせつつ、世にも稀なるかくわしきオナラが——。

美女空気浣腸とオナラ。
これこそ、私の長年の夢なのである。

“女王様方への志願”

（「読者通信」として長いようでしたら「奇クサロン」へでも載せて頂ければ幸甚です）

東京ベン号



私は大学を出て五年になるサラリーマンです。学生の頃から丁度十年間、奇クを読み続けていますが、最初旧刊本を手にして、心臓が止まりそうな刺激を受けた「二百字讃歌」「ヴィーナスの重石」等の代表的な作品も再び読み返して見ると、それ程強い興奮を与えてくれません。これは多分私のマゾが、文字から得られる刺激には或る種の免疫を造ってしまったものと思っております。

そんな今日此頃の私ではありますが、読者

通信欄に寄せられるサジイスチンからのお便り、或は奴隷飼育の体験記、報告文等リアルな女王直筆の文章には、殆んどいても立ってもいられない快感と、空想と刺激を授けられるのです。

性癖の為かどうか、現在まだ独身なのですが、将来のサラリーマンとしての生活を円満に進めていくことを考える時、やはり結婚の相手には女性的な女性をと思っています。これは、昼は天使の如く、夜は夜叉となる女性

が甚だ稀少な存在であるため、理想を後退させてしまったとも言えるのですが、なんと言っても親のこと、世間とのつきあい、自分の将来を考え併せると、邪魔な常識的理性が、私をどのように決心させてしまうのです。

只、このまま何の体験もなく（職業婦人をドミナに仕立てて、ほんの二、三回、甚だ不満足な経験があるだけです）平凡な結婚生活に入ってしまうことに、強い心配、不安が残っています。というよりも全く自信が持てま

せん。何も知らないで、私の妻となる女性を心から幸福にしてやれるだろうか、ついに足を踏んでしまうのです。

誰でもよい、可成りの期間、サジステインの下に隷属して、神経と肉体を極限まで使つて奉仕してみ、その女性から私の奴隷としての不適性が宣告されれば、それで諦めがつくだろうと思うのです。但し、感違いされては困まるので、一言、ことわらねばなりません。

というのは単にノーマルな生活への踏ん切りをつけるためにサジステインを求めている訳ではありません。決して一時の思いつきや気休めから奴隷を志願する訳ではないのです。もしサジステインから適性ありと言われた場合には、前述の理性的な決心は、直ちに崩壊して、将来は又違った形にならざるを得ないでしょう。私の心の中ではやはり理性よりもマゾが勝ってしまうに相違ないのであります。

唯、何も知らない常識的な妻を持ちながら、一方で彼女を裏切った行為を続けるというような芸当は私には出来ません。そうかと言つて普通の女性を私の趣味に合わせて教育したところで、それ程の成果が上るものとも

思えません。やはり普通の結婚に踏み切った暁には、平凡な夫婦生活を通して行く決心なのです。少々話が横道にそれましたが、サデイスティンに適性を認められた場合、爾後のことは全くわかりませんが、こんな風になるのではないかと思っております。

まず、第一のケースとして、サデイスチンが独身であり、単数であつて（複数のサデイスティンを主人にすることも予想できませんから）昼間は夫という名を与え、通常の世界生活を営み、夜（或は二人だけの時間といた方がよいかも知れません）は完全に隷属させ得る男を探しておられる場合です。理由は色々あるでしょうが、彼女に下男として一人の奴隷を持つだけの経済力がないとか、或はやはり私の様に世間態や、親のことが思い切れず、理想と現実を両立させることにいるの望みを残している場合です。こんなケースなら、私には何の無理もなく、主人の思惑についていくことが出来るでしょう。

第二のケースとして考えられるのは、奴隷遊びを週に何回とか月に幾回とか、何日までも続けて行き度いという女性に出逢った場合です。未婚、既婚、未亡人、さまざまサデイスティンが案外このケースに属するのでは

ないかと思ひます。仮にこの種のサデイスティンが、私の奴隷志願を受けて下さった場合、最初私には適性のテストが行なわれているのか、それとも全くなのお遊びなのかはつきり分らないと思ひます。でも幾度か接して、お遊びだなど感付いた場合、私は逃げ出すより仕様がありません。（決して、逃げ口実を用意しているわけではありませんが）駄目なら駄目で、何とかしてマゾに見切りをつけたい、というのが私のいつわらざる気持ちなのですから。

第三のケースを想像するとき、私は最も苦しみます。つまり相手のドミナが、既に立派な生活を持っていて、経済力もあり、表向きは下男として、本当に私を一生飼ひ殺そうという意志を起される場合です。先頃、読者通信にも登場された雪国の女王、（芳野眉美氏画く？）ところの森山美歌夫人）のような方だったら、そんな場合もあり得ると思ひたいなければなりません。この様なサデイスティンから奴隷の適性と終身的な隷属を宣告されたら、私の良心、親に対する不孝の罪、世間に対する気がね等の意識が激しく私を苛むでしょう。でも、第二のケースのようにどっちつかずでいつ捨てられるかわからないという

不安はありません。これを見定めれば、私はきつと無理にも諦観（この場合は理性への諦めです）を心の中に築いてしまおうでしょう。そして終生隷属の世界に飛び込む誓をしてしまふに違いないのです。

まだ一人のサディスティンも目の前に現われないというのに、こんな勝手な空想をしている私を笑って下さい。でも、今の私がマゾを終生貫くか、そろそろ後れ勝ちな婚期に追いついてられて、マゾヒズムという深淵から、無理にでも足を抜きとるか、必死にあがいていることは、理解して頂けたかと思えます。そして、どちらかを決定するのは、私自身ではなく、第一と第三のケースに属するサディスティンであるということも。

私は今まで何回となく奇クに投稿し、読者通信欄に二回、奇クサロンに一回掲載される幸運に恵まれました。特に近頃は前述のような事情であせりが出たためか、有光令子様、横溝とみ子様、東雪枝様と三人のサディスティンを対象に切なる願いを投げかけました。（貴女一人をドミナに決めたという様な空々しいうそも何回か書いたのです）そしていつも指定の日時に指定の場所（勿論私の一方的な指定ですが）に行った私は、どなたも見つ

けることが出来ずに終わっています。そして此頃、未だお逢いしないサディスティンに対して、貴女だけが私のご主人になれる方だというような表現で、お願いすることは、かえって失礼になるような気がして来ました。勿論私の方で主人を選ぶ等とは考えても見ません。私のこの志願に応じて下さる女性があれば、その方が私をテストし、そして決定するのです。第一のケースであれ、第三の場合であれ、私の願いは終生の隷属です（それが一日中か夜だけかの相異しかありません）。

幸いこの文章が奇クに掲載されたとしても、私の前には一人のサディスティンも現われないかも知れません。今まで同様私の願いがサディスティンの心を動かさないとすれば、少くも一人の女性に巡り逢えるまで私は志願し続けるでしょう。そして第一、第三のケースに属する彼女から、もし不適性が宣せられれば、その時こそマゾの世界に見切りをつけなければなりませんから。今、東雪枝様について失礼な空想をはばたかせれば、次のような夢が浮びます。

只、東さんについては、どうも特定な一人をお決めになるということが、お好きでないようにも推測されます。しかし又、読者通

信、虹のあじさい、芳野眉美氏の会見記等からは、彼女が生半可なマゾヒストを好かないことが、はっきりと分るのです。

彼女程のサディスティンならば、一時の遊びでは真正のマゾヒストを得難いことは充分ご承知でしょう。とすれば一筋の望みが残るといふものです。彼女は体力もあり、忍耐力も強いマゾヒストを求め続けておられるようです。私をその場に想定した場合、体力はとも東さんのご希望には叶いません。芳野氏の会見記によれば、「小柄で可愛い感じ」と書かれてはいますが、虹のあじさいの文中には「五十六キロの私を落すまいと……」なる一節があります。

私は百六十四センチ、四十九キロしかありません。実際にテストを受けるまでは、何回十畳の部屋を這い廻ることが出来るか心許ない限りです。

でも私は、折角のチャンスを抱もうと懸命になるでしょうし、小さい頃、友達とのけんかで、どんなになぐられても泣かなかった忍耐力は持っています。そして、更に「重いかい、痛いかい。でもここはジュウタンだからまだいいのよ。板の間のことを考えたら、まだまだ歩けるよ」といった、天才的な調教の

言葉を掛けられ、騎座を巧みに締められれば（身体の安定度を確めてという一節も見られますので）徐々に廻る回数も増していくだろうと信じます。

前述の二、三回の職業的ドミナとの体験からすると（少しPRをさせて頂きますが）私の奴隷としての適性を挙げるとすれば、忍耐力の他には、唇と舌の使い方にいささか自信があります。私ならストッキングを脱がせるのに手を使うような真似はしません。ガータさえはずして頂ければ、口先で上手にとってご覧に入れます。又、おみ足を洗うのに手に石鹸をなすような横着はしないでしょう。鼻面と頬に石鹸をつけて、手に代えるつもりです。もし東さんにその趣味がおありなら、始めて頂くときでも口で直接、決してこぼさずに頂戴できます。

更に、私は鞭を生来好みませんから、「これが上手に出来なかつたら、鞭何十回よ」という風におどされれば、如何様にも調教され得ると思います。念の為に申し添えますが、どんなきつい鞭打の際にも、うなり声はあげませんが、叫ぶような意気地のない態度はとりません。

次に私が最も期待し得る横溝様の場合を空

想させて下さい。

彼女を対象に私が夢に描くのは第一のケースです。

横溝さんは未婚二十四才のBGで（もう二十五になられたでしょうから、或はお嫁に行かれたかも知れませんが）充分第一のケースについて期待できる訳です。

但し、彼女が「結婚するなら、やはり男性的な男性」を欲するなら、それまでの話でしかありません。というのは、彼女が昨年七月号の読者通信欄で「私の希望としては弱々しい小柄な人を相手にしたいのです」と書いておられるからです。まず普通の女性（女性は特に外聞、見得を気にする人が多いので）なら、弱々しい男性を好むことはあっても、自分より背の低い男性を夫に持つ等とは考えられませんから。でも、彼女がサディスティンである場合、この常識では律し切れないものがあることを願います。私をその場に想定した場合、五尺四寸の彼女とは背丈は殆んど変りませんが、十四貫の体重（五二・五キロ）にはやや劣り、やせ型で弱々しい私は彼女の奴隷としての素質充分に思えるのです。牛乳配達少年（うらやましい限りです）の様に床の上に上向けに寝かされた私の上に、一旦

腰を落せば後は簡単、従順で忍耐強い奴隷は、必ずや横溝さんのご意に叶うものと信じます。

以上、お二人のサディスティンを空想の材料に拝借した失礼をお詫び致します。

この志願書（真心の誓約を兼ています）が、お二人をはじめ、今は未だ不特定多数のドミナの皆様の眼に触れることを願って止みません。

編集部の方が、幸い記事にして下さるとすれば、七月号（五月末発刊の）以降となるでしょう。六月の第三日曜日午後五時に渋谷東急文化会館のニュース映画場の最後列、正面に向って一番左側の座席か壁際に右腕に白いハンカチを巻いた男がいましたら「ベン？」とお尋ね下さい。

「ベン」という名は前にも一度使ったことがあります。皆様の便利な奴隷という意味と、便所のベンとを併わせて、せんえつにも自ら慰めにつけたものです。誌上での呼び掛けも大いにお待ちしておりますし、ご命令がもしあれば、本名や住所も発表致します。

（東京Aベン号より）

ストリップSM劇の体験

毒婦の地獄責め

富士春波

さそり せん
蝎のお仙

柳島妙見の社の森を、遠くに望み、鴉の啼
声がかきこえてくる、ここ本所割下水の寂しい
湿地帯の一郭。黒板塀の小さな家。

諸道具もロクになく、なんとなく陰気な感
じのする、この部屋。

洗い髪に斜めにさした櫛、黒襟の荒格子の

袴の衣紋をぬいて、盃をもっている小肥りの
二十三四の女。仇っぽく艶美である。

その相手になっているのが、三十ぐらいの
町人、浅黒く骨格も逞ましい。

その他には誰もいない。

ほんのり上気した顔で、女が、

「今日は外の雨のように、しっばり濡れよう
よ、半さん。どれお銚子のお代り」

と隣の炊事場へ立つ。

縁の軒下の竿に、まっ赤な女の湯文字がほ
してあるのへ、半次郎の眼がちらりちらりと
そそぐのを、炊事場から出かける女が見て、
北叟笑む。

「何に見てるのさ、ホホッ、目に毒だよ。こ
う降り続いちゃ、乾しものも乾かないさ」
と周章する半次郎へ、さアと持ってきた酒
を注いでやり、自分はのまない。

と、たちまち半次郎の体が、崩れ、顫え苦

しみだす。

「お新、からだが……ううう」

お新と呼ばれる女、そつと覗きこみ、

「苦しいかい、半さん」

「おお、お新」

半次郎の前へ、スツと立膝してお新が、

「ホッホッ脆いもんだねえ。南蛮渡りの凄
痺れ薬の利き目は、早いもんさ」

心地良げに冷笑する。

痺れ薬を盛られた半次郎は、動くことも出
来ない、全身に突っ刺さるような苦しみであ
る。

「ホッホッ、苦しいかい。おまえさんが辰巳
芸者だと思ひこんでいる、このあたしを一体
誰だと思ひかい。今にあたしの正体を見せ
てやるからね。ホッホッ」

お新は酒膳を、突き退け半次郎の顔を手で
正面を向け直し、

「ジタバタせずに、よっくお聞きッ。京、大
阪から流れ流れて、江戸まで、^{まおとこ}間男、^{ゆすり}強請、
人殺しの悪事の数々、歴^れつきとした兇状持ち
のお姐さんだ。あたしゃアねッ、あたしゃア
ねッ、あたしゃアツ蝎のお仙だよッ」

スツクと立ち、両肌脱いで、胸から背へ回
った大蝎の文身、^{いれずみ}裾を高々と捲り挟み、燃え

るような、まっ赤な湯文字を出し、毒婦の本
性を現わす

「エッ……し、知らなかった」

半次郎は、無念の齒がみでもがく。

「ここはね、お仙部屋だよ。ここにつれこま
れた男は、唯じゃ済まないよ。ホレ今に見て
いるがいい」

お仙が冷笑する時、

「姐御、うまくいったらしいわねえ」

と裏口から、傘を手にした若い女が入って
来て、縁へ上る。十六七の伊達巻き一本に素
袷で、並の娘ではない。

毒婦なぶり

「お千代、脆いもんさ、このざまさ」

とお仙が、男を見せて笑う。

「マア、苦しそうに……」

お千代は、覗きこんで、お仙へ、

「すぐ、矢場の女衆が四五人くるわ、おかみ
さんも、あとからくるって……」

「フン、そうかい。それまでに仕度しておこ
うよ」

お仙が、半次郎の顔を向け直して、

「ホッホッ、これから蝎のお仙の凄なもの
が始まるんだよ。見物衆のくる前に仕度をさ

せてやるよ、裸になるんだッ」

お千代と一緒にあって、半次郎の帯、袷を
容赦なく剥ぎかける。

「お仙ッ」

必死に拒みもがく半次郎を、まる裸、白い
六尺褌一本にする。

「ホッ姐御、いい体しているわ。ピッタリ締
まった六尺褌、ほればれるわ」

とお千代は、男の裸身を喰い入るように眺
める。

「ホホ、薬は休いっばい回りきっているし、
縛るのはあとでいいよ。このざまじゃ、褌一
本でノタ打つだけさ」

お仙は、パツと男の脇腹を蹴る。

「くくくッ……」

はじめに転がるのを、お千代が裾から赤い
湯文字をひるがえして、男の顔を覗き、

「くやしいの、くやしいの、自業自得よ。恐

ろしい蝎のお仙の罠に、はまってバタバタし
ても仕方がないわ。裸、六尺一本にされたか
らにゃ、男らしく、存分の苦しみのたうつの
よ、綺麗な矢場の女衆が見物よ。ホッホ姐
御のいう通りに男らしくなるのよ。分って、
ホッホ、チチッ……だ」

と笑う。男は苦しうに、もがくだけであ

る。

また、雨がひとしきり降ってくる。

「ヤイ、ご覧ッ、蝎のお仙の前で存分に顫えるがいいさ」

お仙はパツと着物をすてて、赤い湯文字一枚になる。毒々しい蝎が背から腰へ気味わるく這っている。その妖艶さ。

「お、お仙ッ」

半次郎が必死にもがく胸もとを、グツと踏みつけて、

「どうなのさ、てめえが、このお仙の赤い湯文字にノメノメと見とれて、こんなざまになったんだよ。くやしいかい」

お仙は自分の腰の湯文字を、叩いて広げて示し、

「てめえ、この蝎のお仙の湯文字にや、マチ（湯文字の布の上に白い小巾の布がとりつけであること）があることを聞かなかったのかい。あたしに弄ばれた男なら、みな知ってるはずだよ。ホッホホ、とんだ恐ろしい女に引かったもんさね」

責め作者

凄艶なお仙の裸身からは、妖氣がいったい発散するようである。グツとたくしあげた湯

文字、腿のつけ根まであらわに見せる。

お千代が手桶の水を、男の腰へザツとかけて、

「ホホホ、禪で男の形を見せて、苦しみぬくがいいわ」

と半次郎の upper body を、脚で上へ押しあげるようにして見せさせる。

「くくくッくッ」

顫える半次郎の、水を含んだ禪の前袋は、びっしょり濡れて、ふくれあがっている。

「ホッホッ、いいざまね。これからたっぶり、女衆の前で、いいざまになるのよ」

お千代が淫靡に笑って、見入る。

「くやしいだらうねえ、ホッホホ」

半次郎は必死に、悶える。

「ど、毒婦ッ、毒婦に……」

と起きあがろうと、もがく肩先きを、片足高々と腿の奥まで見せて、お仙。

「ジタバタおしでないよッ」

パツと蹴ると、男はドドッと鈍重な音をたて縁から、庭へ転落する。

「くくくッ、くやしいッ」

水浸しで転転する半次郎を、素足でとび降りたお仙とお千代が、ドドドッと、かわるがわる胸や腰を蹴り、なぶる。

「静かにして、これからの地獄責めを受けるんだよ」

と、お仙――

台本どおり舞台は進行している。舞台のソデの影から私は、台本を見ながら人物の動きを凝視していた。

初日だが、女も男も達者で、責め物のイメージをこわさない。芸題は「お仙責め双紙」終戦直後の開放されたエログロが、小説に映画に芝居に、絶大な人気を博していた時であった。ストリップが始めて登場し、全ストさえ、都会のまんなかで演ぜられた。ストリップ女剣劇も、露骨な責め物も、当然、客を呼んだ。

S（サジ）M（マゾ）などの言葉が、ではじめたのも、この頃からである。

この『アバン劇場』はもちろん、ストリップであるが、現代・時代の責め物を加えていた。ドサ回りの女劇団から二、三人の女が、天分があるのか、この責め物を立派にやりとげている。

今の芝居で、お仙の役をやる君代というのは、実際は三十近い年だが、若く見え、日舞もやり、一座のスターであった。お千代の役は二十才の町子という、地方の芸者の見習を

していた、芸ごとの好きな女である。

私はここまで眺めていて、その演技、雰囲気になかば酔うようであった。実際にお仙のような毒婦に、責められているように、官能のうずきに体が熱してきた。

なぜなら、この台本の作者も、演出も私だからである。

耽 美

もちろん、責めに（換言すればSM）趣味や体験がなければ作れるものではなく、また演者も然りといってよい。一夜づけの即成台本（日数をかけておられないほど、小劇団の仕事は何かと忙しい）であっても、力はいっているはずである。

君代のために書いた、久し振りの毒婦物で、君代の全身から発散する妖美な、凄艶な嗜虐のすべてが、私の心を把握している。

「鵜野木さん、こんな役、いやよ。とてもでないわ」

とはじめは、辞退した君代だが、

「じゃ君ちゃんは、平常の人間かい、サジの性格だとも知っているよ。他の人には分らないが、オレには——」

と、私に凶星を指されて、赤くなって苦笑

した。

で、台本が書きあがって、本読みというところで君代ひとりを、ひそかにホテルへ連れこんだ。

台本を読みながら、要所を説明する私は君代の反応を、それとなく窺っていた。

『半次郎は泥水にまみれながら、二人に足蹴にされている。』

お仙「お千代、みんなの来る前に海老縛りにおし、薬はまだ回りきってるけど、縛った方がみじめに見えるからね」と長い麻縄を投げだす。

お千代「あいよ」と縄で半次郎を、俯伏させ、のしかかって縛りだす。

半次郎「ウッ、ゆ、許して」と苦しみもがくのを、強く押しつけて、

お千代「フン男らしくないわねッ、へたの悪あがきはみっともないわ」と縛りあげて、お仙の前へ向けて笑う。

お仙「ざまみろ、覚悟はおできだろうね、このお仙部屋いっぱい、男のありったけの苦しみをさらさせて、やるからね」

とそばの角い庭石へ、片脚かけて湯文字を腰まで捲り上げ、チラリと太股を見せて、妖笑する。

お千代「アラ、みんな来たようよ、姐御」という時、裏木戸あたりから、ドヤドヤと下駄の音とともに矢場女四人が入って来る。

お仙「ホホッ、待ってたよ。こっちへ寄って、よっくご覧な」と四人を半次郎の前へ来させる』

——と読んでいく。

君代は、何となく蕩然としているようで、「芝居でなくて、もし実際だったら、どうでしょう。お仙も半次郎も。鵜野木さんも、この半次郎になりたいのでしょ。ホッホ、あたしもお仙になりたいわ」

と君代は瞳を輝やかせて、鵜野木の顔を見る。

「お仙になるんじゃないか」と鵜野木。

「いえ、現実によ、この芝居のように江戸時代に戻ってさア」

という君代の、ムッチリした肌、妖美を匂わす肥り肉のヒップに真紅の腰巻が、ぴったりとつく理想的な凄艶毒婦である。

毒婦夢想

「昔の姐妃のお百、鬼神のお松や夜嵐お絹などの毒婦に憑かれ、毒婦物の講談や小説を集

めては満足して、そんな女から弄ばれて、殺される男になってみたいんでしょ。それも裸にされて、責め苦のうえ殺される。女は赤い腰巻きをいっぱい出して……男は、その腰巻きの主が、恐ろしい、毒婦のものとは知らず、それに引きよせられる。こんな目に逢いたい……っていう鶴野木さんだったわね」

君代の一言は、自分の胸のなかを、透視されたように私は驚いて、

「ちちがう……バカな」

「だって、いつか酔っ払った時、誰にもいっちゃいけないと、打ち明けてくれたじゃないの。でなきア、こんな真にうがった芝居も作れないわ」

弁解はよそう、君代は頭もいいし、すっかり看破している。

「で、君ちゃんも、サジの毒婦に憧れてるのかい？」

「フフッ、そうよ。現実にはやってみない。町ちゃんも、その気があるらしいわ」

そうだろう、演技のうえにも、そんな気分が溢れてている。

成人後、私はなぜか凄絶嗜虐の毒婦に魅せられ、読物はもちろん、伝説的な人物（例えば姐妃のお百、夜嵐お絹など）の真实性を掴

もうと、あらゆる文献をあさり研究をした。高橋お伝などは近世だし、あまりにも有名な事実であり、いろいろのものを掴めた。その場の髪形、着衣、じゅばん、湯文字の色なども分った。

演劇、映画の嗜虐毒婦に満足するものは、ひとつもなかった。もちろん、検閲の厳しさもある。

谷崎潤一郎のマゾ小説に、断片的に妖女などが描写されているが、やはり私にとってはものたらない。

妖女、毒婦の研究と、嗜虐毒婦への夢想、私のような変った性向は、他に絶無ともいえよう。

他人から見れば、いささか理解しにくい諸点もあるはずである。

毒婦のそなえたものは、酒、賭博、詐欺、強請、殺人、淫乱であり、それに嗜虐性が加わり、この蝎のお仙のような凄絶な、責め、殺しも多かった。

凄艶嗜虐毒婦の文身、湯文字（赤でも水色でも）は耽美である。

今、ここに、私の対象物として、君代という女がいる。舞台の毒婦ぶりが、現実眼前に迫って……という夢想で、すこしでも満

足感に愉悦しよう。

蝎のお仙の君代、君代の蝎のお仙。どちらでもいい、嗜虐毒婦の虜となる男が、私であればいいのであるが。

「それほど責められたければ……」

私に半次郎の役をやったら、と君代がいうが、まさか舞台の役者にはなれない。第一、柄でない。半次郎役の歌舞伎出の文蔵が人気者で、結構何でもこなす。

「これから先きを、あたしはあたしなりに、あなたはあなたなりに、他の者も傍にいる譬えでやってみない」

と君代は、この場で実演しようという。

私もその準備は出来ていたので、わざと防音装置のあるホテルを選んだのである。

舞台でするように赤い腰巻き一枚になった君代が、髪を乱し、口にアイクチ（小道具）をくわえ、六尺一本の私を細引きで後手に縛り、絨緞の上に転がし、小グラスで痺れ薬をのまされる。

雨の庭、横に見物の矢場女四人とお千代。それらを仮定して、君代のお仙と半次郎の私が、台本の進行にともなうて動いてゆく。

恐ろしき実演

「どうだえ、六尺一本の男一匹が、これから女衆のまん前で、生地獄の苦しみだよ。蝎のお仙の責めア金を出しても見られないよ」

とお仙がパツと男の肩を蹴った。

ビュウノ ビュウノ

お仙の右手の長いムチが、空を唸る。

痺れ薬（劇では最初になっている）が回りだし、私の感覚はある一方へ集中する。

シュッノ

シュッノ

求む Ⅱ 撮影場所の提供Ⅱ

○最近読者の方々の御厚意により写真撮影の場所の提供を申し出て下さる方が時々あるのですが、残念ながら遠方のため全面的に利用させて頂くまでには至っておりません。京阪神地区にて、若し撮影場所を提供下される方がございましたら御一報賜われれば幸甚です。使用料その他条件については書面又は直接面談の上、相談させて頂きます。尚、東京方面にて撮影場所の提供並にモデルの提供を申し出て下さいました方々には、誌上をもつて厚く御礼申し上げます。

（編集部）

半次郎の背、腰へ乱打されるムチ。

「ウウッ」

見る見る、男の皮膚は朱線を散らす。

「ホッ、苦しいかえ」

お仙の嘲笑が、打音にのる。

痺れ薬は、快い鈍痛と、ふるえるような、

痺れ、五体の自由が利かなくなるが、裸身に

ムチ打たれ、ムチの先端が腿から脚へ、キリ

キリと巻きつき、引き絞られる、その苦痛は文字では表現できない。

やがて、素裸にされて、そうなるのだ。

半次郎の苦悶の下から烈巾の怒声が。

「ど、毒婦ッ毒婦ッ」

お千代が覗きこみ、

「ホホッ毒婦ってんの、毒婦。いいわねえ、

その恐ろしい毒婦にひかったんだわ。蝎の

お仙って恐ろしい毒婦に」

と男のノドもとを、爪先きで踏みつける。

呻きもがく、その下半身いっぱい、お仙の力

いっばいのムチがとぶ。

ピッノ ピッノ

「ウッど、ど毒婦ッ」

「ホッホ、禪一本で毒婦っていう気持は、ど

うなの」

とお千代は足を離さず、嘲笑する。

「今度は、素ッ裸になって毒婦って、いうんだよ」

お仙が淫靡な笑いをもらし、また一打ノ

「あたしが、みんなの前で、このピーンと締

まった禪をムシってやるわ」

お千代は、男の体を俯伏させる。

「くくッ」

必死の悶え、半次郎の腰が顫える。

「ホホホ、顫えてるの、男にとって禪がどん

なに大事なものか、それを大勢の前でムザム

ザ、ムシリ取られるのよ。素ッ裸にされる、

そのくやしき、恥しさをせいっぱい見せる

んさ。禪のない、熟しきった男一匹のさま

が、見たいってさア、みんなが、ホホッ」

お千代が笑って、体をずらして、

「姐御、もう一鞭打ってよ」

「畜生ッ」

お仙が、ビュウッノ 孤を描いて男の尻か

ら背へ強打する。

「ヒッヒッ」

弓のようにそりを打って、男の絶句。

全身麻痺の私は、俯伏したきりである。

この凄惨な景を、矢場女たちは、思い思い

にささやき眺めている。

「ひどいこと」

「くやしいそうに、マア、あんなに」
「素ッ裸じゃはすかしいだろうね。ホホ」

法悦三昧

女たちや、お千代の台詞を、君代が代言しながら、その抑揚の使い分けは堂に入ったものである。

「お千代、そいつはあたしがするよ。男の禪のムシリ方にや、ムシリ方があるよ」

お仙は、半次郎の禪の結び目を掴む。

「こうして」

踏みつけ、蹴返し、無残、白布は長々と腰から引きムシられる。

女たちの陰になっているが、半次郎は一糸まとわぬ全裸にされたようだ。

「ウウッ、くくやしいッ」

羞恥と無念に顫えるみじめな、男の姿が六人の女のまっただなかにある。

六尺布は松の木の枝へ、長々と引っかけられた。

矢場女たちが、男のなかの何かを見て淫らに笑う。

「マアこんな目に逢ってながら、凄いいじゃないの、ホホッ」

「よく禪が破れなかったわねえ」

「ほれぼれするよ」

「熟しきった男一匹、これこそ素ッ裸ってヤツだわねえ。ホッホッ」

お仙の足が、ダダッと男の胸を蹴る。

「ざまア見やがれ」

「くくくッ、毒婦ッ……」

私は洋子の足下で、ノタ打ちまわった。

毒々しい顔、白い脚に、赤い腰巻き。私は脂汗を流して、苦しく、呻いた。

「フンこれから、たっぷりと生地獄を見せてやるからね」

と洋子はアイクチを握り、私の全身をくまなく、チク、チクと刺していく。竹に銀紙を張った小道具だが、力を入れると痛い。

「ヒヒッヒ……」

半次郎の悲鳴ににせて、私の肉塊は醜く横転する。

「どうおしだえ、苦しいかえ。」

腰巻きを腰まで、たくしあげ、立膝で突き回す洋子の、迫り血を浴びた姿は、凄虐鬼気迫るものがあつた。

これが台本どおりの時代、人物だったら。

自分が半次郎であつたら……法悦に咽び、狂うような全裸を、淫蕩な矢場女は責めなぶるであらう。

毒婦の凄絶苛烈な、責めは、その尽くるところをしらない……。

「お仙」

愉悦と苦悶に、転転する私。気がつくとき洋子も疲れきつたのか、崩れ坐って、紅い顔をしている――。

毒婦へのファンタジーは、私と洋子を結びつけていった。

そして、ふたりは夫婦になった。

毒婦の責め物は、次から次へ作っていったが、時代も移り、芝居もやりにくくなった。

劇団も解散し、ドサ回りのストリップチームに加入し、軽い、ごく軽い責め物をやっている。

舞台では、毒婦物はやれなくなったが、私たちは夫婦である。人目を避ければ、何でも実演できるのである。

私たちは、なぜか一向に年をとらない。二十台の若さに見え、水々しい発らつとした肉体である。原因は分らない。

毒婦につかれ、毒婦を演じ、興ずる私たちは今後もそれに悦び、生きていくであらう。嗜虐地獄のなかに、人知れず踊り舞う。私たちは、因果な境遇かもしれない。

M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足舐と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- 顔面に女の尻が乗る

- 大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にくぐめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

シナリオ

「いちぢくの実を持つ女」

葉 山 啓

人 物

旗 美也子 (28才)
 有田由起夫 (35才) 雑誌編集者
 矢島 (55才) 美術評論家
 中年の男 (50才)
 その他

○

1 いちぢくの老木に、実が、たわわに、実っている。その実の一つ、いま、まさに、熟れきって、落ちようとする風情。その、ク

ローズアップの上に、メインタイトルが、ダブル。(F・O)

2 霊柩車が行く。

3 火葬場、高い煙突から、うっすらと、晴れた空へ、煙が上る。

4 カメラの方に向って、静かに、お辞儀をする、旗晋吉未亡人、美也子(28才)そのアップ。美人である。

男の声(矢島。美術評論家、55才)「あれが、美也子未亡人だ——」

男の声(有田由起夫、美術雑誌編集者、35才)「若いんだなあ——」

(その表情には、感慨をこめた、好奇心が露骨である)

矢島「年寄りが、若い細君を持つと、早死にする。旗君が、良い例だ——」

有田「若返って、長生きするとういじやありませんか——逆ですよ。」

矢島「有田君。君は、まだまだ若い。35才で、65才の夜は、わからんよ」

美也子、二人の方へ、歩みを移して来る。喪服に包まれた、豊かな、肉が、今、まさに、熟れ切って、香ぐわしく、におって来る風情である。

美也子「矢島先生。本日は、お忙しいところを……」

矢島「いやいや……」

（横に立っている、有田を、かえり見て）

矢島「奥さん——こちらは、美術サロン編集部の有田由起夫君。——画の話となると、亡くなった旗君とは、かなり、馬の合った方だった……奥さんとは、どういうものか、機会がなくて……」

美也子（うなずいて）「お名前は、旗から始終、伺っておりました。生前は、何かと、お世話になりました……」

有田「いえ……とんでもございません。私こそ、旗先生には、ずい分、お世話になりました。——一度、家へ来い、女房に、引き合わすから、と、何度も、おさそいを受けながら、ついつい、俗用に追われておりました、失礼しました。……」

美也子（淋しく微笑む）有田「……この度

は、又——先生には、本当に急なことで……まるで、嘘のようです」

美也子（目を、しばたいて）「……本当に……まるで……夢のよう……」

そこへ、縁者と、おぼしき、中年の男がやって来る。

男「奥さん——どうか、あちらへ。」

美也子（うなづき矢島と有田に会釈する）

「では、失礼致します。いずれ、又——」

矢島

頭を下げる。

有田

美也子、縁者と共に、焼き場の方へ、歩いて行く。

有田「矢島先生——いいんですか、お骨を拾わなくても……」

矢島「生きている間は、始終、反目し、論

争をくり返して来た、画家と、評論家だ。

——その評論家に、今更らしく、骨を拾われども、画家は、くすぐったい思いに、苦笑するばかりだろう。」

美也子の後姿、だんだん、小さくなる。

有田「——若く——美しく——」

矢島（ボツリと）「旗君は、美也子さんを愛していたよ。」

有田「六十五才の老人と、四年間も、夜を重ねて来た女——それは、一体、どんな夜だったのだろう……」

美也子の、プロフィール。アップで。——

火葬場の煙突。煙は、もう、出ていない。

(F・O)

5 タイトルバックになった。いちぢくの実が、ぼとりと落ちる。

6 故、旗晋吉画伯の遺影。温和で上品な老人である。

美也子の声「あら、いちぢくが、落ちましたわ。」

7 (火葬場の場面より、14日程後)

旗晋吉画伯の遺影を飾った、座敷。座敷には、矢島と、有田と、美也子がいる。三人の前の床の間に、画伯の遺作となった、制作途上のキャンバスが、立てかけてある。

その画は——。一人の女が、青く固い、いちぢくの実を手にして、しやがみこんでいる

構図である。

有田（しげしげと、その画を眺めて）

「いちぢくの実と女——矢島先生、先生は、この画について、評論家として、どう、お考えになりますか。」

矢島「わからんね……旗君が、一体、どういうつもりで、この仕事を始めたのか、僕にも、わからん。それに、第一、この画は、まだ、制作の途中だ——遺作とはいえ、完成された作品ではない——だから、尚のこと、わからんね。」

有田（うなずき）「奥さん——奥さんは、如何ですか——僕は、どうも、この画のモデルは、奥さんのような気がするんですが……」（画の中の、女のアップ）

美也子「——」（顔を伏せたままである）

有田「勿論、確信があるわけじやありません。間違っていたら、御免なさい。——でも僕には、なんとなく、そんな気がするんです……」（云い終り、タバコに火をつけ、うまそうに吸う。そして、美也子を見つめる）

——（この時、美也子の中に、一つの決意が生れる）——

美也子（伏せていた顔を、きつと、あげ、有田を見つめる。そして、云う）「そうです……この画のモデルは、私です。間違いありません……。」

（画の中の女、アップ、激しく迫る）

（画の中のいちぢくの実、激しく迫る）

（そして、夢見るような美也子のアップ）

有田
矢島 思わず、顔を見合わせる。

故、旗画伯の遺影（アップ）

画、いちぢくの実を持つ女へ、ゆるやかに前進移動する。

美也子の声「そして……この画は、あの人の、人生そのものなのです」

（F・O）

8（F・I）墓地。無数に並ぶ墓石の間を有田が歩いている。この前の場面、（7）より、10日後のことである。

カメラ、有田の視線になって、墓場の中をゆるやかに、動いて行く。

奥まった一角に、故、旗晋吉の新墓がある。その前に、手を合わせている、洋装の美也子の後姿が見える。

有田（立ち止る）

美也子（その気配に、ふり返る）

有田（会釈する）

美也子（美しく、微笑む）

そして、二人、歩み寄る。

有田「お電話を頂いて、驚きました——。」

美也子（えん然と笑って、うなずく）

有田「どういう御用でしょうか？ 何か、

お話があるということでしたが……。」

美也子「——」

（黙って、有田に背を向け、再び、墓石の前に、しやがみ込む）

（その首筋の線が、明るい光を受けて、美しい）

有田「——。」

美也子（そのままの姿勢で、向うを向いたまま）

「有田さん——どうか、主人のお墓に、参ってやって下さい。」

有田（うなずいて、墓石の前に進む。そして、ギコチなく手を合わし、頭を下げる）
美也子（ようやく立ち上り、ハンドバッグから、一通の手紙を取り出す。そして有田の前に、さし出す）

有田「これは——」

美也子「先日頂いた、原稿の御依頼です。

……お返し致しておきます」

有田「では、やっぱり、原稿は頂けませんか？」

美也子（うなづく）

有田「そうか——残念だなあ——」

美也子（顔を伏せる）

有田「僕は、あの……『いちぢくの実を持つ女』が、どうして、旗先生の人生そのものであったのかということを、知りたいと思ったのです——」。

美也子「——」

有田「奥さん——もう一度、御考え下さいませんか……画の方は、もう、グラビアに、まわしてあるんです。——先生の最後の作品の解説は、やっぱり、奥さんをお願いしたいのです。——」

美也子「——」

有田「それに、奥さんは、あの画のモデル

です。モデルと画家という関係からも、是非お願いしたいのです——」。

美也子（首を振る）「ダメですわ……」（そう云って、墓石を離れて歩き出す）

有田（がっかりする）

美也子（フト立ち止り）「——でも。」

有田（ふり返る）

美也子（向うを向いたまま）「有田さん、個人になら——」

——（美也子の中に、又、激しい決意が生れたのである）——

美也子（息使いが荒くなる）「あの画が、なぜ、あの人の、人生そのものであったのか——お教えしてもいいのです——」。

有田（大きく波打つ、美也子の背中を、見つめている——やがて、視線を、そっと墓石に、うつす）

墓石「揚旗光照吉禪定門」

美也子「——人生——、それは、やっぱりどうしようもない程、哀しいものなのですから……」。

（吐き出すように云って、後をも見ずに、足

早に去って行く）

有田（その後姿を見送りながら、ポケットから、タバコをとり出し、火をつける。そして、ホーと、煙を吐く。長く——長く——）

（F・O）

9（F・I）達筆で書かれた手紙（美也子から、有田に宛てたものである）カメラ、その文字を、ゆっくり、なめて行く。

（その上に、美也子の、感情を殺した。低い声が、その手紙を朗読して行くのが入る）

「梅雨に入り、日々、雨足が、激しくなるようでございます。たいへん、ごぶさたいたしました。が、お元気にて、本の編集に、おはげみのことと存じます。わたくしも、亡夫の百カ日を、昨日、相済ませまして、ようやく、おちついたようでございます。

それで、かねてより、有田様に、お約束のこと——『いちぢくの実を持つ女』——の画のことについて、親しい、お話を申しあげようと存じます。」

10 雨が上ったばかりの、山道の夕暮、カ

メラ、ゆるやかな、移動を、重ねて行く。
(その映像の上に、美也子の、朗読が、前シーンに続いて入る)

美也子の声「来る六月二十日の夕、正七時
清水山の当家別邸——」

11 深い木立の中に、朽ちる寸前の数寄屋門が見え始める。カメラ、ゆるやかな移動で、その門に近寄る、表札は、竹製のもの「旗別邸」と見える。カメラゆるやかに、その門を、くぐって、移動を続ける。邸内の庭は、手入れが行き届かずに、雑木雑草が生い茂っている。その草深い一隅に、一棟の茶亭が現れる。立札があって「清見亭」と、読める。

(やはり、この映像の上に、美也子の朗読が続く)

美也子の声「茶亭、清見亭にて、粗茶一服さしあげたく、御案内申しあげる次第でございます」

カメラ、茶亭清見亭の全景まで寄り止る。

12 再び、手紙の文字、カメラ、なめて行く。その上に美也子の声が、かぶって来る。

「当夜は、どうか、どなたも、おさそい合わせにならぬよう、おひとりにてのおはこび、おまち申しあげております。

有田由起夫様

美也子」

13 有田のクローズアップ

不安相に、あたりを見回している。今まさに、暮れようとする山中の黄昏は、しんとして、さながら、寂滅の世界である。その様子を切り返して見せる。有田の不安つのる。

茶亭の障子が、静かに開く。そして、そこには、今までの美也子とは、まったく違う美也子が、立っている。

(註) Ⅱ「このシーン以後の美也子の服装。

それは、まったく、独特の、キモノである。

色は純白、生地は、羽二重、形は、うちかけのようでもあるが、前合わせがあり、かといって、普通の着物のように、深く打ち合わせるものでもなく、前は、浅く合わせて、裾をひき、一本の細い帯を一重に巻き前にたらしめた。独創的な、キモノである。

髪型はというと、肩下、二寸ぐらいの長い

髪を、洗って、すいただけの、シンプルなもの。

尚、美也子が、肌にとっているのは、この、キモノ一枚である」

有田(最初、それが、誰だか、わからない)。目をこらして見る。そして、ようようにして)

「——美也子さん……(口の中で、つぶやくように)」

美也子(茶亭の縁にみこみ、丁寧に会釈する)

「ようこそ、いらっしゃいました。さ、どうぞ、お上り下さいませ。」

有田(まるで、キツネに、騙されたような顔付きで、ぼんやりしている)

美也子「——どうぞ——(微笑む)」

有田(半信半疑、恐る恐る歩み寄る。そして、そんな美也子の様子をしげしげと見る)

美也子(微笑む——その微笑みは、この世のものではないほど、美しい)

有田(思わず)「美しい——(つぶやく)——奥さん——」。

美也子「さ、どうぞ——今、明りを入れましょう」

(と、言いながら、立ち上る。と、その時、キモノの裾が乱れた。白く、豊かな女体が、夕闇の中に動く)

有田(思わず、息を呑む)

「――」

(F・O)

14 湯加減も手順に沸る茶釜(釜)から、この、茶席の内部を紹介する。この席はいわゆる、代表的な四畳半席で、とりたてて、変わったこともないが、ただ席の一隅が、高さ三尺位の二枚折り屏風で囲われているのが、普通ではない。

やがて、百奴ローソクを立てた燭台が、美也子の手によって、水屋口から運びこまれる。

にわかに、席の中が、明るくなる。

有田(正客の座に坐り、この不思議な情景をぼんやりと見ている)

床の間の掛軸(茶掛)「不浄聖」

床の間の一輪差し(青磁)には、青く固いちぢくの実をつけた一枝がある。

美也子(改めて、水屋口をあけて席に入りふすまを閉めて、丁寧なお辞儀をする)

「有田さん――今宵はようこそ、おいでくださいました――」

有田「……奥さん――(声が、のどに、ひっかかる、咳払いをして)こ、これは、一体なんの真似なんです――」

美也子(微笑む)

有田「奥さんが、なぜ、こんなことを、なさるのか、僕には、さっぱり、わからない。……」

美也子(笑っている。ローソクの光を受けて、その笑顔は、実に美しい)

有田「――教えて下さい――」

美也子(静かに)「有田さんに、お茶を一杯、さしあげます……そして――」

有田「――そして――?」

美也子「いちぢくの実を持つ女――の画がどうして、亡夫の人生そのものであったのか、お話致します――」

有田「それだけのこと――。いや、たったそれだけのことに、どうして、こんなにものものしい道具立てが必要なのですか――?」

美也子「有田さん――そのお話は、実は、もう、始まっているのです。――このものものしい道具立ても、このような企ても、すべて、あの画と同じように、亡くなった主人の、人生そのものだったのです……」

有田「――」(呆然としている)

美也子「主人は、死ぬ直前まで、毎月一回、選ばれた日に、必ず、この席で、私と二人きりの、茶事を、重ねて来ました。時には朝茶、時には、正午茶、そして、時には、今夜と同じ、夜咄というようにです。」

有田「――なるほど――しかし、私は、旗先生に、そんな風流心があつたとは、失礼ながら、少しも存じませんでした――(感心したように、うなずいて)――いえ、それで、少し、わかりかけて来たようです。そうすると、今夜は、旗先生御存命の時と同じお茶を、私のために――」

美也子「はい――すべて、まったく、主人に致しましたように、御馳走致します。――そして、そのことが、ほかならぬ、亡き主人の人生そのものに触れて頂くことになりましたよう……」

有田(うなずき)「だんだん、わかって来るような気がします。しかし、奥さん――そ

の、お召し物といい、このローソクといい、僕は、最初、そこに、一体、どんな意味を見出せばいいのか、ずい分、戸迷いましたよ……」

美也子（微笑む）

有田「しかし、それにしても、旗先生は、ずい分と、このような、お遊びが、好きだったのですね……」

美也子（首を横に振り）「お遊びが好きだったのではありません——主人にとっては、プレイが、人生そのものだったのです。いえ、主人にとって人生は、プレイの場にすぎなかった——生活も、愛も、創造も、すべては、プレイであり、人生そのものであったのです——」。

（ローソクの光が、ゆらぐ）

美也子「だから、あの人は、最後まで、孤独で、哀しい心の人でした」

（一粒の涙が、美也子のほほを伝って流れる）

（F・O）

15 （F・I）

黒楽の茶碗の中で、激しく動く、茶釜。

（E）、やがて、一服の茶がたつ。

美也子「——お茶が、点ちました——」。

有田「頂きます」

美也子——（茶碗を、かかえるように持って、首を横に振る）

有田「頂けないのですか」

美也子（笑って）「いいえ——でも、このままでは、主人の時と、同じではありません——」。

有田「——？」

美也子「有田さん——、この、お茶、きつと、飲んで頂けますね……」

有田「——？」（うなづく）

美也子（笑って）「毒ではありませんから、御心配なく——」

（そう言いながら立ち上る。そして、茶碗を捧げたまま、席の一隅の、二枚折りの影に入る。美也子の下半身が、かくれる）

美也子（そのまま、有田の方を、ふり返り）

「私が、これから、なにをすると、お思ひになつて……？」

有田「わかりません……」。

美也子「御覧になる？」——」

有田（うなづく）

美也子「ダメ——」

（美也子、そう云いながら、ほんの少し、身体を、かがめる。そして、捧げていた茶碗が、二枚折りの影に、かくれ、美也子の下半身の間に入る）

美也子（ずっと目を閉じる。ローソクにゆらぐ、横顔が美しい）

茶釜が、沸っている。

有田（理解を越えた美也子の行為が、よくのみこめない。が、なにか、異様に、緊迫した情感が、美也子の方から伝わって来る。なんとなく、息苦しく、落ちつかない、目を閉じる）

——間——

美也子の声「さ——どうぞ——」。

有田（その声に目を開く、ひざ先に、茶碗が置かれ、その、すぐ前に、美也子が、あたかも、対決するかのように、坐っている。有田、顔を、あげて、ぼんやり、美也子を見る）

美也子（微笑む）「さ、有田さん——どうぞ、召し上って——毒は入っておりませんから、さめないうちに……」

有田（なにが行われたのか、まだ、よく、わからないのである。おずおずと、茶碗をとりあげ）

「では、頂きます——」

（と言って、茶碗の中を見て、ギクリとする。思わず、美也子の顔を見て）

「これは——？——奥さん——」

美也子（微笑む）

有田「ま、まさか……あの……」

美也子「そう……その、まさかですよ……私の——」

有田（激しいショックに、身体が、一瞬硬直する）

美也子「さ、どうぞ——これで、なにかも、亡くなった、あの人の時と同じですよ……白い泡立ちの縁に浮ぶ赤——どうぞ——

召し上れ……」

有田（生唾をのみこみ、思わず美也子の顔を見る）

美也子「どうなさいましたの？——有田さん——お飲みになれないの？——」

有田（かすかに、うなづく）

美也子「困りますわ——お飲み頂かないと——折角、たてたお茶じやございませんか、——亭主の心を無にすることは、お茶の作法に、叶いません」

（そう云いながら、ふところから、立派な短刀を取り出し、さやを払う。抜き身が、ローソクの光に、キラリと光る）

有田（口もきけなくなる）

美也子「さ、どうぞ——主人は、いつも、喜んで、二服、三服と、重ねました——」

有田（目を閉じる）

美也子「有田さんは、あの、いちぢくの実を持つ女の画が、どうして、主人の人生そのものなのか、お知りになりたかったのをごさいますよう——それならば——そのために、是非とも、このお茶を飲んで頂かないと、困ったことになります——」

有田「——奥さん——」。（悲鳴に近い）

美也子（美しく笑う）「さあ——どうぞ——」（短刀を、つきつける）

有田（どうしようもなくなり、美也子の顔と、短刀を見比べて、長く、ためらうが、美也子の笑いながらも、迫って来る気はくに遂に、観念し、目を閉じ、茶碗に口をつける、だが、どうしても、飲めない、そっと目を開く。ローソクにゆらぐ、美也子の顔、そして光る短刀——有田、とうとう、一息に、呑みほす。

美也子、優しく笑い、短刀をさやに、おさめる。

（有田、茶碗を下に置くと、思わず、戻しそうになって、ハンケチで、口を押さえる）

美也子「——お茶の、お加減は如何でしたか——？」

有田（じっと目を閉じている）

美也子（静かな声で）「——有田さん、あなたは、今、私——この、美也子のたてた、お茶を、あなたの、おなかに、おさめて下さいました。——これで、本当に、おわかり頂いたことと思います。私と、亡くなった主人との、月に一度の選ばれた日の茶事が、何故、主人にとって、人生そのものであったか——ということが……」

有田（ようやく目を開き、しげしげと、美也子の顔を見つめる）

「——奥さん——（声が噎れて、声にならない）——」

美也子（優しく笑って）「こわい顔——」

有田「——奥さん——ああ——信じられない。——僕は、僕は——気が狂いそうです——」

美也子「大げさな方です——たかが、一服のお茶で……お茶事は、これからですよ——どうぞ、ごゆっくりなさって下さい——」

有田「いえ——もう——僕は——これで——どうも——ごちそうさまでした——」

美也子「いいえ、ダメよ——お茶事は、これからですよ……」

有田「でも——」

美也子「お帰し致しません——」

有田「——」（目を閉じる）

美也子「有田さん——人生は、一度、足をふみ出せば、二度と、ひき返すことの出来ないものなのですのよ……どんなに、つらくても、哀しくても、行くところまで行く。……それが人生の本当の姿なのですわ……」

16 (F・I)

有田の前に、黒塗りの懷石膳が、美也子の手によって置かれる。膳の上には、同じ塗りの、一對の、飯碗と、汁碗が、（いずれも、ふたつき）のっている。添えられている箸は、青竹を割って、くしけずったもの

美也子（やはり、丁寧に会釈して）

「何も、ございません——と、云うと、嘘になりましょう——この膳も、かねてより、亡き主人が愛用のものでございました——どうか、心ゆくまで、御賞味下さい……」

有田（心の中の不安と、必死になって、たかっている。——目を閉じたまま——）

美也子「有田さん——さ、どうぞ——」

有田（おずおずと目を開く）

美也子（はなやかに笑う）

有田（美也子の笑顔を、じっと眺め、その笑顔の奥に秘められた、激しいものをみとめると、やはり観念する。ふるえる手で、飯碗のふたをとる。中を見て、驚いて、手にとる。中には、何も、入っていないのである）

美也子（有田の様子を、見つめている）

有田（汁碗のふたをとる。これにも、なにも入っていない。からっぽの碗と、美也子の

顔を、げげんそうに、見くらべる）

「——奥さん——」

美也子（微笑む）

有田「……これでは……これでは、頂くわけには、参りません……」

美也子（静かに）「亡き夫は、いつも、申しました……。お客に、すすめる料理は、そのお客の目の前で、調理するのが、もっとも、礼に叶った作法だと……ですから、私はいつも、私の料理を、夫の目の前で、調理、そして、すすめて参りました——今夜も、その通りにさせて頂きます……」

有田「……」

美也子（笑って）「これから、有田さんの目の前で、私の御馳走を、調理致します——今宵のために、一昨日から、準備した御馳走です。……どうか、召し上って下さい……」

（そう言いながら、有田の前の、懷石膳を捧げ持ち、再び、二枚折りの影に、かくれる）

美也子「有田さん——」

有田「はい——」

美也子「御覧になっても、ようございますのよ……私の御馳走が、お膳の上に、盛りつけられるところを……」

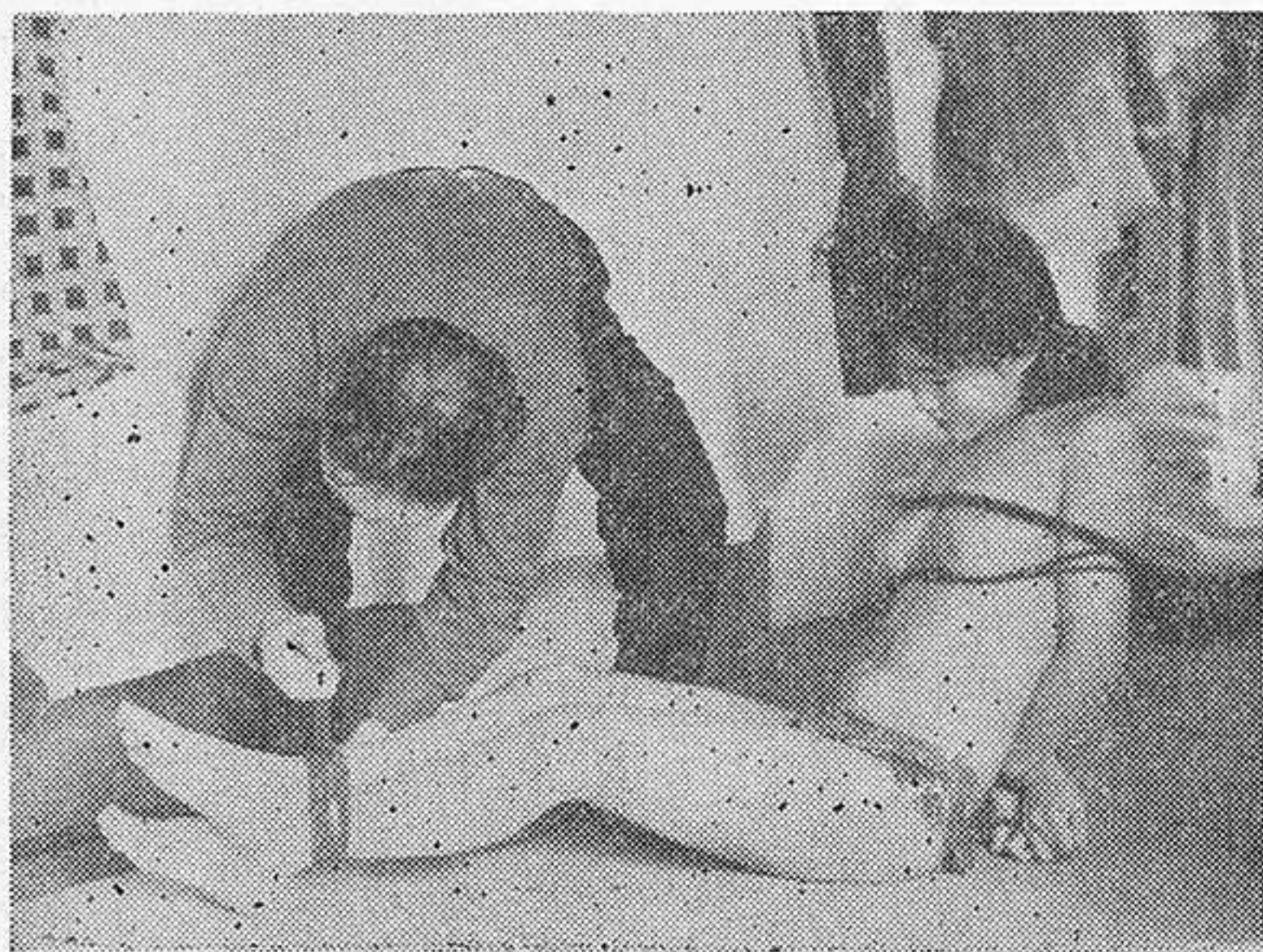
有田（ひざの上で、にぎっている。こぶし

ボクの責め方

宝塚二三夫

節子の足首を——

楽屋裏で踊り子節ちゃんの足首をくくる左近さん。いうまでもなく、ボクの大好きなのは可愛い女の子の足である。女の足プラス縛り。これがボクのすべてである。殊に節子の足は、色が白く腓えくぼが可愛い。こんな良い子を、いつまでも、ささくれだつた舞台の板の上で踊らせておくなんて、なんと勿体ないことだろう。それで、ボクは時々楽屋裏へ現れては、節ちゃんを縛るのである。自分で縛ることもあるが、ときには左近さんが手伝ってくれることがある。



が、ブルブル、ふるえている。目を閉じて、激しい不安と、たたかっているが——、美也子の言葉に、目を開き、フト、よぎる好奇心に、思わず、二枚折りの影に、にじり寄り、そして——見る——(E)

美也子(ほんの少し、身を、かがめる)
有田「——ああ——」。
美也子(目を閉じ、下半身に、少し、力を入れる)

有田「ああ——奥さん——」。(額から油汗

がしたたり落ちる)

仄かな、光が、たゆとう画面の中を、美也子の身体で調理された御馳走が、時には太く、時には、細く、そして、時には、ゆるやかに、時には、流れるように早く、実体のない、シルエットになって、よぎって通る。

美也子(その、うっとりとした横顔)

有田(まばたきもせずに、その美也子の一点を、見つめている。この間に、有田の中で、今迄になかった変化——すなわち倒錯への美意識が、かすかながら生じて行く——)

美也子(陶酔からさめたように)

「さあ、できました……お待ちどうさまでした……」

有田(ぼんやりと、美也子の顔を見あげる)

美也子(神々しいばかりの美しさで、有田に、微笑む——(E)——)

(F・O)

17 (F・I)

膳の上に並んだ、飯碗と、汁碗と——それぞれに、ふたがしてある。

有田（たった今、見た光景に、生理的な嫌悪を感じながらも、激しく、ひかれ始めている）

美也子「有田さん、お箸をおとり下さい。」

……この、お料理は、すぐに、さめますのよ

……暖いうちに、さあ、どうぞ……。」

有田「——奥さん——、そればかりは、どうか……」

美也子「いいえ、いけませんわ……どうか、一口でも、箸をおつけになって下さい。」

——夫は、いつも、お代りを、致しました……

……」

有田「……先生が……旗先生が……。」

美也子「ええ……」

有田「——」。

美也子「さ、有田さん——冷めませんうちに、どうか、せめて、一口でも……さあ、召し上って下さい」

有田（遂に、ことわり切れずと見て、観念し、青竹の箸をとる——（E）——そして飯碗のふたをとる——（E）——）

（F・O）

18 （F・I）

逆光線の画面の中に、大ぶりで、美しい模様を染め出した陶器の茶碗、軽く一杯の白飯が入っている。

その映像の上に、美也子の、晴れやかな、声が、かぶってくる。

美也子の声「有田さん——これで、本当になにもかも、亡き夫と、同じです——夫は、この御馳走に、人生を、かけて来たのです。……あなたも、きっと、今に、自分から、探し求めて、この御馳走を求めるように、おなりでしょう——そして、それが、やがては、あなたの人生の唯一つの目的になり、生甲斐になることでしょう。——本当に、よく、召し上って下さいました——美也子の今夜、最後のお振舞、この、お茶漬を、どうぞ、召し上れ……美也子のすべてを、有田さんに、さしあげます——」。

仄かな光の中を、一条の水に似た、美しく、清らかな流れが、輝きを増しながら、激しく、白飯の上に、注ぎこまれる——

ゆるやかな（F・O）

19 （F・I） 短くなったローソクが、大

きくはためく。

仄かな光の中で、もつれ合い、からみ合う、有田と、美也子——

有田（呻いて）「ああ……奥……美也子……

……美也子……さん……」。

美也子「……愛して……愛して……もっと……もっと……」。

更に、はげしく、より深く、もつれ合い、からみ合う、有田と、美也子。

20 床の間の掛軸「不浄聖」

そして、一輪ざしの、青く固い、いちぢくの実へ、カメラ、寄りながら——

（F・O）

21 （F・I）

銀座の画廊

その入口に、掲げてある看板。

「故、旗晋吉画伯追悼遺作展——主催、美術サロン社11月10日・11日」

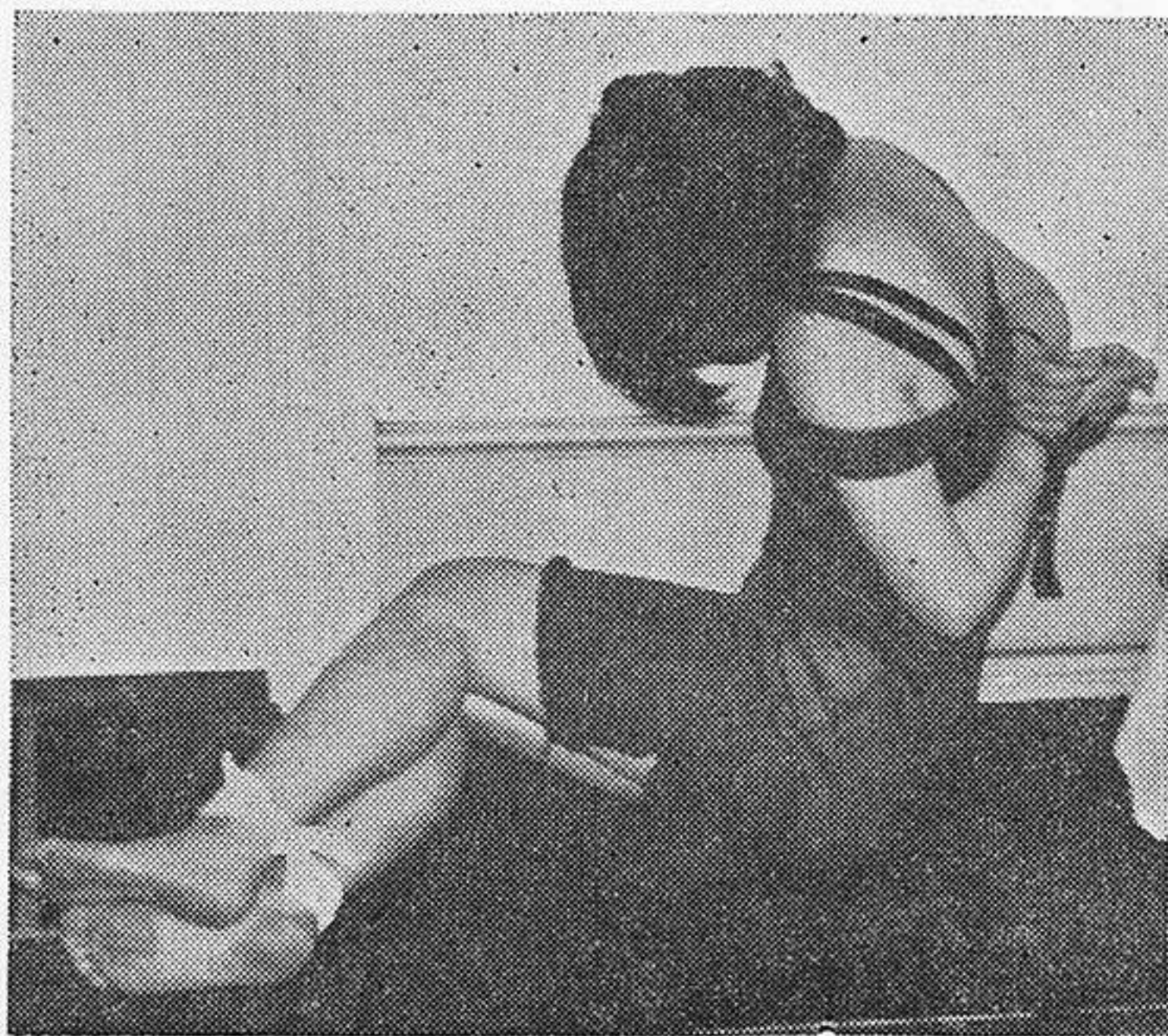
22 画、「いちぢくの実を持つ女」

23 画廊の中、壁には、「いちぢくの実を持つ女」のほかに、十点ばかり、大小の、キヤンバスが、かかっている。

七・八人の客が、それぞれの画の前に立って、画を眺めている。

投げだした脚

ボクのペットである芳子の紹介は、これでたしか三回目になる。それほどボクの気に入りの足の持主である。真赤なシュミーズの裾から投げだすように伸ばされた脚に、ハンカチーフでアクセントをつけた。いつの時もそうだが、ボクは特別に縛りの道具を持参しない。その折々の手近かなものを利用するのだ。この方がリアルで、ほんとうのように思うのだが、どうだろう。素直で従順な芳子、ボクに一番よく手紙をくれるのも彼女である。そのときの欲びをこめた文章で――。



そのほぼ、中央に、美也子が立っている。黒っぽい、和服を着て、髪を、アップにした美也子は、水ぎわだった美しさで、人々の目を、ひいている。入口から、有田が、そそくさと、入って来る。受付の、美術サロンの

女子社員と、何か、打ち合わせをしている。美也子、熱っぽい目で、その、有田を、見つめている。

打ち合わせを、終った有田、中へ入って来る。

美也子、深い思いをこめて、有田に近寄り、そして、素早く、耳元で、ささやく。

美也子「明日、三時――主人の、お墓の前で……。」

有田（なにげない顔つきで、うなずく）

と、その時、画面の外から――

「やあ、奥さん……。」という、評論家矢島の声が入る――

美也子（ふり返る）

矢島（にこにこして、立っている）

美也子「まあ――矢島先生……。」

矢島「いや、どうも……。」

美也子「ごぶさた致しました……この度は、又、いろいろと、お世話さまになりました……。」

矢島「いやいや……旗君の画も、すっかり評判高く、御成功、お目出とうございました……。」

美也子「ありがとうございます——」

有田「矢島先生——今度、うちの雑誌で、旗先生の特集号をやりたいと思っています。……一つ、原稿の方は、先生に、よろしく、お願い致します……」

矢島「相変らず、抜け目がないね……いいよ——いいよ——」

(と、云いながら、後を、ふり返り、画「いちぢくの実を持つ女」に、近寄る)

矢島「奥さん……やっぱり、この絵は、お売りになりませんか——」

美也子「はい……なんですか、私には、この画には、亡き夫の生命が、こもっているような気がしまして……」

矢島(うなずき、しげしげと、画を見る。そして、つぶやくように云う)

「たしかに、この画の中に、旗君が、生きている——」。

カメラ「いちぢくの実を持つ女」の画へ、寄り、そして——

(F・O)

24 (F・I)

墓石の戒名「揚旗光照吉禅定門」からカメラ、後退する。

その墓の前に、有田と、美也子(黒のワンピースを、清潔に着て、髪は、長く、たらし、ゆるやかなウェーブをつけている)が、並んで、手を合わせている。

美也子「あなた——有田さんのおかげで、個展も、無事に、終わりました……」。

(そう、云いながら、ひざの上の、風呂敷包みを、とく、中から、朱塗りの、小さな、重箱が出て来る)

美也子「今、あなたの、好きだったものを、お供えますから待っていて下さいね」

有田「奥さん——」。

美也子「又——奥さんだなんて……」。

有田「——美也子様——、旦那様の、お下りは、この私に、お恵み下さい。」

美也子「あわてるんじゃないやありません……ここで、おとなしく、待っているのよ……」

有田「はい」

美也子(重箱と、からっぽの水桶を、さげて、目の前の木立の中へ——)

有田(一人、墓に向って)「先生——先生

のおかげで、僕は、今、幸福です。——あのお美しい、美也子様のお供をして、素晴らしい、御馳走のお下りを頂く……。先生が、お始めになった、あの素晴らしい、お茶会……僕は、もう、五回も、美也子様との夜を、重ねて来ました。これも、みな、先生の、おかげです。先生、先生は、僕に、こんな、素晴らしい人生を、残して下さいなのです……」。

美也子の声(木立の中から、聞えて来る)

「有田さん——」。

有田「——はい——」

美也子の声「私の、ハンドバッグの中からね……」

有田「は——い。」

(墓石の横に置かれた、美也子のハンドバッグを、とりあげる。そして、そっと、口金をあけて、中を、のぞく——)

そして、中から、一個の、いちぢくの実——ではなく、それに似せて作られた、薬品を取り出す——(EP)——)

(F・O)

25 (F・I)

墓石の前に、供えられる、重箱。但し、ふ

たがしてある。

美也子の、清らかな、アップ

美也子「さ、あなた、たと、召し上れ……

……今日のは、あなたが、殊に、好きだっ

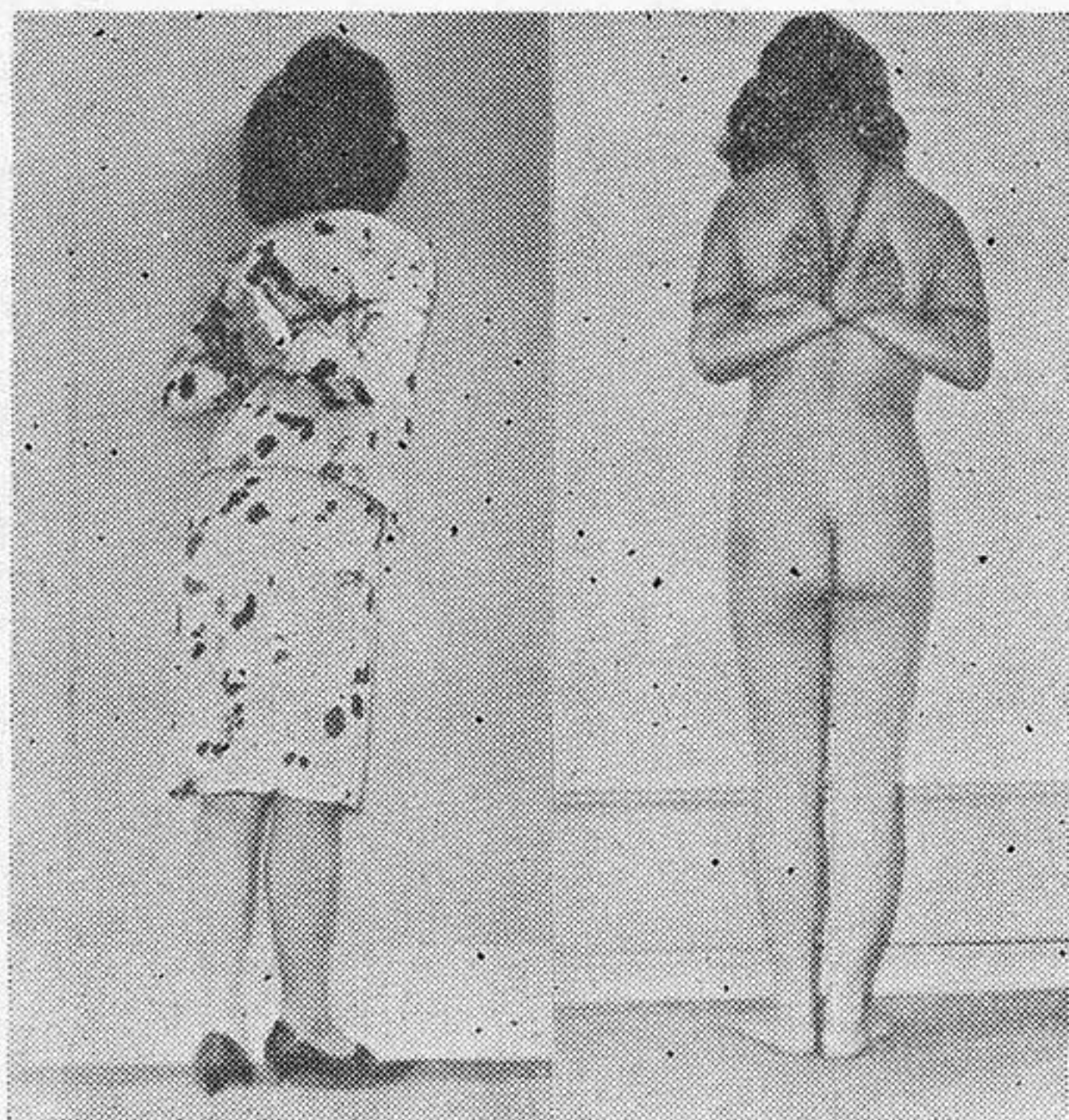
た。少し、やわらかい目の、御馳走ですからね……。」

(そう云いながら、木の、柄杓をとり水桶の中へ、つつこむ、そのアップ)——

いつのまにか、水桶の底には、澄んだ、美

着衣とヌード

先月号では、尚子の外出姿とホテルの一室で軽く後手に縛った姿の二葉の写真を発表した。これを尚子に見せたところ、うち裸にしてくっくってエ！というので、ごらんの通りの二葉の写真となつた次第である。ボクの方はあくまで、左側の着衣の方を考えていたのだが(怪が見えるので)彼女が全裸を出すように希望したので、ボクの好みではないのだが特にサービスしてしまった。



しい、水(！)が入っていて、それに、美也子の顔が、うつっている。と、たちまち、その像が、崩れて、美也子、柄杓にすくった、水(！)を、墓石に、かける。

墓石を流れる、聖らかな、水(！)

美也子「でもね、あなた……やっぱり、人間は、死ねば、おしまいなんですのね……」

有田(目を輝かして、美也子に、見とれてる)

有田の声「——旗先生は、幸せ者だ。……死んだ後も、こうして、美也子様の、お肌のぬくみの消えない、素晴らしい、御馳走を前にして、黄金の雨を、頭に沿びている——幸せなるかな——旗先生——」

(黄金の水(！)に、濡れそぼった、墓石。その、墓石を前に、いつまでも、去りやらぬ二人。——)

深み行く、秋を思わせる、落葉が、二人の上に、舞い続け、そして、静かな時が、過ぎて行く。

永遠の人生へ向って、流れる、長い長い、静かな時間が……二人の間を支配し、そしてすべての空間を支配し、やがて、それが、フィルムの上に、ぴたりと、定着する頃——ゆるやかに、エンドマークが出る)

肥満狂崇者のたわごと

須 渾 朔

私の名はマゾフィスト、しかも幸か不幸か（不幸という方が当るかも知れない）常に空想的にしかすぎない、マゾの園の住人。その上、奇妙にも何はにおいても肥満したものにてこそ胸ときめかし、人知れずゾクゾクする我が身をふりかえり、自嘲し、赤面し、そしてわれながら、その珍妙さにゲラゲラふき出したくなる。何故といて、私ときたら、あのグロテスクな巨獣河馬をみ、または、思い浮べただけですっかり昂奮してしまった少年時代と、そっくり同じことをいつまでたっても反復して来ているのだから、余程、小児性の強い人間という他ないではないか。そしていつしか年をとってしまったことに気付きハッとし、やがてしかも、あくまで私はこの私なりの、そして私だけに違いない空想の花園から

立ちさりたくない。見すてやしまい。いや、この花園を出られるはずもない、とあきらめるのであった。

マゾ、プラス肥満体狂崇、となれば私の空想の女王様は誇らかにお肥りあそばされた、気高き方、そのご肥満の女ご主人様の召使いとならせて頂き、色々なご命令をうけ、お馬となり、犬となり、はい廻り、チンチンを致し、あるいはかぐわしきお美酒をおし頂く、という寸法、空想は全く便利、私のマゾの、そして肥満体狂崇を、まるで際限もない位に誇張し、一人自慰にふけることが出来る。そして、それが空想にすぎない、という自然の認識に立ち帰り、その佗しさにたえかね……、という日々をくりかえし……、情ないことに私みたいな意気地なしは、それを現実

にしようとするには余りにも甲斐性なしに出て来ているのであった。というよりも、もし現実にならぬ出来事が私の上に起ったなら、なにと考えるだけでも私みたいな男は卒倒してしまうし、また、何よりも恥しくて生きていられなくなるに違いない。というわけで私のこんな性癖が昂ずれば昂ずる程、それを空想の中に埋没しなければならぬ次第なのだ。というのも、空想の世界なら、どんなに高度な、こうした性癖にひたるべき想定を考えられそうな気がしたからでもある。せめて私は何度も何度も谷崎文学の「饒太郎」を、「仲間」を、また「痴人の愛」を、くりかえしくりかえし、熟読しながら、いつしか、全く私好みの世界へと、勝手に脚色潤色するのだった。

もちろん、奇クの、そんな記事、小説などを、一人ひそかに熟読した。でも私好みの記事は、もちろん、多いとはいえなかった。だからこそ、稀に私好みにごく近い個所を発見した時の喜び、それは全く筆舌につくしがたい、などといってもオーバーではなかった。マゾ小説の中から三者関係の出て来るものはごく少いだけに、「二百字讃歌」のようなものは正に千天の慈雨、何故といって私は

何よりも三者関係という、徹底したマゾフィズムのシリアスなものに最もエキサイトする人間であったから、

肥満体狂崇の方はもっとめずらしかった。

その昔、麻生和夫氏がご活躍された時代もなつかしいが、氏の文章の消えた後は殆んどなかったといってよい。だから私は、あの麻生和夫氏の「肥満体への郷愁」や「第七天国の夢想家」のような、端的に肥満体郷愁、讃美を綴った文章はおそらく二度と載ることもないことだろう。とは思いながらも、「奇ク」の毎号毎号を、そんな記事にもう一度、巡り会いたい、とはかない願望を抱きつつ待ったものであった。

もちろん、そうした、一種グロテスク趣味(?)が容易にのせられるはずもなく、仕方なしに私は一人拙い、私好みの小説を毎晩毎晩こつそりと書きつらねたものであった。もちろん私だけの秘かに読む拙い小説である。所が、非常に素晴らしいことに、今から数年も前になるが「肉体への讃歌」という書物が出たことがあった。何とまあ、それには古今東西の肥満女性の輝しい歴史が列挙してあるし、とりわけ、ものすごく肥満した美女達の名画が何枚も収められているではないか、私

はすっかり亢奮して、正に河馬のように肥満した、誇り高い女王様(勿論、画にすぎないが)に三拝九拝をくりかえしたものである。

いつか奇クのサロンかどっかで、素晴らしく張り切った、大尻にふみつぶされて死んでしまいたい! と心から叫んでおられた方があったことを記憶しているが、私の思いも正に同じ、私はすっかりその「肉体の讃歌」なる書物に魅せられてしまったのであった。マゾものではないが、「奇ク」が白表紙の時だったが、土俵四股平氏の女斗美ものの中に、美しい玉のような肌と美貌の持主で、肥満な

さった女の方で、玉子とおっしゃる女性が、それがお得意の横綱の土俵入りをなさった。というのを拝見した時、私はすっかり亢奮し数少い肥満体讃美の記事に感謝すると同時にとてもうらやましいと思った次第だった。玉子という名も素晴らしいし、(最高の土俵入りの名手といわれた玉錦関が連想され、また玉錦関は堂々たる太鼓腹と肥軀の持主であつたから)文字通り玉のごとき美しい肌と美貌、そして気品よく肥満された女性がもし私の前で、その堂々あたりを圧する横綱の土俵入りの型をなさって下さるとしたら、考えただけでも氏がうらやましくてならなかったの

も当然のこと、マゾの私は、そんな女性が私の前に女王様として出現したなら、私は何より先、彼女の輝しかつぎとして彼女にお仕え出来る光栄に感激することであろう。

最近、といってもここ、二、三年肥満体好みの記事が僅かながら増したようにも思えて私は一寸喜んだことだった。一つは妊婦ものというめずらしいジャンルにとり組まれた「奇ク」に拍手を送る。(新開地開発の意味で)ものだし、それ以外にも、読者通信、または読者通信の記事に、二、三、肥満好みの記事が散見されるようになったことである。例えば女斗美ファンでいらっしゃる増田トシロー氏とか、ドライブの途中車の故障を直してあげた、肥満した女性への思慕を告白された、戸井氏とか、最近では太った婦人に何よりもひかれる余り、そうした女性にねぎられるとついいいわれる通りになってしまうと告白された京都の某氏とか、最近、僅かながら肥満体狂崇の記事が散見されるようになったことを感じ、私はいささか悦に入っている次第である。最近の、世の、(といっても一部のわからずや達だが)だん圧によく耐えて奇クがなおも健在であることを喜ぶ者だが、今後、肥満体記事が、例え僅かでも絶えないで、と祈る者である。

牝 鶏 妻

— 雑誌「婦人公論」の記事から —

羽 鳥 水 江

わたしの手もとに一つの雑誌の切りぬきがあります。雑誌は自他ともにハイ・ブラウをもつて任ずる「婦人公論」で、昨年五月号の「愛の相談室」という欄、長野の浜野みち子さんという人の「読者からの手紙」「私は性的に不具なのでしうか」という文と、それに対する解答です。

「私は性的に不具なのでしうか。」

昨年七月結婚いたしました農家の妻です。

家庭の事情で晩婚になり、女の子二人ある三十五才の主人のもとに嫁いだのですが、初夜

の苦痛はこういうものと我慢しましたが、たえられぬので、主人に訴えますと、『おまえ未発達じゃないか、お医者さんに診てもらえ』というので、はずかしいおもいをして、産婦人科の先生に診ていただきました。先生は普通のものより腔が狭く、たしかに未発達だといわれ、ホルモン注射をすれば治るかもしれないというたよりないことをいわれました。先生にいわれて見ると、生理もあつたりなかったりでした。自分が性的不具者だと知ったときのおどろきと悲しみはとてもペンではあら

わしようがありません。……………(略)……………

主人は非常にいい人で、『再婚だし、子どものあるところへ来てくれたのだから、何も心配することはない。医者が絶対治らぬというのではないし』といってくれましたが、わたしとして、不具の妻を持った主人が、いまのままのような愛情を続けてくれるかわかない不安もありますし、妻として価値のないわたしが、とどまるべきか、別れるべきか判断がつかなく、悩んでいます。

……………(略)……………

主人の愛情が強ければ強いほど、主人に迷惑をかけている日々が耐えられないのです。そうかといって、結婚式まで挙げた、わたしが、そのことで離婚ということになれば、わたしの人生はまっ暗な気がして、別れるにも別れられないのです。

『おまえは性的な満足は得られないだろうが、おれはおまえの愛情で、性的な満足を得ているからいいのだよ』と、主人はこうしてくれあしてくれと、いろいろなことを教えてくれました。とてもここには書けないような夜の営みです。

主人はそれで満足してくれるにしても、わたしにはこれが耐えられないのです。それに

そのことから痔を起してしまい、その苦痛にもなやまねばならなくなりました。

……(略)……病院へ行くと、痔を悪くしたのは、異常な夫婦生活から起るのだから、主人に理解してもらってやめなさいといわれるのですが、一度味わった異常な夫婦生活は、正常なものよりとてもよいと、他の愛撫では満足しない顔をするので、つい主人の意に従ってしまうのです。苦痛をこらえることが、いまのわたしの愛情の表現になって、体に悪いとはおもいながら、拒否できなくなってしまう。

……(略)……

わたしは人のいうままに、とてもはずかしいこととして、その愛撫の返しをしてあげねばならないのです。

どうしてあんなきたならしいことを主人が好むのか、夫婦生活というものを美しくころに描いていたわたしは、幻滅を感じて、ただいとわしいものにおもわれて来るのです。

……(略)……

わたしはどうしたらいいでしょうか。お教えくださいませ。わたしの体を治す方法はなideしようか。悲しみに耐えられず、ご指導を受けたくて、はずかしいことですが記しま

した。お願い申し上げます。だれにも知れぬよう秘密をお守りください」

解答はマダム・マルグリット女史「手紙に答えて」「自虐の気持をすてなさい」とあります。

「まず最初に、あなたは性的に不具者である」とご自分で思いこんで、必要以上にへりくだり、性の不安におびていられることを申しあげます。

……(略)……あなたの場合、メンス

があるのですから、不具でないことは明らかです。メンスが不規律なのは、女性ホルモンが少し足りないだけのことにすぎず、医学的に治療できる問題なのです。

あなたは三十才をすぎて、後妻として結婚なさいました。そして初夜のひどい苦痛のために、夫婦の性生活の第一歩で、つまり、ひるんでしまわれたのです。女性が三十才をすぎても、処女である場合、膣筋肉は、若いひとにくらべて、柔軟性をいくらか失っていることがあります。あなたは膣が狭いというよりも、伸縮の度合が十分でなく、とくに女性ホルモンが少し足りないのです、受けられる態勢が十分できておりませんでした。

ご主人は、かわいた膣のなかに無理に挿入

されたので激痛を招いたのです。ご主人はあなたを愛されてはいますが、三十才をすぎたあなたを後妻として迎えたとき、あなたのそうした生理的条件を無視してご自分の性的欲望を、せっかちにみたされてしまいました。

……(略)……性の知識がないために、

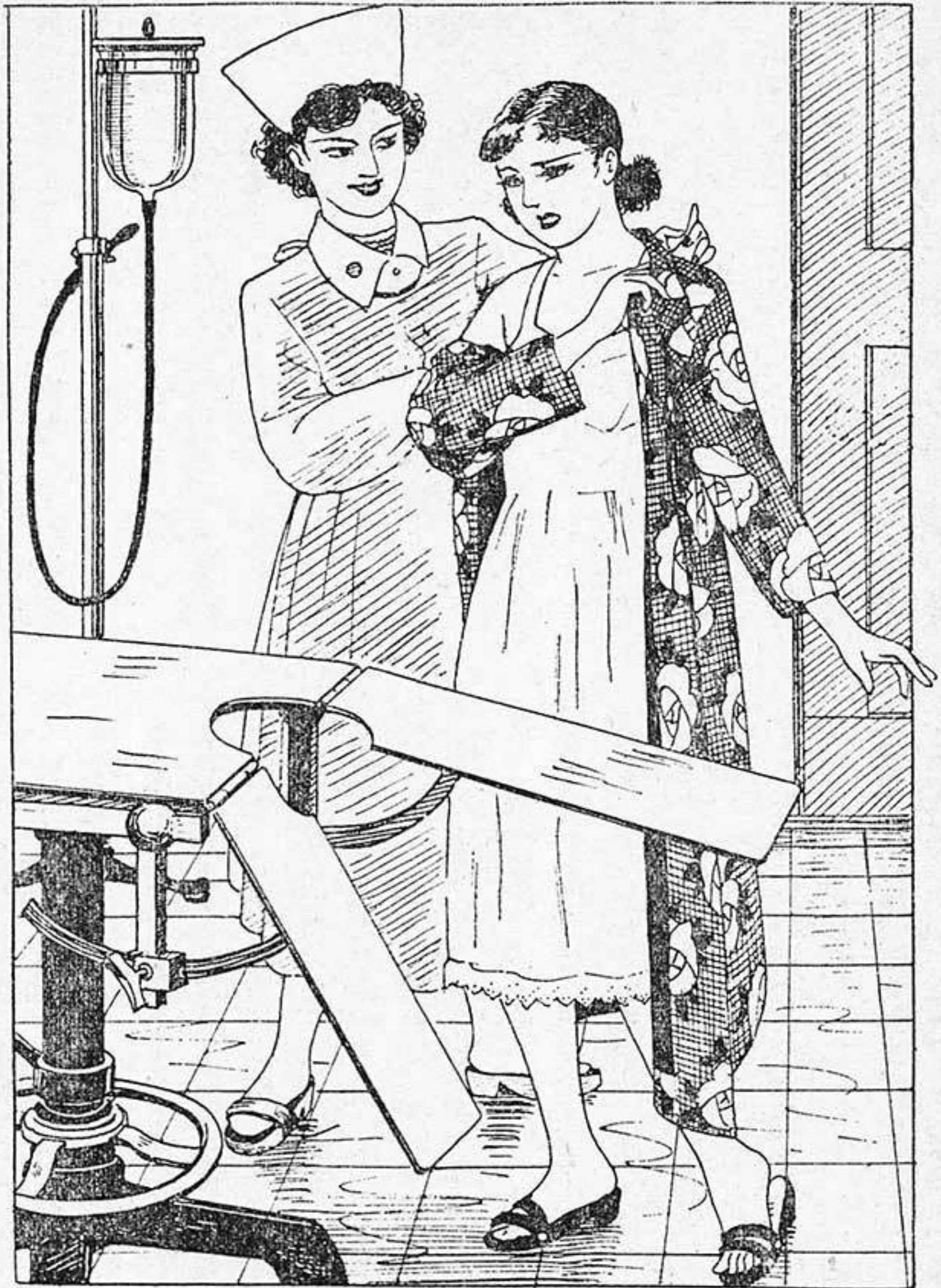
思わぬ痛みをあなたにあたえ『未発達なのではないか』と、ご自分の不注意、不用意に気づかれないで、あなたを精神的な不具に仕立てるような結果になりました。

さらにわるいことに、あなたのゆかれた産婦人科の医者もまた不注意にも、未発達だ、といったことから、あなたは性器の不具者だと思いこんでしまわれました。その医者はおそらく、未発達という意を、女性ホルモンが足りないということの同意義に使ったと思われるますが、それをあなたは、性器不具の宣告として受けとってしまいました。……(略)

……

あなたがご主人とともに、性のよろこびを得られないのは、性器が不具であるからではなく、初夜の苦痛からはじまった精神面の不安に原因しています。お気の毒に思います。その不安から生じるコンプレックスは、ご主人が性の満足を得ようとして、異常な肛門性

交をのぞまれることによって、いよいよ倍加されました。私はここで異常と申しましたが、性生活を何年か続けた男性のなかには、正常な陰性交にあきたらず、肛門性交により大きな快感を得ようとする例は、相当にあります。



あなたは、そのために痔になり、その痛みをだまって耐えているとは、あまりにも一方的なやり方で、どんなにかお辛いことでしよう。ご主人は幸いあなたに対して愛情をもっているのですから、性の営みがあなただけにとって苦痛でなくなり、ともにそのよろこ

びをうけあうために、お二人でその解決にあたるよう、信頼できる専門医にお二人で行かれることを、是非おすすめします。

………(略)………

あなたに妻としての資格がないのではない、自らその資格を得るための努力を放棄していられるのにすぎません。幸福を得るために、近代医学を活用することに、何のためらいがありますか。

主人に申しわけがない、という自虐の気持は、それこそ妻の資格を放棄することではありませんか。積極的に性の快楽を得るために、そして異常な性関係を正常にもどすために、また、ご主人にも妻をよろこばせる性について知っていただくために、専門医はお二人にお役に立ちますから、ためらわずに実行なさってください」

ずい分長く引用いたしました。この浜野みち子さんという女性には、わたしも同性として本当にお気の毒に思い、心から同情しないではおれません。その後、幸福におなりになったのならいいが、と本当にそう思います。夫婦生活には、ずい分かわったケースもあるものですが、次のもう一つの例などは、まったくおどろいてしまいます。

週刊現代、これも昨年の五月二十八日号、

画家、評論家とありますが、やはり身の上相談担当の融紅鴛女史の短文「人生相談に異色の新ケース登場」というのに、

「異例の知事表彰まで受け、この六年間になやみを寄せて来た人一万七千人というラジオの私の人生相談は、更に次々と『新型』が出てきて尽きないのには全く驚いてます。最近最大のショッキング・ケースは『私(29)』は結婚して六年になるが、主人(36・会社員)が一度も関係しないので処女のままです。不能者ではないので、医者に頼んで主人のモノを人工授精してもらい二才の子供があるが、一体これから……』というもので、ほんまにウス気味悪いほどでした。他に女はなく、貯蓄だけが趣味の男らしいのですが、ケチもここまで徹底したら『文学』にもなりますよ。もちろん無責任きわまる結婚やからすぐ離婚してあんたの女を生かしなさいと回答しときました」

ほんとに嘘のような話です。

ところで前の浜野さんの例にかえりましょう。この例では、みち子さんは、いたましいことですが、当時までのところ、不感症ということになりました。しかし、シュテーケルの「女性の冷感症」には逆のケースものっ

ています。これまで不感だった女性が、夫の友人とあるとき、ここに出て来るような自然に反する行為を行なったところ、不感がなおった、というのです。この場合、一、はじめは相当の苦痛(痛み)があったこと。二、不潔という感じになれて何でもなくなることに。そうすると、三、快感は非常にげいこと。をこの女性が述べたといっています。

もう一つ、今度は、カップ・ブックス「快楽主義の哲学」から引用しましょう。渋谷竜彦氏が著者であることはいまでもないことでしょう。

「また、サドはマルセイユの娼家で、娘たちに『後ろから交わらせてくれ』としきりと頼んでいます。娘たちは『そんなことはいやだ』といって、断わったらしい。これは、いわゆる女性相手の鶏姦ですが、サドはさらに下男とともに、娘たちの見ている前で、男色行為さえ行なったらしいのです。カトリックの権威が支配していた十八世紀の当時、鶏姦は、相手が男であろうと女であろうと、ひとしく死刑に値する重大な罪でした。……」

日本でも、明治のはじめごろ、男色を禁止するいわゆる「鶏姦律」というのがあったと聞いています。西洋では、二つの型があったて、一つは、男女を問わず、このような反自

然的行為(といいます)をとりしめるもの、

もう一つは男性どうしの間でのみ罪になるもの、とがあるようです。渋谷さんからの引用では相手が男であろうと、女であろうと同じというのですから、後の方のタイプの刑法は、前のものがゆるめられたものでしょう。

男女間であれば、合意でした場合には、プライヴァシーを侵さないでは摘発することが出来ないという事情を考慮したものにちがいません。もともと、生殖のためでない性行為は宗教的に許されないということから出たものでしょうから。また、これもあまりたしかではありませんが、十六、七世紀にわたってヨーロッパに流行した「魔女裁判」に関して、魔女はひそかに悪魔と肉体関係をもったとされています。その際、悪魔と魔女の間に行なわれるのが正常な行為ではなくて、この「反自然的な」方法によるものだったとされていたようです。

わたしは右のようなことに、すごく興味があります。しかし、悲しいことに、文化史的なまたは風俗史的な知識をあまりもっていません。どういう本をみたら、どんなことが分かるかも知りません。どうか、御存知の方がありましたら、いろいろ教えていただきたいものだと思います。



△S M 時 評▽

「編集子も乗り出せば

読者もいよいよシャベル」

—新刊六月号を見て—

橘 行 司 子

東西、東西、天下御免はS M時評——と、ペンでジャズってはしまった、このランもこれで二回目——。

さて、「奇譚クラブ」の六月号は、編集子も乗り出せば読者もいよいよシャベル、について。いよいよ出ました「奇クサロン」冒頭の編集子のコトバ、これ、「言論出版の自由」。退却ラッパであれ「逆もまた真なり」と私は受けるが、ナンデあれ、その文字、万金の価値ありや。それこそ行司子、マッテタホイノである。「本誌二〇〇号突破記念」原

稿募集V」の誼い文句もうれしく、編集子の近頃のクセ？ じゃないが、まったくこのヘンでドカンと一発ノ増頁のしたいところ——と、まず願って、さて読者のシャベリ工合いに耳をかたむけよう。

『芳野眉美氏のファンとしてのことと、自分のことと、そして自分自身のための、CM』（三枚と二分の一）という題を読むだけで、舌をかみそうな「葉山啓」さんの、それこそ同人雑誌的？ なおあそび？ エッセイ。自称ヘソマガリ氏まで「紙を汚す気持になっ

て、ペンを持った」とは、よしや奇クが、同人雑誌的であれ、世界に？ たった一つ位はこんな商業出版、風俗文献誌があってもいいじゃないか。ヘソマガリ氏まで「祝杯をあげ、拍手を送り、ホクソ笑んだ」のだから——と、私は同調したい。同人雑誌的と言葉を出すとき、私はへもう、ナニモカモ、読者マカセ、アナタノ為ナラV——という、S Mマニヤ中心の奇クの動きが念頭にある。こんなに、読者に開放している雑誌があるだろうか。奇クを、黒衣の美女とするならば「私は、貴女に死ぬほど責められたい」ね——だ。

「どうか皆様の真実の叫びを」という編集部の言葉によるまでもなく、本誌のどれもこれも、他誌には絶対に見られない手記ばかりだが、（だから大枚三百円でも、マニヤは買います。狂信？ します）特に、黒瀬賀集子さんの無題（読者通信でもよろしい）は、ダレカサンの言葉じゃないがシヨックノだった。（「いささか」でなく、大いにだ）

若しも奇クがアブノーマルを救済する窓口であるのなら、彼、嬰一のような者もその恩恵を願ってもよい一人ではないでしょうか。または「どんな目に遭わされても構いませ

ん。私は満足です。それを機会に彼が元通り陽気になるならば。私には、この五行程を引用させていただく他には手はない。(参考「SM」より見た世界史シリーズ黒淵嬰一) 真実の叫びの投稿の見本として、いや、このような言葉はカルイ。SMマニヤの真実とはこれだ。バラエティーな編集とは、誰かがいったように、たしかに「迷路」の魅力。ただし、浮び上ったものでなく、妖しき耽美的な世界の底に、叛骨、諷刺そして、真実がみなぎっていることじゃないだろうか。どうも、ここまで書いて、へどうしようかと思った。Vその、あまりにも、アレモ、コレモ、シャベリ方が多すぎて、しかもそれぞれ、SMマニヤとしての一本、骨が入ってる。ズバリいおう。「SM時評」を、私の書きたいだけ書かせていただくなら、これは百枚位になるんじゃないか。それほど、この六月号は、小説に、エッセイに、告白にヨカッタね。——そんなわけで、カケ足でスミマセンが「ページの設定」もあることだろうし、いつものズバリ、ピリッと、もう少しばかり。

団鬼六氏の「花と蛇」続篇(第八回) SMの世界に、ますます、羞恥文学としての美をただよわせ、形のいい白い足が海草のように

ゆれ動くのだ」などの独自の麗筆ますます冴える。フレイノ フレイノ。「奇クサロン」のカメラ・ハント志望「こんな私いかが？」堺市、大谷勢津子さんの、その「乳首プレイ」ともいうべき発言、志望ぶりに新しきSMへのスリルをドキリノとさせ、「サロン楽我記」辻村隆さんの「どうやら健康が回復して、肥満していたあの頃よりも、むしろ体が軽く動き易い」にホッとして「世相診断室」の木戸川健さんの「女陰芸術論」に、新奇な？(こんな文句を使うと、カミツカレルカナ、このオジサンは恐イカラネ?) 世界をのぞかせていただき、「マニヤ通信」の山本達雄さんと一緒に奇ク万才ノ最近の充実Vさのよろこびをわけあうと——、もう原稿用紙で、六枚目も半分通過しようとする。「SMカメラ・ハント」『しなやかな女獣』(志村善子の巻)の辻村隆さんの原稿掲載で、やれやれと、またまたホッと(休載だろうと思っていたので)夜乃探郎さんの『夜は妖しく更けたれば』の「神酒拝受式」の小タイトルに、オドカサナイデクレヨノとニヤリ。本号としては長文のストーリー「相撲に魅せられた娘たち」の海野美津男さんのいつものがらの御健筆に敬意を表するとなると、いや、

またヘビー級がある「悪書と悪映画」のエッセイ山口広さん。「大人のストレス解消」(傍点筆者)の言葉に賛同する——ということになると、今回は、ピリッとでなくて、スイート(甘い)というペンのふりまわしぶりになってしまったかな？

ともあれ「編集子も乗り出せば読者も、いいよシャベル」そう、この誼い文句が良かったのだ。では、悪声(または、悪筆ながら)パチ、パチと拍子木鳴って、これで幕——。

◎八月号掲載予定作品◎

贗作芳野眉美氏の優雅な生活(芳野眉美) SM入門講座「若き友に与う」

第一回八縛りについてV(栗瀬長)

悦庵絵灯籠「浪江大五郎」(万田不仁)

風俗文献出版史上の異端児

人間、梅原北明伝

(久我庄一)

啓子散華八続V

(高野原美)

小説「奇ク三匹の侍」

(夜乃探郎)

バー「ボテ」の妊婦たち

(羽鳥水江)

アリアドネ八希臘神話の再編成V(黒淵嬰一)

花と蛇八続篇第九回V

(団 鬼六)

うぐいす色のビル

(高見信夫)

嗜虐の歴史(3)

(三原 寛)

時代小説「妙姫抄」

(山口 広)

痴人の糧

(山本一章)

「おとめ」のマダム

山口 広

「おとめ」のマダム

私がよく帰宅の途中で一杯ひっかけるスタンド・バーがある。十人も入れば満員になるその店は、繁華街を外れているので、めったに断られる事はない。『おとめ』と書いたすかし硝子のランプだけしか外からは見えな

い。マダムは五十才ばかりの小柄な人である。今迄の人生の苦悩を刻み込んだ様に顔は小皺が多い。客扱いに巧まない親切さがにじみ出ているので常連も少なくない。尤も常連の中にはバーテン兼ウェイトレスである洋子と云う二十ばかりの大柄で朗らかな女性を目当てにしている者も少くない様である。洋子は

はマダムの事を、「お母さん」と呼んでいるが顔立ちも体つきも全く似ていない。

私はいつも静かに片隅でハイボールを楽しむ。一時間ばかりで二杯あけるのが普通である。他の客同志の会話や洋子と客とのやりとりを聞くでもなく聞かぬでもない私が、マダムと時々言葉を交わす様になったのは、ここへ寄る様になって半年も経った頃であった。最近一年ばかりは親しさを増して来た。マダムが特に私に好意を寄せている事は気がついて

いる。彼女が自分の過去を語った事はなかったが、言葉の端に出るなまりから東北出身らしい事は察せられた。やっと春を告げる生暖い雨の降る夜であった。もう十一時に近かった。知人宅を訪ねての帰りにふと『おとめ』に寄った。マダムは一人で店じまいにかかっていた。

「あら、いらっしやい。もうしまう所でしたの。こんな日はお客様も少いですから。さあどうぞ。洋子はさっき帰しましたけど。」

「それじゃ一杯だけ、いつものを作ってくれ。いよいよ春ですね。」

なめる様にハイボールを味わいながら、今別れて来た友達との会話を思い出していた。

ノレンを外し蛍光灯スタンドを残して照明が消された。静寂が続いた。恐らく短い時間だったろう、何時になくしんみりした口調でマダムが話しかけた。

「山口さん、私の話を聞いて下さいません。こんな雨の降る晩は辛かった昔の事が思い出されて淋しいんです。前々から貴方に聞いて頂き度いと思っていました。」

「ああ良いですよ。僕に聞かせて気が晴れるなら、どうぞ話して下さい。」

大した話ではないと思って気軽に引き受け

たが、マダムの身の上話は長々と続いた。余りにも数奇^{さくき}な彼女の運命に、思わず私は引込まれた。

——。——。

私の名は留（とめ）と云いますの。この店を持った時に自分の名前をつけたのです。親のつけてくれた名前で呼ばれた事が少なかったからです。『乙女』と間違えられるお客様が多いのですが、強いて直しません。私は岩手県の宮古からずっと奥に入った、小さい村の小作人の家に生まれました。名前の通り三人

の姉と一人の兄に

続いて五番目に、

それも年子で生れ

たので『とめ』と

つけられたのです

が、それでも、ま

だ下に二人も出来

ましたわ。あんな

東北の片田舎では

年に一度の秋祭の

他は村芝居も珍しい位で、

娯楽が何もなかったの

で夜

の営みだけが両親

の楽しみだったんでしよう。私の家では三反ばかりのやせた田と、あとは山林での炭焼きの小作でしたから、とても喰べて行けません。冬になると父は東京に出稼ぎに行きました。やっと山肌^{やまがは}に土が顔を出す頃に疲れはてた父が、それでも家族を喜ばせようと安物の着物やおもちゃを土産に帰ってくるのが、とても楽しみでした。私は両親の死んだ事も長い間知らず兄弟もどうなったか行方がわかりません。二番目の姉が川崎に、横浜の近くの川崎に居るとか。それも詳しい住所などわかりません。

私が生れたのは、大正五年です。世界大戦の好景気なんて私の家には来ませんでした。私は小学校に上る頃から近所の子守りをさせられたんです。近くの小地主の息子たちに、よくいじめられたものです。

私は高等小学校まで上げてもらいました。家では勉強も余りしなかったのに良く出来たんですよ。隣村まで毎日通いました。先生が両親に是非高小に行かせる様にすすめたのです。その頃には三人の姉も一人の兄もほんの少しの前借金で働らきに出ていました。一度も帰って来ませんし手紙すら来ないのです。私は高小を出るとすぐ、昭和五年頃だった



でしよう、東京の亀戸にある小さな紡績工場の女工にやられたんです。父が「とめよ。東京さ、働らきに行ってくんろ。」と云っただけでした。鳥打帽をかぶった目つきの鋭いやせた男に連れられて始めて汽車に乗りました。工場について寮に入れられたんです。六畳に六人が一室でした。十四五才から二十位までの朋輩が同居です。最年長の女工が室長で二部屋で一組になって仕事をするのです。今から思えば煎餅布団ですが、私にはふわふわした豪華な夜具に見えました。

山口さんは、お若いから御存知ないでしょうね。女工哀史って本が出たのを。書いた人は『赤』だって云われて特高に拷問されて肺病で死んだんですって。（筆者註―細井和喜蔵著『女工哀史』大正十四年）私たちの生活はあれ以上でしたわ。寮は何から何まで規則づくめで手紙も検閲され、外出も自由になりません。

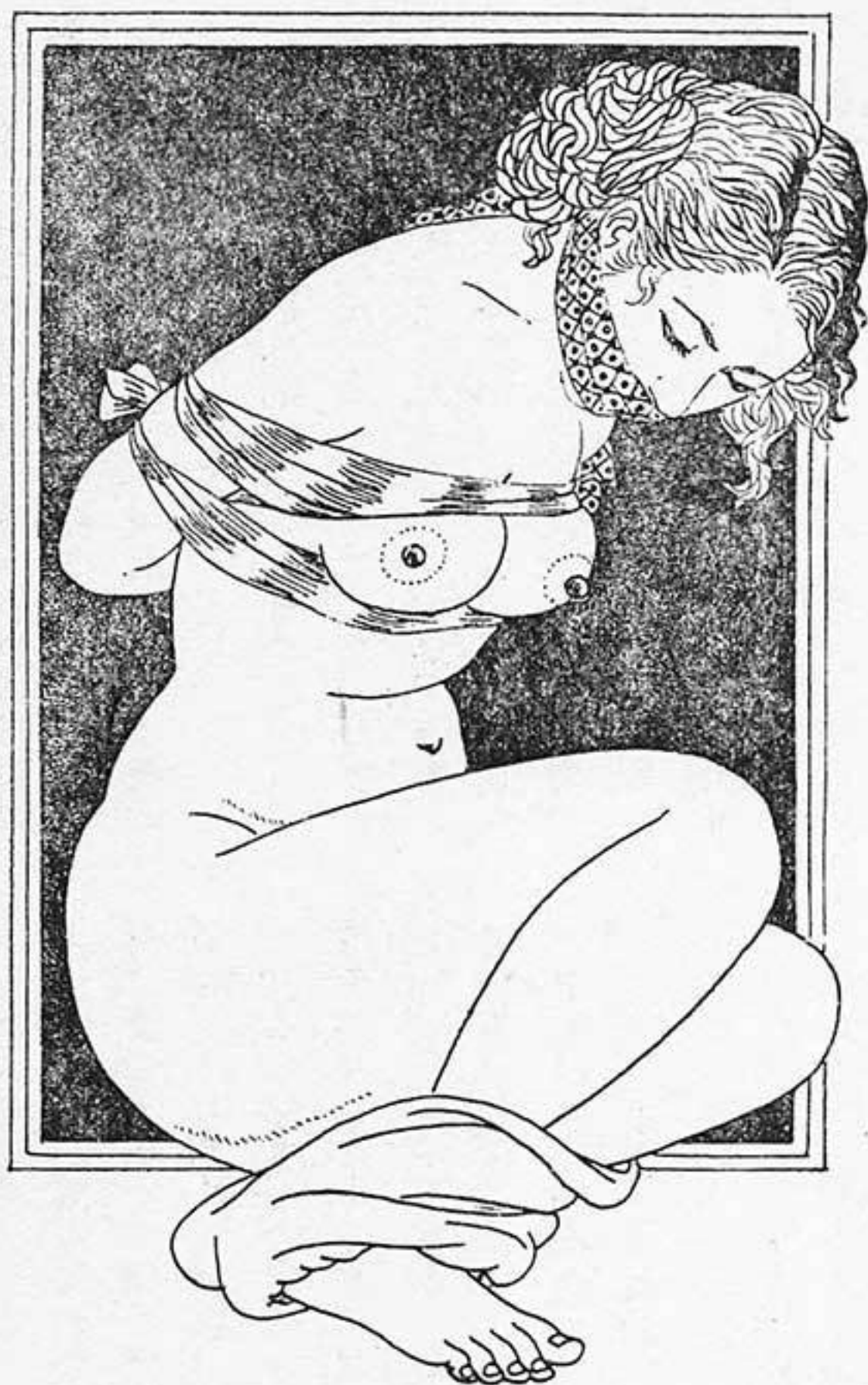
一カ月の見習い期間は、あっという間に過ぎ、私も織機を三台持たされました。その頃はズロースなどはいっている女は、女工の中には居ませんでした。私たちは小さい袂のついた木綿の緋の着物で下には腰巻をしているだけでした。仕事の時は腰巻の上に前のうち合

わせの浅い筒袖の着物と袖を取った割烹着の様な上っ張りだけしか許されません。年中服装は変わりませんので、夏はあれほど風通しが悪く思う工場も、冬は隙間風がびゅうびゅうと音を立てる位ですから、綿ぼこりとの中で病気になる人が沢山ありました。栄養も足りませんしね。

その工場は綿布を織るだけしかやって居ませんでした。糸が切れると織機を止めてつなぐのです。天井のシャフトからかかったベルトを外したり掛けたりするのですが、指をまき込まれる人が随分ありました。四本の指を根本から切り落した人もありました。私の指ですか。これはちがいます。ヤクザに落されたんですよ。

朝七時から夕方の六時まで実働十時間で、織れた布が少いと罰がありました。皆で二百人余りの女工が寮の二部屋十二人の組にわけられていましたが、二番目に少なかった組から三組が寮の板張りの広間に風呂は勿論食事もしないで正坐させられます。そうして約一時間、一番仕事の少ない組の懲罰を見させられるのです。仕事着を脱げと云われ、各人思いの腰巻だけにと云っても赤か桃色が多かったのですが、後手に縛られて正坐をして十

人ばかりの男の監督に説教されるわけです。どうせ、そんな男たちですから、一人が説教している間に動いはいけないといって坐らされている女工の体を撫でたりさすったりするのです。それを拒む態度をすると後が大変です。私も脂っばい掌で乳房を揉まれ思わず声を上げて一層ひどい罰をうけた事もあります。私はまだ幼くて体も小さいので狙われる事は少なかったのですが、二十位になり女らしさの出て来た大柄な人など本当に泣かされていた。くだらない長々した説教がすむと、立たされてお尻を竹の棒で叩かれるのです。普通なら十ばかりですが痛くて大きな叫び声が上ります。説教の間に拒んだ女工や特に仕事の遅い娘が、その後でおまけを貰います。お尻が一番体を痛めないらしいですね。罰を見させられる方も括られはしませんが後に手を組まされるのです。眼をそらすと罰せられるので、じっと見つめなくてはなりません。見ていますと、こちら向に立っている女工の恐怖におののく顔がお尻を叩かれて大きく口をあけて崩れ、わめきが聞え、それが泣声に変わります。始めて見た娘など、見るだけで泣いてしまします。私は運よく村山マスというやさしい室長の部屋に入だったので、仕事



をうめ合わせて貰い一番悪い組になった事は
少なかったのですが、一時間も正坐させられ
て羞かしめられ、縛られ叩かれる同僚を見る
のは辛うございました。

私たちは土曜も平日と同じで月に二度しか
休みがありませんでした。平日は昼休と夕方
に工場の売店で日用品や駄菓子を買うだけで
した。休日だけ外出が許されます。しかし監
督が看視して引率するのです。五十銭の金し
か持って出られません。でも三十銭の映画を
見て井を食べその上そばも食べられました。

ですから監督の好きな映画しか見られませ
ん。外出前は監督に一度、その上守衛にもう
一度服装検査がされるのです。巡査上りだと
云われていた守衛は余分の金を持っている女
工を見つけたのが上手でした。私の同室に長
野の人で植村マキという人が居ましたが、五
十銭も余分に持っていたので、ひどい目に合
わされました。髪を束ねた結び目に入れてい
たのですが、守衛に皆が外出するまで仮眠す
る和室に正坐させられていたのです。三人の
うち二人の守衛がマキちゃんを無理やりに裸

にして後手に縛
り上げて金の使
い途を聞いたの
です。マキちゃ
んは半月前の外
出のときに見か
けた半襟が買い
たかったのです
が、工場の売店
で買えと云うの
です。売店の品
物は高くて悪い
のです。うそを
つくな。逃げる

気だろう。お前の顔に書いてある。と何を云
っても信用されず、夕方まで裸で両手を縛ら
れたまま何も食べさせて貰えず、お便所へ
も縛られたまま行ったそうです。三人の守衛
に交代でとてもひどい事をされたそうで、私
たちが帰ってから寝たあとまで、かすれた泣
声が続いていました。体中の笞のあとが一週
間も残っていました。

そのマキちゃんは、とうとうそれから半年
ほどして逃げてしまったんです。その時は私
たち同室の五人も監督たちにひどくいじめら
れました。十二月の始めでしたかしら、寮の
広間で腰巻だけで縛られて、お前たちはマキ
が逃げるのを手伝ったのだろうか、何処へ
逃げたか白状しろなんて、一人ずつ青竹で叩
かれたのです。夜になると寒くなりました。
お便所へも行かしてもらえず皆腰巻の中に洩
らしていました。濡れた腰巻がびったり肌
にくっついて、とても冷たかったので、私はそ
の晩から風邪を引いてしまいました。縛られ
た手は痺れてしまい、ほどかれてからも動か
せません。体中が痛くてその上五人で六人分
の仕事させられたので、三日も続いて成績
がビリで罰をくれました。仲が良かったので
すが、あの時は逃げたマキちゃんをうらみま

した。三日してやっと若い子が入ったのでは
っとしました。でも室長の村山マスさんは、
一言もうらみ言を云わず、以前にまして皆の
世話をやいてくれました。

正月にも三日しか休みがありません。家に
帰れたのは古い人が少しだけでした。三が日
は平常より少しましな食事だったのですが、
罰もなくのんびりしたのを有難い事だと思っ
ていました。五十銭の日給のうちで、前借金
や寮費や食費を引かれると、月に二三円しか
私たちの手もとに来ません。何を幾ら引かれ
たかもわからないのです。今から思えばもの
凄く搾取ですわね。

寒い日が続きました。でも私たちは仕事着
の下に腰巻以外の下着をつける事を許されて
いませんでした。着ぶくれして機械に巻き込
まれない様にとの親心なんですって。それで
次々に風邪を引きました。でも風邪は病気で
はない。と休ませて貰えませんでした。そし
て肺炎を起して死んだ人もありました。私の
室長だった、あのやさしい村山マスさんも、
その一人でした。今の様に良い薬があれば直
ぐ直ったんでしょうが、随分高い熱があった
らしく真赤な顔をして、ふらふらしながら工
場に行ったんです。二時間ほどして織機の側

に倒れたのですが、私たちは介抱する事も許
されず、寮の部屋にかつき込まただけでし
た。仕事が終わって帰った時は、寒い部屋の中
で布団の中でもう意識がなかったんです。う
わ言にお母さんの名を呼び続けて明け方には
息を引取ったんです。お通夜もさせて貰えま
せん。酷い事ですわ。私も親が死んだ時の様
に泣きました。

室長がマスさんからハナと云う人に変りま
した。やさしい花と云う名に似ず、おそろし
く意地の悪い人でした。毎日の仕事ぶりを見
て、監督に罰をうけなくても夜は私たちをい
じめました。他の四人のしている前で仕事を
怠けているとか、遅いとかなんくせをつけて
私たちを裸にして腰紐で後手に縛り上げま
す。あの人は若い娘をいじめるのが好きだっ
たんです。監督が罰する時は見せしめにす
る為に、高い音が響くほど強く叩き、悲鳴が
聞える様に猿ぐつわをはめたりしませんでし
た。ハナは外に悲鳴が洩れない様に固く猿ぐ
つわをはめるのです。体の大きな女でしたか
ら私達は手向えません。悲がつくほど抓った
り、体のあちこちをくすぐったのです。呻い
て転げまわる私たちの体を膝で押えつけて抓
ったりくすぐったりするハナの顔は楽しそう

でした。くすぐられるのは本当に苦しい事
です。笑っている様に見えますが、膝で押えつ
けるハナの体をはねのけてまで息が絶え絶え
になりながら転げまわります。でも後手に縛
られているので、しつこいハナの指からは逃
げられませんでした。夜も私たちはびくびく
して暮しました。それで私も逃げる気になっ
たのです。

その頃は田舎に行けば、私たちの様な只み
たいな女の子はいくらでもあったのですが、
熟練女工とまでゆかなくても、直ぐに使える
女工の引抜きは盛んでした。会社に半分雇わ
れている様なやくざの子分たちが、たまの休
みに外出する女工を言葉巧みに連れてゆく事
が多かったのですが、私たちはほんの僅かで
すが寮に金や私物を置いていきますので、それ
が惜しくてその場で直ぐという訳にゆきませ
ん。私の居た工場と同じ様に忍びがえしのつ
いた高い塀のすぐ内側に工場のはずれに寮が
あるのが普通だったとか。外出時にしめし合
わせて夜になって巡回する守衛の合い間をぬ
って高い塀の上の忍び返しを越える様に巾の
せまい布団の様な物をかけ外から縄梯子をか
けて脱走させるのです。私の居る間にも二部
屋の女工が、そっくり逃げ出した事もありま

した。引抜こうとするやくざの子分と防ごうとする会社側で乱斗が起った事が何度もありました。

逃げる途中でつかまった女工への罰は、ふだんの罰と較べ物にならないほどひどい事をしたんです。一度だけ見せられました。腰巻まで剥ぎ取られたすっ裸で広間の梁に吊されて四方から竹でびしびしと叩かれていました。がっくりと前に頭を落した女工の体が、くるくるとまわります。その体を、主にお尻ですが何度も力一杯叩くのです。悲鳴が聞えるのは五分間位です。氣を失った女工の体に水がぶっかけられ氣がつくと又始まります。必ず大小便を垂れ流します。本当に半殺しにされるのです。その女工は一週間も這う事さえ出来なかったそうです。

私が逃げ出したのは、丁度一年ほど経ってからでした。外出して映画を見た時に途中で便所に立つ様なふりをして映画館から抜け出したのです。どこをどう走ったか、おぼえていません。省線電車に乗ったのです。残っていた二十銭で切符を買ったのですが、人波に押される様にして二度ほど乗換えてしまったらしいです。大森という駅だけおぼえていました。ホームのベンチで呆然と腰をかけてい

ました。監督に追いかけている様で落着きませんでした。不安と空腹でふらふらしている私を助けて下さったのが、私にとっては命の恩人になった丸井先生でした。その頃、まだ大学を出られたばかりでしたが、大森の高台にある新居へ連れてゆかれ、身の上をきいて下さいました。まだ新婚の奥様が可哀そうだと女中にやとって下さいました。温い御飯とおいしいお刺身だけを今でもおぼえています。私の様な身許引受人がない女の子をやとって頂けるなんて珍しい事でした。今頃は同室の人があの憎らしい監督たちにいじめられていると思うと悪い事をした様な氣持になりましたが、しかし、その中にハナが入っていると思うといい氣味だという氣持もありました。只、寮に残したセルロイドのお針箱だけが心残りでした。二円五十銭も入れたままでしたから。

三疊の女中部屋が与えられ奥様から炊事や裁縫は勿論、お茶もお華までも教えて頂いたんです。その頃人なみに扱ってくれる人の少なかった女中を対等に扱って下さった先生と奥様は本当に御立派な人でした。私が今こうして楽に暮せるのは先生のお蔭ですわ。あの一年は本当に天国でした。体が楽でおいしい

物を喰べさせて頂いたので、私は小柄ながら丸丸と肥り、女らしさも出て来たのです。「山口さん。もう一杯入れますわ。これは私の聞かせ賃ですから。」

一年ばかりして、五月の或る日映画でもと云われて外出が許されたのです。小遣を二円も持たされ、きれいな花模様の銘仙の着物を着ると、自分でも見ちがえるほどでした。そうそう、私が先生のお家に引取られて間もなく両親が出て来ました。奥様が呼んで下さったのです。正月に土産を持たされて村へ帰ったのが、両親に会った最後だったのです。

新宿に行ったのですが、映画館の中で身なりのいきな二十四五の男に話しかけられ、ついふらふらと口車に乗ったのが悪かったんです。食堂で洋食を食べました。何だったかおぼえていません。十七になったばかりで男に對するあこがれみたいな氣持もあったんですね。料理屋で酒まで吞まされて、結婚の約束を言葉巧みにさせられたのです。そして生れ始めて初めて自動車に乗りました。もう自分の生い立ちなどを問わず語りに話していました。連れ込まれたのが吉原の娼家でした。その男久保とか云いましたが、でっぴり太った五十一年配のそのの主人と話していました。まだ日

の高い時間で娼婦たちの化粧がはじまったばかりでした。着飾った娼婦たちを見ると自分の着物や化粧が何だか貧弱に見えました。久保が二言三言あいさつをして帰りかけましたので私が続こうとすると、主人からお前さんはここで働くんだ。と云われました。そして体を見せろと云うのです。驚いて尋ねる私にわかったのは、私がこの娼家に売られた事でした。料理屋で何も知らない私に届けを出すからと云って白紙に名前を書かされ拇印を押した紙が借用証に代っていたのです。私たちのとても手の届かない五百円という大金です。金は勿論久保が持って行ったんです。そしてここが吉原の『女郎屋』である事を聞かされました。私は帰してほしいと泣く様に頼んだのですが、前借金を返せなければ放すわけには行かない。若し嫌なら詐欺で警察に訴えろとおどされました。警察と聞いただけで震え上がりました。久保は私を内妻だと云ったのです。四畳半ほどの小さい部屋に入られて体を固くしている私のそばに主人が来て髪の毛を一本引抜きました。そしてそれをくると一つ結びました。明日の朝までに解けたら帰してやると云うのです。しかし解けなければ体で借金を返すんだぞと云われ一晩中

頑張りました。自分で髪を引抜いては結びし何本も繰返しましたが、どうしても解けません。翌日になり空が白んで来ると益々焦るので、どうにもなりません。朝の遅い娼家の人が起き始めると思わず泣き伏していました。主人が遣手姿をつれて入って来た時、こんなのはとてもほけませんと小さい声で云いました。主人はすぐに近くのそば屋のおかみをつれて来て同じ様に結んだ髪を五分ばかりで解かせたのです。そのおかみは長々と挨拶して帰って行きました。後で聞くとそのおかみも売られて来たのですが髪の毛の結び目を解いたので借金は棒引きされ、おまけに支度金までつけて出入のそば屋に嫁に行かされたとか云います。何かのこつがあるのでしょうか。三十人に一人位はそれで許される娘があるとか云います。

直ぐにその部屋で体を見せろと云われました。でもどうして自分から裸になどなれましょう。部屋の隅に追いつめられた私の体は二人の遣手婆の手で後手に縛られてしまいました。自分の腰紐で縛られるなんて情ない事です。後手に着物がはだけられ、腰巻も剥ぎ取られて迎向けに転がされ、両足を二人の遣手婆に展げられるのは恥かしい事でした。許し

てほしいと泣き叫ぶ私の声は、すぐに猿ぐつわで殺されました。主人が私の体をしらべてお前はまだ生娘だから東によく教えて貰えと云って、そのままの姿で三つほど離れた部屋に運ばれました。源氏名を東という年増女郎の部屋です。縛られたままの私にこの仕来りや、客の扱い方などを詳しく教えられました。見ただけで顔がほてって来る、あの絵や写真を見せられて教えられたのです。泣いて顔をそむけると腿や腕を抓られました。私はすっかりあきらめて、一通りの話を聞き、やっと手を解かれて着物が着せられたのです。早い風呂でしたが、東さんは体を隅々まで洗ってくれました。きめの細かいきれいな肌だとほめてくれたのを今でも覚えています。銘仙でさえきれいだと思っていた私に与えられたのは綿紗の着物でした。それも前借りを大きくするものだと知らなかったんです。濃化粧をされると鏡の中の私が別人の様に美しく輝いていました。おそい昼食は私だけ赤飯でした。夕方までもう一度お客の取り方を教えられました。そしてお客に満足が与えられなかったり、ぞんざいにあしらったりするとお仕置される事や特に外部に連絡しようとしてたりまして逃げたりしたら半殺しの目に会う

から年期のあけるまで大人しくしている方が
良いよ。お父さんは太っ腹の人だから気に入
りさえすれば、決して悪い事はないと云われ
ました。私がどんな風にお仕置をされるん
ですかと尋ねたのですが、そのうち嫌でも見
られるよと笑うだけでした。

夕方に主人に呼ばれ、この店での源氏名も
静香とつけられました。夜になって早速出窓
から客引きをさせられました。しかし十人ば
かりのお女郎の客引きを耳をおおいたい気持
で聞きました。何時間坐って居たでしょう
か。その間に他の娼婦は次々に客をとって消
えて行きます。早い時は三十分程で帰って来
ます。ここに坐る間のない人もいました。い
きなり遣手婆が私を呼びました。静香ちゃん
と云われても、自分の事と気がつきません。
東さんが私を押しながらさあ水揚げだよ、し
っかりやるんだよと、はげましてくれまし
た。遣手婆に手を引かれて部屋に行きまし
た。眼鏡をかけた中年の男が服を脱いで待っ
ていました。私は体を固くしてどうしても云
う事をききませんでした。すると手を拍って
婆を呼ぶのです。泣いて拒む私の体は忽ち裸
にされ右の手と足、左の手と足が別々に前で
縛られました。脚を合わせる私の体はもう客

の思いのままです。その形で括られてしま
うと脚を合わせ様としてもうまく力が入りませ
ん。客の体が脚の間に割って入るとどうする
事も出来ず、拒めませんでした。始めての客
をそんな形で取らされると私がしなければな
らない後始末を遣手婆がすませました。解い
て貰えないままに、その後続いて三人も客が
私の体を楽しみました。

どんなにしても、娼婦にされてしまうので
す。もう私はあきらめました。でも始めのう
ちは嫌だと云う気持が先に立ち、客を拒みが
ちだったので、おかみと遣手婆によく仕置を
されその後で何度も技巧を教えられました。
おかみは娼婦たちをいじめるのが好きでし
た。煙管の雁首を肌にあてられると熱さに飛
上ります。ひどい時には火ぶくれが出来るの
です。

私も一月もしない間に色々と技巧も習い、
始めての時はあれほど嫌いだった勤めにも、
次第に客を喜ばせ、自分も楽しむ様になっ
たのですから、女の体って悲しいものです。

二月ばかり経った時、一人の娼婦が馴染客
としめし合わせて逃げました。でも二日ばか
りで連れ戻されたのです。忍と呼ばれていた
妓です。皆の娼婦を集めて、その前で裸にさ

れて土蔵の中で手足を背中縛られて滑車で
吊り上げられたのです。土蔵に呼ばれると、
年増女郎でも青くなつたものです。駿河責め
にされた忍の体は弓なりに反り、頭を垂れた
体が綱のよじれで何度もくるくると廻りまし
た。私たちをおどしながら責めが続きました。
とうとう汗と脂にまみれて気を失った忍
の体が降されてはっとしましたが、それだけ
ではすみませんでした。迎向けに板の上に縛
り直されて裏庭に運び出された忍の顔の上に
次々に運ばれる手桶の水が絶切れない様に何
杯もかけられました。鼻の上にかけられると
息が出来ないでむせ返ります。口をあけると
水がいくらでも注がれて、見る間に忍の腹が
大きくなります。肩で苦しそうに息をする忍
の体を板ごと逆に立てて胃のあたりを強く押
えると、口と鼻から本当に水が吹き出しまし
た。楽になってほっとする間もなく、三度も
水責めが繰返されました。呻きも出なくな
った忍がその上海老責めにされました。すると
又新しい呻きが出て来るんです。

娼家では一見すれば地位の低い遣手婆が実
はとても権力を持っているんです。折角私た
ちが呼び上げた客でも、うまい事を云ってお
気に入りの娼婦をあてがうのです。ですから

私たちはこっそり婆さん達に客からチップをねだってはつけ届けをするのです。お茶をひいていると稼ぎが悪いとお仕置されます。その時に手を下すのは婆たちですから、私たちは二重に苦しめられるのです。忍は顔がきれいでしたから婆たちにもつけ届けもせずによってゆけたので、一層憎まれていたのです。

私たち娼婦の中でも決して評判は良くありませんでした。憎まれていたので、この時とばかり仕返しをされたんです。後手に縛られたうえ、見ていた私も恥しくなりましたが、あぐらをかく様に足首を縛られ、その縄の余りを背中を前に押しつけて体を丸くする様に縛られたのです。忍は唇でも噛んだのでしよう。口から血を垂らして青ざめた顔をあげて遣手婆をじっとにらんでいました。髪の毛がばらばらになり本当に物凄く感じでした。髪をつかんで前に後に引倒され、とうとう氣を失いました。それでやっと終わったんです。その晩だけは呻りながら一人で寝させられましたが、翌日は立てない体で客をとらされたんです。

その夏に満州で戦争が起りました。私の居た娼家の主人は早速時局に便乗して、九月から奉天で軍の慰安所を開いたのです。奉天ま

で約十日も汽車と船で客をとらずにのんびりしました。それまでは月のものも洗いながら客を取らされたんですからほっとしました。

その代り奉天や熱河では、くたくたになってしまいました。特に匪賊の討伐から帰った部隊のあった時など、私たちは寝た切りで部屋の前に行列を作っている兵隊を十分毎に迎えました。本当に腰が抜けてしまいます。私たちの他に朝鮮の人も居ました。妓生（キーサン）と呼ばれていましたが人種差別でもないのですが私たちとは仲が悪く、殆んど話もしませんでした。あちらでは軍医が週に一度検診に来ました。吉原に居た時は月に一度でしたが、あれは本当に羞かしい事です。検診台の上に足を展げて乗るとガラス棒で病気がしらべられるのです。血液検査もされました。むしろ客を取る方が気持は楽でした。何だか自分が汚い物に思えるのです。あっさりした軍医が尻をばちんと叩いて「よし、次」と云う方が気持が良いのです。

満州の事件が終るか終わらないうちに上海で戦争です。主人は早速私たちを連れて上海に行きました。上海では陸軍と海軍が一緒でした。それに租界という日本の領土みたいな土地があり民間人も多く居ました。それで事変

が終ってからもずっとそこに居ました。鉄砲の音も慣れれば平気になります。満州でも上海でも私はこれでもお国の為だとして兵隊さんを慰めましたし、どうした事か主人からも信用され、支那事変の頃には上海の店を委される様になりました。そうすると私は将校しか客にとらなくなりました。軍の動きなどとはつきり判ります。現地の空気は益々悪くなり戦争が続くような気配がありました。

支那事変の初期に、いつか馴染になった憲兵隊長に誘われました。面白い物を見せると憲兵隊に連れて行かれました。門の前で鉄砲に剣をつけて私にまで捧げ銃をするのが、おかしくて笑い出しました。私も二十三位でしたから笑いが止りません。地下室に若い男女の支那人が縛られて転がって居ました。その姑娘（クーニヤン）はまだ二十にならない位でした。顔立ちのきれいな娘で、泥にまみれていました。顔立ちのきれいな娘で、泥にまみれていました。長は我軍の動きを探りに来たスパイだ。何を探ったかを聞き出そうとしても口を割らないのでこれから痛めつけて白状させるのだ。と云って部下に拷問を始める様に命じました。男の方から始められました。後手に縛られたままの体を足から天井に吊られ、服が切り裂

かれました。ぼろぼろになった服の間からたくましい体が現れます。逆さ吊りにされた体に木刀が力まかせに振り降され忽ち体中にみみずばれが走り、時には皮が破れて血がにじみ出しました。男の口から弱い声ですが「日本兵の鬼め」と云う様なもののしりが呻きや叫びと共に出て来るだけでした。鼻血を流しながら気絶してしまいました。隊長はしぶとい奴だと云いましたが、私は特に娼家でのお仕置を知っているだけに、こんなに強い支那人と戦争するのは大変な事だと云う気がしました。

男を降し水をかけて息をふき返させてから娘の方の拷問が始まりました。娘は一度後手を解かれて三人の兵隊の手で忽ち素裸にされてしまいました。泥に汚れた手足と顔にそぐわない真白な肌がとてもきれいでした。身をもがきながら男と同じ様に毒づく女の体は大きな机の上に迎向けに手足を四方に張り伸ばされたのです。隊長は自分で手を下して娘の体をくすぐったり抓ったりしました。大きく息づく乳房をぎゅっと、潰れるほどつかんだりしましたが何も白状させられません。なるべく気絶させない様に体中が木刀で叩かれ、遂には体の中に木刀を突っ込まれてこじられた

のです。私も娼家ではお仕置もされ、見せられた事は多かったのですが、商売道具である娼婦の顔と体を傷つけたり痛めつけたりする事はなかったのです。私はそんな責め方を始めて見ました。その姑娘も口から泡をふいて気絶しました。大小便を垂れ流してです。恐しくて思わず隊長にしがみついた私を兵隊達は笑って見ていました。

それから三日して、その男女の処刑を見ました。その後も何度か見せられましたが何度見ても悲惨なものです。すっかりやつれ、体中に生傷が一杯についた男女が中庭の深い穴の前に引出されました。全裸で後手に縛られて穴の前に坐らされ、二人とも口の中でぶつぶつと何かをつぶやいていました。念仏だったでしょう。大人しく首を前に差し伸べる二人を見て、中国民族の強さを見せつけられた様です。私なら泣いて命乞いをしていたことでしょう。男の方は隊長が自分で首を切りました。気合と共に振降された日本刀で首が一米も飛び切口から血が二米ほど吹き出しました。首のない体が伸び足が伸びて穴の中に首に続いて落込みました。次いで娘の方はさすがに顔は青ざめていましたが、きちんと坐ったままでした。縄尻を押えられていました

が身悶えもしません。若い少尉が斬ろうとするのですが少尉の方が震えていました。刀で斬られた時の音は映画やテレビで聞くのとは違います。そうです、丁度お風呂で男の子が濡れたタオルをタイルにぶつつけるあの音に似ています。何とも云えない不気味な音です。

少尉は気合だけは良かったのですが、首を切り損ねて肩に斬り込んだのです。そのとたんに娘は縄尻を持っていた兵隊の手から縄をもぎ取るもの凄い力で立上り、大声でわめきながら走りまわりました。少尉の刀を肩に喰い込ませたままです。いきなり一番古参の曹長が横に居た兵隊の剣をつけた鉄砲で正面から胸を突刺してやっと殺したのです。あんなに苦しんで本当に可哀そうでした。娘の体から引抜かれた少尉の刀が返され、兵隊が足を引きずって穴の中に投げ込みました。飛び散った血の上に砂が撒かれ穴が埋められて終りました。戦争さえなければ今頃でもまだ百姓でもして、孫でも出来ている事でしょうに、あの二人の顔は今でも覚えています。

支那との戦争が進むにつれて私の店は南京から漢口まで移りました。主人は軍の上層に取入って居ましたから、新しい所は軍に安く殆んど只で用意させて前に居た所を高く売っ

たそうです。私が漢口に居た時に大東亜戦争が始まりました。私には一週間ほど前にわかりました。そしてマニラ、シンガポール、そしてスラバヤまで軍について行きました。その頃は私は娼婦としてではなくおかみとして店をやりくりしていました。女が足りない時は客もとりましたが将校だけしか相手にしませんでした。それもお金ではなく軍の物資や情報が目あてでした。最後の一年ほどはもう内地からの交通もなくなり、主人とは手紙すらままになりませんでした。結局主人は東京の空襲で焼け死んだとか云う事をずっと後で知りました。終戦後一番早く帰って来れたのも将校に馴染が多かったからでした。店で使っていた女たちの中には現地人の奥さんになった人もあったそうです。

佐世保に上陸しても、その後のあてはありませんでしたが、モンペ姿で兵隊の雑糞二つと風呂敷包みだけが私の財産でした。汽車に乗ってともかく故郷の村に帰ろうと思ったのです。所が満員の汽車は網棚まで人が乗り、板張りの窓から出入していました。まる一昼夜ほど床に坐ったまま荷物を抱えていたのですが、この神戸に来た時便所に立った隙に荷物が窓から投げ出され、若い男が持って行く

のが見えました。人を押しのけて窓から飛出して追いかけたのですが、駅前で見失いました。残ったのは財布の中の百円ばかりで、引揚証明書も何もなくったのです。神戸の町も同じ様に焼け野原でした。ヤミ市をうろつきながら呆然としていました。諸をかじって空腹を充しました。楠公さんの境内でごろ寝をしました。私はやっと三十になったばかりで外地で良い暮らしをしていたのでやせこけては居ませんでした。アメリカの兵隊や黒んぼが大きな顔をしてのさばっていました。

家のない私には結局は元の娼婦になるしかありませんでした。それも自分で身を売る所謂パンパンです。行きずりの少し身なりの良い男や特に復員のヤミ屋が良い相手でした。その頃は日本の警察なんて少しも怖くありませんでした。MPだけがどうにも反抗できない権力を持っていました。一番しやくにさわったのは黒人兵に輪姦された時でした。脂ぎった体臭は今でも虫酸が走るようです。

いつか神戸駅の北でガード下を根城とするパン助の仲間でグループが出来ました。自分たちを守る為に仲間になって見張や情報の交換や、自分たちの縄張りを守るのです。私はさすがに十年以上もの娼婦の経験があり、年

も上だったので、男を喜ばせるのも上手で稼ぎが一番多くいつか姐御になっていました。

十人ばかりのグループでした。早速出来はじめた簡易旅館のバラックをドヤにして随分稼ぎまくりました。私たちのグループが出来てからしばらくして、顔を見た事もない女が私たちの縄張りで客引きをしているのを見つけ、二度目に仲間を三人連れて無理やりに楠公さんに引っぱり込んだのです。いきなり平手打ちを喰わせて縄張りを荒すなど脅したのです。それで謝れば軽くすんだんでしょうが私も荒んで居たんですね。口答えをするそのパン助をいきなり蹴倒して三人の仲間と服を剥ぎ取ってしまいました。そして縄で後手に縛り上げました。その娘は服を剥ぎとってみると、見たより案外太っていましたが、板切れで何度も尻や腿を何度もどやしつけますと、ののしる声が悲鳴に変わり泣声を上げました。その頃は女の悲鳴が聞えても助けに来る人なんか居ませんでした。倒れてもがく姿を見て急に思い切りいじめてやろうと云う気になったんです。荒縄に大きな結び目を作り、おまけに砂までつけて股を縦に縛りました。仲間と四人で交代で尻から上に上っている縄をぐいぐいとしやくり上げました。私たちの

見幕に浮浪者たちも遠まきにして見ていた。夕暗が濃くなった頃でした。ヒ―と泣き叫ぶ女の股がすり切れて血が出て来ました。その時、ポリ公だと云う声で私たちは散り散りに逃げました。そのパン助は氣を失っていました。浮浪者が二三人でその女をかついで行ったそうです。後に元町の裏で浮浪者と同じ藪の中で寝ているのを見ました。

「そうですか。山口さんはこんなリンチの話がお好きですか。それじやもう一杯おごりましょう。おつまみはこれで我慢して下さい。そんなリンチの話ならもっとしますわ。でもそれからの事をさきに終らせて下さいね。」

私はそうしてパン助の生活を昭和二十五年頃まで続けました。運良く、そして私たちのグループの上手なやり方で警察へは二度しか捕まりませんでした。しかし世の中も段々落着いて来ましたし、私も三十五にもなり次第に稼ぎが悪くなって来たのです。余り仲間にテクニクを教えすぎたのが却ってあだになったのです。丁度その頃、私が女工から逃げた時に助けて頂いた恩人の丸井先生にお会いしたのです。朝鮮で戦争があり好景気だった頃です。神戸駅で降りた中年の紳士を呼び止

めました。鞆を提げた手に抱きついて止めたのですが、二言三言誘ううちに逆に手を握られ、とめではないかと云われびっくりしました。覚えて頂いていたんです。出張されたついでに神戸のお友達を訪ねられた時だったのです。私が吉原の娼家に売られた時も随分探して頂いた事や私の両親が戦争の終り頃に相ついで失くなった事など、一晚中旅館でお話を聞かされました。一かどの姐御であった私も先生の前では昔の女中のとめだったんです。自分の家に来ないかと云われましたが、とても御好意をお受けする事は出来ませんでした。こんなに汚れ切った自分が恥しかったのです。

その時に土地を買う事をすすめられました。体で稼いだ金が、それでも五十万円ほどありました。先生のお友達に紹介して頂いて六甲と御影の土地を百坪ばかりずつ買ったんです。あなたもお顔を知って居られるでしょう。月に一度か二度ここへも顔を出される白髪の上品な方ですよ。そして間もなく県庁の近くの料理屋の女中にお世話して頂いたのです。五年もしたら六甲の土地を手離したただけで、この店と十坪ほどの家を買えました。もう十年になります。落着きましたが、やっぱ

り女が一人で生きるのは淋しい事ですわ。家庭が欲しいですね。

そうです。一昨年は久しぶり、本当に三何年ぶりで村に帰って来ました。顔を見知った人も少なくなっています。山や川の形も変わった様な気がしました。兄弟の行方も只二番目の姉が川崎あたりに居るらしい事しか判りませんでした。兄弟のうち何人が生きているでしょうね。

「そうそう、こんな話よりリンチの話の方が興味がおありでしたわね。詳しく話せとおっしゃるんですか。なんだか自分が真裸になるみたいで羞しいですわ。」

前にも云いましたが、女工の頃は仕事を多くさせる為でしたので、そんなにむごい事はなかったんです。女工は栄養も足りず、年も若い娘が多かったので監督なども、それほど強くは叱らなかつたのです。その時はこれ以上の苦しみはないと思いましたが、後から見ると生ちよろいものでした。娼家でも大切な商売道具である娼婦の体に傷がつくのをとて嫌いました。せいぜいお尻を叩かれるか、抓ったりくすぐったりするのが関の山だったのです。女工の頃にこわい室長から、そうされた事はありませんが、特にくすぐられると

経験のない人は苦しいものと思わないのですが、自分がくすぐられると本当に息も出来ません。二人以上に方々をくすぐられると苦しくて気絶してしまいます。私もパン助をしている時は、よくこの手も使いました。

一番ひどいのは何と云っても憲兵がスパイを捕えた時でした。支那に居た時は便衣隊とも云いましたが、どうせ死刑にするつもりですから棒で殴る位は手ぬい方です。指を切り落したり、真赤に焼いた鉄を体に押しつけられるのを見た事もあります。大の男でも爪をはがされると泣きわめきますね。死刑にしても首を切るとか銃殺が多かったのですが、一度だけ注射で殺されるのを見た事があります。これ位の太さの（二十CC位か）注射器で空気を打たれたのです。腕の静脈でしたが一分位でクーと云ってそれっ切りでした。

女スパイがつかまると大変です。本格的に痛めつける前に白状しても、勿論スパイである事を認める様な女は居ませんでした。その次は必ず裸にされます。体を痛めつけられ、辱められます。乳首をペンチで潰されて気絶したのを見た事もありました。顔も殴られたり切られたりで、本人とわからない位になります。自白しなくてもスパイにされて

しまいます。今思い出してもぞっとします。お互いに国の為だと思っているのでしょうか、気の毒なことです。中には無実の人も居たことでしょう。特にマニラやシンガポールでの白人や白人との混血などにはむごかったですね。人種がちがうと人間はこうも惨酷になれるんですね。

パン助時代には、自分たちを守る為という気持があつて、縄張り荒しにはひどかったですよ。去年も肉体の門という映画が上映されました。私も見てあの頃を思い出しましたが、映画には出せない様な事の方が多いですね。そんなリンチで殺されたパン助もありました。いやですよ、私は殺したりはしませんでしたわ。さっきお話した様に裸に剥いで叩いたりくすぐったりした程度です。そして必ず商売道具を痛めつけました。体を縦に縛ると、どんなに向う意気の強いあばずれでも悲鳴をあげました。そして足腰も立たなくしておいて、服を取上げ裸で放り出すのです。時には髪の毛を全部切つてやりました。丸坊主になると云うとそれだけで大抵は謝りますので、めったにしませんでしたが、一度ヤクザ仲間のパン助だけは一言も許してくれと云いませんでした。お蔭で私もひどい目に会ったんです。仕

返しをされましてね。

まだ私たちのグループが小さかった時は、他のパンパンを仲間に引き入れたものです。もうパン助であれば話ただけで入って来ます。一人だけまだ女学生だった娘をパンパンに仕立てた事がありました。私は長い間の経験でその女学生が男に気に入られると目星をつけたのです。悪い事をしたものです。継母との折合が悪かったのでヤミ市をうろついていたんです。稼ぎの多かった私は身なりを早くから整えていたのです。男の人は顔と見なりを気にしますからね。私たちは「マリ」と名づけました。私も「とめ」なんて色気の無い本名を出さず「サリー」なんて気取って名づけていたのです。マリの両親は発疹チフスで死にました。マリの腹違いの妹が今お店に居る洋子です。私が足を洗ってからマリに頼まれてずっと育てて来たんです。

セーラー服の大柄なマリを簡易ホテルの私の部屋に連れ込んで、三人の仲間を取囲んで仲間になれと脅しました。いやだと云うので裸にして縛り上げました。泣き叫べない様に猿ぐつわも噛ませました。私は娼家で見せられ、自分が何度も縛られたので縛り方は上手です。よく新聞に出ていますが強盗に縛ら

れても大抵は自分でほどこでしょう。手首だけをどんなに強く縛っても、腕が自由なら手首をこじればゆるむんです。腕が動かせない様にすれば弛くても仲々ほどけません。私はマリを出来るだけ痛めつけないで仲間にしようと思いました。夜になって私が客を取るのを押入れの中に坐らせて見せつけました。わざと電灯も消さずに私の方から男にサービスしました。三度も見せつけられると何だかお

挿絵画家

募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応募を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。

○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。

●本誌旧号（既刊号）

在庫について

○本誌の旧号は在庫品が僅少なため毎月売切品が出て、折角御注文下さった方々に御迷惑をおかけしまして申し訳ありません。御希望品は在庫している間に、お早くお申込み願います。

かしな気分になるんですね。ぶるぶる震えるマリの体を、私が最初のときされた様に左の手と足、右の手と足を別々に括って私の布団で仲間が連れて来た客をとらせたのです。やはり体が汚されると女ってあきめますわ。私が仕込んだのでマリは良く稼ぐ様になりました。

そしてさっきお話ししたヤクザの手下のパン助を痛めつけ仕返しをうけたのです。チンピラがお前の手下を一人預っているから受取りに来いと云いに来たのです。何をされるか解りませんし、怖かったのですが姐御と云われる手前、行かなければグループも潰れるし私も稼げなくなりますので、そのチンピラに案内されてその親分の家に行きました。大勢の若い男に囲まれてマリが裸にされ髪の毛を切られてしまつて、ぐったりとしていました。体中にみみずばれが走っていました。私を見ても呻くだけです。親分格から、お前はうちの若い娘をよくも可愛がつてくれたナ、パン助のくせに生意気だ、たっぷりお礼をさせて貰うぜ。と云うので、今更逃げられませんか、どうにでもしてくれと云うと、若い男たちに忽ち裸にされ、二部屋ぶち抜いた広間の真中でマリと一緒に、皆の見える所で、男

たちに次々に辱められたのです。軍の慰安所で兵隊を相手にした時と同じでした。ふらつきながら坐り直した私に指をつめろうと云うのです。左の小指をまな板の上にのせ、出刃庖丁が関節にあてられ、木槌で庖丁の背を叩くと、一気に指先がすっ飛びました。私は歯をくいしばって痛みをこらえ、むーと呻いただけでした。叫びをあげなかった私に感心した親分は、パン助ながら度胸がある。女にしておくのは惜しいと云って指の手当をさせた後で、盃をくれました。私はきれいに明けたので益々気に入られました。私たちのグループが割に長く潰されなかったのは、その親分の引き立てがあったからです。只マリも私もその時ひどい病気をうつされて大分金がかかりました。出かけたのは夕方でしたが腰が抜け、丸坊主にされたマリを背負う様にして宿に帰ったのは十二時をまわっていました。それからマリは私にとってもなりました。

私が足を洗う時は大変でした。皆を集めて足を洗いたいと云うと、マリなど私を慕う娘は、もっと居てくれと頼むのですが、私の次に年のいったエミという意地悪な出戻り娘が急に居直つて私が姐御になると云い出したのです。私はもう年だからと足を洗う理由を話

したのです。先生の事は何も云いませんでした。エミは私に落し前をつけろと云うのです。私の稼いだ金を全部出せと云います。でもその時はもう先生のお友達にまとまった現金も通帳も全部預けた後でしたので行李の中には金は何もありません。一層怒ったエミは他の若い娘に命じて私を縛り上げました。私は和服が好きでした。脚が短いのでとてもスカートなど着ようとは思いません。縛る為の紐を身につけているみたいです。四時間余り私のリンチが続きました。エミも他の女も金を出せ、どこにかくしたか、など結局金が目当です。誰が幾ら持って居るかなど、ちゃんと判っていましたから。

板切れや棒で叩かれ、何度も気を失いました。自分の垂れ流した物を顔に塗られたり、海老責めにされたり、結局それまで五年の間に私がして来たリンチを一度にやられたのです。私に手を下さなかつたのは、マリともう一人の女だけでした。縛った体を動かない様に押えつけておいてお灸をされたのが一番こたえました。猿ぐつわをされても随分高い呻きが出た様です。気がついた時は髪も刈られ素裸で駅の裏に放り出されていました。体中が痛み、火ぶくれがそこそこにありました。

その姿で中山手の先生のお友達のお宅まで這うようにして、やっこのことで、明け方にたどりついたのです。体が傷だらけで泥にまみれて気を失っている私を見つけて二週間もお宅で寝させて頂きました。体の痛みよりも、やっこのこれでみじめな職業から足が洗えたと云う喜びの方が強かったものです。料理屋の仲居をしている時、以前私が客として接した男の方が来られるのが一番辛い事でした。居にくくなってとうとう先生のお友達に御相談してビルの掃除婦になったのですが、それも二年ほどでした。私はマリの妹、洋子連れで間借していたのです。でも洋子もやっこの高校も出しました。この店を出してからは楽でした。

私の作ったグループは世間が落着いて来たせいもあり、直ぐにヤクザに喰い物にされてなくなりました。可哀そうにマリは私が居なくなつて急に荒れたとかで、ヤクザのヒモを持ち、麻薬を打たれ、今では行方を探す手懸りもないのです。やさしい娘でしたのに。

洋子には私やマリの様におそろしい世界に引ずり込まれないで、平凡な平和な暮らしがさせたいものです。

私は考えて見ると、とても不幸でした。でも私には丸井先生という救って下さる人があ

ったのです。私と同じ様な不幸な女は沢山あったのです。そして救われずにもがいている人が多いのです。

——。——。——
「おや、もう一時過ぎですわ。随分お引留めしてすみませんでした。」

私はすっかり話に引込まれていた。スタンドの明りで見えるマダムの顔の一本一本の皺に数奇な運命の苦悩が刻み込まれているのを見た。淋しい笑顔ながら、きらりと眼尻の輝きが頬を伝わる。ハンカチで涙をぬぐう左手の少指の切口が苛酷だった過去を表している。私の眼も熱くなった。

「お話しして本当に気が晴れましたわ。でもお客様にこんなお話をしないで下さいね。それじゃ途中まで御送りいたしますわ。」

逆境と云うには余りにも悲惨な運命を甘んじながらも、潰されなかったやさしい女心が淋しい微笑に感じられた。これからは平和な暮らしが続くであろう。

(終)

あと書き 『おとめ』というスタンド・バーは架空である。若しあったとしても、そしてマダムが五十年配の小柄な人であっても、その人は文中の『とめさん』ではない。

フィクションとして考えて頂きたい。読者諸氏もフィクションとして、とめさんの幸福を祈って下さい。

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にち)

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
田中美佐子 略号 (にし)

臨月腹開陳

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
田中美佐子 略号 (にり)

臨月腹開陳

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にす)

柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
田中美佐子 略号 (にや)

臨月のヌード

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にわ)

妊婦の裸身像

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
田中美佐子 略号 (にた)

縛られた妊婦

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
田中美佐子 略号 (にる)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にお)

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にぬ)

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
田中美佐子 略号 (にい)

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いち)

縄に悶える入墨

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いへ)

足吊り三態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いと)

剥れた腰巻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いは)

女一匹御意見無用

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いお)

玉取姫が凄む

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いる)

全裸緊縛立像

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いに)

入墨ヌード

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いよ)

後手吊りの構図

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いほ)

黒細帯の裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いわ)

黒禪を誇る

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いか)

入墨自慢

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いり)

黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (くの)

黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (くな)

黒禪背面模様

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (くこ)

黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (くり)

全裸入墨姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (いれ)

晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ろと)

白六尺禪一本の姿

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ろに)

白禪後手高手小手

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ろし)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (いら)

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (いこ)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)

山原 清子 略号 (いさ)

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (いみ)

黒フン高手小手縛り

大手札八枚一組 略号 (八〇〇円)
山原 清子 略号 (ひろ)

入墨女体全裸像

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひへ)

黒禪刺青女体美

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひね)

六尺禪をするまで

連続二十ポーズ組写真
大手札二十枚一組 略号 (二〇〇円)
山原 清子 略号 (ひは)

白ふんどし脇差切腹

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひに)

白ふんどし短刀切腹

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひぬ)

刺青姐御腹巻脇差

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひほ)

刺青姐御腹巻短刀

大手札十枚一組 略号 (一〇〇円)
山原 清子 略号 (ひり)

入墨女体海老責姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ほか)

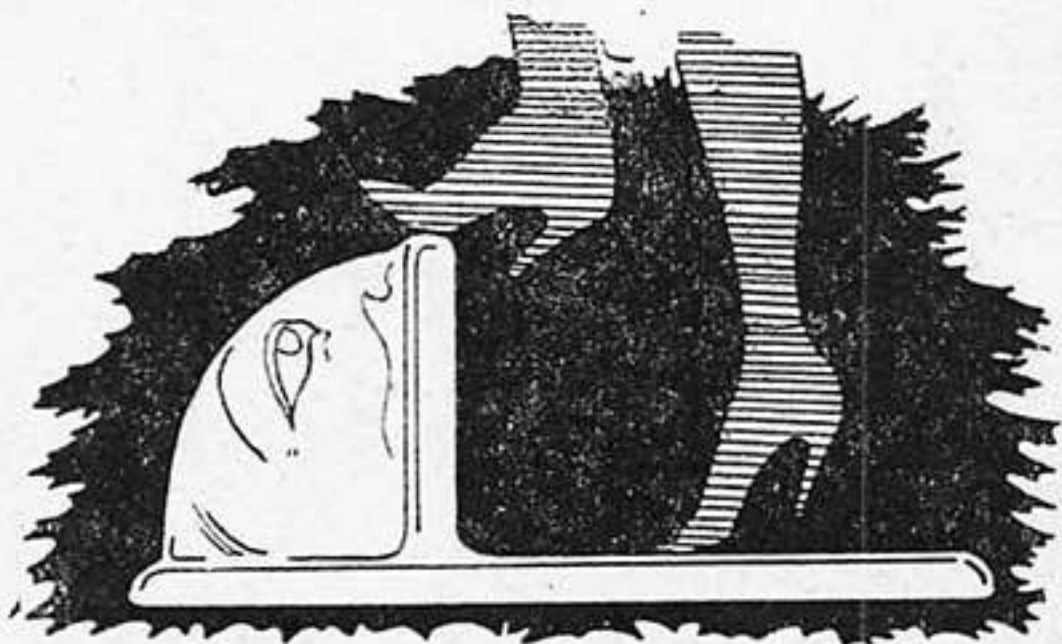
文身女体股間縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
山原 清子 略号 (ほき)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美



A 非常識

B、D氏

C、スキン・ダイビング

D、ゴムバンドの女性たち

(1) 岡田 京子さん

(2) 吉川太紀子さん

E、純文学における性

F、六月号への返書

葉山 啓 様

福田久文 様

橘行司子 様

羽村京子 夫人

黒淵賀集子 夫人

A 非常識

四月一日

午後十一時、連絡場所を依頼している友達より電話有り。

「お前は美人らしいな」

「なんだい、いきなり」

「お前を訪ねて来た奴がそう云っていたよ」

「誰だ」

「知らねえよ。名前も何も云わねえから」

「用件は」

「芳野眉美さんは美しい人だから会わせてくれって」

「よせよ」

「そいつ、お前のことを絶世の美女だと信じているぞ」

「へえ」

「だからよ、ムクツケキ野郎だって、いくら云いきかせても、そいつ、信じようとしねえんだ」

「それは困ったな」

「取引きしよう云いやがった」

「取引き」

「金をやるから、お前の住所を教えろって」

「おいおい、それだけはやめてくれ。そういう非常識な奴がいるから、連絡場所をたのんだのだから」

「わかってるよ。あまり馬鹿馬鹿しいから追い帰えしたぞ」

「それでいいよ」

「今度来やがったら、ブンナグルかもしれねえぞ」

「そう怒るな」

「下町っ子をなめられてたまるか」

「エプリル・フール」

「いくら四月一日でも、シャレにもならねえよ」

直接に訪ねることだけはやめて下さい。オコリッポイ奴だから、あまり興奮させると竹ボウキでなぐられますよ。

筋を通してお手紙を下さる方は、すぐ返事を書いて、私のほうからお会いしていただいています。私も奇クを愛する先輩や友達を多く持ちたいのですから。

でも、中には、失礼な手紙も有ります。こんなことは書きたくありませんが、ついですから、一言おことわりしておきます。

女性を紹介してくれとか、私の知っている友人の住所を教えてください、とか、どこそで待っているから来てくれ、というような手紙は、返事の書きようがありませんから、いっさい無視しております。

悪しからず御了承下さい。

B D氏

四月十六日

D氏—ということにしておこう。

D氏は奇ク大型版からの読者だという。三月から続けて来店して下さった。奇クも全巻そろっているらしい。だから、私の初期の作品をひっぱりだして読むのも簡単だ。これには弱い。

D氏は、神経質なヒョワな私を想像していられたらしいが、陽気で適当に肉がついている私に、初期の作品のイメージはない。失礼しました。

D氏は書齋派だと云われた。奇クだけでなく、種々の本にくわしい。奇クの作家たちをペンネームから、有名人を推理されて楽しがっていられる。あんがい、あたっているかもしれない。純文学の作家で奇クに書いた人が事実いますからね。

D氏は御年配になっても、独身を楽しみ、ゆうゆう自適なさっているそうだから、こんなうらやましいことはない。(どなたか、養女になられる美女はいませんか。)

そのD氏が、私好みだというので、可愛い子を紹介して下さい。(このところ、ツイテル)

で、閉店後、さっそく電話。チャンスは逃がすな。すぐ会った。

「紹介されたんだよ」

と彼女に云った。とても可愛い。

「そう。わたし、はじめてだな、と思った」

「弱った」

「どうしたの」

「あなたの顔を見たら、云えなくなった」

「何を」

「怒るなよ」

「怒らないわ」

そこで気の弱い俺は、ようやく云ったね。

「飲ませてくれる？」

「ああ、オシ……」

話が早いや。

「あのオジサマと、お友達なの」

「そうだよ」

「おかしいわ」

「どうして」

「だって」

「俺が若いからか」

「うん」

「俺の先輩さ」

「でも、あのオジサマ、お話だけで、そんなことしないわよ」

「しては、だめか」

「ううん」

「今、でる？」

「うんと」

だって。

彼女、台に腰掛けると、うしろの壁にもたれた。

（私の位置を解説しておきましょうか。私は、彼女の前の床に坐っていたのである。ワカル）

彼女、ふと膝を立て、膝頭をかかえて俺の顔を不思議そうに覗き込んだ。

「いいの」

「いいよ」

足を開いた。

「いいわね」

「——」

「でるわよ」

D様—チャーミングな可愛い子を紹介して下さって、感謝します。

C SKIN DIVING

四月十八日

スキン・ダイビング（アクアラング）に行。海岸に、車が十数台止まり、全身ゴム装束の男が三十人ばかりうろついているのは、ちよつとした壮観だ。

ゴムの帽子、ゴムのスーツ、ゴムのソックス、素肌にぴったり合ったゴムは、そのまま第二の皮膚を形成していると云っている。柔らかなゴムの感触。四月だというのに、厚さ5ミリのゴムに密閉された肌は汗をかく。皮膚の呼吸は防げられるから、心臓が強くないと絶えられない。

ナイフを右足に結び、足ヒレをつけ、ウェイトベルトを締め、酸素ボンベを背おい、マスクをし、シユークルを口にくわえ、水中銃を持って海中に潜水するスキン・ダイビングは、豪快なスポーツだ。

海岸に群がるゴムの男たちを見ていたら、津田亜紀子さんや、梅川幸子さん、雨奇男夫妻たち、ゴムの好きな方々のことをふと思ひ出した。

昼中、外で、他人の見ている前で、裸身の上じかにゴムを着られるスキン・ダイビングは、ゴムの好きな人々にとって、すばらしいスポーツではないか。強烈な太陽の下であくまで健康で明かるい。若々しい。

厚さ5ミリのゴムスーツ（ツープース）二万円ぐらいで仕立てられるから、家庭着にでもどうぞ。

サザエを焼く。

熱海伊豆山に寄り、温泉に入り、酒席をもうけ、帰宅。

ホテルの女中が全身ゴム装束の男を、何か珍らしい動物が歩いているように見ていた。

D ゴムバンドの女性たち

三十九年度の読者通信を読んでいたら、ゴムバンドの好きな女性の通信があったので、興味深く拝見、一人で喜んでゐるのも、もったいないから紹介しましょう。

(1) 岡田京子さん（相生市）

三十九年一月号読者通信に

「貴女の使用巾又は使い古されたバンドは、経血のついたままで私にとりましてはダイヤモンドにまさる宝物の様に思います」という。

「もう十年の前からの生理バンドの魔力に魅せられているものです」

——氏の手紙がある。

「貴女の使い古されたものは洗濯なさらないで汚れたまま、又綿花も一緒につけて御持参下さい」

と強烈なのはいいけど

「お暇でしたら貴女の目の前で、そのバンドについた汚れを清めさせて下さい」

そんなことができるつもりなのかしら。

「私が今迄に手に入れたものは全部新品ばかりで、使用中又は使用後のものは一つありません」

というなさない十年選

手がさ。勇気があるなら、

直接その時にキスすればいいじゃない。普通のSEX

ですよ。どこにキスするっ

て？ そこまで書かなきゃだめなの。

ところで、彼をこんなに

興奮させた女性の通信は、

三十八年十二月号にあった。

「学生時代に使っていたも



のをあわせますともう十枚以上になると思

ます。捨てるのも忘れて、いたんでいたり、

少し汚れていたりしたまま、大事にしまっ

ているのです。もしバンドに興味をおもちの男

性が近くにいらっしゃるようでしたら、おゆ

ずりしてもいいと思っています」

泣けてくるなあ、この言葉。俺もほしい。

「生理バンドに興味をおもちの男の人が多い

のに、おどろいています」

そうでしょうそうですね。理解して下さい

い。男は女性の神秘的なものに弱いのです。

「ゴムのむきだしになっているものや、前開きのもの、パンティ型のものなど五枚を交互に使っています。私の好きなのは、前開きになっているもので、今でも気がむいたら下着のかわりにすることもございます」

二十才のBG。嗚呼。

(2) 吉川太紀子さん(大阪)

大西良子さんあて読者通信、三十九年二月

号。

「日常パンティやショーツをはいているより、バンドを着用している方がはるかに多いのです。一週間のうち五日までバンドを着用しています」

とあり

「お休みの外出にはいつも大人用のゴムオムツカバーをタイトの下に着けて出ますが、やはりスカートの下でゴムがキュキュと音を立てるのは気がかりです」

実感があるなあ。しかしタイトとオムツカバーの取り合わせは露出的な人に多いね。

「此の間思い切って女学校時代のクラスメイト二人で遊びに出ましたが、お友達にはその様な音は聞こえないらしく、私のタイトの下にオムツカバーが着用しているなど夢にも知らない様子で、いつもの通りその日一日楽しく何のこともなく無事終ってしまいました」

以上実験報告でした。

「一度お逢いして、もちろんゴムカバーを二人共着用して、心ゆくまでゴムカバーについて語り合えたらと思います」

大西良子さんの最近の通信は四十年二月号にある。続いていますねゴムマニヤぶりが。

「レインブーツの下にソックスの代りにゴム氷のうを足にはいて街を歩きました」

「汗で、ぬめぬめすべって歩きにくいのですが、すばらしい感覚のゴムタッチを味合えました」

元気よく街を歩きましょう。明かるくて健康でこんなすばらしいことはない。

「氷のうの風船を十五個作り、それぞれひもで継いでおきます。夜床に入るとき此の風船マットの上で私は休むのです」

さて、

「神戸三宮駅そごうデパート四階ベビー用品に行きましたら、一時品切れだった大人用ゴ

ム製おしめカバーが又発売になって居りました」

よし。ゴムのおしめカバーの好きな方のために。

「今度の品は五百円で色は黄色総ゴム製で布は全然つかってありません」

そうです。大西良子さん、早速穿いた。

「御希望のお方には、ゴムカバーを差し上げたく思うのですが……」

生きているってことは、すばらしいことだな。そう思わない。

読者通信は、それが現実であるが故に、いつ読んでも面白い。

E 純文学における性

「世界的な禁書として有名なこのすぐれた性文学の古典は、昨年英米両国で夷々たる論争裁判の結果、二百年間の禁をとかれた。ここに名訳を得て本邦初公開なる」

という宣伝文にひかれて、文芸五月号を買ってしまった。ジョン・クリーランドの「フアニーヒル」で訳は吉田健一。

ところが同号の近藤啓太郎の「陰の色彩」のほうが性指定がより最高に露骨なんじゃないの。綺麗ごとの名訳より、現代の日本文学

のほうが進歩的？らしい。ホントカネ。ところで、これが「純文学」だから、表現が露骨になっても許されるので、「文芸」の活字は「奇ク」より数倍発禁になる可能性が多いのである。

同号の河野多寿子の「男友達」や近啓さんの作文が純文学と称するものかどうかは判断がつかねるけれど、一応ソウイウコトになっているらしい。肩書きには誰でも弱い。

性をあつかっても、その主題で、純文学になるか、通俗エロ小説になるか、どちらかになっちゃう。奇ク作家の中にも、この文学コンプレックスを持っている人がいるんじゃないのかしら。

小説は書いても、文学にならない人が多いから、くだらねえ心配をしよう。最も、文学なくてくだらねえと思うホホエマシイ人は別だけど。小説が上手なことで、文学の主題を理解することは違うから、錯覚を起こさないほうがいい、と私は思っている。

私は、いつも宣伝している様に、女性の神酒が何より好きだから、神酒をあつかった純文学の作家はいないかと気になっちゃう。別に気にしたって仕方ないのだけど、神酒もSEXなのだから、当然性の問題としてとり

あつかわれていいと思っているからである。

ヘンリー・ミラーの「ネクサス」集英社世界文学全集6河野一郎訳に

「きみだよ（妻のモーナのこと）きみがぼくに許しを持ってきてくれたんだ。ぼくに小便をかけてくれないか？ 祝福のかわりだ。ああぼくは、どんな夢遊病者だったことだろう」

とあるけれど、これでは物足りない。

大江健三郎の「個人的な体験」新潮社版読売文学賞受賞作品に

「鳥（ニックネーム）は指か唇か舌で、火見子（鳥の大字の同内を）の欲望をなしくずしに解消させることを考えた。しかし昨夜すでに、火見子（現在は末亡人）はそれをオナニイみたいで厭だといったのだった。いまそれを申し出て、おな言葉で拒否されたとしたら、おれたちはおたがい手ひどく軽蔑しあった気分になるんだろう。不意に鳥（現在は結婚している。一男有り）は、もし火見子がサデイクな趣味をもった女なら、なんとかうまくゆくだろうに、と考えた。すべての災厄が湧き出てきた、あの穴ぼこと関わらなくていいなら、おれはどんなことだってしよう。殴りつけられ蹴られ踏んづけられても、おれ

は穏やかに忍耐するだろうし、彼女の尿を飲むことだってためらわないだろう。鳥はかれの生涯ではじめてマゾイステイクな自分を見出した」

この場合、火見子の尿イコオール、マゾイステイクな鳥という観念であつかわれているわけだから、まあまあですね。これでも物足りないけれど、こういうことを書く作家は外にそうはいないから稀少価値がある。

「ネクサス」では「小便」という訳がぴったりだし、ここでは「尿」が文章としてもいい。作品を一読すると自然にそう感じるから不思議だ。あとで神酒などということはない。

「作家には誰にも書かれざる一章というものがある。それを宇能鴻一郎は敢えて書いた」という宣伝文の「密戯」新潮社版に、やはり妻の尿を飲むくだりがある。大江健三郎も宇能鴻一郎も、そして近藤啓太郎も芥川賞作家であることをお忘れなく。

「密戯」は妻と夫と男という、女一対男二（複数）という小説だから、読んでごらん下さい。純文学だから、電車の中でも読めますよ。露骨な箇所がかなりあるけれど、紹介してもカッジョされますからやめておきます。

「窒息しそうになって身を起し（夫が）辛うじて息をつく、目を閉じたまま身じろぎもせず横たわり、どこか菩薩像に似通っても見える蘭子（妻）に、そのままの姿勢で排尿し若者（蘭子を強姦した）の残滓をすべて洗い流すことを要求したのである。物理的にはそれで洗滌の目的が達せられぬことは十分承知していたのであるが、心理的には有効なはずの行為であり、しかもこの場で排尿を促すために、それ以上の適切な口実がなかったのである。勿論、彼の要求が本当にこの目的から発していたものであるかどうかは疑わしい。そのときまでに自覚していた彼の、これが一つの性的傾向なのであるが、それまでも浴室での愛の行為のときは、きまって蘭子に同じことを要求したのであるから」

とあり

「ここからあとは、はつきりと快楽であった。清浄な熱い液体を面に注がれ、傷ついた蛇のようにのたうちながら、彼は滝に打たれて悟入の瞬間にある白衣の行者さながらの霊肉の一致した絶頂感に浸っていた。といえは滑稽に響くかも知れぬ。しかし、汚辱の底のこの快楽に、いままでは全く感じたことなかった崇高さを伴っていたのは事実である。

……さつきから彼の肉は、戦慄しつつ痛いほどタイルに押しつけられていたが、このとき耐えきれずに脈うちはじめ、抑えに抑えていたものを、限りなく吐きだしつつけるのであった」

ヘンリーミラーといい、大江健三郎といい宇能鴻一郎といい、息を吐くひまもない文章だから読んでいると死にたくなってしまふ。読者にこれほど不親切な作家もいない。体力と精力の強い奴にはかなわない。

婦人公論五月号の書評に、

「性の快感をより完璧にたかめようと試みた二人の男女が、性の底知れぬおそろしさのため破滅する過程を描く」

とあったけれど、「破滅」しては何もならないし、主題としても破滅スタイルは書きたくない。興味も無い。

性はいくまで明かるく健康で前進的でなければ、性を書く意味は無いと思う。

まあ、こんなことはどうでもいい。

「灯りを消し、羽前鶴岡の絵蠟燭を、蘭子を燭台代りにして点したこともある」

とか

「サンルウムの張出台に如来のように結跏趺坐させ、黒縮緬の兵児帯を褌に締めさせてそ

の前に拝跪してみたこともある」

とか

「可愛い蘭子……いつものように、ぼくの額に足をあてておくれ。そして、軽く小突いておくれ。踊りの練習のように。……君の柔かい、いい匂いの、ひんやりする足の指で」

とか、部分的に興味をひくところがある。

宇能さん、大部研究しているね。

純文学で許される描写も「奇ク」では許されないことは、悲しむべき現実であるけれど「文学性」はやはり認識しないといつまでもたってもヒカゲのハナで、退化しても生長はないという最低のことになってしまふのを、私は怖れるのである。

F 六月号への返書

葉山啓様

六月号「三枚と二分の一」拝見しました。

どうぞ「悪魔の酒」でもなんでも、プライベート・フィルムにして下さって結構です。ただし、貴婦人の神酒を拝受するシーンだけは主役をおしのけて、私が代役致しますから、その時は呼んで下さい。私は残念なことに、シナリオは書いたことがありません。そのうち勉強してみますから、よろしく御指導下さい。

い。

福田久文様

六月号読者通信拝見しました。御丁寧なお手紙に恐縮しております。「SEXの考え方に就いて」は悪意で引用したわけではありませんから、よろしく御了承下さって、お許し下さいますように。私の本棚は、宝石のはいっていない宝石箱と、海に持っていってたら鳴らなかった二石のトランジスタラジオと、おトイレの水の音がついているピンクムードショウというレコードと、我が愛する学習国語辞書だけで、不勉強なこと我ながらアキレテいる状態なのです。ショーペンハウエルの「意志と表象としての世界」はさっそくさがして読んでみます。有難う御座居ました。

橘行司子様

六月号「SM時評」拝見しました。「神秘

物聖崇」の名訳にニコニコしています。「我等奇クを愛す」の引用の部分は、書いた本人がわからないのですから、読んだ人はゼンゼンわからないのではないかと思います。スマセン。好意をいだと毒舌を吐きたくなるという奇妙な癖があるので、奇クの作家と作品をあげてコキオロスと胸がすつとすると常に思っているのですが、なんせ気の弱い私の

ことですから、ああいう遠まわしな表現にな
ってしまつて書いた本人もわからなくなつて
しまったのです。悪しからず御了承下さい。

羽村京子夫人（羽鳥水江夫人じやピンとこ
ない、失礼）

六月号「思いつくままに」拝見しました。

やっと「贗作妖花」を読んで下さったことが
わかつてほつとしてるところです。高校の
頃のクラス誌に、妊娠した婦人に対する憧憬

を書いたことがありますから、その神秘性は
生物学上のみならず、美的感覚に当惑してい
るのが本音です。しかし、残念なことに「あ
なたの子供よ」と云われたことはありませんが
まだ子供を持った経験がないので、十カ月間
の楽しみを味わったことはありません。これ
から先も子孫は残さない方針ですので、どな
たかの御好意で拝見させていただく外はあり
ません。それはともかく「贗作妖花」を書い

◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▼

▽内 容△

- 一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌に
ふさわしい内容の力作をお待ちします。
- 一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮する
ため、後世に残しておきたい文献的価値の
ある資料は、長短に拘らず歓迎します。
- 一、SMの他、フェテツシユ、切腹、女斗
美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場
した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新
分野の開拓を大いに期待します。
- 一、形式は創作、小説などのフィクシヨ
ンも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は
告白も大いに結構です。更に論説、意見、
感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効
果を発揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出し
たいと思っております。

▽規 定△

- 一、作品はすべて未発表の自作品に限りま
す。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は一切御自由です。
- 一、締切日は別に定めません。優秀なる作
品は、最近号に掲載いたします。
- 一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料
をお支払い致します。
- 一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎
に十円）にてお願い致します。
- 以上の内容規定にて、奮て御応募下さ
らんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▼

たのは、私が羽村京子夫人のファンであるた
めです。勝手に贗作してしまったことをお許
し下さい。これから先の御活躍をお待ちしま
す。欲を云えば、私信をいただけるとうれし
いのですが。

黒淵賀集子夫人

六月号「無題」久し振りに名文に会って、
一息に読ませていただきました。とても参考
になりました。「奇ク的飲物」なんて最高の
表現でうれしくなります。それはともかく、
御主人の嬰一氏の作品「SMより見た世界史
シリーズ」は力作で、その筆力、体力には感
服しております。私にはとても書けません。
「拙劣な作品」などと、とんでもないこと
で御主人に対して失礼な言葉だと思ひます。
「神経質」なのは、それだけ御自分の作品を
大切になさっているからでしょう。結構なこ
とです。私みたいに、勝手なことばかり書い
ていては、奇クの品位も落ちますので、世界
史シリーズのような価値ある作品は、是非続
けていただきたいと思います。表に現われた
反応は無くても意外なところにファンがいる
ものです。もう少し「図う図うしくなれ」と
御主人にお伝え下さい。力作をお待ちしてい
ます。書くことってすばらしいことですよ。
自分を表現することができるのは最高です。

私の S M 路線

保藤久人

大谷勢津子

毛利園子

両嬢に捧げる

図らずも同一誌上で二人の女性の稀に見る希求の文章を拝見し、奇クの今後の充足を約束されたかの様な……その可能性に感激し、両嬢に敬意を表しつつペンを執りました。

○

モデル募集は従来から続いているので、今までに数々の応募の手紙が編集部に届いていると思うが、此の度、両嬢の志願文を発表されたのは、それ程、お二人のものが傑出していたのではないかと察しられる。

凡そ S M を論じる者の総て、いや、S M に興味のない男性でも、お二人のあの文章を読んだならば、妖しく胸を躍らせるのではないだろうか。その様な、男の夢を誘う様なムードが、あの短文の中に盛込まれていた——。

◇

大谷勢津子嬢の志望文を読んだ人は、その

人の好みは S であろうと M であろうと、ギュッと胸を締めつけられる様な激烈な反応を受けた筈である。彼女の文章を写し書くのは、重複になるが要約すると ①本格的な猿轡と胸部緊縛 ②逆エビ吊りと乳房圧迫 ③乳首クリップ責め ④同じく強烈なもの ⑤乳首縛り。と五項目ある。

①はほんの初期的なものだということが出来るが、先ず緊縛感を得る為には欠くことの出来ぬものである。(女性が胸——乳房の上——を締められることは、最も確実に、適確……そして痛切に緊縛感を味わい得ることが出来る。と私は思っている) 大谷嬢は乳首を残して……と仰言る。その為には尚更強固な縄目を乳房に掛けねばならない。圧迫は激しく文字通り胸を締めつけてくる筈である。②は苦しい姿勢であろう。自分の体重の殆ど

が豊かな胸にのりかかって来る。そして、③と④と——。

何時だったか(白表紙時代の別冊だと思うが、そういう姿で責められている場面があり、巧みな挿絵があった様に思うが……不確か)それを見乍ら、痛々しいが又何という素敵な乳飾りなのだろうと目を瞞ったものである。その物語りの女性は後手に縛られて前屈みに歩いていった。左右の乳首に別々に重たそうな分銅をぶらさげ乍ら……。大谷嬢の希望通りにすれば、その場面を真新しく再現することになる。更に⑤に到っては——。

それを書くだけで気持が上つて来る。(陳腐な、月並な表現だがゾクゾクするといふのは、こんなのだと思う) 男性なら、必ず一度はそういう人すがた・かたち V を心の中描がくのではないだろうか。大谷勢津子嬢の求めている最終的な姿態は、男の奥底の心を揺り動かす程の強大な磁力を秘めていて、其処には男の夢が充滿している様な気がするのである。

○

御病中だと訊く辻村さんは、大谷嬢からの申出をお断りになって、今、後悔なさっていることでしょうか。が、熱心な辻村さんのことだから、自分の身体が許す限り、近い日に、きつと実現するに違いない。

その瞬間を、辻村さんと成り替り度いと希

うのは私だけではないと思う。

大谷さん！ 希望を捨てないで——。辻村さん！ 私共を代表して立派なものを——。

私は、この様に、お二人にお願いしたい。

二十才だという色白で美しい毛利園子嬢。

私は先ず、マスコットのなお嬢さんか可愛い妖精を想像したものだ、仲々どうして、一六一センチ、五三キロというから立派な身体である。そして彼女の文章の中には、偽ることのない赤裸な願望が迸り出ている。

自己愛（ナルチズム）から更に発展して露出欲に到る道程、心理の変化は、一つの強烈な個性を持つ美少女の成長を、克明に、そして鮮烈に描き出している。私は読者の中にこの様な卒直な表現をされる女性が存在するのを知って驚くと共に、限らない喜びを感じたものである。併し、残念乍ら毛利嬢の願望の総てを絵にすることはむづかしい。

《思春期の生長》といい《生理時の変化》更に《苦痛に対する内臓的推移》。これらの実測は大病院に於ても不可能であろう。今、彼女に可能なことは、レンズの前に裸身をさらし、そのフォトを大勢のファンの目に提供することだけであるが、それでも、ささやか乍ら悦びがあると思う。

毛利嬢の末尾の空想的実験材料のあたりは特に激しく私の心を騒がせ誘発させる。導尿

という言葉は私にとって刺戟的である。少し前に、私の拙文（異常体験）が採用されたところがあるが、それがその姿であった。もう二十数年前であるが、思えば、私がSMに関心を持ち出した原因は、その時の出来事である様に思う。毛利嬢の《採尿》という文章を読んだ時、当時のその少女《珠江》が再現したかの様な錯覚に襲われ、暫くはボウとした儘、想い出にふけたものである。《珠江》は私に見せて呉れなかった。終いには強制によって見ることは出来たが（但し私も共に……そして私の……）その頃の感情はまだ幼なかつた筈である。——今は違う！

○

毛利嬢は美しい方らしい。自らを信じ、自己に陶醉し、その《美》の総ての鑑賞を、他の人にも分ち与え度いと仰言る彼女の心は、きつと清々しいものだと思う。そして、彼女の麗軀を目前にしたいという気持は読者の総てにあると思う。併し、私は彼女も又、辻村さんにお委せしたい。但し絵に出来る部分だけで、それ以外の内緒の部分は辻村さんと芳野さん——。芳野さんなら私の代理をして呉れる様な気がする……。

先頃私は、SMについて勝手な文を編集部に書き送った（没になると思うが——）人間的なという私のそれを森厳な《S》と《M》に程遠く、安易な、甘ったれたものとして否定的な方も多いと思う。SMを弄ぶものとしてお叱りを受けるかも知れない。併し、現実の社会に生きている人間として、最も理想的なものだと今も尚信じている。

よく誌上で「私はSが何%でMが何%」と仰言っている方がいるが、私はその言葉を偽りのない真実だと思うし、こういう方こそ本当のSM主義者だと思う。私自身の中にもそういう部分が介在している様である。

確かに、大谷嬢に対しての気持はS的である。ヌード派（姿態美という意味で）なのでFでもあるのだろう。毛利嬢に対するとSとMとFが入り混々ってくる。本質的なものを、と探ぐればMの要素が多分にあり、強いていうなら《セツメ派》（通常のSEXでなくSM的な）とでもいうのかも知れない。MをFに転嫁し、それを求めるのに急な場合、S的な結果になる様に思える。人の心の中にあるSMとは、こんなものではないかと思ってい

（四〇、四、二五）

△編集部注△

毛利園子さんの写真が編集部に届いていますが、撮影の機会があれば、分譲品に加えられると思います。

〔映画通信〕

藤村 正夫

異色映画紹介

OPチェーン 「変態」と「異常者」

三月下旬よりOPチェーンと銘打って、いよいよ本格的なエロ物専門の独立館が誕生。ゆくゆくは五社の牙城に迫ろうという意気込みが、明らかに感じられます。

第一弾が「変態」と「裸女の渦巻」。第二弾が「死ぬ程抱いて」と「異常者」の二本立興行でしたが、私のこれから語ろうとするのは、「変態」と「異常者」の二本です。

まず、「変態」について、ストーリーからいいますと、一美人興信所記者とその助手がある会社の社長よりの依頼で娘の家出を捜査することになります。色々調査している中にヒロインの売買と女身売買の暴力団が背後にあることを知り、女の武器を利用して、その組織内に入り込み、警察の協力もあって最後には、暴力団全員逮捕という、まことに勇ま

しいお話です。しかも最後におまけまでついていて、本当のボスは依頼主だったというドンデン返しがあります。

見ていて、話のつながりに何かしっくりゆかないものがあり、やはりこういう作品は金をかけねばリアルな表現は難しいと痛感せられました。ストーリーは以上のような他愛もないものでしたが、画面の中に縛りのショットが沢山ありSFファンのためには、これがお目当てといっているでしょう。

まず第一は社長の娘（たしか大岡正代という女優）が暴力団に捕ってシュミーズ一枚にむかれ、後手に縛られて麻薬をうたれます。そしてボスの登場となり、密室で女は前手し、男はムチを持ち両者とも目かくしをして、追いつ追われつをやります。

女は悲鳴をあげながら不自由なシュミーズ一枚の姿で逃げまどい、男はムチをならしながら、それを追います。しかし、所詮は狭い部屋の中、とうとうつかまって全裸にされ、ムチ打たれます。全裸のところは勿論、影だけでムチは影を打つだけです。でも、女が半裸にされるところで、ちよっとだけですが、乳房をのぞかせます。

これはボスが自分の娘を打っていることになるのですが、彼が目かくしをする理由がふつています。今まで女に裏切られていたのもう顔も見たくないのだそうですが、こじつけがましく、二人の俳優が目かくしをしていた方が演技しやすいから、そうやったのでしよう。それに乾分達がボスの娘を知らないはずもなく、ここのところは筋としては、おかしいところです。しかし、闇の中のムチのひびきと娘の悲鳴はなかなかよく、サディスティックなシーンを展開しています。

次にはボスを裏切った女（榊田邦子という女優）が、その若いツバメと一緒に縛られ乾分達に拷問を受けます。男を壁の所に縛っておいて動けないようにし、その首に綱をまきつけ、女がその綱を短刀でおどされながら、引くのです。男は愛する女に段々に首をしめ

られて死んで行きます。この時、女は裸になりません。しかし、顔が男好きのする顔で、唇も形よくこの場面にぴったりでした。

次に美人記者（桜さゆりという女優、この映画のヒロインです）が組織にもぐり込んだのも束の間、見つかってしまい麻薬を持って来た中国人の好餌になります。椅子にガンジガラメに後手しぼり。洋服のままですが、その縛り方は、この映画の中においては、一番徹底していました。中国人が好色そうな目と笑いで、鳥の羽毛で女をくすぐります。女は一重瞼ですが、中々の美人でインテリ女のよな知性もありますから、責められる女としては、なお更効果があります。苦しみにあえぐ姿はとても良かったです。ただ洋服を着たままだったのはおかしく、あれだけ長時間やってサービスしてくれるのなら、胸だけでも見せてくれてもよかったと思いました。（女の体はあまり良くない模様）

最後はボスを裏切った女（榊田邦子）の強姦シーンです。これが、この映画の一番のヤマバなんでしょう。林の中に女を連れ込み乾分二人が着物を剥いで全裸にし、手足をおさえる中で、例の中国人が女を犯します。それを遠方でボスが覆面のまま見ています。

女の必死の抵抗と、男達が着物のオビを解き胸をグツとはだけて両の乳房を中国人に見せるシーンは、中々迫力があってよかったと思います。以上この映画に出て来た三人の女の縛りシーンですが、三人ともいずれも、それぞれに個性があって後が楽しみです。

もう一本の映画は「異常者」。

これは二組の夫婦がドライブ中、車のエンコで、近くの別荘に水をもらいに行きます。その中に異常な夫婦がいて、それに捕まってしまう、みんな殺されてしまいますが、異常な男も自分の飼犬に殺され、二組の夫婦の中、若い方の女が助かり、ボロボロにひきちぎれたシュミーズ一枚の姿で逃げて行くというストーリーです。しかし、これも編集に難があり、前の場面で右のシュミーズの紐をひきちぎったはずなのに、次の場面では、すぐ新しいのと着がえているという。その他、たくさんあるが、ここで書くのは徒らに煩雑になるので、やめておきます。

つなぎ間違いは、この映画への不信感ばかりでなく、画面までを汚してしまうのですから、注意してもらいたいものです。どんなに内容がつまらなくても、観客は話のツジツマさえあれば満足して帰って行くものです。裸

もいいですが、こういう映画の基本は守ってもらわねば、客も減って行くことでしょう。

能書はこのくらいにして、Sシーンを紹介しましょう。始めは中年の男を殺し、男一人女二人を椅子に縛っておきます。この縛りはただ椅子のまわりをぐるぐる紐をまわしたただけで、全然つまらぬものです。その間、異常男は、何だかわけのわからない面を書いていて、どうもうまくゆきません。狂った妻（宮明子という女優）が男に耳打ちして、こうしろあしろと教え込みます。若い女（松島洋子という女優、この女優は「日本拷問刑罰史」の最後の方で祇園の芸者に扮し遣手婆に竹竿で打たれたり半裸にむかれ、くくり猿にされた）を縛り、見ている前で、夫と他の女（水島英子という女優、一重の瞼と華奢な体で余り見えない）を交情させます。

異常男は猟銃を持ってニヤニヤわらっています。それに飽きた異常者は、今度は風呂場につれて行ってシュミーズ一枚にした女二人をお湯の中に顔を入れて拷問します。一人の女（水島英子）は窒息死してしまいます。もう一人の女（松島洋子）は気絶します。このとき濡れた下着の下に乳房が見え、乳首もはっきり分ります。

その中、若い男が逃げ出し、異常男はそれ
を追いかけて銃で射殺してしまいます。三人
殺され一人残った若い女は、下着のまま後手
に縛られ（縛り目が分らないのが、つまらな
い）転されます。それを見てまた、異常男は
絵を書き始めますが、どうも行きどまってし
まう。そこで女が耳打ち、今度は下着一枚で
縛られている女を、二階のベッドに連れてゆ
き、ベッドに念入りに括りつけます。（この

ときの後手しぼりは後手のナワ目もはっきり
撮れていて良かった）そしてその肌に犬の好
きな蜜とミルクをぬりたくります。犬はあの
ザラザラした舌で全身をなめまわします。女
の苦しそうにあえぐ表情のクローズアップ。
もちろんこのシーンは、本当には犬はなめて
いず、女一人の演技、女の下ぶくれの顔はマ
ゾ女を思わせ、中々圧巻でした。

すが、私が思うにまだまだこの種の映画の俳
優は演技が下手です。見ていていやになった
り、観客の失笑を買う場合が、しばしばあり
ました。

今度奇クのモデルさんでも使用して、映画
をつくってもらえないでしょうか。私も映画
を作ったことがあるので、そんな時は喜んで
手助けさせてもらおうのですが？ では、また
次の機会にお目にかかりましょう。



告白

「T」との

貴重な一夜

笹原桃子

私は今、自分のからだの奥底から湧きあが
って来るような欲びで、この文章を書いてい
ます。というより、書かずにはおれない気持
がペンを私にとらせたのかもしれない。そ

して、私自身、書くことによって、自分の素
足を男の方の目の前に投げだしたときのよう
な露出的な喜びさえ感じているのです。
こんな気持は今にはじまったことではなく

で、この前、奇クを読んでいた、思わず知ら
ずペンをとって編集部へお便りを書いてしま
ったのも、丁度これと同じ発作からでした。

レターペーパーへの走り書きで、もちろん
編集部の方が読んで下さるか、どうか、そん
なことを考えてみたこともなく、只、胸のか
たまりを解きほぐす手だてとして書いたので
す。それが、思いがけずTという読者の方と
プレイにまで発展しようとは、私としては夢
にも思ってみないことでした。

そのとき編集部へ出したお便りは、自分に
はMの性格があること、誰か異性の方にいじ
められてみたいこと。などを平常胸にいだい
ている空想を混えて書いたと思います。そし
て、いつとはなしに、自分が手紙を書いたと

いうことすら、忘れてしまっていたのです。

私はTと名乗る男の来訪を受けたのです。

彼は平凡な容姿の一見温和そうな紳士で、彼の話では町工場の工場主ということで、話しているうち、彼の自分の性癖に忠実な執念というものが感じとられ、私にプレイに応じる力を与えてくれました。平凡で善良そうな童顔の彼の眼鏡の奥に、時折りきらりと光る眼が、サジスチックなものを匂わせ、その眼の光に魅せられたのかもしれない。

「僕は徹底したゴムフェチなんだ。女がゴムの冷たい感触を嫌やがり、その中で身もだえする姿を見ると、自分のS傾向を自覚して、男の充実感をおぼえるんだ」

というのです。私は今までゴムに対して特に愛著を感じるなんていうことはありませんし、関心を持ったこともありませんでしたが、彼の話を聞いているうち、未知のものに対する或る種の期待を持つことは出来ました。

それから二日後、Tとのプレイを楽しむ日が来ました。緊張の余り朝から胸が高鳴り、口の中がからからに乾くようでした。それでも、いよいよ二人きりの部屋に落ち着くと気分もいくらか静まって来ました。眼のやり場に困って身体をかたくしていますと、何かい

たたまれなような気持ちになります。

その部屋には冷たいゴムのシートが一面に敷きつめられてあり、数々のゴムの製品、ゴムの合羽、レインコート、帽子、ゴムの地下足袋、ゴム紐、ゴムの管、エネマシリンジ、ゴムの棒、マスク、オムツカバー等々が私を責めるために待ちうけています。

Tは部屋の隅からポストンバッグを重そうに持って来て、「これで足りなきや、まだまだここにたくさんしまっているよ」といいます。その残忍そうな無慈悲な態度に、私は思わず身ぶるいし、ここについて来てしまったことに後悔を感じ、逃げ出したくなりました。そんな私の心の動きをまるで見通したように、「ホラ」と彼は私に一冊のアルバムを投げ与えるのでした。彼が何年もかかって集めたという、そのアルバムはゴムのレインコートで身をつつんだ女優さんの可愛いフोटから始まり、ゴムフェチシストのよだれの垂れそうな写真や切りぬきが、ぎっしりと埋まっています。

ゴム布で荷物のようにぐるぐる巻きにされ、ゴム紐できつくしばられた女、首だけ出しあるいはお尻だけを出し後はゴム布で包まれ、紙袋の中の人形のように口を結ばれても

がいている女。ゴムのももひき、ゴムの上衣に手袋まではめられ口にはゴムマリをくわえさせられ、ゴムの鉢巻をして犬のように四つん這いにされ背中の上の男の重みにたえている美女。ゴムの褌をきつくしめられ、鼻の先だけ一寸のぞく奇妙な頭巾をかぶせられ、首でしめたその紐を乳房の先にセロテープでとめられ両手両足を、それぞれ固定されているグラマー娘。

それらを見てみると、写真の男の持っているムチが今にも自分の肌に振り下されるようだから中が、ぞくぞくしました。

Tの指示で私もゴム長をはき手袋をはめ、レインコートに身をかため、ゴムくさい猿ぐつわをはめられました。そんな姿を彼はスタンドを近づけてながめながら「ウッフ」と興味悪く笑って眺めています。からだのしんまで凍るような冷たさと恥しさに身もだえしました。Tは素早く片手片足ずつをまるで荷物のようにくくってしまいました。ゴム紐の締め痛み、それにも増して耐えがたいのは、まるでひきがえるのように縛り上げられたみじめな自分の姿でした。

……………

(未完)

春曉夢奇譚

「艶麗切手」

牧 高志

文・画



何しろ長蛇の列である。列の先頭もしっぽも暗闇の中に消えてさっぱり見えない。

「大変なんですネ、一体、何を売り出すんですか？」

「さア、あつしにも、よく判らねえんですがね」

「何んでも家内の話によると前代未聞の切手を発売するんだって、専らの評判でさア」

「女の下着も一緒に売るんだという話も……」

「まさか洋品店の店じまいでもあるまいし、その切手とか何んとか仰言った切手って、一体全体、何んですか？」

「失礼ですが、あなたがた、何んにもご存知ないんですね。これは郵政省でも何んでもない、つまり、飛脚組合、いや、この江戸中の

東西南北八百八町にある飛脚組合が連合して、何んでも町内随一の美女を選び出し、モデルにしたのが、こんどの切手の図案だそうですよ。ただ普通の記念切手と違うところは、この切手を張って出すと独り者だと先方から嫁さんの口がかかるという幸運な切手、だから前の晩から列を作っているのは、大半がチヨンガァーですがナ——」

「成る程、世の中が進むと切手まで変って来

るもんだネ、驚き入りました。この分だと今に切手が人間様を売るようになりますね」

いろいろなことを云っているうちに、陽があたり出したと見えて、あたりがぼうつと明るくなって来た。行列は漸く動き出した。

「どうも皆さん、お先きに、やっと買いましたよ。これです。今回は五十円と百円の二種類だけです。一人十枚限りだそうです。やれやれ、くたびれました。はい、お先きに御免なさい。」

「そううしろから押さないで下さいよ。ゆっくり買えますよ。こうして趣味の切手を買うのも楽しいですよ。」

「どれどれ、何んだ、これですかい？ この踊っているのが五十円で打首が百円だって、まあいいや。どうせ趣味の切手週間なんだから、相手が女でさえあれば……」

「お姐さん、あんなこと、あの男の人が云ってるわ。モデルになった太物問屋のお糸ちゃんか聴いたら泣くわよ。だって一所懸命、云われた通りのポーズをしたんですって。本当は縄を取り出して……」

「皆まで云うんじやありません、悪趣味よ。今日はそんなえげつないこと口に出してはいけないことになりました。ですから、こんな



切手なんか見る人が見たら、早速没にして逆に訴ったえられますよ」

「だって、百円切手のお小夜ちゃんも後手にされたりして、ひき据えられた挙句に、ああでもこうでもないって散々なぶられて、お蔭げでよそゆきの訪問着を台なしにしたって云うじやありませんか。あたし達女性にとってはも口惜しくって……」

「まあまあ、そう怒らないで下さいよ。折角宵の口からならんで、気持よく買った記念切手じやありませんか。どうせ今の世の中は面白い事って、何んにもありませんよ。一事が万事、しやくに触ることばかりです。それよりか私達男性群は、こんなつまらない世の中に

在って、どうしてあなたがた女性群の美を見出すか、いや、美をひき出すかに苦勞してるんです。本当ですよ。笑わないで下さい。実は今回の切手の発売も、こんなところに意味があったんですよ。きものを着て貰ったのも、そのためなんです」

「一寸伺いますが、あなたはどなた？ もう誰もここには居ませんよ、記念切手ですって？ ご冗談を仰言らないで下さい。ここはプレイガイドですよ。踊りと芝居の切符ですからそれならあります。最初からそれを仰言ればよかったのに……。ですがもう残念ながら五十円席と百円席としかありません。勿論割引自由席なんですが時間一杯充分御覧になれます。踊りの方は泣くな小鳩という

お座敷物である女性哀史を舞踊化したものですが、入れ換って百円席の方は十八才未満の人には毒です。本当に首が飛ぶんですから、ご入場出来ません」

「もし、もし、そこなんですよ。切手がこのうるわしの美人切手が切符であろうと無かろうと、そんなことはどうだっていいじやありませんか。うちのカーチャンも云

ったんです。少しでも刺戟が欲して……。だから、ゆうべから徹夜で、この切手か切符を買いにわざわざかけつけたんです。御覧なさい。群衆がまた騒ぎ出しました。早くどんな無制限に発売しろって……」

「君はうまいことを云うじやないか。その通りだ。その変なことを云い出した男、毒だの入場出来ないのと抜かした男を、皆んなでここからつまみ出そうじやないか」

「本当に判っちゃいないんだナ。つまみ出さなくつたって、こっちの方から出てやるよ。出りやいいんだらう。出てやるとも、どうだい、これなら文句はねえだらう」

寒い、いやにぞっとする。

「あなた！ 大きな声で寝言なんぞ仰言ったりして——そんなにお布団から外へ転り出ちやお風邪をひきますわよ。買ってあげばよかったって、それ何んのお話？ 日曜日だから、いいようなものの、もう十時ですわよ」という訳。いや、失礼しました。

茶のみ話として聴き流して下さい。夢に出てきた絵を添えておきます。

では、お退屈さま。

(おしまひ)

……………

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 (八〇〇円)
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 1
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 2
大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てい)

全裸アキラ縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てほ)

六尺褌の変形姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るに)

磔 (はりつけ)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (くし)

月経帯のまま縛り、

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆす)

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川文代 略号 (らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号 (へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (ろも)

ふり乱す長髪の悶え

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (ろめ)

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号 (ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号 (ほむ)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (ちり)

写真の中に悶える

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (けよ)

写真に埋れた裸女

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (けお)

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号 (ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号 (ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円

栗本ミチ 略号 (ふな)

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号 (ふに)

前開き、ゴムオシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (しま)

前開き布製防水オシメカバー

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (しな)

全裸の切腹悦楽(1)

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸切腹悦楽(2)

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひと)

乳房しばり

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (うは)

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号 (うい)

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (もく)

椅子責めの果て

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (いす)

哀婉血紅切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号 (るな)

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (そう)

動感海老責地獄

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (とう)

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (いふ)

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号 (はす)

膨満正面縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野良子 略号 (へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号 (ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川文代 略号 (ちた)

オムツ着用フオート

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚啓子 略号 (むね)

バンド着用開股ポーズ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (つん)

マニヤ全裸緊縛フオート

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本ミチ 略号 (いな)

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」 三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」 三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」 三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」 三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」 三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」 三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」 四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」 四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」 三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」 三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」 四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」 四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」 三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」 三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊娠前裸縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「よみ」 四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「よみ」 四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「よみ」 三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」 三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「なく」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」 三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「ない」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」 三〇〇円
苦悶の裸身	大手札三枚一組 略号「なは」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」 三〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「くせ」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「くせ」 四〇〇円
全裸股間縛り	大手札三枚一組 略号「わあ」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「わあ」 三〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「せら」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「せら」 四〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「えり」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」 三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なき」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なき」 三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「なみ」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なみ」 三〇〇円
六尺禪縛り	大手札三枚一組 略号「おき」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「おき」 三〇〇円
吊り責め	大手札三枚一組 略号「ろは」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ろは」 三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つき」 二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」 三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」 三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」 四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」 四〇〇円
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」 五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」 五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」 二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」 二五〇円
激痛、逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」 四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「きん」 三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」 二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「こり」 二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「こく」 四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」 三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「もい」 三〇〇円
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」 二〇〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「もろ」 二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「もた」 四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」 四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「むち」 四〇〇円

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」

愛川 悦子 略号「ねい」

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

水本 茂美 略号「えひ」

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

水本 茂美 略号「みす」

バンド開股

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はこ」

バンド責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「はん」

夫人の表情

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

関谷富佐子 略号「せや」

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うら」

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うり」

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 略号「五〇〇円」

東浦ひかる 略号「うる」

吊り打ち

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

関谷富佐子 略号「やり」

股間縛法悦境

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

絹川 文代 略号「ぬこ」

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

絹川 文代 略号「りこ」

責め衣

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

大塚 啓子 略号「せめ」

猪 吊り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

梨花悠紀子 略号「いの」

足挙開股責

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

梨花悠紀子 略号「あけ」

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚 啓子 略号「むら」

○フエチ資料の部○

白晒六尺襷

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「しは」

白晒六尺襷

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「しろ」

黒 襷の女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「くま」

黒 襷の女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「くう」

相撲襷を締め込む

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

遠藤百合子 略号「すい」

変形六尺襷

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

細川アヤ子 略号「ふい」

六尺襷開股

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

細川アヤ子 略号「ふは」

六尺フンドシ

大手札五枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「ろい」

六尺襷の女性像

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

関谷富佐子 略号「くろ」

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚 啓子 略号「いろ」

ゴムフエチ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

梨花悠紀子 略号「こま」

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「ゆお」

月経帯縛り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

遠藤百合子 略号「ゆす」

相撲襷着用

大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」

大塚 啓子 略号「すま」

股に喰い込む黒フンドシ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「とし」

股を開いた黒フンドシ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「とひ」

バンド晒し

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はと」

バンド足挙げ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はそ」

バンド見せ

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「はぬ」

白フンドシ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚 啓子 略号「ふん」

黒フンドシ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

大塚 啓子 略号「くふ」

ゴムぐるみ人形

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こみ」

ゴム包みの束縛

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こは」

ゴムと女体アップ

大手札四枚一組 略号「四〇〇円」

東浦ひかる 略号「こあ」

パリスバンド前開き

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おい」

パリスバンド縛り

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おは」

携帯用白バンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おか」

サカエ軽便型バンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おた」

パリスSSバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おこ」

パピアバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おし」

サカエバンド

大手札三枚一組 略号「三〇〇円」

東浦ひかる 略号「おえ」



読者通信文について——。読者通信の中に連絡場所を記載したものの（例えば駅のホームとか或は局留とか）は種々の支障を生ずる恐れがあり又読者通信の存在理由に誤解を招く恐れが多分にありますので、今月号からは、そういった通信は没にするか、或はその個所を削除することを、一つの試みとして実施してみました。今後読者通信をお寄せ下さる際は、その点御留意下さるよう、お願い致します。本誌読者通信の目的は、特定

の読者個人間の文通交際の斡旋機関ではなく、あくまでも誌上を通じた意志交換の共通の広場を提供することにありますので御諒解願います。（読者係）

毛利園子様。貴女の告白を拝読し強く心をひかれました。男女の相違やSMの違いはありますが、思春期からの心の変遷、生長の過程が余りにも酷似していることにびっくりしました。家庭環境や学校時代のこともよく似ているのです。貴女が述べて居られる色々の実験的空想もそれに類した興味は私も持ち、医学書などを漁ってみたこともあります。これまで然る可き女性にめぐり遇えず独り空想をめぐらすだけで飽き足りぬ日々を過して来ましたが、貴女の手記を拝見して矢も盾も堪らず筆をとった次第です。写真の心得もありますし、一度お会いして色々お話をしたりプレイも出来たらと思っ

て居ります。是非お便りを下さい。私は大阪市内に勤務する大学卒のサラリーマンで良識を具えた紳士と自負しています。年齢は三十九才で貴女とは可成り開いていますが、それだけに却ってお互に気がおけず、万事スムーズ

に行くのではないでしようか。妻もあり年令的にも無分別なことは神かけてありませんし、秘密も厳守致しますから絶対御安心下さい。長い間の夢を貴女によってどうか実現して下さいよう切にお願い致します。日曜日ならば私も都合です。お便りをお待ちして居ります。（大阪市八伊達三郎）

志村善子君。辻村氏の緊縛記事面白く拝読致しました。私は常々思う事ですが、奇巧は現在風俗誌として発足以来歴史も古くSM誌としても広く知られて居り、応募するモデルも総て、Mと思われるます。読者としてはモデルと云うよりM用鑑賞女性と云った方が適切でありますが折角の好材料に恵まれながら今迄のグラビヤ写真の中には大した事もないのが見受けられました。たが之れは雑誌社が読者を喜ばす様もつと之等の被写体を訓練する必要があると思われま

す。私は貴女に通信をする気になりましたのは住所が神戸と云う以外「しなやかな女獣」と云う題名です。私が今迄緊縛した女性達にはMは一名もおられません、貴女の写真よりはもっと強烈で且つしなやかでありました。後記に述べるのは私がM嬢に行った緊縛訓練の一部ですが、若し之れを読んで気が向けば五月三十日又は六月六日午後三時より五時迄の間新開地三角公園ロマン座最後部西寄の席かその後に立って居て下さい。服装はノースリーブ、襟なし背割の白ブラウスに右腕（肘と肩の間）に腕輪をして手袋は黒レースをして下さい。この服装であればすぐ判ると思いますし、ロマン座は割に空いて居る映画館ですから、気軽に入って居れると思われま

す。私は表紙のない週刊誌を丸めて右手に持って居ります。尚私は本年四十才になる（神戸市内に居住する技術家で、行動については紳士的に行うつもりです。私がM嬢に行った訓練とは緊縛に容易な様に又緊縛後の効果を一段とあげる為身体を柔軟にする事です。その寸法としては彼女は私と居る時は何時も腕を組む替りに手を高々と肩先迄振上げられ、その為腕の柔軟さは格別で、私の手を借りず容易に後から自分の両耳を握る事が出来ます。（勿論何時もと云っても人の通る所では出来ませんが）第二の方法としては海老責、逆海老責を始終行う事です。只彼女がMでない為殆んど海老責のみ

でしたが貴女であれば之れも四種類の海老責を考えられますが紙面の都合上割合させて貰います。尚

常に簡単ですが、若し気があればその際このつづきを話せると思います。(神戸市八田中恭一)

○

直ります。その他何時も服装は薄着とさせており、オーバーを着た冬には上半身はオーバーの下は裸で外出し、このオーバーすら時には取り除いたりして厳冬の緊縛に備えました。又彼女の身体は時と場所をかまわず私に何時も身体中所かまわず、つめられておりました。之れは声を出さない訓練でいくら責めても声を出さない様になりました。私は猿轡が好きで(但し口をおおう様なのは嫌いです)すが彼女を訓練する時半分は之をせず彼女が声を出さない様にしました。私が好んで使用する縄はナイロ綿の袋打になった細いもので非常に柔いが強く、緊縛方法は強く変って居るので両手は丁度椿の芯の様に濃緑になり腕は赤黒く変色しますが彼女は全然声に出しません。一番辛いのは縄を解いた時らしいです。以上が私の訓練の一部ですが、辻村氏の意見では貴女は非常にしなやかな身体であるらしく若し以上の様な訓練をうければ貴女の緊縛写真は奇ク読者にとって喜ばれる事と思われます。非

六月号拝見。発行部数やや増加との由、嬉しいかぎりです。グラビヤ廃止もそんなに気にやむことはないでしょう。拷問刑罰フォトもどしどしお願い致します。ただ処刑後の、死に切った死体を血紅やトリックを使ってあらわせないでしょうか。これが私の最も望むもののなのですが。本文の方は処刑マニヤにとっては、ちょっとさびしいものでした。『啓子散華』今月も休みですが、あまり派手に殺すのもナントカ法にふれるのでしようか。私が前に投稿したものは確かに露骨な部分が多すぎましたが、佐出須登ノートにはこのまま誰にも見せずに埋らすには惜しい殺し方があるので、現在稿をあらためて二つほど出品する予定です。文章がまずいためにうたしかたありませんが、この程度でもナントカ法のため没だというのなら、希望がもてなくなります。そう言えば前川氏の生首ものも最近見かけません。ところでこの東北の地に在る私の仲間は佐出氏去りしあと一人でしたが、今回一人新

加入があり、互に材料をもちよって楽しんでおります。映画女優などの目をつぶっている写真があれば、首の部分だけ切りぬいて、獄門台上の生首と化してみたり、そのポーズによってハリツケや絞首刑に出来るわけです。映画雑誌や週刊誌などに材料はいくらもありますから、皆様もためされたいらいかがですか。ニッコリしているものは、この点むきませんが、場合によっては目かくしをするだけで十分というのもあります。読者通信に三行広告に類するものは没とありましたが、その一二頁をさいて資料交換室を設ける案は如何でしょう。一般誌と異なるだけに大っぴらに名のりもあげにくいとは思いますが。現在私が所持している佐出ノートなども誰か御希望の方があつて、御自分の住所を局止でもよいですから誌上にのせてくれればおゆずりしてもよいのです。最も私はガメツイたちなので代償を要求するかもしれません。かく申す私も極めて小心の上、仕事の関係で住所不定のため、注文もすべて局止の上同志Xに頼む位です。から採用になりますかどうか。あまり自分勝手なことばかり書いていると、この一文まで没になりそ

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 略号 八〇〇円

女相撲投げ業

大手札八枚一組 略号 八〇〇円

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

相撲マワシ着用

略号 (すね)

略号 (すく)

うです。グラビヤ廃止も結構。見る雑誌より読む雑誌へは時代の逆行だとはとんでもない。イバラの道はむしろ誇りでしょう。奇くこそ世界最高の雑誌！(黒田寿)

「美四」楽しく拝見しましたので批判力の未熟な者ですが、私なりに感想を述べてみたいと思います。秀作は矢張り「古墳後手吊り責め」でしょう。吊り型も変型を使わず自然的で抵抗を感じさせませんし、大腿部の紐は緩みがちな下股を引締めており、縛り方も無駄がなく、十分にまとまっています。背景の古墳の石門によってこの写真が日本の古代社会に於ける

刑罰であるかのように錯覚させますがモデルが全裸であった方がより完全となったのではないでしょう。この点だけが少し残念に思います「野外晒責め」は期待していましたが、まったくの期待外れでした。人工的な庭園では放置されることによる恐怖感よりもむしろ縛られたと云う羞恥感をモデルの上に追求するべきだと思います。私は前とは反対に洋装、和装で残酷な程の連縛の方がより効果的ではなかったかと感じました。つまりぬぐ託を並べてすみません

でした。私も三年來の愛読者ですがプレーよりも緊縛美の創造に多分の興味を持っています。これについて色々意見交換したいと思っています。東浦ひかる様、よければ便りを下さいませんか。一度貴女をモデルにして奇く編集者の方々にまいらせるような写真をとってみたいと思っています。無理であっても努力はしてみましよう。(西宮八山田剛一)

芳野眉美様、御希望により私愛用の真紅のナイロン・パンティ三枚、本日確かに送り申しました。夫々メンスと、分泌物と、お小用とでひどく汚れております。ある程度わざと汚すのでなければ実際にはあれ程汚れるものではないと思いますが、どうでしょう。お気に召しましたか？ S的な手紙をとの事でしたが、こんなはしたない事をしてはまだ私も新婚のうちです。今では羞しくてとてもそんな物は書けません。だって娘時代にはSMと云う言葉すら知らなかった私ですもの、S的な言葉が日常夫に何の気兼ねもなく云える様になる迄お待ち下さらなくては無理と云うものです。奇くファンの中には、夫と同様に女性の汚れた

木村洋子 完全逆さ吊りフォト 分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

パンティをお望みの方々が沢山にいらっしやるのだから少しはお力にならなければと、夫が熱心に申しますものですから、私もついその気になって内心大いに期待していたのですが、お便りが貴方だけと知って何だかガッカリした様な気持ちであります。でも貴方だけは私の思った通りでした。穿き古してデンセンしかかった物なら他にも沢山御座居ましたが、貴方は「汚れ」だけが御希望の様なので新しい物ばかり選んで差上げました。夫に毎日洗濯させては愛用していたものです。大切にしなければいけませんよ。では御気嫌よう(東京都巣鴨八市川千鶴子)

愛読者の皆さん今日は。大変ご無沙汰しました。といって、私も毎月読んでいるというのではないのですが、変ったことが大好きなしょう分なので、テキストとして参考にしていく程度です。奴隷募集で手に入れた奴隷男は結局はろくなのはいませんでした。やはり

家の中の下働きは労働する意志の男ではないと勤まりません。女王様とか女御主人様だなんて甘えたことを言っている、とどのつまりは、自分が楽しみたいというさもない根性のなさけない男ばかりで、とても女王様に奉仕するなんて、大それた考えは持てそうにありません。ほんとうに女王様に身も心も捧げるといふ気持があるのなら、たとえ私が一週間や十日、言葉一つかけてやらなくたって、女王様に使育され、女王様のために働かせて頂いているということとで有難く思わなければならぬのに、いやいじめてほしいだのムチをほしいだの、足を舐めさせてほしいだの。それじゃ、まるで私の方がサービスしてやってみてたいじゃないの。私の女王様として奴隷を飼ったら、気が向かなければ一月でも働かせばなしで、顔も見せてやらないという主義なのよ。だから、採用した奴隷男は月一万円の手当をやっているのに皆逃げ去ってしまっただわ。今屋

〔最新版〕
女体責写真五十粒選

A組五十集
大手札判印画紙（9×13糎）焼付

A 4	A 3	A 2	A 1	五組一枚	十組十枚	二十組二十枚	三十組三十枚	四十組四十枚	五十組五十枚
全裸正面柱しぼり	ハリツケ猿ぐつわ	手吊り乳房責め	フミツケ汚辱縛り	一、	二、	三、	四、	五、	六、
(遠藤)	(新井)	(五月)	(新井)	一五〇円	九〇〇円	七〇〇円	五〇〇円	二〇〇円	四〇〇円

A 16	A 15	A 14	A 13	A 12	A 11	A 10	A 9	A 8	A 7	A 6	A 5
裸自慢縛りヌード	正面縛蛙股ひらき	色褌の開股しばり	うねる緊縛裸身	全裸正面強烈縛り	膨隆臀部さらし	全裸後手高手小手	鼻責鼻梁いたぶり	乳房責め股間縛り	豊満乳房いじめ	全裸手吊りムチ打	亀甲強烈乳房縛り
(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)

[illegible][illegible]

敷の庭掃除は、やはり前からのじ
いやにさせています。私は夜も晩
いし、外出勝ちだし、殆ど家にい
ません。そんな女王様でもいいん
だったら、私、変ったことって大
好きだから、奴隷男の三人や四人
いてもと思ったわけです。今は人
手不足ですしね。でも、私のとこ
ろへ来たマゾ男は、四人とも自分
勝手に、手当をもらいながらサー
ビスしてもらえるとといった虫のよ
い考えの者ばかりで大失敗でし
た。私の方では安い給料でマゾ男
をこき使ってやろうと思ったので
すが、これも甘い考えだったわけ

ですわね。でも、普通の給料を払うのだったら、何にも奴隷を募集しなくたっていいのですからね。この通信らんを利用させていたことですから、奴隷飼育報告書でも書かせていただきたかったです。こんな有様で私もがっかりでした。本当に真面目に働く奴隷があつたら、私は御主人様として使ってあげる気持は持っています。但しこき使うだけで、こちらからのサービスはしませんよ。それでもよければ、どうぞ。（兵

○ 庫県芦屋市八佐川奈津子）

東浦ひかる様。六月号で貴女のお便りを懐しく拝見しました。我々古いファンにとっては今までも写真や記事により貴女の様子を拝見していましたが手のとどかぬ高嶺の花の観がありました。しかし今度の通信欄での貴女のお呼びかけに接して非常に身近な親しみを覚えしました。しかも貴女の好まれる責めの傾向が私の日頃求めているそれと全く一致していることを知り心躍る思いが致します。私は未だ一度も緊縛や責めを行った経験がありませんので、むしろ貴女のようなベテランの方を相手にプ

レイをやらせて貰えれば却ってうまく行くのではないかと考えます。初めての人ではあがって下さい。そうな不安を感じるのです。私は今年四〇才で世に云う不惑の年に達しました。勿論既婚で子供もありますが、妻もこの道には全く関心がなく子供の手前もプレイなど到底不可能で常々悶々の思いで過して来ました。年令や家庭生活の経験から貴女とは共鳴し合える点もあるかと存じます。色々ともやま話を交し、貴女に当初は何かと教わり乍らプレイを行えたら、どんなに楽しいだろうと思ひ

ます。私は市内の会社に勤めるサラリーマンですが、充分思慮分別も持っている積りでお互いに生活を乱したり秘密をもらすようなことは絶対しない事はお誓い出来ま
す。(大阪八山崎英吉)

○

太田恵子様六月号読者通信の貴女のお便りを拝見して、私の喜びと興奮は筆舌に尽くし難い程、大きなものでした。日頃渴望し止まぬ婦人のお便りなので、早速拙い文筆で筆をとった次第です。女性の豊満なるヒップ、それは私にとって、深い神秘性をたたえた尽きせぬ魅惑の泉であり、狂信的なまでの崇拜と憧憬を持っております。そのシンプルな自然の造型、躍動を秘めたる美しさに、私はリビッドを凝集させた云々でも過言ではありません。重量感溢れるヒップを有する女性こそ絶体的権勢の女王であり、鞭打、緊縛、アヌス等の苛酷なる責め、命令に服する事を喜ぶ私は、その忠実なる下僕と云えましょう。恵子様、貴女が峻烈無比な女王として、君臨すればする程私は生きがいを感じるので。下僕として私を使って戴けるならば、本誌掲載の「翌月五日、午後六時三十分、東京駅名

店街アートコーヒー」にて、お待ちしております。レジ係に呼出しを頼むか、手にハンカチを持って入って来て下さい。私もテーブル上にハンカチを置いておきます。
(東京都中央区八田中哲文)

○

△東浦ひかる様△六月号にて貴女様の通信を拝見しました。グラビアの廃止によって次々と楽しませてくれたモデル嬢が消え去って行くことに寂しさを感じていたのですが久し振りに本誌に登場されて、旧知の友人に会ったような懐しさを感じました。恐らく本誌ではもうお目に掛かることもないでしょうが新しい分譲品等での活躍を期待しています。奇クを読みはじめて三年程になります。緊縛もプレーの経験はありません。以前女友達をいたずら半分に腕をねじって手首を縛ったことがあります。が、足がふるえ、呼吸困難な状態になり、本誌の小説や手記のようになり、その事を思い出したに今もって何とも形容しがたい気分になります。貴女も初めての時はどんな気持ちでしたか。恐らく無我夢中だったこととと思っています。がもし暇でもおありのようでしたら是非お便りを下さい。(西宮市

春川ナミオ画
分譲用秘蔵版

女体下敷力作M画決定版

大判印刷画紙鮮明焼付

七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

益々凄くなってきた春川ナミオの傑作M画

M派マニヤなら、先ずこの一組を!

- 一、女の股間で圧死する
- 二、行水の美女の尻敷き
- 三、見事な美女の臀部
- 四、人間ハンモックの男
- 五、人間椅子尻に喘ぐ
- 六、逆エビの背に蠟燭責
- 七、臀部に埋れた法悦境

△山代正友△

○

六月号拝見、この頃連載されている海野氏の娘相撲物語、特に今月のは面白く読みました。娘達が裸で相撲を取っていく心理と情景が生きて描かれていて感服しました。又挿絵もMUとしてあるのは海野美津男氏の作でしょうか。女相撲が本当に好きでなければ書けない絵だと思えます。取組んでいる表情やポーズなど実によく出来て居り貴重な作品だと思います。又余程相撲にくわしい方と思われるのは腕や足の運びなど、昔の鯨崎英明氏の相撲絵を女性にして現代版にした様で非の打ち所ない様に思われます。この娘相撲物語は毎号続けて頂き、挿絵も沢山見せて頂き度く存じます。尚女相撲分譲写真に就いては前便でも私の希望を申し上げましたが、更に、この娘相撲物語の挿絵を参考に数々のポーズを大塚啓子さん達によって見せて頂けたらと思います。例えば六月号の挿絵二人の女性が禪を引き合い腰を落して互いに相手を吊り上げ様と踏張っているポーズなど、そのまま大塚さん、山原さんなどで再現して頂いたらと思います。尚、前便で述べましたが、大塚・山原両女性の女相撲写真「めれ」「めよ」「めわ」繰返し見えますが、これだけ美しい女相撲写真は他にあまりないのではないでしょうか。それにつけて

も更に一層素晴らしい、大胆なポーズの分譲写真を見せて頂き度く切望する次第です。(東京八雪崎京人V)

大阪の東浦ひかる様。貴女のカムバック心より喜び致します。私は以前より貴女の大ファンで、フォトも少し持っております。貴女が暫らく誌上に姿をお見せにならないので、淋しく思っております。私は本年三十才のサラリーマンで一児の父親です。以前から貴女のような人とSMプレイがして

みたいと思っていました。妻がM傾向には程遠いので、余計にM女性に恋しかつたのです。私は十年位奇クを読んでおり、色々豊富な話題も知っています。しかし、女性緊縛の経験はありません。どうでしょう。東浦様、私と一度逢ってくれませんか、そしてプレイをしませんか。貴女を思い切りいじめたい、操り責め、羞恥責め、私は特に股間縛りに興味があり、貴女に素晴らしい股縄をかけてあげたい。このように思っております。私はあくまでも紳士的にプレイは

プレイとして、割り切っているつもりです。私の大好きな東浦様、私は紳士です。それだけは断言できます。(伊丹市八吉井幸男V)

奇ク編集部の皆様、いつも充実した楽しい誌面を読者の為に御苦労なさっていらっしゃる御努力を心から感謝致している一読者で御座居ます。つぎの一文を是非読者通信に御掲載下さいませ、世のM男性諸君、誰か私の奴隷希望者はいませんか。私は当年二十才のいくらか自分の容姿に自信ある女性

ですが、奇クを愛読するようになって自分の性格がS傾向である事に気づきました。奇ク読者の中には大変M性の奴隷用男子が多い様に見受けられますので、私も忠実な奴隷ボーイを二、三飼育実験してみようかと思いましたが、普段えらぶってる男共を膝下に組み伏せ思い切りムチ打ったらどんなに気持ちよい事でしょう、想像するだけでたのしくなります。どなたか志願者はいませんか。但し絶対忠実に一切の命令に服従出来る人でなくては駄目。又今迄に何回もプレ

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集

大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)
B 5	足の裏操り責め(竹野)
B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突立てエビ責め(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 24	強制鼻挾水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)
B 28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上的マゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	炎責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

イの経験ある人は御遠慮下さい。本当に心の底から忠誠が誓える人で死ぬ迄に只の一度でもよいからS女性に奉仕してみたいと願いつづけ、そのみに生きつづけてきた人。その様な哀れな男共に女王として優先的に、仁慈を以てテストする機会を与えて上げる。そしてその中から、誠実性もあり人格的にも社会的にも経済的にも安定した人で、私の為になら生命も財産もすべてを捧げれる人を二、三四月極め又は半年契約位で専属奴隷として採用して上げる。出頭命令を出したら即座に指示に従いホテル泊りも出来、雑費その他負担出来る人に限る。一度だけでもプレイを實際にして下さいと泣いて土下座出来るような男なら願ひをかなえてあげる。どんな残酷にでもソフトにでもお相手してやるし飼ひ馴しいじめぬいてみたい。勿論、ムチと神酒で誓約させる。私は五尺三寸、十三貫五百、横顔が嵯峨美智子に似てるそうです。では私の足で踏みつけられたい方はどうぞ（伊豆下田八小川雅代V）

○ ゴムマニヤの皆様、本誌発展の為、大いに投稿しましょう。小生以前よりカーキ色（国防色）ゴム

引バイク用雨合羽上下を探して居りますが中々見当りません。表地は何色にても構いませんが、裏がゴム引きのものを売っている店を御存じの方は誌上にてお教え下さい。全国どこでも結構です。お札に総ゴム大人田オシメカバー三着を差し上げます。ニシキゴムの茶、白、黄の新品です。（佐賀県多久市八吉沢春夫V）

○ 貴誌毎月本屋さんに姿を見せる日を楽しみにしておりました。しかし、ここ数カ月以前からはまったく姿を消してしまいました。それ故に入手が大変困難になりました。た。本社から直接注文して送ってもらえばよいのですが、私は仕事の関係上家をあける日が多くて家には殆ど居りません。そんなわけで古本屋で求めた十二月号が私にとっては一冊新しい号なのです。今度増刊された「花と蛇」特集号はどんなことをしても手に入れたい。どんな犠牲を払ってでも手に入れたい。編集部の皆様、私の勝手な願いを聞いて下さい。どうかお願いします。再発行は出来ませんか。高価になろうとかまいませんから、よろしく願ひします。（新潟県中頸城郡八新井順V）

傑作迫力Mフット

二人の女性からの責

山原清子嬢と他に一名の新人女性との組合せにより、ここに初めて二人の女性から責められるMフットを作成しました。サド役としてその迫真の熱のこもった演技でMファン待望の山原清子嬢が友を得てしまった。二人に責められた男性モデルは、今までの経験でこんな素晴らしい思い出はなかった。しかし二人の責められるという大きな負担だったと語っています。

男が屈伏するまで

ズベ公タイプ二人の若い女に縛られ、猿轡をかまされ、ムチ打たれ、踏みつけられ、完全に屈伏するに至るまでの連続場面を組写真にしたシリーズです。

臀の下に呻吟

二人の女性の暴虐の嵐はとどまるところを知らず、手足を押さえつけられて、仰向けに男の顔の上には、大きなお尻をデーンと据えられて、窒息寸前の連続写真。

二人になぶられる

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号（ふた）

刺青を見事に散らした逞ましい尻で咽喉を潰されて苦しむ男を冷やかに眺める女。足を舐めと強制される男を眺める女。股間を嗅がれ、二人の女になぶられつくす場面ばかりの点景フット

二女の股責地獄

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号（ふぬ）

山原清子嬢一人の股責めでも、その迫力に圧倒されたファンからの讚を浴びましたが、これは二人の女性による股責め、これは二人の素晴しさは筆舌に尽くし難いものがあります。

逆エビとムチ打

大手札印画紙焼付
十二枚一組 三〇〇〇円
略号（ふち）

二人の乱暴な女に狙われた男は後手に厳しく縛りあげられた上、逆エビに締めつけられ、ムチ打ちに激しいムチ打ちを加えられ、えつけられる。

○ 毎号、御誌を拝見致して居ります。四月号読者通信(二二六頁)に大阪八織田信氏Vの意見に賛同申上げます故、何卒貴社代理部に、取扱われていかがですか？相当注文があるものと考えられます。生ゴムバンド生ゴムカバーは只今では、なかなか入手困難ですからね。此の際ぜひ御協力下さって全国のマニヤの方々の為に努力されんことを望みます。尚、値段等、荷造のこともありますし、少々高くなっても品物さえ良心的なものでしたら、マニヤも喜ぶものと考えられます。実物写真を広告して下さい。(高知市八ゴムマニヤよりV)

○ 貴誌を読みはじめて四年になる青年です。昨年の十月号「編集部への注文」でP・Q生様が書かれておりました「フェチファン」の願いVを読みまして非常に感激いたしました。(男性が女性の下着をつけたところ、黒の運動用ブルマ、白ズロース、メンスバンドその他)またゴムのオシメカバーをはかされたり洩らしたりしている絵などは是非お願い致します。男がズロースを穿いているところは風

俗ビンランとかにひっかかるでしょう。どうか若い男性にゾクゾクする様な女らしい下着をつけさせて下さい。以上P・Q様の文中より抜き書きさせて戴きました。が、僕が思っていた事と余りにもびったりなので、びっくりしている所です。僕自身のことについて書きますと、両親が商売をしていて兄弟四人居ましたが、長男長女とも結婚しまして現在兄二人だけです。僕の女装趣味が先天的か環境によって芽生えたものか分かりませんが、近所でアパートを経営しております長兄の留守宅を狙ってゆき、美しい義姉(二十六才)の下着(パンティ、ブラジャー、ガーターベルト、クツ下、シュミーズ等)を着用し化粧したりしました。僕は今までSとMが六、四ぐらいの割合で好きだと思っていたのですが、最近ではM傾向の比重が重くなった様な気がしてきました。自分で夜晩くなってから縄を出してきてふとんの上に座って縛を楽しんだりしていましたが、思う様にゆかず、誰か縛ってくれたらなあと思っております。(同じ縛られるのでも中途半端ではなく貴社の諸先生が行われる様な本縄を望んでおります)長々と僕の

ムチで仕込む

大手札印画紙焼付
十枚一組 二五〇〇円
略号(ふよ)

ムチで脅かされた挙句、馬乗りになり跨って尻を叩かれた足の指に挟んだ布片を口に押し込まれ、頭を踏みつけられ、二人でさんざんになぶられムチで仕込まれる。

口中に水吐き

大手札印画紙焼付
九枚一組 二三〇〇円
略号(ふり)

二人の女にがっちりつかまえられる。口を上むけて開かせられ、吐かれた男は、うがいした水をかわるがわる吐かれて汚水処理器にさせられる。

顔面を玩弄

大手札印画紙焼付
八枚一組 二〇〇〇円
略号(ふわ)

二人の女に押さえ込まれた男の顔は浣腸器やいろんな小道具でほしのままに玩具にされる。

二人の馬になる

大手札印画紙焼付
七枚一組 一八〇〇円
略号(ふる)

豊満な女体二つを背中のにせてムチで追われながら、這いずりまわるM男のあわれな姿。

臀臭をかがさる

大手札印画紙焼付
六枚一組 一六〇〇円
略号(ふお)

ぐったりと仰向けにのびた男の顔の上に、芳香をかげとばかり据えられた巨大な女の尻が、でんと息もつがせぬ圧迫を続ける。

口中に汚片を

大手札印画紙焼付
六枚一組 一六〇〇円
略号(ふね)

女の口の中を使用した汚れた布が嫌がる男の口の中に無理矢理押し込まれる。あさましい場面さまたま。

縛り人形を踏む

大手札印画紙焼付
五枚一組 一四〇〇円
略号(ふつ)

ぐるぐると全身縛りつけられた男の顔をはじめ、顔から胸、腹部と二人の女の真白い足でさんざんに踏みつけられる。

顔面踏みつけ

大手札印画紙焼付
三枚一組 一〇〇〇円
略号(ふな)

二人の女の足で顔を踏みつけられ、足の指や足の裏を舐めさせられ、唯々諾々と応じているM男のあさましい生態。

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しせ)

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

五、愛人の手で介錯される娘 浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組

略号(のゆ)

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しき)

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンドラーの乱舞
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しえ)

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しい)

- 一、灌水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

内面を書いてきましたが、最後にお願いを書かせて戴きます。大変厚かましい事ですが、どうか僕を一度モデルとして貴誌のフェチフアンの願いを満足させるためにも使用して頂けないでしょうか。切にお願ひ致します。勿論モデル代等戴きません。吉報を待ち望んでおります。(神戸市葺合区八中川オサム)

○

奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。編集部の皆様方の御健斗感謝致して居ります。今後共益々御繁栄の事を祈ります。一度四月号の通信欄にのせて頂きました紀村浣良です。全国の浣腸同好の友の皆さん、よろしく今後共お願い致します。

ます。五月号の「旅の思い出」栗瀬長さんの記事は、我々に取りまして大変嬉しくいやー浣腸なんて——大変良い旅の思い出となりました事と申します。又四月号の「或る変身」の吉村英子さんの記事等、私も浣腸に多大の興味をもつて居ります。羽島水江さん(旧羽村京子さん)の記事待ち遠しく感じます。兵庫県の高砂浣好生様、ほんとうに私と同一趣味の方と思われます。文通したいものです。愛知の吉村英子様、川崎市の中村優子様、大阪富田林市の河村隆子様、同じく大阪市にお住いの山村幸子様等と誌上で文通お願い出来ますれば……と思つて居ります。勿論誠意を以って、ね。(和歌

山県八紀村浣良生)

○

貴誌の御発展心から御慶び申上げます。初めてお便り致します。小生九年前学生時代事情があつて一人の女性から憎しみを受け其の報復の為彼女の友人と二人で言語に絶する責苦を受けた体験がございます。後手に緊縛された私を一时间近く吊下げられ、自分の重みで胸に縄目がひしひしと喰込み息の根も止まる程激痛を味わされ、逆海老縛りにされたうえ、丸太を三角木代りにして其の上に微動一ツ出来ない私を半日責めぬかれ、四日排便を禁じた後、浣腸を施されて樽の中に押し込め一晩中放置されたり其の他色々の責めを数え

切れない程経験しました。人間として完全に抹殺され畜生以下の扱いを受け、辛苦と羞恥の連続で想像もつかない悪夢の様な百日余りでした。詳しく書けば永くなりまので機会があれば其の時の模様を投稿したいと思ひます。只私に絵の才能がないので描けないのが残念です。二人の女性の意志のまに数々の責めを受け当時の激痛の苦しみより恥づかしい姿を異性の前に、さらしていた自分を思い出す度に自己卑下し忘れ様と努める程自分の脳裏に焼付き苦しんで参りました。然し二年前貴誌を拝見し其の後毎月愛読している中に同好諸氏も数々ある事を知り自己卑下するよりも経験した私が幸せ

かも知れないと感ずる様になり、自分の気持を変化させた貴誌に対し感謝の念で勇気を出して便りを差上げます。今では以前の憎しみの為の責めでなく楽しく行えるS Mプレイを念じています。私の前に其の様な女性の出現を心から

お待ち致します。愚文悪しからず。(大阪市八松本潔)

○
五月号サロンは森田敬三氏の「仇討と切腹」それに六角京之助氏の「女志士の最期」など二枚の切腹画と云う嬉しい贈り物があり

☆女体切腹資料の部☆

血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号 (せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号 (せん)

血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (せぬ)

禪裸女血紅切腹 (大写真)

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (おお)

血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (くえ)

肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号 (なせ)

瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号 (ねは)

瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号 (ねに)

血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (わい)

殿中の女性切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号 (わは)

豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号 (えん)

女体介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号 (あか)

下腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やい)

下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やお)

柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号 (やえ)

ました。いずれも色彩がみられないのは残念ですが。森田氏の作品は奥女中達の修羅場の雰囲気巧みに描かれています。侍女達の死屍が横たわる中でのヒロインの切腹の図は私が求めていたものの一つでもありました。裾を乱し赤い腰巻、白い脛をあらわにこと切れと斃れ伏している岩藤や、その侍女達の姿態も無惨な中にどこか艶な風情を漂わせ、上半身肌脱ぎになつて腹を切るヒロインの姿もよりしく、又、哀艶な情が巧みに描かれていて佳作でした。六角氏の作品はこれ又、ヒロインの血みどろな姿がたまらない魅力です。此の種のものはやはり時代物がピッタリします。此の頃、前川様の作品がみられませんが如何がお過しですか? 昨年二月号、九月号のふんどし一本の裸女の首級をあげる図は今もって愛玩しています。小生の方も心掛けていたのですが仲々仕上りません。非力を今もって嘆いている次第です。四月号では、妖異女斗美八景「アマゾン女軍」も楽しくよませていただきました。よみ乍ら画集をひもといてリーベンス作「アマゾン女兵」を改めて見乍ら、作中にあらわれる人物配置と、画中で描かれているアマゾン達にあてはめ乍ら楽しい空想をさせました。落馬しかけている女王ペンチシレイア(山本富士子扮)橋下の小川の岸辺に、又流れの中に全裸のあられもない姿の屍となつて横たわつていいる豊満な美女達(有馬、若尾扮)何れも朱に染り、こんもりと盛りあがつた胸乳もあらわに屍となつて浮んでいる裸女等々正に裸女血斗の修羅場です。これを日本風の髪形、それにふんどしをしめさえすれば「大奥裸女血斗」の泉水に掛つた石橋を中心として描かれる裸女血斗の図になります。橋上では黒髪をなびかせ、薙刀を振って奮戦する紫ふんどし一つの美女は一方の旗頭「嵯峨の局」(山本富士子扮)は、その足許にうつ伏せにこと切れ、橋の縁から水面へは手をだらんと下げ、血汐を泉水へしたたらせている赤ふんどしの女の屍を踏みつけている。今しも嵯峨の局の薙刀一閃は若い黒ふんどしの奥女中(岡田茉莉子扮)の首を宙にとばし、血汐のしぶきをあげた。後より迫る赤ふんどしの太刀を構えた女中(倍賞千恵子扮)も返す刃で胴をなぎ払われることだろう。背景にあちこちで演ぜられるふんどし裸女達の死斗が描かれ、屍は

累々と横たわっている。前景、橋の下、泉水の岸辺には赤ふんどし、紫ふんどし、黒ふんどし等をしめた裸女達の屍がうつ伏せに上半身を水の中へ突込み、ふんどしをしめた見事なお尻を出してこと切れ、或は虚空を掴んだ手も空しく、ふくよかな乳房をえぐられている赤ふんどしの女（若尾文子扮）等がみられる……と云った図柄を想像して胸をときめかせております。同好各位の通信を待つこととや切（女斗彦）

○ 藤島万寿子様、貴女の記事拝見致しました。非常に思い切った此の読者通信欄に投稿された勇氣に感心致しました。男性にしろ、女性にしろ少なからず責めたい、又責められたいと強く思う人の多い事でしょう。貴女の純粋なM願望には大いに敬伏致します。私も女性を心ゆくまで縛って見たいと常々思っています。毎日やるせなく思っています。居ります。私は三十八才、二人の子供が居ります。上の子は中学二年で、下の子は三才に成ったばかりです。貴女が希望される様に私も紳士の心算で居ります。絶体責任を持ってSMプレイを致し度

く思っています。お互いに名前や住所を尋ねない事に致しまして。又、一切の費用は私が負担致します。尚出来ればプレイ出来る日は土曜日、月二回ぐらいが良いと思います。五月八日には是非行き度いのですが、私五日から東京へ出張に行きます故、五月一日午後二時、阪急電車の西院駅の出口近くで御待ち下さいませんか。目は黒の水玉のヘアバンドをして左手の指二本にハンカチを巻いて下さい。必らず出て来て下さる事を信じて御待ち致して居ります。（西宮市青木町八中西寿男V）

○ 五月号の通信にて、呼びかけをなさいました、川崎の中村優子さん。あなたの、お好みは、特にアヌスプレイとのこと。同じ、好みを持つ、同好の士として、是非共意見の交換、又、プレイの研究など、お願い致します。私は、あなたが、特に希望された女性ではありません。今年三十五才の男性で、その点多少の不安や疑惑をお持ちになることと思いますが、私は現在、TV映画の責任ある仕事（詳しいことは、直接のお便りにて申しのべます）を、やっております。自分で、云うの

異色責写真分譲品

鼻責め万華鏡

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

モデル MS役 山原 清子 鈴木 晃子

略号（はた）

山原清子のペットである新しいモデルの鈴木晃子は、彫の深い可愛い顔立ちの従順な娘である。この可愛い晃子の鼻を清子が「鼻責めマニヤ」のために存分にいじめ抜いたところをアップで三枚の連続撮影をした中から選びだした八枚の組写真である。晃子の背後に回った清子が晃子の鼻や鼻孔に対して、どのような責め方をするかお楽しみ下さい。

黒禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 刑部 典子 略号（ろち）

女体フンドシ・マニヤの中でも特に黒禪がきりりと双丘に割り込んで白い肌と黒い布との鮮烈なコントラストに強い興味を抱かれる方が多いのですが、カモンシカのようにすうと伸びた若々しい刑部典子の肢体に黒ふんどしを締め、奔放なポーズを開陳しました。どのような裸身に禪が映えるか見て

のお楽しみにして下さい。

白禪奔放姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 刑部 典子 略号（ろて）

清潔な晒の白ふんどしを野性的な若々しい女体にきりきりと締め、た姿は、フンドシ・マニヤならずとも、その魅力にひかれるのである。が、禪一本の瑞々しい女体をあらさきに晒して、布の喰い込んだ双丘を誇示し四肢を踏み、禪着の全身をあますところなく、皆様の目前にお目にかけます。

碧玉裸身緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 刑部 典子 略号（のん）

辻村隆のカメラ・ハントで始めて、その姿をあらわした刑部典子の裸身の高手小手縛りである。お茶目のノンコが厳しい縄目に対してどのような反応を示したか、とくとご覧下さい。

入墨を踏みにじる

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

モデル 山原 清子 略号（いつ）

年少からSとMとに鍛えられて

はおこがましいのですが、その道では、多少の社会的地位もあり、又、名前も売れていますので、あなたのおつきあいも、あくまでプレイや意見交換に限り、決してそれ以上を望むものでもなく、又あなたの、今後の人生を、破壊するようなことはせつたいに致しません。なぜなら、私自身が、そういうスキヤンダル的主人公になるのは、いやですから……。ですから、お互いに、好きな道の上だけの楽しい、社会人としての責任とルールを、ふまえた上でのつき合いにしたいと思っています。尚、私は九年前に結婚し、現在は東京都内に於て、いわゆる健全な、家庭を持っています。私について、もっと詳しいことをお知りになりたいことと思いますし、私も又、あなたのことを、もう少し知りたいと、思います。写真を同封して、お手紙をさしあげようと思います。が、連絡先を御教示下さい。（東京八葉山啓）

○ 風俗文献雑誌として貴重な存在を誇る「奇ク」五月号はかなり読みごたえがあった。号を追って充実してきた奇クサロンは読者のS Mフォトがとても楽しい。読物も

山口正氏の「革の盛装」がMを満足させてくれ、団鬼六氏の「花と蛇」もますます佳境に入り、小夜子に対するこれからの責めが待ち遠しい。来月号から辻村隆氏の「カメラハント」にお目にかかれたいのが淋しい。早くご全快して、再び麗筆をふるってください。ようお祈りしている。私も一度辻村氏に女装責めのテストをしていただきたいと思っているのに、残念でなりません。また真山淳氏の「洋装女性と和装女性の縛り責め感」は同感です。女性への責めは、羞恥を与えるのが最高で、全裸がよいのですが、ムードからいえば洋装の下着姿がいちばんすばらしいのは事実でしょう。私の好きなスタイルはブラジャーとショーツ、それも黒か赤一色で、黒のストッキングをはいていることです。またショーツのかわりにバタフライを着用させるのもよい。私も女装して責めをうけるときは、このスタイルになるのが、とても楽しい。読者通信の中田生様、私も生ゴムの前開きメンスバンドが好きで、二、三種類持っています。したが、いまは一つもなく、手に入れたいと思っています。しかし最近市販されていないので残念で

その何れにも極めて深い趣向と経験を持つている山原清子嬢が、自らその全裸身を投げだして、力のかぎりの強烈な麻縄しぼりを望み背中いちめんに彫った玉取姫を男の足で、めちやくちやに踏みにじられ、顔を足で踏みにじられて歓喜の声を挙げる場面をスナップした中の八枚です。

全裸麻縄強烈縛

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 山原 清子

略号(いね)

乳房が変型してしまうまで力の限り麻縄で縛り上げて、刺青を彫っている痛さに比べたら平気だという清子嬢、縄のすり傷や縛り跡なんか一向気にしないという山原清子嬢を、それこそトゲトゲの麻縄でガンジガラメに縛り上げて背中一面の刺青をこれ見よがしにさらけだす全裸身を、ごろごろところがして、あらゆる角度から狙

す。どなたか譲ってくださいる方はいませんか。使用したもので結構です。女装するときに着用した

いので、メンスで汚れていてもかまいません。それに責め具もほし

い撮りした十葉の組写真。

裸女レスリング

大手札印画紙焼付

四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子

略号(れす)

二人ともパンツ一枚の外は何にも身につけないという素裸で、あられもなく格闘を続けるところを早いシャッターで次々とシャッターを切っていった動きのある女体レスリングの場面の中、迫真力があって且つ鮮明なものばかり四十ポーズを選びました。若々しい二つの女体が組んずほぐれつ、美しく躍動してエロチシズムの中に女だけの醸し出す明るいサドとマゾが画面に満ちています。プロレスのファンであるという肉体派の二人が真剣に力のありたけを出し合って、実演したレスリング・Mフォトです。の方もSの方も御一見をおすすめいたします。

○ の方があればお教えください（大阪八尾崎敏男）

○ 読者通信らん過日号でこんなうれしい事はないワと思ひ乍らお便りがおくれたのですが、代理部でバンド通信販売扱いをして下さること、希望が多い場合での事です

が、私も是非、是非お願い致します。最近の市販品はウーリゴムや布製ゴム引き品で、以前の製品の様に生ゴム底当てのものが無くなっています。通動におむつカバーは気がひけますもの、やはりゴムのコッテリ縫付けた月経帯の方が女性には好都合と云うところ。表面はすけて見えるぐらいの薄くて強いナイロン製がいい。そして色はゴムと対象的強烈なコントラストの黒が一番、内側はヒミツだけど、ネットリと高純度良質の黄色い薄ゴムを巾広く全面一ぱいに使用し、替ゴムも生ゴム広巾型付き、裏側全面に装着した当てゴムは表面ナイロン布からすけて見えるの、その上足の周辺は内側のゴムが汚れ防止のため表側へ出して折曲げ縫付けてある型のもの、フレンドバンドの普及型一号にある様なもの、黒い布、黄色いゴムの組合せバンドとして湿布帯としておむつカバーとして何れにも使え男女共用こんなものがほしいワ。高価でも下着ですもの毎月買ってはきつぷすのになーと夢に描いています。代理部も此の様な下着の特注販売を代行してくれないうそですわよ。総ゴムのパンティ型おしめカバーも是非

ほしいナ。美しい伸縮性のある薄手最高級のゴムを使用したものを作ったほしいナ。バンドもゴムは特にムッチリした上等に限りますわネ。それからお知らせですけれど前回お話ししました大人用総ゴムカバーの事ネ。神戸そのう百貨店四階のベビー用品売場に品切になって、あと製造しないと店員さんが云ってたけど申込みが多いらしく又大量に入荷していますワヨ。ニシキゴムの製品で色はカラシ色定価五〇〇円。ゴムが厚手で私にはちよつとゴワゴワしていけないワ。今もはいてるけど別のゴムのに取換えて休むつもり。ゴム氷のうを風船みたいにくらまして、その上に座ってお便りを書いてます。ゴムが破れそうになつてバリバリ、キュツキュツと私のおしりの下敷になって苦しんでいます。(神戸市兵庫区水木通八太西良子)

○
五月号の読者通信欄に載せて頂いた小生の呼びかけに応じて、当日、即ち四月三日(土)の午後六時半か四月四日(日)の午前十時に仙台駅前、日の出会館に行かれた女性の方に一言お詫び申し上げたいのは四日(日)は、第一日曜

四馬孝画 秘蔵版 責め画集

分譲

△責められる美女波津子の痴態▽

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(しお)

- 一、白く輝く肌にとす黒い縄。
- 二、恐怖の浣腸責め展開す
- 三、庭に於けるハダカ責めシーン
- 四、裸の美女荒縄の股間縛り
- 五、チェン・ブロックの吊り

△可憐な美少女加奈子の羞恥責め▽

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(しる)

- 一、捕われの美女加奈子の運命
- 二、ローソクの火責めにあう
- 三、逆エビ縛りの柱宙吊り
- 四、股間縛りで被虐の絶叫
- 五、鑑賞に供される緊縛美体

『花と蛇』画集

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(えに)

- 一、京子に芸を仕込む鬼源
- 二、静子令夫人への汚辱
- 三、操り責めにあう美津子
- 四、片足挙げ縛りの桂子
- 五、粗相を強要される京子

浣腸と排泄画集

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(えい)

- 一、恐怖の浣腸台の美女
- 二、浣腸のあとの楽しみ
- 三、百CCのブリセリン浣腸
- 四、塩水をヤカンで飲ます
- 五、排便を耐えぬく美女

女体吊責め特集

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(えほ)

- 一、弓吊りローソク責め
- 二、エビ縛りの宙吊り
- 三、股間縛りの責め
- 四、美女の舌の先縛り
- 五、股間縛り鼻孔吊り

美貌汚辱と鼻責

大判判五枚組 一〇〇〇円 略号(えは)

- 一、美しい女の鼻をなぶる
- 二、一本一本女の鼻毛をぬく
- 三、美女の口中をほじくる
- 四、泥絵具にまみれた顔
- 五、ラーメンを食べさせる

でしたが折悪しく、予定日直者が急用のため帰省したため、交代出勤の止むなきに至り、約束の場所に行くことが出来ませんでした。当日は午後九時半ごろ帰宅したほどでした。もしも四日の午前十時に、右場所に御足労願った女性の方がいらっしやったら、この誌面を拝借して深くお詫び致します。併し前日の三日(日)の午後六時半には、私は確かに右の場所に行きました。併し、結局、それらしき女性は見われず、帰ってしまいました。ただ実際のことを申しま

すと小生の服装に一点だけ違反した点があり、もしも、あの場所に行かれた女性が居られたら、やはりお詫びしなければなりません。呼びかけ文には：小生は眼鏡をかけ、雨でも降らない限り紺の背広を着て(雨天のときはグレイのレノコートを着ます)。右手の小指に繃帯を巻いておきます：と記したのですが、小生は、確かに眼鏡をかけ、紺の背広を着、レノコートとを、その上に重ね(当日の午前中、雪でしたので!)そして右手の小指に白い繃帯を巻いて行きま

した。併しその右手を右ポケットから、最後まで出す勇気が無く貴重な一瞬を(或いは、誰方も女性には来なかったかも知れませんでした)が失ったような気がしてなりません。それらしき女性は見われずと書きましたが、あのとき私の前に立っていた、エレベーターのすぐ前に立った紺、いや黒っぽい外套を着た、地味な感じの女性の方、あなたではなかったのでしょうか。仮りにそうでしたら目印の繃帯を巻いた右手を出さなかった小生の違反を重ねて詫びなければ

ばなりません。まだまだ小生には真の勇気、SとMの真髓に直接触れていこうとする決断と勇気が欠けているのかもしれない。お恥かしい次第です。次回には必らず一大勇猛心を奮って実践してみようと思います。(仙台市A・H・K生V)

初めてお便りします。私は、三年程前から奇クを買っていましたが、思い切って今度読者の皆様に呼びかけをする次第です。私はSでもMでもないと思っています。

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)	一組一枚	一五〇円
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)	五組五枚	五〇〇円
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)	十組十枚	九〇〇円
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)	二十組二十枚	一七〇〇円
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)	三十組三十枚	二五〇〇円
		四十組四十枚	三二〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇〇円

K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)	厳しき縛りに酔う (山原)
K 7	荒縄で仕置される (美木)	土壇に観念した女 (美木)
K 8	ムチ打たれる女囚 (美木)	縛り人形を眺める (山原)
K 9	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)	足首と首を連繫す (大塚)
K 10	後手の複雑な縛り (玉田)	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 11	夫にされる鼻責め (増田)	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 12	猿轡で鼻を虐める (増田)	

K 13	開股縛にあう女囚 (美木)	罪状を訊かれる女 (美木)
K 14	股間縛りの全裸像 (山原)	荷造り縛りで晒す (玉田)
K 15	革拘束衣で括らる (大塚)	庭木に立縛りなる (木村)
K 16	柱に晒される裸身 (玉田)	セーラー服しぼり (大塚)
K 17	高手小手首縄緊縛 (山原)	黒輝豊満刺青縛り (山原)
K 18	踏みにじられた女 (山原)	古墳にて吊り準備 (木村)
K 19	拷問にあう裸女賊 (山原)	ロープブラジャー (山原)
K 20	厳重な後手縛猿轡 (刑部)	エビ縛りにあう女 (木村)

K 21	イルリのある風景 (大塚)	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 22	亀甲縛り正面裸像 (刑部)	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 23	全裸を投げだして (山原)	縛しめに哭く乙女 (木村)
K 24	エビ責め放置十分 (木村)	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K 25	観念アグラ縛り凶 (玉田)	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 26	猿轡の下にあえぐ (刑部)	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 27	伸びやかな裸縛り (刑部)	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 28	立木より逆さ吊り (木村)	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

私は浣腸とおむつに大へん興味をもっております。現在は三〇ccのシンダーで鏡を見ながら一人で楽しんでおります。どなたか、女性の方で母親のように私を幼時にかえらせて、浣腸をしておむつをあてて下さる方いらっしゃらないでしょうか。そうしてもらえば、どんなに素晴らしいかと思ひます。私の希望をかなえて下さる方、是非、お便り下さい。相手になつて下さる方がお望みなら浣腸でも、乳房責でも何でも、御希望にそうように致します。又、浣腸に興味のある先輩方、他の方面に興味のある方お便り下さい。返事は必ず差し上げます。それから編集者の方、他のマニアとのスペースの具合もあるでしょうが、浣腸、おむつに関する記事を多く載せてもらうことを希望します。私は人間が生存する限り一般の人は異常と言ふかも知れませんが、こういうマニアは断えないと思ひます。ですから、末永く奇クが続くことを、お祈りします。皆様のお便りをお待ちしています。私は二十二才、一七四センチ、六四キロ、顔は普通です。では、よろしく。(大阪市八徳増由二)

風薫る五月。K誌愛読の皆様御元氣ですか。関西から東京へ転勤して数年になります。在阪當時からの十年近い愛読者です。グラビアが無くなり淋しいがK誌存続の爲には止むを得ないと思ひます。最近女性投稿も散見されますが、小生もお友達になり度い。特に東京近く、或は関西にお住いのM女性、方御連絡下さい。小生は三十才五尺三寸十四貫瘦形的美青年? 傾向はS六M四位ですが鞭打等身体に跡が傷つく様なプレイは好みません。清純な制服姿に長髪を垂らし椅子に机上に寝台に緊縛された貴女の姿を、写真やグラビアで、或は空想して独り古いK誌のグラビア等を見乍ら東京の空の下に一人或はX人緊縛のみを望んで居られる貴女と交際を望んでいます。お互のペースを乱さないでプライバシーを守り、秘密も固く守ります。然してMとSの人生を楽しく過し度いですね。緊縛愛好の貴女勇氣を出してお便り下さい。写真を入れて戴けると本当に有難いのですが又、文通も御指示通りの方法にて確実な連絡先へ郵送します。本当は編集局から回送されるのが、一番よいのですが。(東京八佐藤明)

「今月の新版分譲品」

浣腸される清子

大手札印画紙焼付 三枚一組 五〇〇円
山原清子 略号(かろ)

蒲団の上に足を投げだして長々と寝そべった清子さんの可愛いく、アヌスに浣腸器の嘴管は迫つていく。初めて試みられた清子浣腸実施の有様をごらん下さい。

浣腸に興ずる女

大手札印画紙焼付 八枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かへ)

イルリガートル、エネマシリッジ、五十ccガラス製浣腸器というものを施している清子嬢の艶なる姿はまことに刺戟的である。

浣腸に悶える

大手札印画紙焼付 七枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号(かに)

S Mに対して大きな理解をもつて没入している山原清子は、こと浣腸に関しても異常なまでの関心を抱いていることがわかった。もろもろの浣腸器に囲まれて、その陶酔の中にある表情をみて下さい。

乳房責め五態

大手札印画紙焼付 五枚一組 六〇〇円

山原清子 略号(てら)

刺青にばかり気がとられていたが、彼女のもう一つの大きな特徴はオッパイ小僧ばりの巨大な乳房である。内容の充実した重量感のある乳房が、縄によってどのような料理され誇張されるだろうか。

渾美に羞じらう

大手札印画紙焼付 六枚一組 八〇〇円
玉田美佐子 略号(こん)

人一倍羞かしがり屋の玉田美佐子が全裸にされて、白晒の六尺フンドシをさせられたときは大変だった。大騒ぎをして恥らいながらもポーズをとったが、さて、この魅力的な写真をマニヤヘどうぞ。

啓子をいじめる清子

大手札印画紙焼付 八枚一組 一〇〇〇円
山原清子と大塚啓子 略号(うの)

大塚啓子が殊の外は氣にいった山原清子が自分のS Mプレイの相手に選んで縛り上げ、情容赦なく転がし蹴上げ、さんざんに弄ぶ様子は、二人とも若々しい美女だけに言うに言われぬエロチシズムがムンムンするS Mの臭気を混えて画面いっぱいに展開します。

啓子を縛しめる清子

大手札印画紙焼付 八枚一組 一〇〇〇円

宮城県のミスター奴隷生さん。

六月号でのお呼びかけ拝見致しました。あなたの性向と私の性向とよく似ているようですので大変親しみを覚えました。でも、あまりにも遠過ぎてお目にかかれそうもないのが残念です。私の好きなプレイは、一定のストーリーに従って、例えば誘拐されて着衣剥奪、緊縛、拷問と奴隷になることを強制され、奴隷としてのあらゆる訓練を受けた後、売り飛ばされ、女主人のもとでさまざまな奉仕、労働、気まぐれな責めに苛まれるといったようなプレイで、写真もこうした連作ものが沢山あるのですが、どうしても公開誌に発表するには不適當なものが多く、ほんの一部しか発表できない次第です。それにネガは無数に保存してあるのですが、多忙のために引伸すことができませんので、奇クサロンへ発表の分も編集部へネガをお貸しして引伸していただいたものです。尚、小生、鼻中隔に六ミリの穿孔をしています。又、フェチの傾向も強く、各種の女性下着を多数集めてあり、常に着用致しております。御希望のフォト、差上げててもよいのですが、どこへお

送りしてよいか判りませんので御連絡下さい。(編集部では手紙の転送はしていただけないそうですから念のため……) もし、貴兄が写真の引伸しができるのでしたら、ネガをお貸ししてもよろしいです。(但し、用済み次第責任を以て返して下さること、他人へ公開したり、小生の氏名を明かしたりしないことを、お約束下さい。)(美枷輪生)

○

読者通信の皆様、御気嫌宜しいようで何よりです。小生、当、奇クを購読始めてから三年になりました。最近ではそれ以前のものも古本屋等を歩き廻って買い求めて参って居りますが復刊白表紙以前のものがどうしても手に入らないで困って居ります。つきましてはこの欄がお目にとまった方で昭和二十七八年以前の本誌をお持ちの方で御不用の方お譲り下さいませんでしようか。もしくは短期間お貸し下さるだけでも結構です。誰彼でも結構です。充分とまでいかぬまでも、お礼はさせていただきます。宜しくお願い致します。(東京八岡田正春)

奇ク御愛読の御婦人の方にお願

山原清子と大塚啓子……

略号(うな)

同性愛的な親密な境地に達した二人が火花の出るような緊迫した熱烈な緊縛プレイを演じます。これは清子が啓子を縛り上げて身動きできない彼女を熱く抱擁するに至るまでの縛り過程と両女の交歓風景を連続キャッチしました。

山原を責める大塚

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子と山原清子……

略号(うね)

厳しく縛りあげた山原清子に対して、乳房責、擦り責め、逆エビ責め、首絞め、といういろいろの女体責めを敢行するベテランの大塚啓子。女から責められた清子が歓喜の叫声を挙げて身をくねらせば益々かきかかかって責めたてる啓子の巧妙な手さばき――

逆さ吊り正面背面

大手札印画紙焼付

二枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(つる)

両足をはちきれんばかりに大字に開いて逆さ吊りにされた新妻増田みゆきのあからさまなポーズを前後から写しました。

夫婦連縛鼻責

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田みゆき夫妻 略号(らか)

辻村隆氏が増田みゆき夫妻を連縛して責めるといふ珍しいフォトです。これは七月号のカメラ・ハントで詳しく述べてありますのでごらん下さい。

夫を責める新妻

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はや)

これはMの夫を責める新妻の生感です。みゆきがS役を努め、夫婦のいたわりを心に秘めながら、反面夫相手のこと故遠慮気兼ねなく存分に腕を揮っています。喜代司の鼻孔にはめられた牛の鼻輪など奇妙な文献といえるでしょう。

牛男をのりこなす

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はま)

鼻輪をつけられた牛男、夫の喜代司は妻みゆきの御主人様に、乗りになり、足で顔を蹴られ、足を舐めさせられ、顔にまたがられ、などして、さんざんに弄ばれる夫婦のSMプレイの生感がいきいきと描写されています。カメラ・ハント御参照の上、この幸福な御夫婦のために、どうか一度ごらん下さい。

い申し上げたく投稿させて頂きました。今迄心に思い乍ら余りに突飛な事なので筆に現わすのを憚って居りましたが私今度事情あって摘出整形を行う事に致しました(病気ではありません)時期は未定ですが今年末頃を目安として居ります。で、お願いと云うのは御婦人愛読者の中で、その部位に特に異常な興味で、例えば解剖学的にか、サジステイックな行為とかを心に描き乍ら果せないで居られる方がいらっしやいましたら提供させて頂き度いと存じます。と申しましたら大方お察しの事と存じますが、私は多少のセクシアル・マゾなのです。どうせ無になるものなら大いに弄んで頂き、御婦人に仕える倅せもついでに味わいたいと虫のよい考えです。どうかお便り頂けます様、お願い申し上げます。(横浜八三十六才男V)

市川高夫様、五月号のマニヤのメモの欄で「パンティマニヤの方々に」という記事を読ませていただきました。私も貴兄と同様女性の汚れたパンティに異常なまでの関心を持っております。二十二才の青年です。品物が女性の下着だけに、しかも汚した品(新品であ

ればいくらかでも売っているんです)だけに思う様にいかず、毎日毎日苦しみ悩んでおります。貴兄は独身時代にたった一枚ではあるけれど現実に持っておりましたのでまだいいではありませんか。私は一枚も実際に自分の手にした事はありません。それだけに毎日、やりきれません。貴兄だけでも私の気持を解って下さい。人に話しても出来ず、女性の友達でもあれば恥を承知で話してみようんですが生れつき気が弱く友達等あまりおりません。まして女性の友達など一人もおりません。だから奇巧が私の今の生きがいです。貴兄の記事を読むにつけ大変うらやましくなりました。奥様は大変美人で、グラマーとの事です。奥様の様子が目に見える様です。貴兄はほんとうに幸福な人です。うらやましいです。貴兄の様にいっそう結婚と考えましたが、まだ親のすねかじりの身です。でももうまいりません。また仮りに結婚しても貴兄の奥様の様な理解のある女性にめぐり合うとはかぎりません。貴兄は奥様の様な女性をどうして知り合ったか聞きたいと考えております。記事では奥様の汚れたたっぷりと体臭のふくんだパンティをプ

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

プレゼントして下さる等のことですが、もし奥様の様な女性のはいたパンティを自分のこの手にする事が出来ましたなら死んでもいいと思います。どうぞ私に奥様のパンティをプレゼントして下さい。もしいただく事が出来ましたならば貴兄が独身時代にもっていた、たっ

だいが考えが変ってきました。私と同じ様な悩みを持っている人が多くあるのには、おどろきました。この同じ様な悩みを持つもの同志がお互に依頼し合い色々交歓し合えば楽しく人生をすごせるという考えに変わってきました。これも奇クのおかげだと感謝しております。だから今では女性のパンティが自分の手もとにないのだけが悩みの種です。しかし貴兄の様な

理解のあるマニヤが現われてほんとうにうれしく思っております。貴兄こそ真のフェチマニヤだと信じます。私も貴兄の奥様の様な女性を見つけて（しかしなかなかみつからないと思います。また現実には現われたとしても私の様な男性では相手がいやがると思います。しかし夢だけは持ちつづけていきます）貴兄の様な生活をしたと考えております。その時は私の妻

のパンティを貴兄に心からプレゼントしたいと思えます。そして今後色々の考えや品物を交歓したいと思えます。どうか奥様の汚したでるだけ体臭の多くしみこんだパンティを私にお送り下さい。私は真剣に願っております。悪ふざけでは有りません。今まで書いた事は何も知らない人が読んだら変態者ぐらいにしかおもわれませんが、貴兄や貴姉ならば、私のこの

気持を理解して下さると思えます。（大阪府岸和田市本町八山西一郎）
○
奇クの魅力にとりつかれてから二年になります。私が毎月かかさず、愛読するようになってからでもその発展ぶりには今更のように驚くと同時に喜びにたえません。私は軽いSであることは、どうしてもかくせません。会社が終って

本誌既刊号在庫一覧表

残部僅少！ お申込みはお早く

○本誌の既刊雑誌は最近発行の分を除いて殆ど残り少なくなつてしましました。

○左記一覧表の中、価格の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。

○送料は当社にて負担いたしますが、定価一五〇円の雑誌のみは送料を含めてお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和35年6月号（定価三〇〇円）
昭和35年7月号（売切）
昭和35年8月号（売切）
昭和35年9月号（売切）
昭和35年10月号（売切）

昭和35年11月号（売切）
昭和35年12月号（売切）
昭和36年1月号（売切）
昭和36年2月号（送共一七〇円）
昭和36年3月号（売切）
昭和36年4月号（送共一七〇円）
昭和36年5月号（売切）
昭和36年6月号（送共一七〇円）
昭和36年7月号（売切）
昭和36年8月号（売切）
昭和36年9月号（売切）
昭和36年10月号（定価二〇〇円）
昭和36年11月号（定価二〇〇円）
昭和36年12月号（売切）
昭和37年1月号（売切）
昭和37年2月号（定価二〇〇円）

昭和37年3月号（定価二〇〇円）
昭和37年4月号（売切）
昭和37年5月号（売切）
昭和37年6月号（売切）
昭和37年7月号（定価二〇〇円）
昭和37年8月号（売切）
昭和37年9月号（売切）
昭和37年10月号（定価二〇〇円）
昭和37年11月号（売切）
昭和37年12月号（売切）
昭和38年1月号（売切）
昭和38年2月号（売切）
昭和38年3月号（売切）
昭和38年4月号（売切）
昭和38年5月号（売切）
昭和38年6月号（売切）
昭和38年7月号（売切）
昭和38年8月号（売切）
昭和38年9月号（売切）
昭和38年10月号（売切）
昭和38年11月号（定価二五〇円）
昭和38年12月号（定価二五〇円）

昭和39年1月号（定価二五〇円）
昭和39年2月号（定価二五〇円）
昭和39年3月号（定価二五〇円）
昭和39年4月号（定価二五〇円）
昭和39年5月号（定価二五〇円）
昭和39年6月号（定価二五〇円）
昭和39年7月号（定価三〇〇円）
昭和39年8月号（定価三〇〇円）
昭和39年9月号（定価三〇〇円）
昭和39年10月号（定価三〇〇円）
昭和39年11月号（定価三〇〇円）
昭和39年12月号（定価三〇〇円）
昭和40年1月号（定価三〇〇円）
昭和40年2月号（定価三〇〇円）
昭和40年3月号（定価三〇〇円）
昭和40年4月号（定価三〇〇円）
昭和40年5月号（定価三〇〇円）
昭和40年6月号（定価三〇〇円）
○極めて在庫の僅少な分がござりますので、第二希望品があらましたらお書き添え願います。

代理部分譲品用女性写真モデル募集

○本誌では代理部分譲品用の写真撮影するため、女性モデルの方を募集しております。

○本誌愛読者の方でしたら、年齢遠近は問いません。分譲品用です。から誌上に発表いたしません。もし誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添或はブレイのみ出演御希望の方でも差支えありません。

○出演又は参加御希望の方は年齢略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につきお返

事いたします。

○応募された方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚、お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌内容充実のため、並に皆様のレジャーのために奮って御応募御参加下さるよう、お待ち致します。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。特に妊婦フオート撮影可能の方は、遠近に拘らず御連絡下さい。

奇ク編集部

暗い下宿に帰り床の中で奇クを読む時を最も幸せに感じています。しかし残念なことに今日まで一度もこうした私を理解して下さる女性にお目にかかったことがありません。私は美しい女性の緊縛に強い関心を持っている。裸体の上にかけられた縄が、彼女をこの世のものとは思えない美しさにしてくれる。私はこうした文章を書いたことがあります。ので文章が下手なことは恥かしいくらい、責めてみたい、そう思っても、いつも心の中で想像するだけ、そうした自分が今ではとてもやりきれなくな

ってしまいました。団鬼六氏の書かれてある「花と蛇」は毎月楽しく読ませていただいております。誰か一人で良い、私の今の気持ちを少しでも満足させてくださる方が欲しい。その気持ちをおさえることが出来ません。私は二十四才のサラリマン。平凡で貧しい生活は何ともない。でも私の心を理解して下さる方がいたら私の人生はバラ色になる。広島市内の女性の方、私の良き理解者になって下さいませんか？ 一七三センチ、五八キロ、秘密は絶対に守れます。(広島A・S・Z生V)

藤山秀緒様。若し御存命でしたら、何卒筆をとって、全国の切腹研究者、愛好家に、最期の御言葉をお残し下さい。今日偶然に求めた某誌、昭和三十九年四月号によって貴女の死病の再発を知りました。それから一年、恐らくはすでにこの世には居られないかも知れないと思います。切腹文学の上に残された貴女の功績の偉大さを知るだけに、大きな衝撃を受けました。御健在とばかり思って居ましたのに、全国の貴女を知る程の人々がどんなにか驚き悲しむでしょう。今あらためて貴女作品を読み返す気になりました。それにしても病氣のため最後の気力を失って、多分はその理想とする切腹死を遂げることの出来ない貴女はさぞや残念でしょう。然し切腹文学の創始者としての貴女の名は、永遠に歴史に輝くでしょう。その業績は不滅です。後継者も必ずや多く現われるでしょう。静かに眠って下さい。若しまた奇蹟的に命永らえて居られるならば必ず誌上にお便りを下さい。全国のファンが待ち望んで居ります。なお編集部に御願ひ。多くの切腹作家が唯一度の作品発表だけで消えてゆく例が殆

どですが、まことに残念でなりません。編集方針上採用困難な原稿がある場合など、まことに御面倒なから見捨てずに、どこが不適当かをその本人に、簡単に知らせて下さって、その創作の泉をからすのでなく、育てるために努力して下さいるわけには行きませんか、是非お願い致します。(森田敬三)

○桜花の咲く季節になりましたね。初めてお手紙を書きます。最近本屋さんで今年の一月号を見まして買って帰り読書しましたら、大変面白く書かれて居りますので又機会を見て買いに行こうと思っています。全部読書したいのですが、中々時間にじばられて思った様に出来ないの面白そうな処だけ、或は写真や絵だけ見る時もありますよ。それで一月号のK氏邸での撮影の塚本鉄三先生撮影構成で新人モデル山原清子さんの緊縛女体風景は大変気に入りました。それでも無いかも知りませんが、もしも売残りが御座居ましたら、山原清子さんの白禪後手高手小手の(ろし)をお送り下さいませんか、もしも売切れて居りましたら、似た様なので良いですから、どうかお願い

します。(神奈川八森山年雄)

岐阜の青木恵子様。先日のお呼び掛けに、わざわざ出かけましたが、御会いすることもかなわず残念でした。何かの機会に御会いする事が出来たらと、念じております。若し御都合がよろしければ、一度名古屋へお出掛けになりませんか。我々仕事を持つ者は中々昼間という訳にも参りませんので夕方六時頃新名古屋駅出口辺りにでも何か目印をお互いに持ってお会いするのもスリリングで楽しいではありませんか。又夕方少し遅くなら岐阜迄でも出掛けますが、何卒再度のお声をお待ちして居ります。吉村英子様。同じ愛知県に在住のマニヤ、貴女様の手記は何時も興味深く拝読いたしております。小生は古くからの同志であり現在三十五才の医師です。時々名古屋へもお出かけの由、ゆっくり語り合えたらと願っております。医学的な助言或は御希望の器具等についての話とか、医療器具薬品の入手に就いてのお手伝いは出来

ますし十分紳士的に御交際出来ます事を御約束いたします。新しいお試みの事などあれば御聞かせ下さい。楽しく御協力致しますよう名古屋駅での待合せ場所を御指定下されば参ります。目印は右手にハンカチを持って下さい。私もその様に致します。(名古屋市八西本生)

愛読者及び編集部の皆様お元気ですか? 今年は天気が非常に変わりやすく、体をこわしやうに思われます。辻村さんの病気の全快を心から祈ると共にお互いに体を健全にし、精神の健全さを持ちたいものです。編集部の書かれた「言論出版の自由」と「愛読者へのおねがい」は、あらためて私達に、編集部の意図を表わされたものと思います。私等も、勝手気ままなことをばかりいつて編集部まかせにしていたことを感じ編集部の方々に心から頭を下げるものです。何度読んでも飽きないのがこの最初のことばです。とっても素晴らしいですね。大谷勢津子さん

次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします

のカメラ・ハントを大いに期待しています。何か男性的な感じもする顔立ちですが、とても美しい方です。乳房責めをお好みのようなので、誌上にのらないのではなにかと心配です。愛読者の方々と共に期待しています。木戸川健氏のお言葉、その様なものが出来るならある程度とり入れてもよいと思います。梨花悠起子さんには、久振りでお目にかかったわけですが肥えたといえ、そんな気もします。代理部の分譲品にも手が出ない私等は、誌上でしかお目にかかれません。これからもチョイチョイ顔を出して下さい。山本達雄氏の奇ク万歳の中に一人加えて下さい。二人すれば声も倍になり、いかにも万歳らしくなると思います。山原清子嬢を囲む座談会の提唱は近頃編集部のいろいろな面での積極さの一面とされます。これからはもういったものを御企画下さい。黒淵賀集子氏の無題は、大変おもしろく読ませて頂きました。とっても文章が上手ですね。これからは嬰一氏とのこと、さし

そこがまた大きな一つの魅力のようです。ひきつづき活躍を期待しています。SMカメラハントは毎度のことながら言うことなしです。羽鳥水江、夜乃探郎、海野美津男、兵頭庫一、山口広、芳野眉美、黒淵嬰一、久我庄一の諸氏、すっかりおなじみにさせていた方々の文章は、私達にはとても真似られないですね、今月号は渋谷竜彦氏の「快樂主義の哲学」のことについて多く書かれていましたが、早速読んでみるつもりです。団鬼六氏ますます冴えてこられた感じで息をつめて読まれた方も多かったことと思います。来月号が待たれます。西条操氏や黒田寿氏のものも、相変わらず愛読させていただきます。いつでも読んで感じるこの一つは、自分も書いてみたいなあーと、思うことです。この後は原稿用紙に一気に三十五枚書きましたが、どうも好ましくないということで、ドラムカンの火の中へ消えてしまいました。才能はまるでなさそうです。しきりに残念がっているのですが生れつきの性には逆らえないものです。すね。また、長話になってしまいました。では皆様、おやすみなさい。(東京八泰生)

☆ 編集後記 ☆

○夫婦ブレイのフォトの投稿が増えて、サロン欄も大分賑やかになってきました。妻を撮影したフィルムがあるのだが現像してくれないかという問合せも四件ばかりありました。中には自分はまだ未婚なので恋人の緊縛フォトを送るからという熱心な方もあります。

○団鬼六氏が本職の映画の方がお忙しくて、今月号の「花と蛇」が休載になったのは、まことに残念至極です。枚数は短くとも、なんとか締切日まで間に合うようにと依頼したのですが、凝り性の氏のこととて器用な芸当はできなかったようです。フアンと共に次号の力作を期待いたしましたよう。

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作

○懸賞応募の原稿は只今でも送って頂いておりますが余り秀でたものには、お目にかからないようです。今月号では山口広氏のを一篇掲載しましたが、あと二、三篇掲載できるものがあると思います。

○本誌の内容については、夜乃探郎氏あたりから、いろいろ御進言を頂戴し大いに啓発されておりますし、内容充実に関してのプランもあるのですが、それは実現可能になってから、お話しすることにしたまいしよう。

○笹原桃子さんの告白は、急に載せることになりましたので誌面の都合上、尻切れトンボのような恰好になりましたが、次号で引続いて発展の場面を掲載できる筈です。

(四〇・五・一〇)

分以上贈呈します。

成の各種フォトを贈呈する用意がございます。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

七月号

(第十九巻第七号)
(通刊第二〇四号)

昭和四十年六月二十日 印刷
昭和四十年七月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。